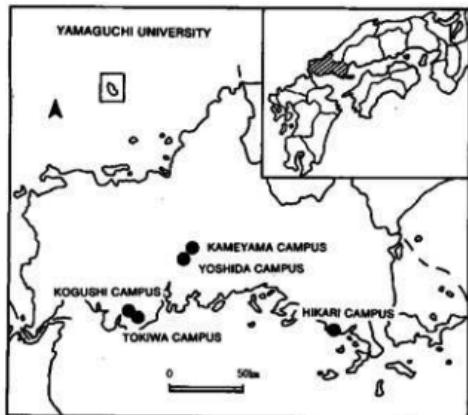


山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅶ

1988

山口大学埋蔵文化財資料館

山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅶ



1988

山口大学埋蔵文化財資料館

発刊にあたって

山口大学構内遺跡調査研究年報は昭和57年度以来すでに第Ⅰ～Ⅵ集が発刊されています。今回の第Ⅶ集は昭和62年度に実施された発掘調査の報告書であります。

研究年報（Ⅰ～Ⅵ）の吉田遺跡に関する記述をみると、その内容は科学的であって、推測は比較的少ないことがわかります。私たちはこの報告によって縄文後期の先史時代から近世江戸時代にかけて、この地域に居住した人々の生活様態を、断片的とはいえ、或程度うかがうことができます。然をいえば、こういった各時代の文化の担い手であった人びとの人骨の出土があればいいのですが、それは今のところ無理というものでしょう。とはいえ、この研究報告はこの地域で生活していたと想定される後期縄文時代人が日本人の起源とどうかかわっていくか、これが弥生時代の住人とどうつながっていくのかというような考古学上、あるいは人類学上の重要な課題の解決にいささかの手掛かりを与えることになります。このことはやがて日本民族の源流という古くて新しい研究課題の解明にも役立つことになると思われます。

また、本年報にみる如く、昭和62年度の調査でも小串地区からは旧石器時代の遺物が出土しました。これは上流の宇部台地から流れてきたものようですが、それにしても考古学上興味のもたれるところであります。

この稿を書くに当たって机上に第Ⅰ～Ⅵ集を並べてみると、その学問的重厚さに改めて心を打たれます。これらの年報は山口大学の吉田、小串、常盤地区など全構内の発掘調査に当られた研究者及びその協力者の努力の成果の集積であります。第Ⅶ集の刊行に当たりこれらの方々の労苦に深く敬意を表します。本研究年報は今後も続刊される予定であります。これが今後本邦の関係学界の進歩発展に大きく貢献することを祈って止みません。

平成元年3月

山口大学

学長 粟屋和彦

序 文

埋蔵文化財資料館による発掘調査の年報が発刊になりました。本報は昭和62年度調査分で、吉田構内調査10件（事前2件、試掘1件、立会7件）、小串構内調査2件（試掘1件、立会1件）、その他亀山、光構内調査（各々立会1件）計14件の調査概要である。

吉田構内の教育学部附属教育実践研究指導センター新営予定地の発掘調査では、吉田遺跡保存地区に近接しているが削平が著しいため、予想された遺構は殆どみられない。しかし、縄文時代晩期の石器類包含層を確認することができた。これは山口盆地内で初めての発見であることがわかった。それに出土石器は姫島産の黒曜石製であり、その製法の手がかりも判明し、極めて重要な資料となった。またこの層の下位にみられた河川跡では、自然木、種子類がみられ、当時の植生が推定され興味ある知見となった。

また教養部複合棟新営予定地の発掘調査では、縄文、弥生時代から古墳時代さらに江戸時代に至るまでの遺構があり、集落の規模、その展開課程を解明する上で貴重な資料である。これらからわかるることは堅穴住居が吉田遺跡保存地区と同時代のものであり、当時この吉田構内南西部から中央部にかけ大規模な集落が長期間存在したことを物語っている。

なお立会調査では農学部附属農場近くで土壤を検出し、土質の化学分析により、リン酸カルシウムを多量に含むことが明らかとなり、土壤基の可能性が示唆された。

一方小串構内調査では新営病棟の北側、南側で土質が異なっているが、いずれも削平が著明で新たに遺構を発見することにはならなかったものの、南側トレーンチでは旧石器時代遺物のみを含む遺物包含層が発見されたことは、大きな収穫であった。

ほかに光中学校グラウンドでは遺物包含層は確認出来ないが、多くの土器が発見されている。

なお、昭和60・61年度に調査した吉田構内遺跡保存地区的報告は諸般の事情から次回にゆずりました。

平成元年3月

山口大学埋蔵文化財資料館

館長 黄 基 雄

例　　言

1. 本書は、山口大学埋蔵文化財資料館が埋蔵文化財資料館運営委員会の指示を受けて、昭和62年度に山口大学構内で実施した調査の報告書であり、第5章第1節7は山口県教育委員会の調査を補助したものである。
2. 現地における調査・研究は資料館員河村吉行・木村元浩が担当した。また、出土遺物の整理は主に河村・木村が行ない、同館員杉原和恵が援助した。
3. 調査・研究における事務一般は事務局庶務課庶務係が統括し、実施面においては各関係部局の事務部があつた。
4. 遺構の実測は、河村・木村および作業員が行ない、遺物の実測は、第2・4章を木村、第3・5章を河村が行なった。
製図は、第2・4章を木村、第3・5章を河村、付篇Ⅱを杉原が行なった。本文の執筆は、第2・4章を木村、第3・5章を河村、付篇Ⅱを杉原が分担して行なった。
5. 現地における写真撮影は主に河村が行ない、遺物写真的撮影は主に木村が行なった。
6. 下記の各氏に本書のための分析・鑑定を依頼し、御教示・玉稿を得た。記して感謝の意を表したい。

石器の石質	山口大学理学部教授	松本 徳夫
植物遺体、木製品の樹種	山口大学農学部講師	宇都宮 宏
土壤中の花粉分析	九州大学理学部地質学教室	野井 英明
土壤中のリン・カルシウム分析	山口県農業試験場	平田 俊昭

なお、炭化物の¹⁴C年代測定は広島大学文学部中田高・川越哲志尚氏に依頼中である。測定結果は「山口大学構内遺跡調査研究年報」に掲載を予定している。

7. 本書の編集は館員が協力して行なった。
8. 調査・研究においてはカラースライドを作成しており、出土遺物とあわせ埋蔵文化財資料館が保管している。広く活用されることを希望したい。
9. 調査組織は次のとおりである（昭和62・63年度）

調査主体	埋蔵文化財資料館	館長	黄 基雄	[昭和62年4月3日～]
		館員	河村 吉行	
		タ	木村 元浩	
		タ	杉原 和恵	
事務局		事務局長	大谷 嶽	[～昭和63年3月30日]
		タ	有地 成光	[昭和63年4月1日～]

本部庶務部	部長	田中 武雄
庶務課	課長	竹下 寛美
	課長補佐	大多和泰則
庶務係	係長	野村 宗成
		本田 正春
		岩佐 厚子
		深町 洋二 [～昭和63年3月30日]
		三浦 勝弘 [昭和63年4月1日～]
		中川イクミ [～昭和63年3月30日]
		山下 京子 [昭和63年5月20日～]

10. 調査・研究にあたって下記の方々の多大な協力と援助を受けた（官職は昭和62年度）。

山口大学事務局庶務部	人事課長	村上昭生、同課長補佐 増谷 泰、同係長 有吉 明、 同係 松本龍明、池本誠也
経理部	部長	何木 豊、主計課長 伊藤良昭、同課長補佐 本間 健、経理課 長 丹澤 満、同課長補佐 廣石輝男、総務係長 田中善人、監査係長 石崎啓介、管財係長 小林和生、用度係長 野沢章三、用度主任 谷本信之、管理主任 正司三喜男、同係 浜田千春
施設部	部長	笠井宏悦、企画課長 比嘉真義、建築課長 竹田忠文、同課長補 佐 萩尾次男、設備課長 久芳 稔、総務係長 松永次郎、総務主任 三村文雄、第一工営係長 藤井 幸、同係 小川賀津夫、澤谷弘美、 第二工営係長 鈴垣竜實、同係 河田徹也、電気係長 吉永峯生、同係 松田清司、機械係長 鈴木輝美、同係 鹿嶋正則、板垣健一
学生部	部長	青木秀夫、次長 中山昭成、学生課長 吉村 學、同課長補佐 鷲本拓司、学生係長 佐藤正治、学生主任 五嶋幸生、同係 角井隆志、 金重達也
教育学部	事務長	西澤喜昭、同補佐 柳 等、庶務係長 松本正史、三浦勝弘、 会計係長 森本茂雄、附属幼稚園園長 川口政宏、同副園長 志熊淑子 附属光中学校長 徳富正義、同副校長 水上義昭、附属光学校係長 長谷知之
経済学部	事務長	原田見威、庶務係長 廣政 登、会計係長 中島岩弘
農学部	事務長	原田政明、会計係長 木村賢治、附属農場事務長 宇山隆造、 同係長 山本直行、同係 寺山幸夫、尾崎恵雄
教養部	事務長	梅原儀助、庶務係長 野中章彦、会計係長 伊藤敏徳、同係 三原秀鶴、櫻井健二

医学部 事務部長 宮崎敬一、同次長 宮脇照男、総務課長 坂井友造、
同課長補佐 竹腰直道、管理課長 井上隆次、同課長補佐 河野繁之、
西野雅博、庶務係長 原 和男、管理係長 末次敏男、
経理係長 野澤章三、施設係長 三浦幸一、設備係長 山本安雄、
環境係長 藤井良雄

人文学部考古学研究室

山口県教育委員会

山口シルバー人材センター

宇都宮市シルバー人材センター

末広産業

作業員

岡屋知子、西見利子、峯重つや子、宮家静代、中河都子、重富梓子、石川好江、光永スミ江、
花田智都子、東亀代、金子朝江、胡美和子、杉山玲子、秋枝幸子、阿部恭子、須子光子、
芳西恒忠、長田三男、木村実、近江喜助、小山博行、市川二郎、山根萬年、河上正弘、奥英子、
岡村サ一、山崎兵馬、有田久義、河村忠悟、原田喜一、佐々木誠、前好国、谷口喜久男、
佐上哲郎、安藤義雄、田村時夫、財満孝典、三井広孝、小林シメ子、谷川アサツ、福隈愛子、
繩田美代子、中村シズエ

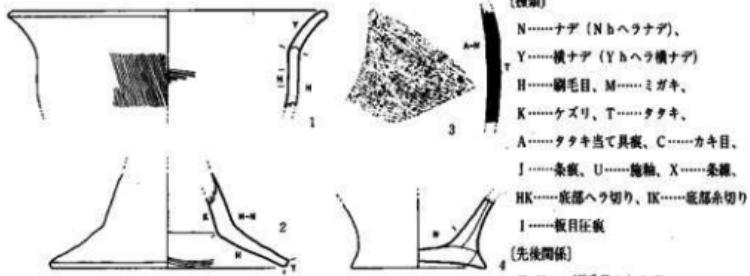
凡 例

- 吉田構内における調査地区および層位、遺構の位置は国土座標を基準として北から南へ1~24、西から東へA~Zの番号を付して50m方眼に区画した構内地区割のA-24区南西隅を起点（構内座標x=0, y=0）とする構内座標値で表示する。なお、平面直角座標系第Ⅲ系における座標値(X, Y)と構内座標値(x, y)とは下記の計算式で変換される。

$$x = X + 206,000$$

$$y = Y + 64,750$$

- 各遺構は下記の記号で表記することがある。
 穴住居跡……S B, 捩立柱建物跡……T, 土壙……S K, 井戸……DW, 溝……S D, 河川跡……N R, 墓壙土壙……UG, 谷……V, 暗渠……A
- 本書に使用した方位は、吉田構内では国土座標を基準とした真北、他構内では磁化を示す。
- 標高数値は海拔標高を示す。
- 遺物・土層の色調は農林省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』(1976)に準拠した。
- 土器の実測図は下記のように器種分類した。
 断面黒ぬり……須恵器、須恵質土器、断面白ぬり……縄文土器、弥生土器、土師器、土師質土器、瓦質土器、瓦、断面網目……陶磁器
- 土器の器面調整については、断面周囲に調整の境界を記し、境界間に下記の略記号により明示した。ただし、風化等による不明部分は無記入とした。



- 口縁部内外面横ナデ。胸部は外面縦刷毛目、内面は横刷毛目が一部にみられるが調整不明。
- 外面刷毛目のちナデ。視端部は横ナデする。内面は、脚柱部ヘラケズリ、据部横刷毛目。
- 外面平行タキ、内面はのち當て具痕をナデ消す。
- 底部内面のみナデが観察できるが、あとは内外面とも調整不明。

本文目次

第1章 昭和62年度山口大学構内遺跡調査の概要	（河村・木村）	1
第2章 吉田構内教育学部附属教育実践研究指導センター新營に伴う発掘調査	（木村）	
1 調査の経過		5
2 層位		6
3 遺構・遺物		9
4 小結		17
第3章 吉田構内教養部複合棟新營に伴う発掘調査	（河村）	
1 調査の経過		23
2 層位		24
3 遺構・遺物		27
4 小結		60
第4章 小串構内医学部附属病院病棟新營に伴う試掘調査	（木村）	
1 調査区周辺の地形		67
2 調査に至る経緯と調査方法		67
3 層位		69
4 遺構・遺物		73
5 小結		74
第5章 昭和62年度山口大学構内の立会調査	（河村）	
第1節 吉田構内の立会調査		
1 教養部複合棟新營に伴う立会調査		85
2 國際交流会館新營に伴う立会調査		86
3 教育学部附属養護学校自転車置場移設に伴う立会調査		87
4 農学部附属農場E7圃場排水管埋設及びE6圃場進入路拡幅に伴う立会調査		88

5 農学部植栽に伴う立会調査	91
6 経済学部集水樹取設に伴う立会調査	92
7 九田川河川改修に伴う立会調査	93
第2節 小串構内の立会調査	
医学部附属病院東駐車場改修に伴う立会調査	94
第3節 亀山構内の立会調査	
教育学部附属幼稚園遊戯室拡張に伴う立会調査	95
第4節 光構内の立会調査	
教育学部附属光中学校グラウンド防球ネット設置に伴う立会調査	96

付篇

付篇 I

吉田遺跡の花粉分析	野井英明	97
山口大学構内出土の植物遺体	宇都宮宏	103

付篇 II

墨で文字を書きこんだうつわ 一既刊の報告 補訂一	杉原和恵	107
--------------------------	------	-----

山口大学構内遺跡調査要項

山口大学埋蔵文化財資料館規則	124
山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会規則	125
山口大学構内の主な調査	127
Summary	133

図 版 目 次

〈吉田構内教育学部附属教育実践研究指導センター新館に伴う発掘調査〉		本文対応頁
P L . 1	吉田構内全景（北西から）	
P L . 2	(1) 調査区全景（東から）	
	(2) 1 グリッド北壁土層断面（南から）	6~8
	(3) 4 グリッド西壁土層断面（東から）	6~8
P L . 3	(1) 2 グリッド南壁土層断面（北から）	6~8
	(2) 3 グリッド南壁土層断面（北から）	6~8
	(3) 1 グリッド遺物出土状況全景（東から）	12~14
	(4) 1 グリッド遺物出土状況（南から）	12~14
P L . 4	(1) 1 グリッド植物遺体出土状況（西から）	12~13
	(2) 1 グリッド植物遺体出土状況（西から）	12~13
	(3) 1 グリッド植物遺体出土状況（西から）	12~13
	(4) 調査風景	
P L . 5	(1) 出土遺物	11·13~17
	(2) 接合資料	14
〈吉田構内教養部複合棟新館に伴う発掘調査〉		
P L . 6	(1) 調査区西半部（北から）	27~64
	(2) 調査区東半部（北から）	27~64
P L . 7	(1) 調査区北端部（北から）	27~64
	(2) A トレンチ河川跡（西から）	29
P L . 8	(1) A-B 壁土層断面（東から）	24~27
	(2) C-D 壁土層断面（北から）	24~27
P L . 9	(1) 落し穴検出状況（西から）	27~29
	(2) 落し穴全景（西から）	27~29
P L . 10	(1) A トレンチ遺物出土状況（東から）	34~36
	(2) A トレンチ遺物出土状況（東から）	34~36
P L . 11	(1) B トレンチ全景（北から）	34~36
	(2) C トレンチ全景（西から）	34~36

	(3) A レンチ石斧出土状況 (北から)	34~36
	(4) 包含層石匙出土状況	34~36
P L . 12	(1) 第1~3号竪穴住居跡検出状況 (北西から)	36·39·40
	(2) 第1·3号竪穴住居跡 (西から)	36·39·40
P L . 13	(1) 第4号竪穴住居跡検出状況 (北から)	40
	(2) 第4号竪穴住居跡 (西から)	40
P L . 14	(1) 第1号河川跡土層断面 (東から)	40
	(2) 第2号河川跡土層断面 (北から)	43·44
	(3) 第1号河川跡石斧出土状況 (南西から)	40·43
	(4) 第2号河川跡石器出土状況 (南から)	44
P L . 15	(1) 第1号掘立柱建物跡 (北から)	45
	(2) 第2号掘立柱建物跡 (西から)	45·46
P L . 16	(1) 第1号井戸 (東から)	46
	(2) 第2号井戸 (東から)	48
P L . 17	(1) 第2号埋甕土壤 (西から)	50·51
	(2) 第3号埋甕土壤 (西から)	51
P L . 18	出土遺物(1)	29~60
P L . 19	出土遺物(2)	29~60
P L . 20	出土遺物(3)	29~60
P L . 21	出土遺物(4)	29~60
P L . 22	出土遺物(5)	29~60
P L . 23	出土遺物(6)	29~60
P L . 24	出土遺物(7)	29~60
P L . 25	出土遺物(8)	29~60
<小串構内医学部附属病院病棟新築に伴う試掘調査>		
P L . 26	小串構内全景 (南西から)	
P L . 27	(1) A レンチ全景 (西から)	73
	(2) B レンチ全景 (東から)	74
P L . 28	(1) A レンチ中央全景 (西から)	73
	(2) A レンチ溝 (東から)	73

(3) A レンチ北壁土層断面 (南から)	69
(4) B レンチ東壁土層断面 (西から)	69~70
P L. 29 (1) B レンチ遺物出土状況全景 (南から)	74~79
(2) B レンチ遺物出土状況 (南から)	74~79
(3) B レンチ遺物出土状況 (東から)	74~79
P L. 30 (1) 出土遺物 (石器・表)	73~79
(2) 出土遺物 (石器・裏)	73~79
P L. 31 (1) 出土遺物 (石器)	73~79
(2) 出土遺物 (土器)	73~79
(3) 出土遺物 (サメの歯)	73~79
〈昭和62年度山口大学構内の立会調査〉	
P L. 32 (1) 農学部附属農場 E 7 地点土層断面 (東から)	88
(2) 農学部附属農場 E 6 地点土壌 (西から)	88~90
(3) 出土遺物	90

付篇Ⅱ

（墨で文字を書きこんだうつわ）

P L. 33 (1) 吉田遺跡出土の墨書土器「富」	110~113
(2) 平城京跡「富」	109·113
(3) 郡家今城遺跡「富鏡」	113
(4) 谷内遺跡「富」	113
(5) 黒河尺目遺跡「大富」	113
P L. 34 (1) 周防国衙跡発見の墨書土器「国厨」	113~115
(2) 周防鋳銭司跡発見の墨書土器	113~115

挿 図 目 次

〈昭和62年度山口大学構内遺跡調査の概要〉

Fig. 1 山口大学吉田・亀山両キャンパス位置図	2
---------------------------------	---

Fig. 2	山口大学小串・常盤両キャンパス位置図	3
Fig. 3	山口大学光キャンパス位置図	4
<吉田構内教育学部附属教育実践研究指導センター新營に伴う発掘調査>		
Fig. 4	調査区位置図	5
Fig. 5	基本土層柱状図	6
Fig. 6	土層断面図	7・8
Fig. 7	遺構配置・グリッド設定図	9
Fig. 8	第1号土壤実測図	10
Fig. 9	第2号土壤実測図	10
Fig. 10	第3号土壤実測図	11
Fig. 11	出土遺物の平面分布図（1グリッド）	12
Fig. 12	出土遺物の垂直分布図（1グリッド）	12
Fig. 13	出土遺物の平面分布図（2グリッド）	13
Fig. 14	出土遺物の垂直分布図（2グリッド）	13
Fig. 15	出土遺物実測図	15・16
<吉田構内教養部複合棟新營に伴う発掘調査>		
Fig. 16	調査区位置図	23
Fig. 17	試掘調査トレンチ設定図	24
Fig. 18	土層断面図	25・26
Fig. 19	トレンチ設定図	27
Fig. 20	縄文時代の遺構配置図	28
Fig. 21	落し穴実測図	29
Fig. 22	落し穴出土遺物実測図	29
Fig. 23	河川跡出土遺物実測図	30
Fig. 24	谷状遺構土層断面図	31
Fig. 25	谷状遺構出土遺物実測図	32
Fig. 26	Aトレンチ河川跡・包含層遺物出土状況	33
Fig. 27	包含層出土遺物実測図（土器）	34
Fig. 28	包含層出土遺物実測図（石器）	35
Fig. 29	弥生時代以降の遺構配置図	37・38

Fig. 30	竪穴住居跡実測図	39
Fig. 31	第1・2号河川跡実測図	41
Fig. 32	第1・2号河川跡出土遺物実測図	42
Fig. 33	掘立柱建物跡実測図	44
Fig. 34	第1号井戸実測図	45
Fig. 35	第2号井戸実測図	46
Fig. 36	井戸出土遺物実測図（1・2—第1号井戸 3～6—第2号井戸）	47
Fig. 37	第1号井戸出土遺物実測図	48
Fig. 38	第2号井戸出土遺物実測図	49
Fig. 39	第2・3号埋甕土壤実測図	50
Fig. 40	第2・3号埋甕および出土遺物実測図	51
Fig. 41	溝・暗渠出土遺物実測図	53
Fig. 42	第4・5層およびその他の出土遺物実測図	55
Fig. 43	出土錢貨拓影（1—第2号井戸 2—第5号暗渠 3—第5層）	55
〈小中構内医学部附属病院病棟新営に伴う試掘調査〉		
Fig. 44	病棟新営地位置図	67
Fig. 45	トレンチの位置と遺構分布図	68
Fig. 46	土層断面図	71-72
Fig. 47	Aトレンチ第1・2号溝実測図	73
Fig. 48	Aトレンチ旧丘陵の地形	74
Fig. 49	Bトレンチ石器群の出土状況（上・平面、下・垂直）	75
Fig. 50	出土遺物実測図(1)	77
Fig. 51	出土遺物実測図(2)	78
〈昭和62年度山口大学構内の立会調査〉		
吉田構内の立会調査		
Fig. 52	調査区位置図	85
Fig. 53	調査区位置図	86
Fig. 54	調査区位置図	87
Fig. 55	調査区位置図	88
Fig. 56	A地点土層断面図	89

Fig. 57	B地点土壤実測図	89
Fig. 58	A地点出土遺物実測図	90
Fig. 59	調査区位置図	91
Fig. 60	調査区位置図	92
Fig. 61	調査区位置図	93
小串構内の立会調査		
Fig. 62	調査区位置図	94
亀山構内の立会調査		
Fig. 63	調査区位置図	95
光構内の立会調査		
Fig. 64	調査区位置図	96
Fig. 65	出土遺物実測図	96

付篇 I

〈吉田遺跡の花粉分析〉

Fig. 66	B壁セクションおよび試料採取層準	100
Fig. 67	C壁セクションおよび試料採取層準	100
Fig. 68	B壁から採取した試料の花粉ダイアグラム 1	101
Fig. 69	B壁から採取した試料の花粉ダイアグラム 2	101

付篇 II

〈墨で文字を書きこんだうつわ〉

Fig. 70	「盆」の須恵器 発見場所	107
Fig. 71	さまざまな墨書文字（平城京）	109
Fig. 72	「盆」の須恵器実測図	110
Fig. 73	吉田遺跡周辺の須恵器窯跡	111
Fig. 74	律令時代の墨書土器が見つかった遺跡（山口県内）	114
Fig. 75	律令時代の墨書土器 実測図	115
Fig. 76	大学会館周辺の地下の状況	117
Fig. 77	山口大学吉田構内地区割および調査区位置図	135・136

Fig. 78 山口大学小串構内調査区位置図	137・138
Fig. 79 山口大学常盤構内調査区位置図	139・140
Fig. 80 山口大学亀山構内（幼稚園・小学校部分）調査区位置図	141・142
Fig. 81 山口大学亀山構内（中学校部分）調査区位置図	143・144
Fig. 82 山口大学光構内調査区位置図	145・146

表 目 次

〈昭和62年度山口大学構内遺跡調査の概要〉

Tab. 1 昭和62年度山口大学構内遺跡調査一覧表	1
〈吉田構内教育学部附属教育実践研究指導センター新營に伴う発掘調査〉	
Tab. 2 出土遺物観察表	20～22
〈吉田構内教養部複合棟新營に伴う発掘調査〉	
Tab. 3 土壌一覧表	54
Tab. 4 出土遺物観察表	56～59
〈小串構内医学部附属病院病棟新營に伴う試掘調査〉	
Tab. 5 出土遺物観察表	80～84
〈昭和62年度山口大学構内の立会調査〉	
Tab. 6 A 地点出土遺物観察表	90

付篇Ⅰ

〈吉田遺跡の花粉分析〉

Tab. 7 中国地方の晩氷期以降の植生変遷（三好、1983を一部改変）	99
〈山口大学構内出土の植物遺体〉	

Tab. 8 山口大学構内出土の植物遺体	104・105
----------------------	---------

付篇Ⅱ

〈墨で文字を書きこんだうつわ〉

Tab. 9 律令時代の墨書き土器一覧（山口県内）	115
---------------------------	-----

Tab. 10 山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会委員	126
Tab. 11 山口大学埋蔵文化財資料館特別調査員	126
Tab. 12 山口大学構内の主な調査一覧表	127～132

第1章 昭和62年度山口大学構内遺跡調査の概要

山口大学の関連施設は山口・宇部・光の県内各市内に分散している。各構内には、繩文時代後・晩期から江戸時代にかけての複合集落遺跡として著名な吉田構内をはじめとして、周知の遺跡が埋存している。山口大学埋蔵文化財資料館は学内共同利用施設として、これら各構内において現状変更を伴う工事に対し、埋蔵文化財保護の観点から調査・研究を行っている。すなわち、埋蔵文化財の調査を必要とする場合は、工事地域周辺における既往の調査結果や工事の内容、埋蔵文化財に対する影響の度合等を勘案し、埋蔵文化財資料館運営委員会の議を経て、立会、試掘、事前の三種の調査方法によって調査を実施している。

昭和62年度は事前調査2件、試掘調査2件、立会調査10件の計14件の調査を実施した。

Tab. 1 昭和62年度山口大学構内遺跡調査一覧表

調査区分	調査名	構内地区	構内地区割	調査面積 (m ²)	調査期間	桜岡番号
事前	教育学部附属教育実践研究指導センター新宮	吉田構内	K-18	240	6月22日～8月11日	Fig. 77-91
	教養部複合棟新宮	吉田構内	J・K-17-18	900	9月14日～12月12日	Fig. 77-94
試掘	教養部複合棟新宮	吉田構内	J・K-17-18	35	7月21日～7月27日	Fig. 77-92
	医学部附属病院病棟新宮	小串構内		104	1月19日～2月15日～3月4日	Fig. 78-16
立会	教養部複合棟新宮	吉田構内	I・J-16	30	9月8日～2月24日～3月12・17日	Fig. 77-93
	国際交流会館新宮	吉田構内	M-23 N-22・23	195	11月9日～11日 3月28日	Fig. 77-96
会	教育学部附属義務学校自転車置場設置	吉田構内	B-21	1	11月20日	Fig. 77-97
	農学部附属農場E7圃場排水管埋設及びE6圃場進入路拡幅	吉田構内	L-N-12	45	12月14日～3月7日～9日	Fig. 77-98
九	農学部植栽	吉田構内	N-17	3	3月17日	Fig. 77-99
	経済学部集水樹取設	吉田構内	K-20	0.5	3月20日	Fig. 77-100
田	川改修	吉田構内	B-C-17	20	10月20日	Fig. 77-95
	医学部附属病院東駐車場改修	小串構内		6	9月7日	Fig. 78-15
川	教育学部附属幼稚園改築	亀山構内		40	11月26日	Fig. 80-6
	教育学部附属光中学校グラウンド防球ネット設置	光構内	V-15-16	2	3月28日	Fig. 82-5

吉田構内の調査

事前調査2件、試掘調査1件、立会調査7件の計10件の調査を実施した。

教育学部附属教育実践研究指導センター新営予定地では、弥生時代から古墳時代にかけての土壙1基、柱穴、江戸時代の土壙2基、および近・現代の溝5条を検出した。これらは上部の削平も著しく、良好な残り方はしていない。調査区は遺跡保存地区に接するが、



Fig. 1 山口大学吉田・亀山キャンパス位置図

検出した遺構は少なく、後世の擾乱よりは、本来の地形そのものに影響されていると考えられる。当調査では、縄文時代晩期の石器類の抽出に成功し、吉田構内において、また山口盆地内で初めて当期の包含層を確認した。これに伴って、水洗選別による微細遺物の有無を確認した結果、若干の碎片類が検出された。周辺地域での今後の調査に期待される。出土石器には姫島産黒曜石製のブランクなどがあり、現在、県内での報告例はなく、石器製作法を究明する手がかりとして、重要な資料となった。また、この包含層下位で検出された河川跡からは自然木・種子等の植物遺体が発見された。分析の結果、当期の植生が明らかとなり、環境復元の上で貴重な資料を提示することとなった。なお、擾乱層から黒曜石製の細石刃？が出土したが、これまで細石器文化期遺物の発見はなく、形状からは積極的に肯定できるものではない。

教養部複合棟新営予定地では、縄文時代、弥生時代から古墳時代、江戸時代の遺構を検出した。縄文時代のものには晩期の河川跡、落し穴、溝、谷状遺構のは

か遺物包含層がある。県内では縄文時代の遺跡の調査例が乏しく、しかも、沿岸部に集中しており、貴重な調査例となつた。落し穴と思われる遺構は、幅29m以上の規模をもつ河川跡と同一面で検出された。県内では極めて類例が少なく、古環境、生業形態を解明する資料として注目される。遺物包含層は晩期中頃のもので、本構内では初例である。後述する弥生時代以降の遺跡は、遺物包含層を掘り込んでいることが明らかになり、火山灰の分析結果などから今後、同時期さらにはそれを遡る時期の遺構、遺物包含層が検出される可能性がある。弥生時代から古墳時代のものには堅穴住居跡4基、河川跡2条等がある。堅穴住居跡は遺跡保存地区と同時期のもので、吉田構内南西部から中央部付近にかけて大規模な集落が存在していたことを窺わせ、本構内における集落の時期的な立地、規模、展開過程を解明する好資料となつた。江戸時代は掘立柱建物跡2棟、井戸2基、埋甕土壙3基等の集落関連遺構がある。両建物は棟方向がほぼ直交し、井戸、埋甕土壙を付設する屋敷内の一連の建物と考えられ、屋敷構造、集落および構成員の性格を知る良好な遺構である。

出土遺物には縄文時代から平安時代および江戸時代の土器、縄文時代の石器などがあり、須恵器模倣土師器、墨書きある須恵質土器は注目に値する。

立会調査では7件のうち3件の調査で、遺物包含層あるいは遺構が認められた。

教養部複合棟新館に伴う調査では、時期は明かでないが溝状遺構を、国際交流会館新館に伴う調査では、弥生時代から古墳時代およびそれより時期的に遡る可能性のある2条の



Fig. 2 山口大学小串・常盤両キャンパス位置図

河川跡を検出した。また、農学部附属農場 E. 6 園場進入路拡幅に伴う調査では、全リン酸・全カルシウム量の定量分析結果から、土壌墓と考えられる土壤が検出された。遺物包含層は同 E. 7 園場での排水管埋設工事で認められ、古代から近世の各時期の遺物が混在する。

小串構内の調査

試掘調査1件、立会調査1件の計2件の調査を実施した。

医学部附属病院棟新営に伴う試掘調査では、北側と南側にトレンチを設定したが、両者の土層は著しく異なっていた。北側では初めて山上を検出し、旧地形の北東方向への傾斜を確認した。また遺構では、近・現代の所産と考えられる溝2条が発見された。削平が著しく、これまで検出されている遺構に新たな知見を加えるものではないが、このように遺構自体は確実に残存しており、今後の調査によっては古い時期の遺構の見つかる可能性はある。こうした中で、南側トレンチ内の数枚の遺物包含層の発見は大きな成果であった。特に、旧石器時代遺物のみを含むと考えられる層からは、姫島産玻璃質安産岩製のナイフ形石器など多量の石器類が出土し、剥片剝離法などの石器製作に係わる貴重な資料を提示した。また、黒曜石・チャート・凝灰岩など使用石材の多様性から、当期の交易・行動範囲の類推に際して極めて重要な資料であると言える。石材に関しては、蛇紋岩?が多く見られた。当期に石器石材として使用にたえ得るものかどうかの判別はし難いが、二次的な加工と思われる痕跡を持つものもあり、蛇紋岩系の石材がこのように多量に見られること自体、はなはだ珍しいと言える。



Fig. 3 山口大学光キャンパス位置図

同病院東駐車場整備に伴う立会調査では、過去の調査で認められた遺物包含層を検出したが、遺物は出土しなかった。

亀山構内の調査

教育学部附属幼稚園遊戯室拡張に伴い立会調査を行ったが、顕著な遺構、遺物包含層は認められなかった。

光構内の調査

教育学部附属光中学校グラウンドでの防球ネット取設に伴い立会調査を行った。明確な遺物包含層は確認していないが、土師器、瓦質土器、陶器、瓦が出土した。

第2章 吉田構内教育学部附属教育実践研究指導センター 新営に伴う発掘調査

1 調査の経過

調査地区は教育学部研究実習棟の北東部にあり、構内地区割ではK-18南東隅に当る。今回、教育学部附属教育実践研究指導センター（以下、実践センターと略称）が新営されることを受けた資料館では、この地区が以前より、弥生土器・土師器等の遺物散布地点として知られていたことを考慮した上、遺構・遺物の埋存状況、土層の堆積状況を把握する目的をもって実施した。

調査期間は昭和62年6月22日から8月11日までで、調査面積は約240m²である。実践センター新営の件は昭和61年度からの案件であったが、62年度に入って急撫具体的となつた経緯をもつ。試掘調査の後、改めて調査方法の検討を行なう予定をたてたが、期間が切迫していたこともあり、調査面積を考慮して全面調査に切り替えた。なお、梅雨の時期に当った為、調査期間が伸びたことを付け加えておく。

調査区内においては、既設配管の為、見かけ上A・B・Cの三区に分かれた（Fig. 7）。A区では約1/4が現代の共同溝敷設工事の際にすでに攪乱を受けており、実際の調査面積は新営予定地全体の約1/3となつた。調査方法は、第1層である埋め土を重機によって除去したのち、2層以下は手掘りによる分層発掘をおこなつた。その結果、弥生～古墳時代にかけての土壙・柱穴、近世以降の土壙・溝、それに近・現代の暗渠5条が検出されたが、顕著な遺物は見られなかつた。なお、第3層については遺物包含層であることが判明し、4箇所のグリッドを設けて掘削したところ、縄文時代の所産と考えられる土器片・石器類が出土した。また、自然木、木の実等が見られ、縄文時代を含めそれ以前の自然環境を知るうえで貴重な発見となつた。



Fig. 4 溝敷区位置図

2 層位

調査前の地表面はほぼ水平で、標高18.85mを計る。遺構を検出し得る層までには造成土、旧水田耕作土がある。造成土は本学統合移転時の埋め土で、C区、A区の西部において40~60cmで、厚い。旧水田耕作土は灰黄色を呈する近世以降の水田耕作土で、C区、A区の西部において厚い。以下、第3層目として、粘性を帯びた浅黄色土が堆積し、この上面で弥生~古墳時代、近世以降の遺構を検出した。本層は繩文時代の遺物包含層である。第4層として赤灰色粘質土、第5層として灰オリーブ粘質土と続く。第4層以下においては遺構・遺物の発見はない。第3層は2~3つに細分可能な状況にあり、下部に向かい小礫が多く含み、粘性も強くなる。この状況を合わせて旧地形の復元を試みると、A区南側では、削平の度合いから凸部であった可能性も高く、逆にA区中央付近では第3層上部に灰黄色土の堆積があり、ここが落ち込んでいたことを推測させる。微妙な凹凸が存在したことは、遺構の残り具合からも求められる。元来、希薄である可能性も否定出来ないが、ここでは、削平によるものと思われる。当調査区内においては、微高地あるいは谷部といった旧地形の起伏を考え得るが、これは決して平面的な広がりを持つものではなく、垂直的に幅を持った起伏の存在が浮かび上がる。

基本層序の各上質は次のとおりである。



第1層 埋め土 20~60cm

第2層 灰黄色土 よくひきしまる。構成粒子は細かいが、不純物を多く含む。旧耕作土。5~35cm。

第3層 浅黄色土 砂質である。不純物はほとんど含まない。5~30cm。遺物包含層。

第4層 赤灰色土 硬くひきしまる。0.2~0.5cm程度の小礫を多く含む。5~30cm以上。

第5層 灰オリーブ色土 黏性が強く、0.3cm程度の小礫・炭を多く含む。5~30cm。

第5層以下は未掘である。

基本層序としてこれらの5層を確認しておきたい。ただ、Fig. 6に示したように、接近した地点でも堆積の在り方は微妙に違っており、無理に比定することは避けた。

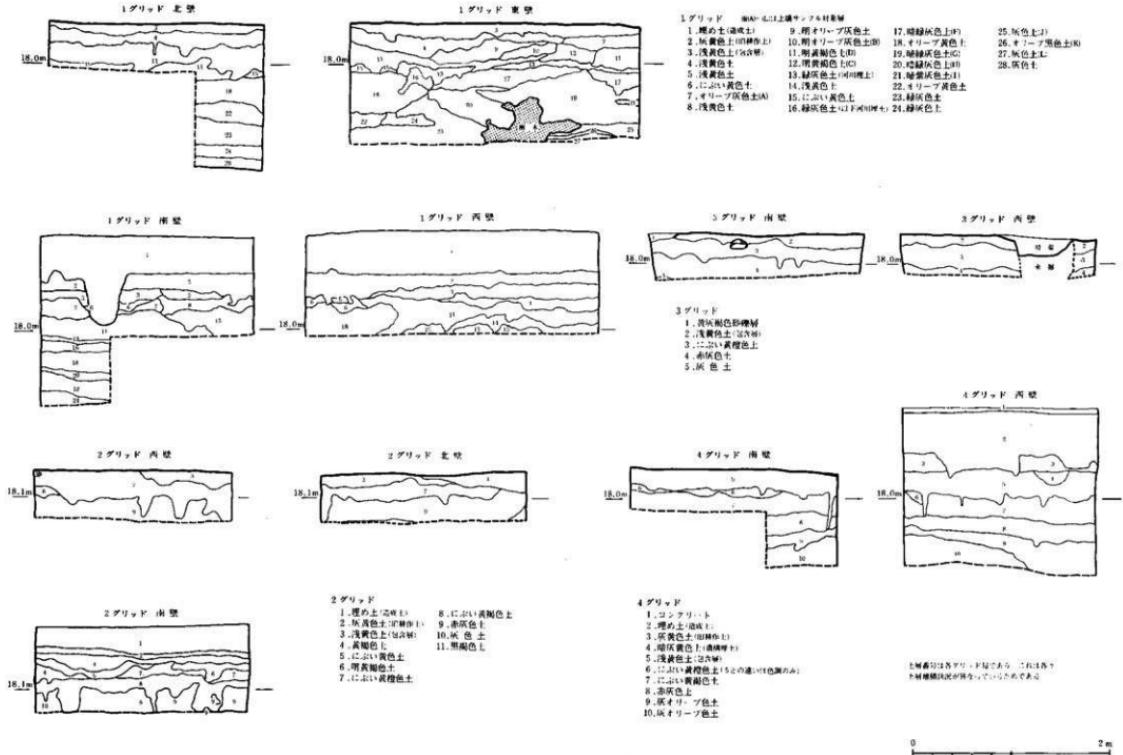


Fig. 6 土壠断面図

3 遺構・遺物

(1) 弥生～古墳時代、江戸時代以降の遺構・遺物

検出した遺構には、土壙・溝・柱穴がある。弥生～古墳時代のものはA区の西部・東部、C区の東側に、江戸時代以降のものは、C区の北東部と南西部に偏ってみられた。

土壤 A区においてのみ3基検出した。

第1号土壤 SK 1 (Fig. 8)

A区の西部、構内座標 $x = 304$, $y = 498$ 付近で検出された不整規四形のもので、北東～南西方向に長軸を持つと考える。南東部は溝（略図2）によって切られており、最低、長軸で1.4m、短軸では0.8mの規模を持つ。深さは検出面より11cmを最深部として平均6cm程度で浅い。底は最深部で標高18.14m。中央部がやや窪む。内部からの出土遺物はない。

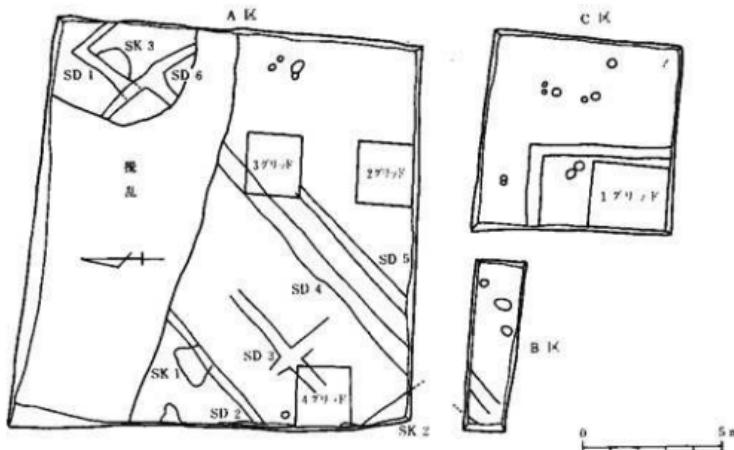


Fig. 7 遺構配図・グリッド設定図

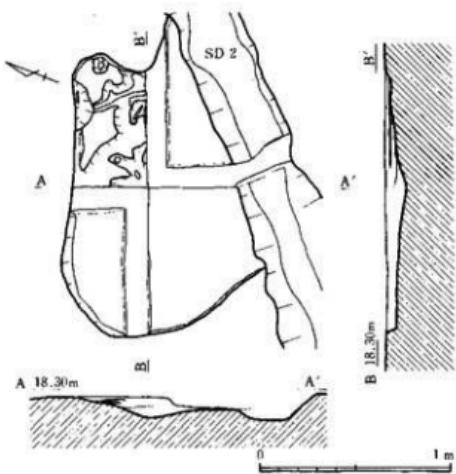


Fig. 8 第1号土壙実測図

が、埋土の状況等から弥生～古墳時代にかけてのものと考えられる。

第2号土壙 SK 2 (Fig. 9)

A区の南西隅、B区の西隅において検出した。構内座標 $x = 295$, $y = 496$ 付近のもので、方形を呈すると思われる。一边は少なくとも 2.5m はあると考えられる。壙底は平で、その標高は 18.23m を計る。検出面からの深さは 17cm 程である。出土遺物はないが、埋土等から江戸時代以降のものと考えられる。

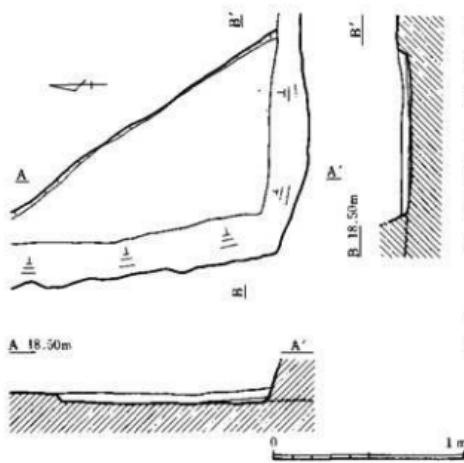


Fig. 9 第2号土壙実測図

第3号土壙 SK 3 (Fig. 10)

A区北東隅、構内座標 $x = 306$, $y = 509$ 付近で検出された、不整格円形のもので、やや北東～南西方向に幅が広いようである。これを長軸とみると 1.5m、短軸 0.6m の規模を持つことになる。壙底は平で、検出面からの深さは約 20cm である。出土遺物はないが埋土の状況等から SK 2 同様、江戸時代以降の所産と考えられる。なお、溝 1 との切り合いは明確にし得なかった。

溝 A区においてのみ 6 条検出した。

溝 SD 1

土壙 SK 3 に隣接するもので、A [X] の北東隅ではほぼ直角に曲がる部分を検出した。既述のとおり、土壙 SK 3 との切り合いは不明である。また、南西側は溝（暗渠 5）によって切られている。幅は約 40cm、断面形は逆台形状を呈する。溝底にはかなりの凹凸があり、検出面からの深さは最深部で約 55cm 程ある。出土遺物

はなかったが、埋土の状況等から江戸時代以降の所産と考えられる。

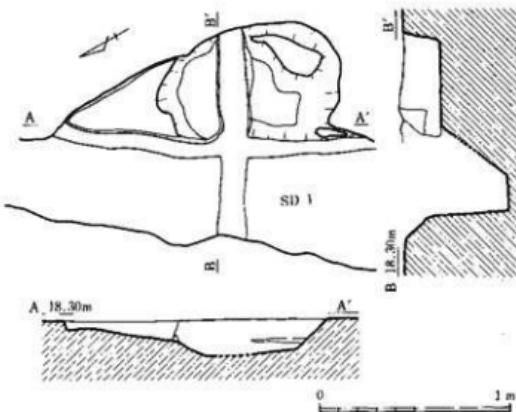


Fig. 10 第3号土壙実測図

溝 SD 2～SD 6

ほかに、溝 5 条が検出されている。これらはすべて近世以降の水田耕作に伴う排水用施設（暗渠）である。ほとんどが北東～南東方向に流路をもっているが、一部これと直交するものもある。検出面からの深さでは多くが 10～15cm 前後であるが、場所によってはかなり異なる。幅は 40cm 程度のものが多い。出土遺物 (Fig. 15, PL. 5) について、SD 2 では、土師質土器の壺・須恵器の壺蓋・瓦質上器・磁器・瓦が出土している。SD 4 からは、須恵器・瓦質土器・陶器・磁器・管玉の未製品と考えられるものが出土した。このうち 18 は表・裏両面に施釉し、貫入がみられる陶器の破片である。外面にはヘラによる 2 条の沈線とスタンプによる菊花文を施している。1 の管玉の未製品と考えられるものは、一部を欠損し縦方向に擦痕（磨き痕）が見られる滑石製のものである。SD 6 からは弥生土器・磁器が出土している。なお、当調査における遺構出土の遺物は、これら近・現代の暗渠からのみで、すべて細片である。

柱穴 A・C 区において 22 穴検出した。

埋土の状況等から、弥生～古墳時代の所産と考え得るもの14件を検出した。A区の中央部東端とC区の中央やや東寄りに集中しており、直径10～40cmのものである。検出面からの深さは3～15cmであり、10cm前後のものが多い。外に、近・現代の所産と考えられるものを8つ検出した。

(2) 縄文時代の遺構・遺物

弥生時代以降の調査を完了した時点で、第3層上面に多くの炭が入っていることを確認した。これらが人為的なものか自然的なものか、また、下層にも続くのか、ということに注意を払い、炭が集中して見られた部分に、4箇所のグリッド設けて掘削を行なった。その結果、第3層の上部で縄文土器片、縄文時代のものと考えられる石器類が出土し、炭に関しては、人為的である可能性が大きくなかった。しかし、遺構は全く検出されなかった。

以下、各Gridの説明を行なうこととする。出土遺物については後に一括して述べたい。

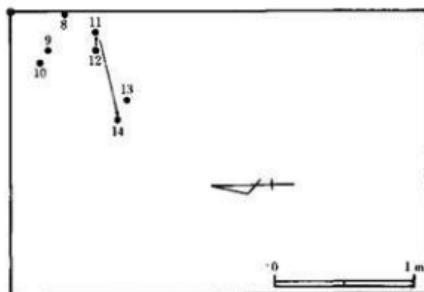


Fig. 11 出土遺物の平面分布図(1グリッド)



Fig. 12 出土遺物の垂直分布図(1グリッド)

1 Grid (C区)

C区西壁に沿って設けた南北2.5×東西2mのグリッドであるが、すぐに北東隅で大形剝片の出土を見たため、この時点ではグリッドを北へ50cm拡張した。実際の掘削は南北3×東西2mである。掘削方法は、移植ゴテ・手鋤によって、5cm程度づつ全面同一レベルで掘り進めていった。第3層上面より約30cmまでの中では、土器片・剝片・貝片・木片が出土したが、それ以上はこれらの遺物の出土はなかった。ところが土壤サンプリングの為、グリッド東壁から西へ70cmの幅をとってスコップにより掘り下げを行なったところ、湧

水をみた、第3層上面から深さ0.7~1.5mのところで自然木・木の実が出土した。出土層位は旧(縄文時代)河川跡の堆積土内である。

2 Grid (A区)

A区南壁の中央に設定した2×2mのグリッドで、1グリッドとの距離は最低6.5mある。北西部にのみ第3層上部が見られ、外は第2層直下に小礫混じりの層が堆積する。これは河川の堆積土と考えられ、この上面から約40cmの深さまでの内から水晶製の削器・貝片等が出土した。掘削方法は1グリッドと同様である。第4層以下では、遺物の出土はなかったが、炭については数は少ないものの入ることを確認した。

3 Grid (A区)

A区の中央部に設定した2×2mのグリッドで、2グリッドの距離は最低2mある。掘削方法は1・2グリッドと同様である。第3層上面より5~15cmの深さで大形の蝶が1点出土した。

4 Grid (A区)

A区西壁に沿った2×2mのグリッドである。2・3グリッドの土層堆積状況が悪かった為、それを補う形で他グリッドの掘削途中で設定した。2・3グリッドとの最短距離は、約6mである。第4層までは他グリッド同様の掘削方法で、第5層以下は西壁土壤サンプリングの為の掘削で西壁から東へ80cmの幅をとってスコップにより掘り下げた。遺物の出土はなかった。

遺物 (Fig. 15, PL. 5)

縄文土器片、削器・蝶・剝片・鋒片、貝片がある。出土層位は河川の埋土内のものを除き第3層であり、その上面に中心をもつ。

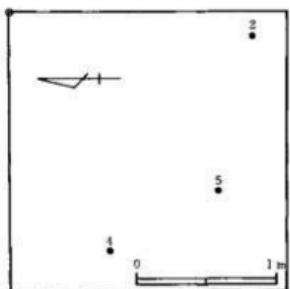


Fig. 13 出土遺物の平面分布図(2グリッド)



Fig. 14 出土遺物の垂直分布図(2グリッド)

1 Grid では姫島産黒曜石を用いた剥片等を見ていきたい。計 8 点のうち 4 点は微細なものであるのでここでは触れない。11 と 12 は非常に大形のもので、コアーブランクとして捉えておきたい。両者とも節理面と考えられる面をもっており、形態も類似する。調製痕も方向をほぼ同じくすることから接合作業を行った結果、欠損による 2 分割が判明した。剥離による分割ではないものの、器種認定に当たり、原形の非常な不定形、不安定さにやや疑問が残るものである。14 は片側を欠損するもので、原形は薄手の横長の剥片であろう。打面・打点は欠損により残らない。前述の 11・12 に接合する。11・12 がコアーブランクであると見ると、その調整剥片として認定されるものであろう。13 はやや縦長で厚みのある剥片である。打面・打点は残すが、下端と一個縁は欠損する。背面には原礫面と考えられる面を持つが、これは著しい剥離風化面かもしれない。1 Grid では外に縄文土器片、黒曜石の碎片、貝片があるが、これらはあまりに微細であり、検討にたえない。

2 Grid では河川の埋土内から、削器・碎片・貝片が出土している。2 は水晶製のやや横長の剥片を素材とするもので、二次加工は腹面から緻密に入る。側面に見られる背面からの加工は何らかのアクシデントであろう。腹面上部には剥落痕と考えられる微細な痕を見るが、これはリタッチを入れる際のものか、あるいは使用による際のものという 2 つが考えられる。素材上部は欠損する。

3 Grid では大形の礫のみ、1 点出土した。これは自然の礫である。出土層位は第 3 層からであるが、第 3 層を細分して見た場合、二つの層にわたっての出土である。

4 Grid では掘削中による遺物の出土はない。

ほかに、細石刃？・土師質土器片・陶器片といった遺物が攪乱土中から出土している。このうち 18 の細石刃？は黒曜石製のもので、両端（上部・下部）を欠損（折断）し、縦長の剥片を素材としている。細石刃としての認定に躊躇するのは背・腹両面に見られる剥離の方向が一定しないことと、背面側の微細剥離痕の存在である。なお、風化がかなり進んでいる。

水洗選別作業検出の遺物

今回、水洗選別作業を行なったグリッドは 1・4 グリッドであり、対象上層は第 3 層上部を中心に第 3 層全体に、また一部第 4・5 層に及ぶ。1 グリッドについては、包含層の残りの良さと遺物の出土状況を踏まえ対象区とした。4 グリッドは、遺物の出土こそなかったが、包含層の残りの良さから、また 1 Grid との距離・その位置関係を考慮し、対象区

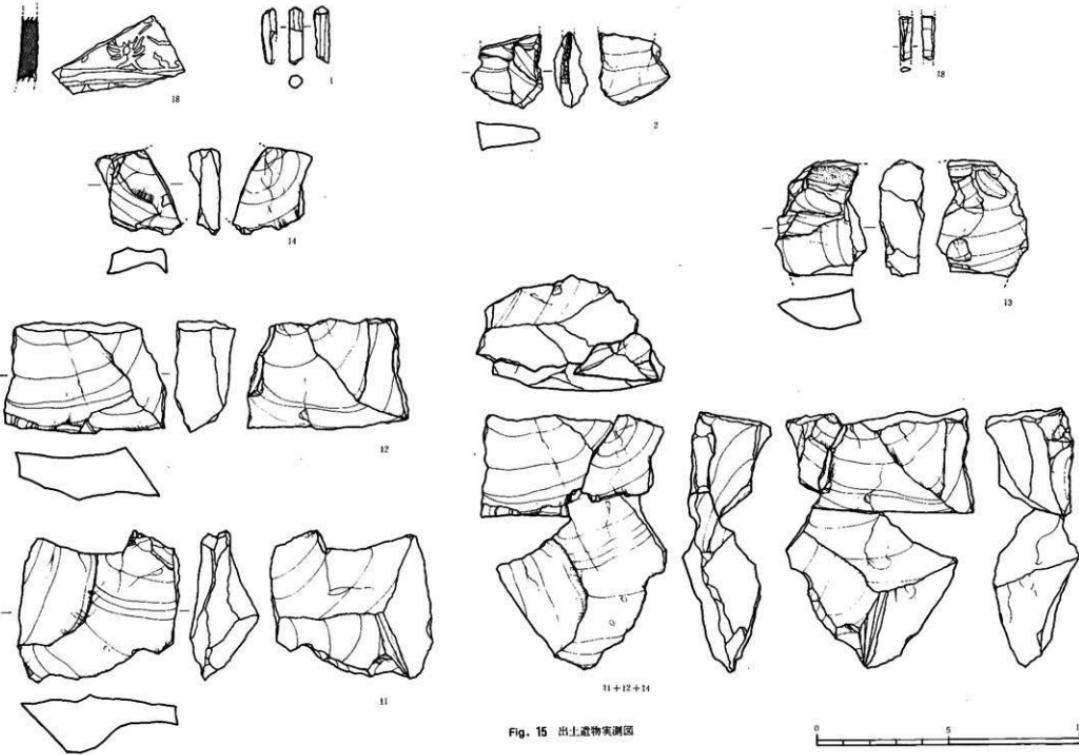


Fig. 15 出土遗物实测图

小 結

とした。水洗選別作業の目的は吉田構内において、これまで掘削したことのない層から縄文時代の遺物が初めて出土したことを契機として、遺物の平面的・垂直的な広がりを把握する中の一環として行ない、今回どれほどの微細遺物が包含されているのか、特にその量の把握に主眼を置いた。

その結果、1グリッドでは二次加工のある剝片・加工痕(使用痕)のある碎片・剥片・碎片・炭・貝片・水晶片が検出できた。石器類の石材に関しては、チャート・姫島産黒曜石・水晶がある。4グリッドでは、貝片・炭・水晶片があるが、いわゆる石器類はなかった。また、両グリッドに見られる水晶片は、石器・剝片・碎片に区分できるものではないが、水晶製の石器類が出土していることから、単に石片として片付けられないものもあると考える。両グリッドとも第3層から遺物が検出された状況であるが、層の堆積がよりしっかりしており、出土した遺物も多い1グリッドにおいて検出した微細遺物も多かった。

4 小 結

(1) 遺構・遺物について

今回検出した遺構は、土塙3・溝6・柱穴22である。残り具合は非常に悪く、調査面積の割には希薄な残存状況であった。各遺構について時期・性格などを追及でき得る資料はほとんどなかったと言える。また、自然木等を含む旧河川を考えるものについても、検出面積の少なさと、人工遺物の未検出で、その詳細は分からなかった。

当調査区は、北東から延びる姫山・今山の洪積丘陵地と、櫛野川左岸の沖積段丘に在る吉田遺跡のはば中央部に位置し、周辺の既往調査から見て、今回の遺構埋存状況は全くの予測外であった。これはもともと足跡のない地域であった可能性はあるものの、残存遺構の状況、さらにその偏り方から見て、ここでは大きく削平を受けた結果であると考えておきたい。しかしながら、その時期・内容・方法についての詳細は不明である。また、旧地形は微妙な起伏をもって存在していた可能性が高い。

今回、縄文時代の遺物包含層を確認したことは大きな成果であった。出土遺物は黒曜石製の剝片等、土器細片・貝片が若干で、出土層位は第3層上面であった。石器に関してはその接合関係から明らかであるが、これらの遺物はその出土層位から同一時期とみなすことができよう。すなわち、当調査区において、第3層上面を中心とした一文化層が確認できた。そして、これらの所属時期についての判断資料として、土器もあるが、細片のため時期を特定することはできなかった。

小 結

とした。水洗選別作業の目的は吉田構内において、これまで掘削したことのない層から縄文時代の遺物が初めて出土したことを契機として、遺物の平面的・垂直的な広がりを把握する中の一環として行ない、今回どれほどの微細遺物が包含されているのか、特にその量の把握に主眼を置いた。

その結果、1グリッドでは二次加工のある剝片・加工痕(使用痕)のある碎片・剥片・碎片・炭・貝片・水晶片が検出できた。石器類の石材に関しては、チャート・姫島産黒曜石・水晶がある。4グリッドでは、貝片・炭・水晶片があるが、いわゆる石器類はなかった。また、両グリッドに見られる水晶片は、石器・剝片・碎片に区分できるものではないが、水晶製の石器類が出土していることから、単に石片として片付けられないものもあると考える。両グリッドとも第3層から遺物が検出された状況であるが、層の堆積がよりしっかりしており、出土した遺物も多い1グリッドにおいて検出した微細遺物も多かった。

4 小 結

(1) 遺構・遺物について

今回検出した遺構は、土塙3・溝6・柱穴22である。残り具合は非常に悪く、調査面積の割には希薄な残存状況であった。各遺構について時期・性格などを追及でき得る資料はほとんどなかったと言える。また、自然木等を含む旧河川を考えるものについても、検出面積の少なさと、人工遺物の未検出で、その詳細は分からなかった。

当調査区は、北東から延びる姫山・今山の洪積丘陵地と、櫛野川左岸の沖積段丘に在る吉田遺跡のはば中央部に位置し、周辺の既往調査から見て、今回の遺構埋存状況は全くの予測外であった。これはもともと足跡のない地域であった可能性はあるものの、残存遺構の状況、さらにその偏り方から見て、ここでは大きく削平を受けた結果であると考えておきたい。しかしながら、その時期・内容・方法についての詳細は不明である。また、旧地形は微妙な起伏をもって存在していた可能性が高い。

今回、縄文時代の遺物包含層を確認したことは大きな成果であった。出土遺物は黒曜石製の剝片等、土器細片・貝片が若干で、出土層位は第3層上面であった。石器に関してはその接合関係から明らかであるが、これらの遺物はその出土層位から同一時期とみなすことができよう。すなわち、当調査区において、第3層上面を中心とした一文化層が確認できた。そして、これらの所属時期についての判断資料として、土器もあるが、細片のため時期を特定することはできなかった。

ただ隣接地の教養部教養複合棟新宮に伴う調査（第3章参照）では、この第3層の相当層上面から縄文時代の遺物が多数出土している。土器片については、良好な残り方はしていないが、岩田Ⅱ類・月崎上層Ⅲ式に併行するものと考えられる。実践センター第3層上面出土の遺物は、その層位的事実からこれらに比定でき、よって、その時期は縄文時代晚期中頃と捉えられる。

山口県において、縄文時代の石器を層位的発掘によって検出した遺跡は、ほんのわずかであり、多くが表探・不明といった時間軸にあてはめられないもので、包含層出土のものにしてもその多くはかなりの時間的幅をもっているという状況にある。その意味で今回出土した資料は貴重である。また、県内におけるその体系的な研究を行なう上でも今しばらくの時間は必要となろう。

土層について若干述べておきたい。

実践センター新宮予定地内の土層は、造成土・旧耕作土・浅黄色土・赤灰色土・灰オリーブ色土と続く。このうち、第3層目の浅黄色土の最上面で遺物が出土し、縄文時代晚期中頃の一文化層として認識された。また、浅黄色土は、細分が可能な状況にあり、今後の調査を待つて検討したい。

吉田遺跡（山口大学構内遺跡）の南西約2kmに位置する小路¹⁾遺跡では、小路層と呼ばれる沖積低地の堆積物が確認されている。このうち小路層下部はアカホヤ火山灰に由来する砂質粘土の二次堆積層で、吉田遺跡で見られる、縄文時代晚期中頃の遺物を含む層（第3層）は、これに相当するものと思われる。

アカホヤ火山灰の降下年代は、今から、約6300年前と考えられており、よって、小路層下部はこれ以後、縄文時代晚期中頃（今から2500年くらい前）にかけて堆積したものであろう、との推測が可能である。

第3層のみが、小路遺跡で発表されている砂質粘土の二次堆積層に相当するものかと言えば、そうではなさそうである。教養複合棟Ⅹの調査においては、B・C壁のⅤ層（実践センターの第3層）基底面下、約30cmのところにある暗褐色粘質土（C壁のⅣ層）上面から掘り込んでいる落し穴と考える遺構があり、隣接して検出された河川跡（落し穴とほぼ同時期と考えられる）からは、縄文時代晚期の土器片などが多く出土している。すなわち、暗褐色粘質土（C壁のⅣ層）は一時期にせよ、縄文時代晚期の人々の生活面（地面）であったことになり、小路遺跡で発表された砂質粘土の二次堆積層は、縄文時代晚期中頃の遺物を含む第3層（教養複合棟Ⅹの調査ではB・C壁のⅤ層）以下、少なくとも、教養

複合棟区の調査でのC壁のIX層までの範囲を示すことになる。このように縄文時代晩期中頃に砂質粘土の二次堆積層の活動が行なわれたと考えられるが、果してこれが、その二次堆積活動の全てなのか、あるいは、断続的な活動のうちの一サイクルなのかは判断できず、小路層下部の始源は教養複合棟区の調査でのC壁で見るならば、IX層以下に求められる可能性も出てくる。

また、土層の色調・性質は教養複合棟区の調査でのB・C壁のVI層（実践センターの第3層）と教養複合棟区でのC壁のIV層では、大きく異なっており、これを同一層としては捉え難く、環境なり何らかの変化がここに求められるのではないだろうか。

なお、当調査では土壤のサンプリングを行なっており、現在、花粉分析中である。また、植物遺体の分析から、当期の環境を推察いただいている（付篇1 山口大学構内出土の植物遺体）。今後とも学際的研究による古環境の解明に全力を注ぎたい。

（2）埋蔵文化財遺存状況と今後の方針

当調査区では、削平の度合いが大きいと考えられ、遺構の残り具合が非常に悪かった。この結果をもとに調査終了後の取扱について、埋蔵文化財資料館運営委員会では工事に際して特に支障はない、との結論が出された。

当調査区は「遺跡保存地区」に近く、遺構の集中する範囲内と予想されたが、結果は全くその逆であった。これは削平の有無もあるだろうが、そればかりの問題とも言い切れず、多くの問題が残されたというのが実情である。周辺地域では今後ます、綿密な試掘調査が必要となるもので、さらに縄文時代晩期中頃以前の相当層は削平の手を免れており、この層以下では特に注意を払う必要がある。

〔注〕

- 1) 松尾正：「小路道路周辺の第四系」「小路道路」（山口市埋蔵文化財調査報告第27集、山口市教育委員会、1988年）

Tab. 2 出土遺物観察表

No.	器種	石 素	出土位置 (Grid)	出土鋼位	北→南 (m)	東→西 (m)	出土高 (m)	積入幅 (cm)	積入深 (cm)	重 量 (g)	打 印 の 形 态	打 印 の 高 底 の有無	複合印伝	光 質 センターハイ		
1	斧	玉 沿	6	砂岩	層十	西川	172.0	17.5	18.240	2.8	2.7	1.1	8.2			
2	削	器 木	6	木	2 G	西川	94.2	179.0	18.170							
3	片	片	2 G	木	層十	河川	71.0	170.2	18.231							
4	斧	片 木	46	木	死4:	死4:										
5	斧	片 木	46	木	2 G	河川	147.2	128.2	18.037							
6	標	標	3 G	山	2-3	272.0~ 285.0	54.0~ 101.0	148.244 148.154								
7	鉤	片	鈎頭半磨石	1 G	3				1.7	0.5	0.2	0.1				
8	鉤	片	鈎頭半磨石	1 G	3		38.7	0	18.374			0.01				
9	鉤	片	鈎頭半磨石	1 G	3		27.0	27.2	18.393			0.01				
10	鉤	片	鈎頭半磨石	1 G	3		21.7	36.0	18.367	0.8	0.3	0.1	0.02			
11	コアープランク	片	鈎頭半磨石	1 G	3	62.0	148.392	16.0	18.365	5.6	5.1	2.1	61.8			
12	コアープランク	片	鈎頭半磨石	1 G	3	62.3	23.5	148.387	4.2	6.1	1.9	55.2				
13	剥	片	鈎頭半磨石	1 G	3	83.1	62.3	148.372	4.3	3.4	1.5	23.4	平 打	繩目-495°	○	
14	剥	片	鈎頭半磨石	1 G	3	77.5	76.2	148.393	3.2	3.2	1.0	7.0			E2-14	
15	片	片	1 G	3	67.0	186.5	18.394	0.7	0.5	0.1					H1-14	
16	砂	片	黑 磨 石	1 G	3							0.03				
17	砂	片	水 (6系)	2 G	不明						0.4	0.2	0.1	0.01		
18	標	石?	黑 磨 石	層相延							1.6	0.5	0.15	0.1		

吉田樓内教育学部附属教育実践研究指導センター新嘗に伴う発展調査

実践力学 - (2)

No.	器形	出土地點	出土標記	石英	長石	斜長石	黑雲母	黑雲母	其他	外面(本色)	調査(他)	特殊層度	形態・成形・調査等の特徴
1	A A. 上地質下部	解剖 (SD 2)	解剖 (SD 2)	無	無	無	無	無	無	オリーブ色 (7.5Y 3/2)	オリーブ色 (2.5Y 6/1)	不明	ヨコナガ。
2	上地質上部	解剖 (SD 2)	解剖 (SD 2)	無	無	無	無	無	無	淡褐色 (2.5Y 8/3)	淡褐色 (2.5Y 7/3)	不明	内面に小穴出現。肥料袋用の鑿。近世。
3	火												
4	瓦	解剖 (SD 2)	解剖 (SD 2)	無	無	無	無	無	無	灰褐色 (10Y 4/1)	灰褐色 (5Y 7/2)	不明	
5	瓦質下部	解剖 (SD 2)	解剖 (SD 2)	無	無	無	無	無	無	灰褐色 (10Y 4/1)	灰褐色 (5Y 6/2)	不明	竹編にヨコナガ。
6	瓦	解剖 (SD 2)	解剖 (SD 2)	無	無	無	無	無	無	灰褐色 (7.5Y 4/1)	灰褐色 (7.5Y 6/1)	不明	
7	瓦	解剖 (SD 2)	解剖 (SD 2)	無	無	無	無	無	無	灰褐色 (5Y 8/3)	透明	不明	「解剖」内・外面に貫入。
8	瓦	解剖 (SD 2)	解剖 (SD 2)	無	無	無	無	無	無	灰褐色 (7.5Y 6/2)	緑がかった透明	不明	内面の本體・瓦入。
9	瓦	解剖 (SD 2)	解剖 (SD 2)	無	無	無	無	無	無	灰褐色 (5.5Y 7/1)	青色	不明	内・外底面、瓦入なし。
10	瓦	解剖 (SD 2)	解剖 (SD 2)	無	無	無	無	無	無	灰褐色 (5Y 8/3)	透明	不明	内・外底面。
11	瓦	解剖 (SD 2)	解剖 (SD 2)	無	無	無	無	無	無	灰褐色 (7.5Y 6/1)	灰褐色 (7.5Y 6/1)	不明	内・外底面にヨコナガ。
12	瓦	解剖 (SD 2)	解剖 (SD 2)	無	無	無	無	無	無	灰褐色 (7.5Y 6/1)	透明	不明	内・外底面にヨコナガ。
13	瓦質上部	解剖 (SD 2)	解剖 (SD 2)	無	無	無	無	無	無	灰褐色 (7.5Y 6/1)	透明	不明	
14	瓦質下部	解剖 (SD 2)	解剖 (SD 2)	無	無	無	無	無	無	灰褐色 (10Y 5/1)	透明	不明	内・外底面にもヨコナガ。
15	瓦質下部	解剖 (SD 2)	解剖 (SD 2)	無	無	無	無	無	無	灰褐色 (10Y 4/1)	灰褐色 (10Y 4/1)	不明	内面ヨコナガ。LHによる可能性あり。
16	瓦	解剖 (SD 2)	解剖 (SD 2)	無	無	無	無	無	無	灰褐色 (2.5Y 6/3)	灰褐色 (2.5Y 7/3)	不明	化粧のため、表面の色調はよくならない。外底面は不透明で、内底面は透明。
17	瓦	解剖 (SD 2)	解剖 (SD 2)	無	無	無	無	無	無	灰褐色 (7.5Y 7/3)	緑がかった透明	不明	内・外底に施釉、瓦入あり。
18	瓦	解剖 (SD 2)	解剖 (SD 2)	無	無	無	無	無	無	灰褐色 (2.5Y 6/3)	透明	不明	内面に工具による2重の施釉と施花瓦。内・外底に施釉。
19	瓦	解剖 (SD 2)	解剖 (SD 2)	無	無	無	無	無	無	灰褐色 (10Y 8/1)	灰褐色 (10Y 8/1)	不明	内・外に文字題、施釉、瓦入はない。

実践セミナー(3)

No.	名	形	出力(瓩)	土	色	外被(表面)			内被(裏)			地被(側面)			刺繡・成形・調査等の特徴		
						石	瓦	瓦	角四石	瓦	瓦	砂	土	色	(透明)	不 明	性質
20	縦	筋	(SD 4)	埋土内	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	(透明)	不 明	外面上に施物、内面には施物、買入なし。
21	筋	筋	(SD 4)	埋土内	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	(透明)	不 明	外面上に施物、内面には施物、買入なし。
22	筋	筋	(SD 4)	埋土内	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	(透明)	不 明	外面上に施物、内・外間に施物、買入なし。
23	筋	筋	(SD 4)	埋土内	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	(透明)	不 明	外面上に施物、内・外間に施物、買入なし。
24	筋 4 + 瓦	筋	(SD 6)	埋土内	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	(透明)	不 明	外面上に施物、内・外間に施物、買入なし。
25	筋	筋	(SD 6)	埋土内	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	(透明)	不 明	外面上に施物、内・外間に施物、買入なし。
26	筋	筋	(SD 6)	埋土内	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	(透明)	不 明	外面上に施物、内・外間に施物、買入なし。
27	筋	筋	(SD 6)	埋土内	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	(透明)	不 明	外面上に施物、内・外間に施物、買入なし。
28	上筋瓦 25	瓦	1	埋土内	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	(透明)	不 明	外面上に施物、内・外間に施物、買入なし。
29	不	引	1/4	1	埋土内	-	-	-	-	-	-	-	-	-	(透明)	不 明	外面上に施物、内・外間に施物、買入なし。
30	筋	筋	1/2	1	埋土内	-	-	-	-	-	-	-	-	-	(透明)	不 明	外面上に施物、内・外間に施物、買入なし。
31	筋	筋	1/2	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	(透明)	不 明	外面上に施物、内・外間に施物、買入なし。
32	横文上 筋	瓦	1/2	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	(透明)	不 明	外面上に施物、内・外間に施物、買入なし。
33	筋	瓦	1/2	瓦	1	埋土内	埋土内	埋土内	埋土内	埋土内	埋土内	埋土内	埋土内	埋土内	(透明)	不 明	外面上に施物、内・外間に施物、買入なし。

空耳觸は該当事所のないもの。但し、法量については右器觸では計測不可能なもの意味。
上器の船上については、含まれる粒の大きさを、農林省農林水産技術会議事務局監修「新版標準上色帖」(1976) に従って、便宜的に分類した。

第3章 吉田構内教養部複合棟新営に伴う発掘調査

1 調査の経過

教養部の敷地は吉田構内のほぼ中央部に位置し、複合棟新営予定地は同敷地の南西部部分に計画された。昭和62年度当初には、事前の発掘調査を必要とする案件として複合棟の新営工事計画が埋蔵文化財資料館運営委員会に諮られたが、予算措置が未定であったため調査は先送りとなつた。しかし、7月に至つて、急進新営計画が具体化したため同委員会は対応を協議した。

¹⁾ 予定地は跡保存地区と弥生時代から鎌倉時代の遺物が多量に出土した図書館増築地域のほぼ中間にあたり、両地域から直線距離でわずか約150mである。こうした周辺地域における過去の調査結果および立地から、同予定地でも埋蔵文化財の存在が充分に予想された。そこで、同委員会はまず、試掘調査によって遺構、遺物包含層の有無、分布状況を把握し、調査結果を踏まえて再度同委員会において協議し、新営工事計画との調和をはかることとした。この時期、埋蔵文化財資料館は第2章で述べた教育学部教育実践研究指導センター新営予定地での発掘調査中であったが、工事計画日程から早急に試掘調査を行うことになった。

試掘調査は新営予定地内北半部に存在する既設の自転車置場間に、東西に幅約0.6m、長さ約32m（Aトレンチ）、26m（Bトレンチ）の2本の試掘坑を設定し、昭和62年7月21日から27日にかけて実施した。

Aトレンチ東半部は構内造成時の埋め土の下が耕作土で、その直下が地山であるが、後世の削平により遺構、遺物包含層は消失していた。地山は西に向うにつれて下降し、西半部では茶褐色および黒褐色粘質土の遺物包含層3枚に加え溝、柱穴を検出した。吉田構内での過去の調査による土層、埋土の色調から、弥生時代から古墳時代のものと考えられた。

Bトレンチではほぼ全面に遺構埋土な



Fig. 16 調査区位置図

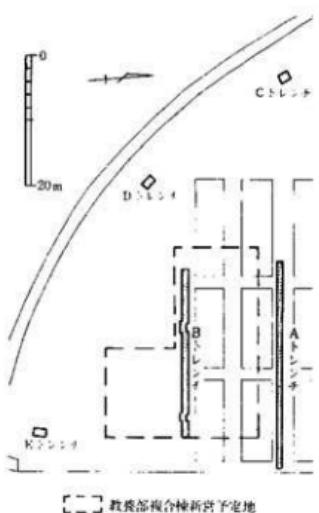


Fig. 17 発掘調査トレンチ設定図

いしは遺物包含層が認められ、弥生土器、土師器、須恵器が出土した。また、この層を掘り込んで近世の埋壟土塚1基が検出された。既設の自転車置場の基礎部分が同層に達していないことから、新営予定地では後世の削平が著しい北東部を除いてほぼ全面に遺構、遺物包含層が埋存していることが明らかとなった。試掘調査の結果を受けて埋蔵文化財資料館運営委員会は、新営工事の際には予定地内における事前の発掘調査が必要であるとし、その後の取扱いは調査結果を踏まえて協議することにした。

発掘調査は、自転車置場解体、撤去後の昭和62年9月14日から12月12日にかけて実施した。建物一階部分の面積は約500m²であるが、教養部棟とをつなぐ共同溝および新営建物の周囲を巡る汚・排水管等の付随工事部分も調査対象となり、調査総面積は約900m²となった。

なお、12月11日には現地説明会を開催し、調査の成果を公表した。

2 層位 (Fig. 18, PL. 8)

現地表面の標高は約19.20~19.30mで、西側がわずかに高いものの、調査区全体ではほぼ平坦に近い。表土(構内造成時の埋め土)の層厚は約30~80cm、平均40~50cmである。表土の下位には基本的に耕作土、床土が認められるが、北・南両端部では床土を欠く。4層：オリーブ褐色粘質土より下位が非人为的な堆積層であるが、同層は後世の削平により部分的にしか残存しておらず、遺物もほとんど出土していない。4層上面の標高は約18.60mである。5層：黒褐色粘質土は最大20cmの層厚をもち、南半部を中心に堆積する。古墳時代から平安時代および江戸時代の遺物を包含する。6層：オリーブ灰色粘質土は層厚約10cmで弥生時代から江戸時代の遺構の検出面である。同層が木炭を多く含んでいたことから部分的にトレンチを設定して調査したところ、層厚約10~20cmの7層：オリーブ灰色土とともに縄文時代晩期中頃の遺物包含層であることが明かとなった。両層とも不連続に堆積しており、遺物は南端部に設定したA・Bトレンチを中心に出土した。なお、北・南両端部では耕作土の直下が6層である。7層の下位は木炭を若干含む層厚約20cmの灰オリー

層位

吉田構内教養部複合棟新館に伴う発掘調査

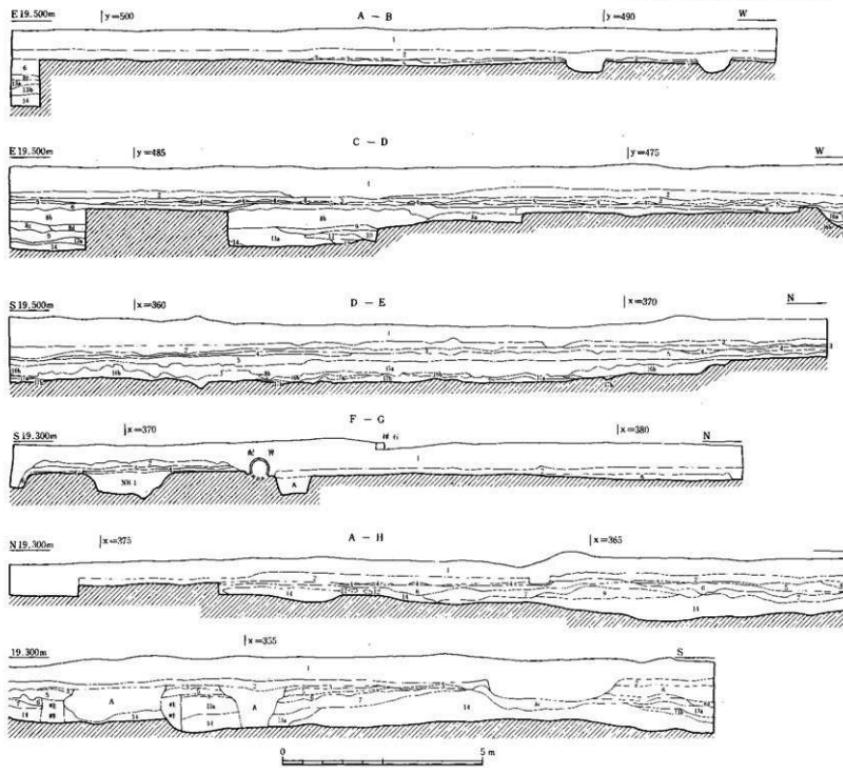


Fig. 18 上層断面図

ブ色粘質土で、縄文土器が若干量出土したが、調査範囲内では時期を決定する資料には恵まれなかった。

C-D壁のy=479付近の深掘りではその下に落し穴、河川跡の検出面である層厚約10~20cm暗褐色土が認められた。検出面の標高は約18.30mである。9a~14層は縄文時代の河川跡の埋積土で暗緑灰色ないしは緑灰色を基調とした砂、礫の互層である。15a~17bは第2号河川跡の埋積土で、黒褐色土および黒褐色粘質土、オリーブ黑色土の堆積が認められる。

3 遺構・遺物

(1) 縄文時代の遺構・遺物

弥生時代以降の遺構検出の際、検出面の6層から縄文土器が出土した。そのため、木炭とともに土器が集中して分布していた調査区南端部にA(2.5×16m)・B(2×3m)二本のトレンチを設定し、遺物包含層の掘削を行った。6~8層の三枚の包含層を掘削した段階で、Aトレンチから河川跡が検出され、遺構検出の発端となった。また、その規模を調べるために、流路にあたると考えられた地域に設定した四本のトレンチのうち、Hトレンチから落し穴が検出された。なお、6層を検出面とするものには溝、浅い谷状の落ち込みがある。

落し穴 (Fig. 21, PL. 9)

調査区中央部のHトレンチで検出した。当初はAトレンチで認められた河川跡の流路方向を調べるために設定したトレンチであったが、西端部分が検出されたためトレンチを拡

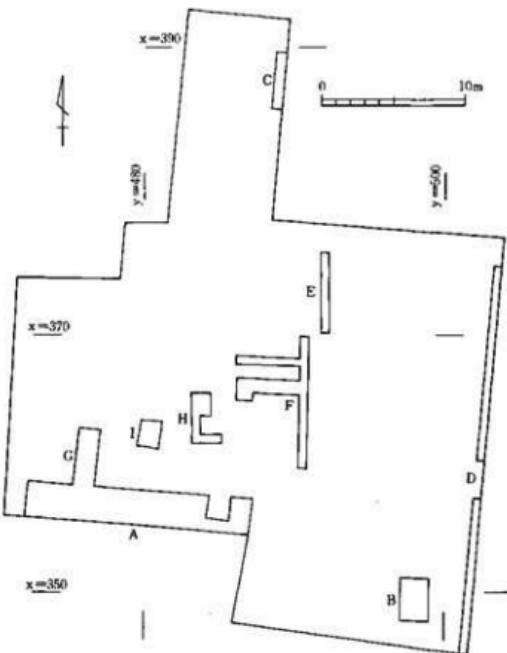


Fig. 19 トレンチ設定図

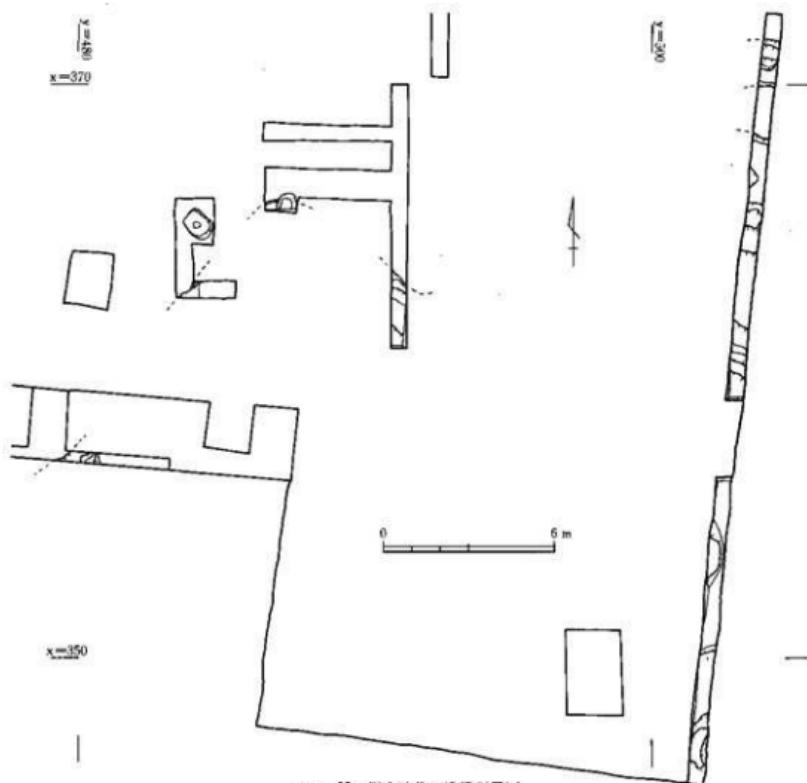


Fig. 20 繩文時代の遺構配置図

張した。平面形態は底面と同じく隅丸長方形で、長軸105cm、短軸78cm、検出面からの深さ25cmの規模をもつ。壁面は外方へ傾斜しながら立ち上がる。底面は中央部に向ってわずかに下降しており、長軸90cm、短軸72cmである。底面中央部には上面25cm×22cm、下面12cm×14cm、深さ58cmの凹形のピットが存在する。ピット内には底面から10cm～49cmの範囲内に6個の板石状の自然石が縦位に詰められており、中央部には隙間が認められる。埋土は灰オリーブ色土（Hue10YR 6/2）である。検出面の標高は約18.25m。遺構の性格上、さらに同種の落し穴が存在する可能性があったため、F・IIトレンチを拡張後、さらにTトレンチを設定して調査したが検出できなかった。

内部からの出土遺物には縄文土器片および剝片 1 点がある。時期はにわかに決定しがたいが、検出面の直上層が晩期中頃の遺物包含層であること、同一面で同時期の河川跡が検出されていることおよび¹⁴C の測定結果から晩期中頃をそれほど遡るものではないであろう。

出土遺物 (Fig. 22, PL. 18-23)

1 は粗製の縄文土器で、小破片のため器形はわからない。外面ナデ、内面は荒い条痕を施す。2 は剝片で上端部を欠損する。正面は左・右および上方向からの加壓による 3 枚の剥離面によって構成される。正面左側縁はヒンジフラクチャーをおこしている。

河川跡 (Fig. 20, PL. 7(2))

調査区南西部に設定した A トレンチで、東への落ち込みが確認された。そのため、さらに 4 本のトレンチを追加し、流路方向を調査した。その結果、調査区東壁に沿って設定した D トレンチのほぼ全面および調査区中央部の F、H 両トレンチの南端部で落ち込みが検出された。

F、H トレンチ付近でやや蛇行しており北東から南西に向かって流れる。試掘調査の際、E 地区でも検出していることから、幅約 29 m 以上の規模をもつものと考えられ、検出面からの深さは最深部で約 80 cm である。検出面の標高は約 18.20-18.40 m。なお、D トレンチ北端部で同一面で支流と考えられる幅約 1.7 m、深さ約 40 cm の河川跡が検出された。出土遺物には縄文土器深鉢、浅鉢および剝片がある。晩期中頃。

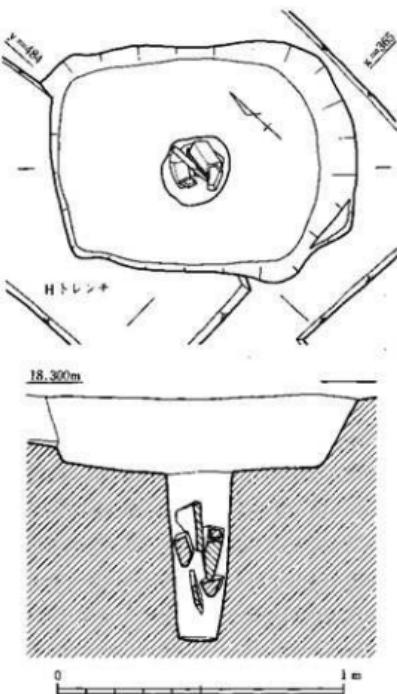


Fig. 21 落し穴実測図

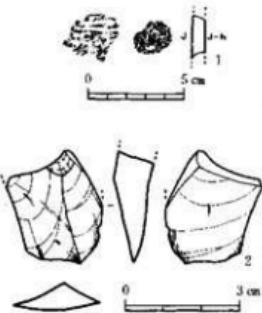


Fig. 22 落し穴出土遺物実測図

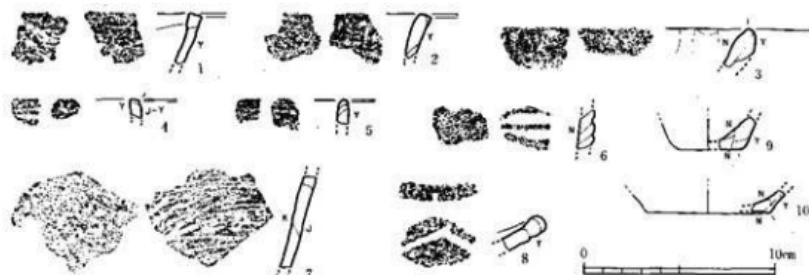


Fig. 23 河川跡出土遺物実測図

出土遺物 (Fig. 23, PL. 18)

いずれも粗製で、風化、磨滅によって器面調整の観察が困難なものが多い。1～7は深鉢ないしは浅鉢。口縁部が内湾ぎみに立ち上がり内面に段をもつもの（1）、外傾するものの（2・3）、直立するもの（4・5）がある。端部は平坦なもの（1・2・4）と丸いものの（3・5）がある。内外面とも横ナデが多いが、3は内面ナデ、4は外面横条痕のうち横ナデ。6・7は胴部で7は外面横、斜め条痕、内面ヘラケズリを施す。8は波状口縁をなす浅鉢で、肥厚する口縁端部に刻み目、口縁下外面に1条の沈線を施す。端部は丸い。内外面横ナデ。9・10は底部。9は小形品で浅鉢であろう。

第3号溝

調査区中央部を北西から南東に走り、第1・3号堅穴住居跡を切っている。谷状の落ち込みに流れ込んでおり、検出した長さは約7mである。幅約40～60cm、検出面からの深さ3～4cmを残す。検出面の標高は約18.65m。出土遺物には石鎚1点がある。

出土遺物 (Fig. 41-12)

円基無茎式の石鎚で、先端部、脚部の片方を欠損する。抉りは浅く脚端部は平坦に近い。正面基部・左脚部側には極状の調整加工が施される。

谷状遺構 (Fig. 24・29, PL. 6)

調査区中央部から南東および南西に「U」字形に開く深い谷状の落ち込みで、幅約2.5～5mの規模をもつ。深さは検出面から平均約10～15cmで、谷底へは緩やかに落ち込む。南東へは蛇行しながら北へ大きく開くが、深さは2～3cmと極めて浅い。検出面の標高は約18.55～18.65m。埋土は上層が黒褐色粘質土、下層が黒褐粘質土を含む砂疊である。

遺物は「U」字形に開く落ち込みの奥部付近に集中して、上層から古墳時代後期、下層か

ら縄文時代晚期の二時期のものが出土した。古墳時代の遺物は上層から若干出土し、量的には後者の方が多い。

出土遺物には縄文土器、土師器、須恵器、石器にはか比較的多量の剥片がある。縄文時代晚期終末の一時期に谷状の落ち込みが埋積し、埋まりきらなかった床みに古墳時代の遺物が混入したものと考えられる。

出土遺物 (Fig. 25, PL. 18・23)

土器 (1~12)

1~9は縄文土器。1~5は突帯文の壺。1・2・4は口縁部が内傾する。1は口縁端部が短く外反し、突帯のやや下位に煤が付着する。刻日の有無は不明。2は刻目をもたない突帯の下位に2個の穿孔を有する。3は外反する口縁部をもち、端部よりやや下位の突帯にやや大きめの刻日をもつ。6~9は底部。6は浅鉢、7~9は壺ないしは深鉢。6~8は平底、9は洼み底。10・11は土師器。10は壺で、頭部内面に稜をもち、口縁部は短く外湾しながら開く。端部は丸い。11は高壺の脚部。12は須恵器の壺。口縁部は直線的に外反し、端部内面に断面三角形の低い貼付突帯をもつ。

石器 (13~26)

13は磨製石斧の頭部。正面はほぼ平坦であるが、裏面は凸レンズ状に湾曲し、断面形はいびつな梢円形を呈する。正面右側面には縱方向の研磨が観察される。正面の3枚の剥離面は荒い成形段階のもの。14は砥石で、正・裏両面を研砥面とする中砥。下面に比べ上面の摩滅が著しい。研砥方向は不明。15~18は石錐。15は円基無茎式、16~18

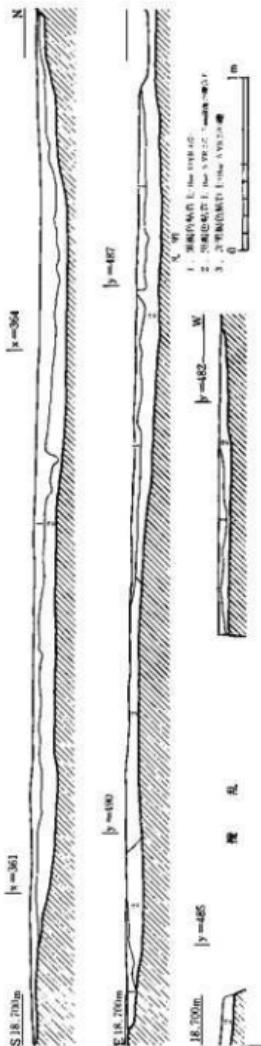


Fig. 24 谷状遺構上層断面図

吉田構内教養部複合棟新營に伴う発掘調査



Fig. 25 谷状遺構出土遺物実測図

は平基無茎式。15は剥片鎌で、身部の中央には素材面を残す。脚端部が丸く、抉りは正面が1枚、裏面が2枚の剥離によって作り出される。16は左右対称で、二次加工も荒く、

やや厚手に仕上がっている。17は裾部が鋭く尖る。18は整った二等辺三角形を呈する小形のもので、基部はわずかに内湾する。19~24は加工痕のある剝片。19は正裏両面の上線に二次加工が施され、スクレイパーとしての機能をもつものであろう。断面形は菱形を呈する。正面左側縁には使用痕と思われる微細な剝落痕が認められる。20・21は縦長剝片を素材とし、正面上縁部に荒い二次加工を施す。22は縦長剝片を素材とし、正面左側縁、下縁に連続する二次加工を施す。裏面下縁にも荒い二次加工がみられる。23は寸づまりの横長剝片を素材とし、主要剝離面である正面側には打点、打面を除去するよう二次加工が施される。24は縦長剝片を素材とし、正面左側縁下半にノッチ状の二次加工を施す。正面上半部には自然面を若干残す。裏面側が主要剝離面で、ネガティブバルブを除去している。25は使用痕のある剝片。縦長剝片を素材とし、正面右側縁および左側縁下半に微細な剝落痕が認められる。正面右半には自然面を残す。裏面側はネガティブバルブを除去している。26は石核。剝片剝離作業はおののの作業面を打面として全周から行われており、打面

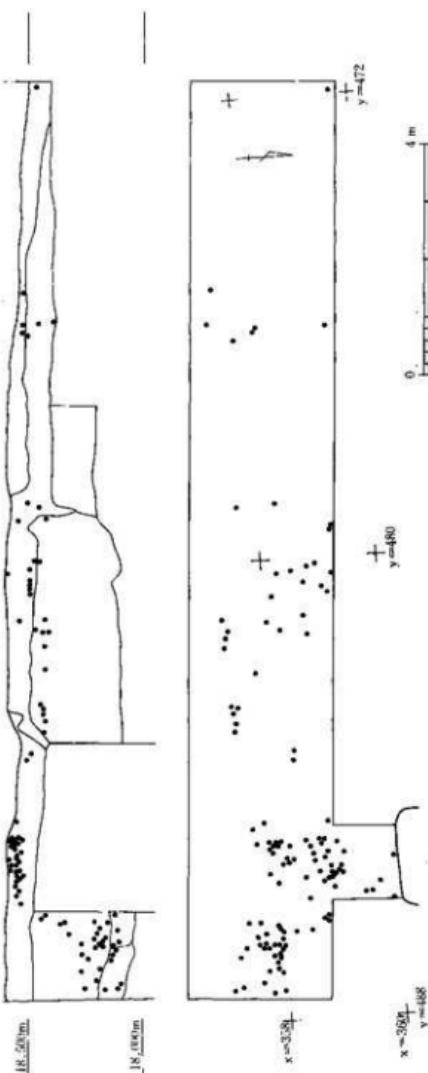


Fig. 26 Aトレンチ河川跡・包含片遺物出土状況

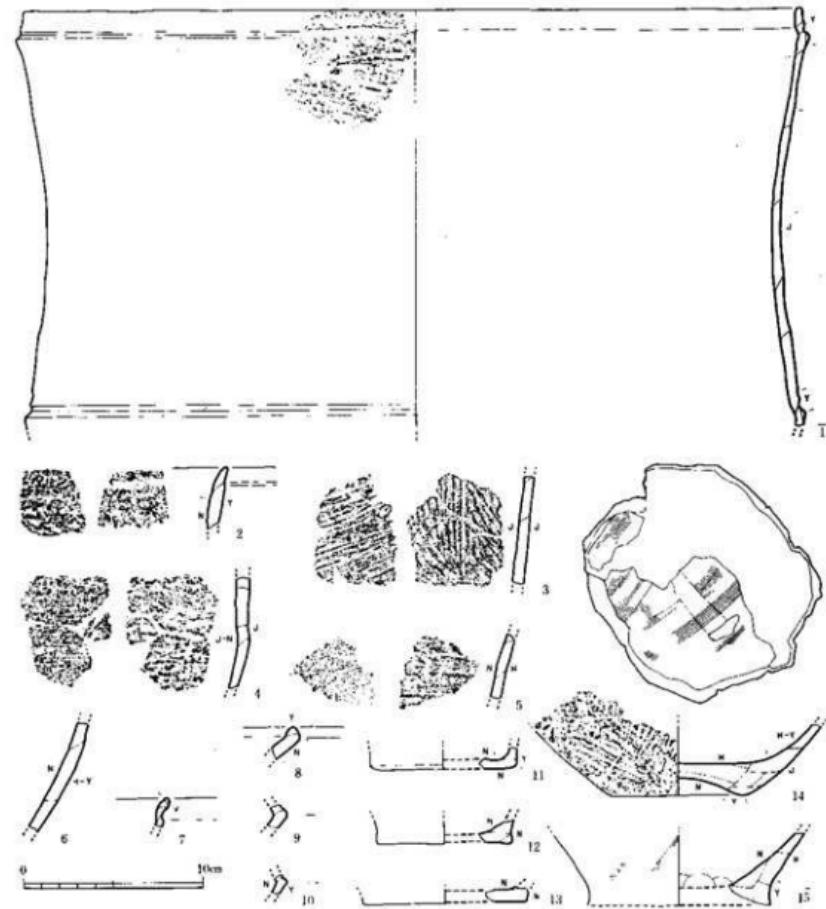


Fig. 27 包含層出土遺物実測図（土器）

の転移が著しい。目的剥片は少しづまりの小ぶりな縦長剥片であろう。

包含層出土遺物 (Fig. 27・28, PL. 19-23・24)

遺物は A ~ D トレンチで約140点出土した。C・D 向トレンチではきわめて少量で、大

遺構・遺物

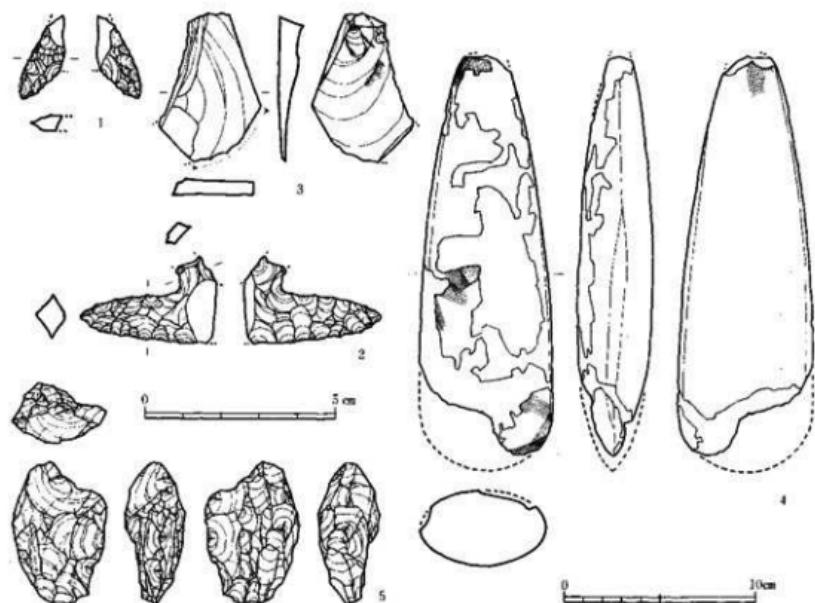


Fig. 28 包含層出土遺物実測図(石器)

半はAトレンチ東端部、Bトレンチの6層に集中して出土した。土器は小破片が多く、圓化しうるものは少ない。石器は剥片を含めて11点ある。

土器 (Fig. 27)

粗製の深鉢、浅鉢がある。1～6は深鉢。1は大形品で、脣曲部から外済しながら直立きみに立ち上がる胴部をもち、口縁部は短く内傾する。口縁部下、胴脣曲部の突帯および口縁部に刻み目はない。2は直立きみにわずかに外反する口縁部をもつ。3～6は胴部。4は脣曲部に稜をもたない。3・4は外面条痕、4はそのうち内面をナデている。5は外面横刷毛目、6はそのうちナデしている。3・6は外面に煤が付着する。7～10は浅鉢。7は口縁部が胴部から脣曲して外側に短く開く。8は口縁端部に断面三角形の肥厚帯をもつ。9・10は胴部の脣曲部で、10は外面に明瞭な後が認められる。11～14は底部。11はほぼ直立して立ち上がる。14はくぼみ底で、外面は荒い縦、斜め条痕、内面刷毛のうちナデで指頭圧痕が残る。岩田脣類・月崎上層Ⅲ式併行と思われ晩期中頃に位置づけられる。

石器 (Fig. 28)

石鎚、石匙、使用痕のある剝片、磨製石斧、石核、剝片がある。1はやや大形の凹基無基式の石鎚の脚部片端。基部の抉りは比較的深く、脚端部は尖る。2は横形の石匙で、つまみ部上端、正面右半分を欠損する。素材の長軸とつまみ部の長軸とが斜交し、上下両側邊に刃部をもつ。端部は尖る。正面に比べ裏面の加工は荒い。3は使用痕のある剝片で、打面には自然面を残す。正面左端部を欠損するが、下縁には微細な剥落痕が認められる。4はAトレンチと試掘調査A地区との接合資料である。刃部幅が基部幅の約3倍近くになる平面形態が撥形を呈する磨製石斧で、刃部の大半と基部を欠損する。正面の剥落が著しいが研磨は丁寧。5は石核。打面、打点は一定しておらず、剝片剥離作業面を打面とする。剝片剥離作業はほぼ全周から行われ、目的剝片は寸づまりの小形の継、横長剝片である。

2 弥生時代以降の遺構・遺物

調査区北東端部を除いてほぼ全面に分布するが、後世の削平によって北端部の遺存度はよくない。検出遺構には弥生時代から古墳時代の竪穴住居跡4基、古墳時代の河川跡、江戸時代の井戸2基、埋甕3基、掘立柱建物跡2棟のほか、土塙13基、溝2条、柱穴多数がある。

竪穴住居跡

第1号竪穴住居跡 (Fig. 30, PL. 12)

調査区北西部で検出された住居跡で、第2・3号竪穴住居跡を切っており、第1号溝に切られている。北辺部は後世の削平によって消失している。平面形態は方形で、南北軸214cm以上、東西軸208cmの規模をもつが、検出面からの深さは4cmを残すにすぎない。検出面の標高は約18.60m。ほぼ平坦な床面には9個の柱穴が認められるが、床面からの深さが10cm前後で本住居跡に伴うものとは考えられない。西半中央部には平面形態が不整格円形の66×42cm、床面からの深さ15cmの掘り込みが検出された。

内部からの出土遺物はないが、埋土の色調、棚野川流域における竪穴住居跡の平面形態、⁵⁾規模の変遷および切り合い関係から古墳時代のものと考えられる。

第2号竪穴住居跡 (Fig. 30)

第1号竪穴住居跡の西に近接する住居跡で、同住居跡に切られているが、第3号竪穴住居跡との切り合い関係は明かでない。南半部は後世の削平によって消失している。平面形態は不整円形ないしは不整格円形で、上面径340cm以上の規模をもつ。残存状態はきわめて悪く、検出面からの深さは2cmである。検出面の標高は約18.60m。床面は平坦で、少なくとも7個の柱穴が認められる。しかし、主柱穴と考えられるのはP1ぐらいで、他

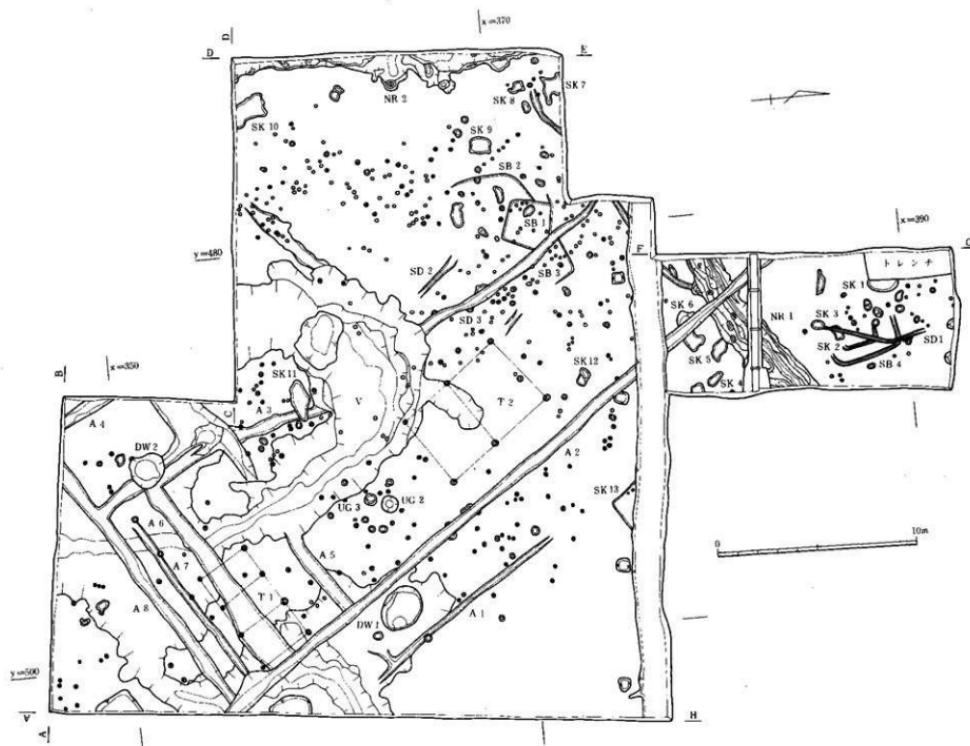


Fig. 29 弥生時代以降の遺構配図

弥生時代以降の遺構・遺物

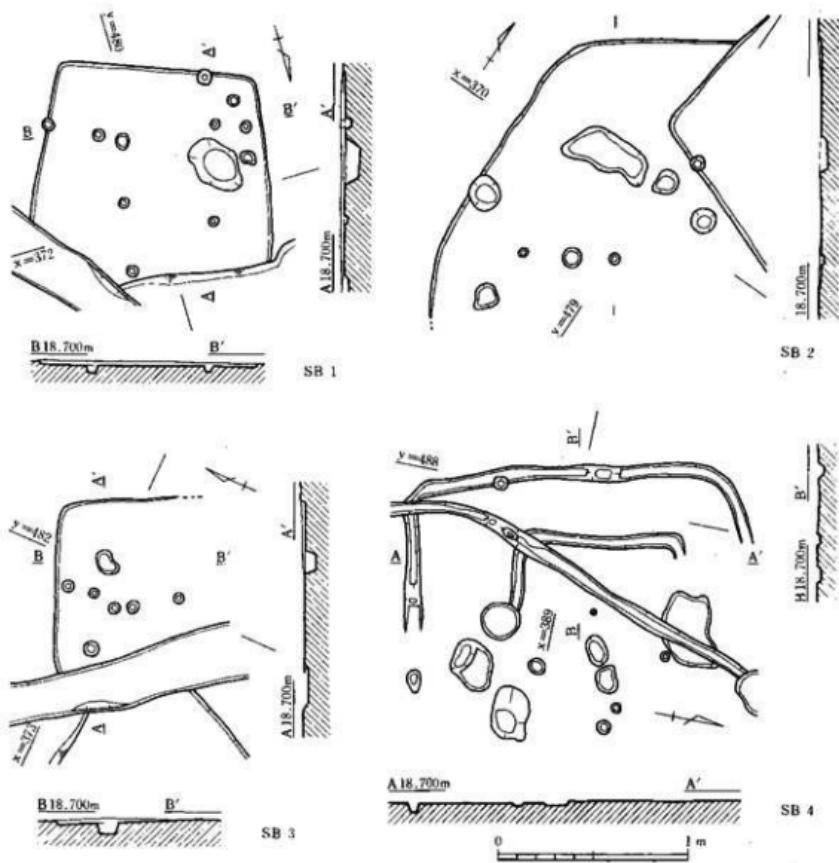


Fig. 30 壁穴住居跡実測図

は床面からの深さが10cmに以下で本住居跡に伴うものとは考えられない。

内部からの出土遺物はないが、埋土の色調、平面形態および上面径6.5m前後、床面積約30m²の規模をもつことから、棋野川流域における壁穴住居跡の平面形態、規模の変遷および切り合い関係から弥生時代中期から後期のものと考えられる。

第3号壁穴住居跡 (Fig. 30, PL. 12)

第1号壁穴住居跡の東に近接する住居跡で、同住居跡に切られている。南半部は後世の

削平によって消失している。平面形態は方形ないしは長方形で、南北軸172cm以上、東西軸170cm以上の規模をもち、検出面からの深さは5cmを残す。検出面の標高は約18.60m。やや北に向かって下降する床面には8個の柱穴が認められるが、第1・2号竪穴住居跡同様、床面からの深さが10cm以下で本住居跡に伴うものとは考えられない。

内部からの出土遺物はないが、埋土の色調、樅野川流域における竪穴住居跡の平面形態、規模の変遷および切り合い関係から弥生時代後期から古墳時代のものと考えられる。

第4号竪穴住居跡 (Fig. 30, PL. 13)

調査区北端部で検出された住居跡で、第3号溝に切られている。後世の削平によって西半部が消失しており、壁溝のみが東半部に残存する。平面形態は方形ないしは長方形と思われ、東辺350cmの規模をもつ。壁溝の深さは検出面から5~6cmである。検出面の標高は約18.60m。また、住店内には各周壁に沿って「コ」の字状に巡る1条の溝が検出された。建て替えに伴うものと考えられ、東辺180cmの規模をもち、深さは検出面から2~3cmである。主柱穴の配置は明かではない。

内部からの出土遺物はないが、埋土の色調および樅野川流域における竪穴住居跡の平面形態、規模の変遷から弥生時代後期から古墳時代のものと考えられる。

河川跡

第1号河川跡 (Fig. 31, PL. 14(1))

調査区北部で検出した。中央部付近は配水管、暗渠が貫通し消失している。北東から南西に貫流し、検出した流路長は約9mである。幅約2m、検出面からの深さ約50cmの規模をもつ。検出面の標高は約18.60m。右岸側は川床まで急傾斜に落ち込むが、左岸側は川床から緩やかに立ち上がり、川岸付近に部分的に存在する狭い平坦面から急激に立ち上がる。断面形は基本的には「V」字形である。

左岸南西部には同一の流路方向をもつ幅20~30cm、深さ5~6cmの溝が検出された。撥乱塀による消失および調査区外のため一部未調査であるが、一連のものと思われ、長さは約13mである。切り合いが認められず、同河川跡の支流もしくは取水溝と考えられるが、合流点付近にはなんら取水施設は認められなかった。

埋積土は基本的に上層が粘質土ないし砂で、下層は砂と砾の互層である。

出土遺物には上師器甕、高坏、器台、手握土器、須恵器短頸壺蓋、須恵器模倣土師器坏、打製石斧、石鎌、加工痕のある剥片がある。河川跡が縄文時代の遺物包含層を削って流れているため一部時期の過る遺物が含まれるが、おおむね5~6世紀に機能していたものと

新生時代以降の遺構・遺物

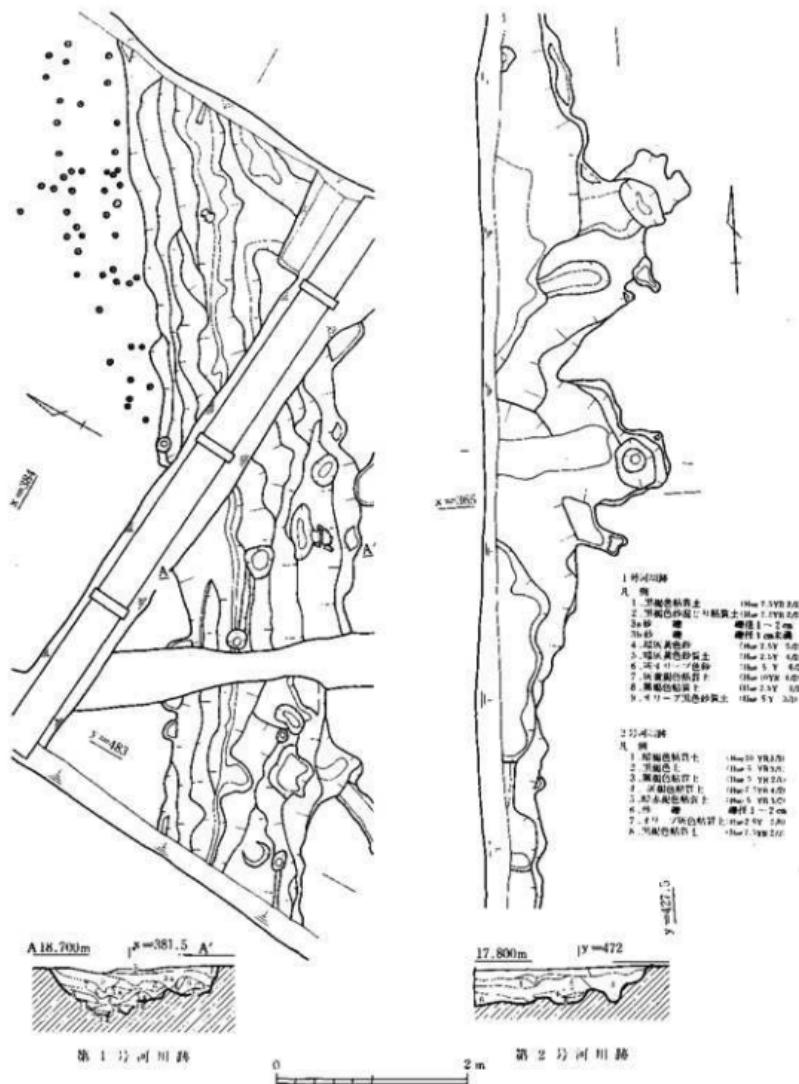


Fig. 31 第1・2号河川跡実測図

吉田構内教養部複合棟新宮に伴う発掘調査

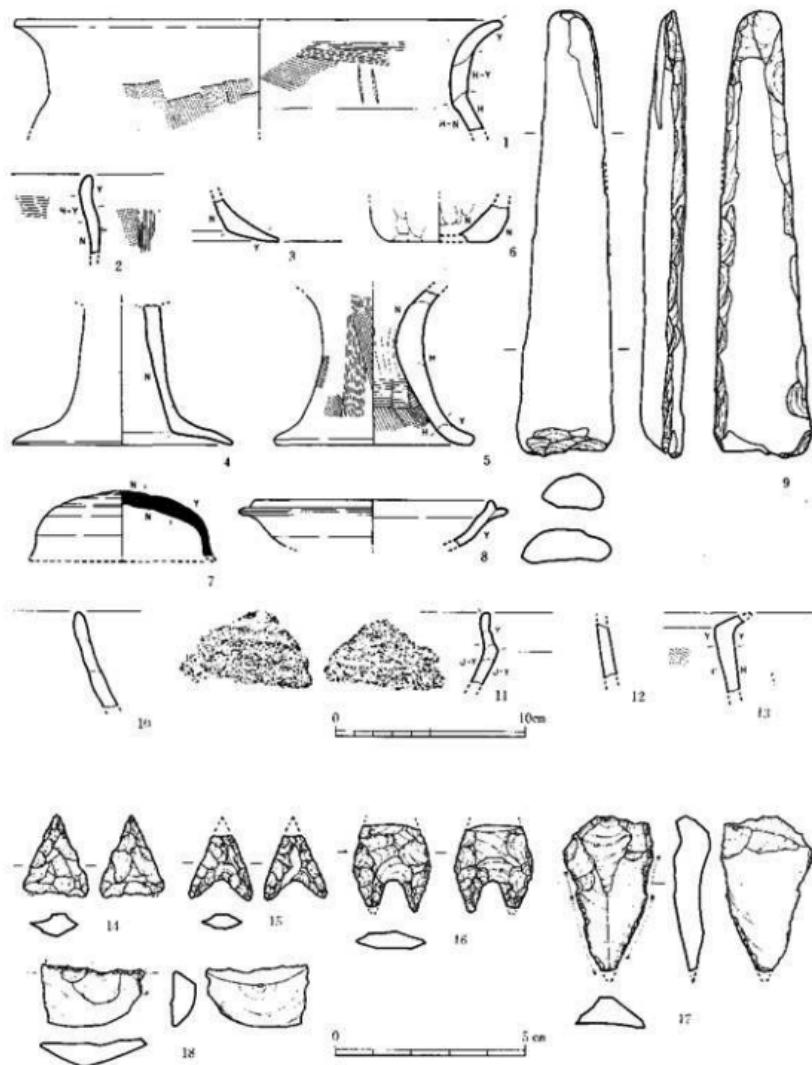


Fig. 32 第1・2号河川跡出土遺物実測図

考えられる。

出土遺物 (Fig. 32, PL. 20・23・24)

土器 (1~8)

1~5は土師器。1・2は壺。1は頸部内面にわずかに稜をもち、口縁部は外湾しながら中位付近でやや強く聞く。口縁部内外面の横ナデは荒く刷毛目が残る。2は小形の壺で、しまりのない頸部から直立する短い口縁部をもつ。口縁端部は丸い。3・4は高坏脚部で、裾部内面は接地せず、斜下方に聞く。3は脚柱部から屈曲せず裾部にいたる。4は脚柱部が比較的長く、裾部で強く屈曲しやや内湾ぎみに聞く。5は支脚で口縁部を欠損する。裾部の開きは短く、裾部付近の刷毛目は荒い。内面と外面は異なる刷毛工具を用いる。6は手捏土器の底部で、塊状のものであろう。外面には指頭圧痕が顕著に残る。7は須恵器短頸壺の蓋。天井部から体部にゆるやかに下降し、口縁端部は短く外反するものと思われる。天井部はヘラ切り放しのち若干ナデしている。体部には重ね焼きの痕跡が残る。8は須恵器模倣土師器の坏身。立ちあがりは断面三角形で、上方に短く聞く。立ちあがりと蓋受け部の境はわずかに窪む。

石器 (9・14・17)

9は片刃の打製石斧。綠簾石石英片岩を石材としていることから剥落が著しい。加工は比較的荒く、特に裏面側の頭部は大きな剥離面によって構成されている。断面形は扁平な楕円形で、頭部にむかうにつれて丸みをおびる。頭部幅2.3cm、刃部幅5.0cm。14は石鎚で平基無茎式。正裏両面とも比較的大きな剥離面によって構成される。加工は粗雑で断面形は菱形状を呈する。17は加工痕のある剥片で、下端部を欠損する。綫長剥片を素材とし、正面の左右両側線上半には裏面側からノッチ状の二次加工を施す。正面上半中央部には上端部の一枚の剥離面を打面として加撃が行われ、素材の高まりが除去されている。また、裏面側は2枚の剥離面によってネガティブバルブが除去される。

第2号河川跡 (Fig. 31, PL. 14(2))

調査区西端部で検出した。北から南に貢流するが、右岸側は調査区外にあたるため、確認していない。検出した流路長は約15mで、幅1.8m以上、検出面からの深さ約45cmの規模をもつ。検出面の標高は約18.60m。川床は起伏に富み、北半部は流路がかなり乱れている。

埋積土は川床に約5~10cmの砂礫層が堆積している以外はすべて粘質土である。規模、位置関係、出土遺物から第1号河川跡と同一河川の可能性があるが、本稿では区分して報

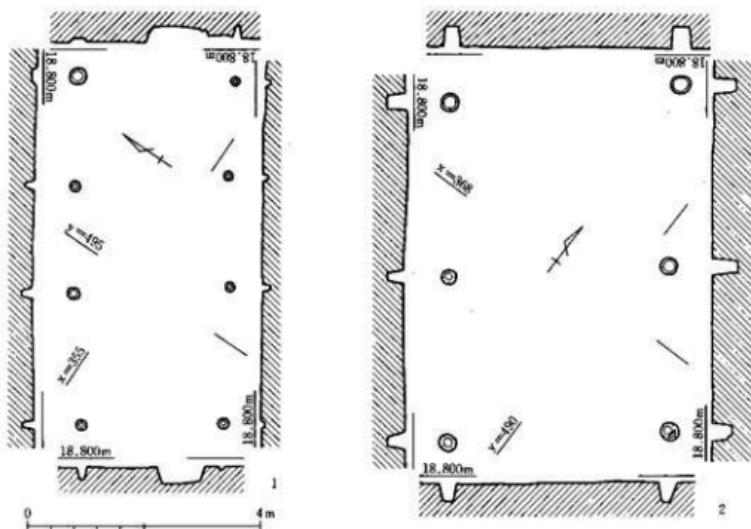


Fig. 33 柱立柱建物跡発掘図

告する。

出土遺物には縄文土器深鉢、浅鉢、土師器壺、石鏃があるが、第1号河川跡と比べて量的には少ない。第1号河川跡同様、縄文時代の遺物包含層を削って流れているため、一部時期の遡る遺物が含まれるが、おおむね5~6世紀代に機能していたものと考えられる。

出土遺物 (Fig. 32, PL. 20-23)

土器 (10~13)

10・11は粗製の縄文土器深鉢。10は直線的に内傾する口縁部をもち、端部は尖る。12は粗製の浅鉢。口縁部は直線的に短く内傾し、胴部との境にはわずかに稜をもつ。13は土師壺で、「L」字状に短く外反する口縁部をもつ。

石器 (15・16・18)

15・16は凹基無茎式の石鏃。15は先端部から脚端部まで直線的に開く。脚端部は尖る。抉りの深さは5mmで、基部から全長の約1/4まである。16は脚部が外方に開かず、直立する。端部は尖る。先端部、脚部の片方を欠損する。抉りは深く、抉り部幅10mm、抉りの深さは8mmである。抉りの最深部は一枚の大きな剥離面によって構成される。裏面上半中央部には素材面を残す。18は使用痕のある剝片。素材は打面に自然面を残す横長剝片で、

正面、右側縁部上端部に細かな剥落痕が認められる。

掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡 (Fig. 33-1, PL. 15(1))

調査区南東部で検出した身舎1間×3間の建物跡である。棟方向に平行に現代の暗渠が走る。検出面の標高は約18.65～18.70m。北隅を起点として、桁行長6.0m、梁行長2.8mの規模をもつ。棟方向は北東～南西で、N-54°-E。桁方向の柱間距離は平均約2mで、柱穴の上面径は15～20cm、深さは20cmのものが多い。柱穴の埋土はオリーブ褐色粘土質(Hue2.5Y 4/4)。

出土遺物はないが、第2号井戸に近接して位置することから17世紀頃のものと思われる。

第2号掘立柱建物跡

(Fig. 33-2, PL. 15(2))

調査区の中央部付近で検出した身舎1間×2間の建物跡である。検出面

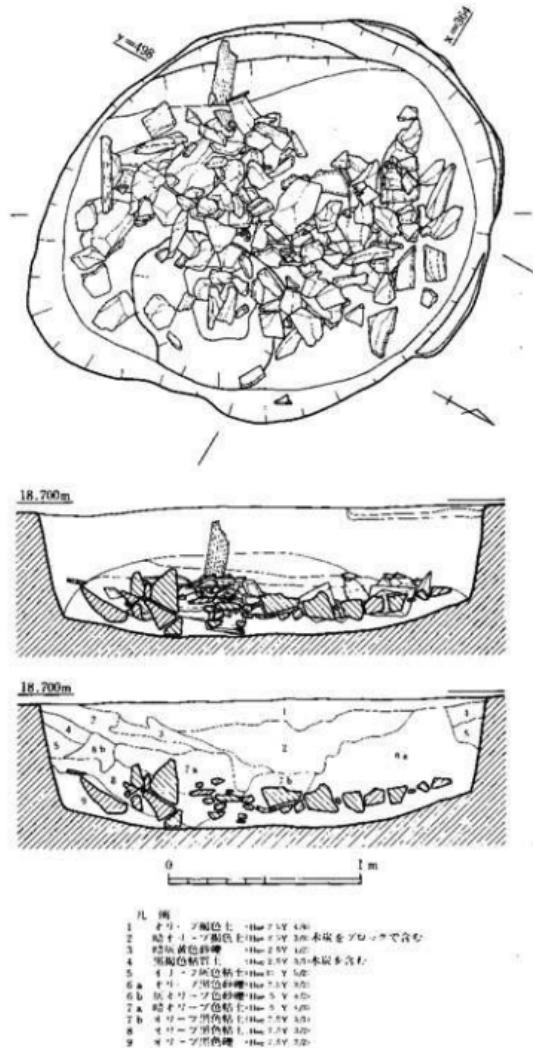


Fig. 34 第1号井戸測量図

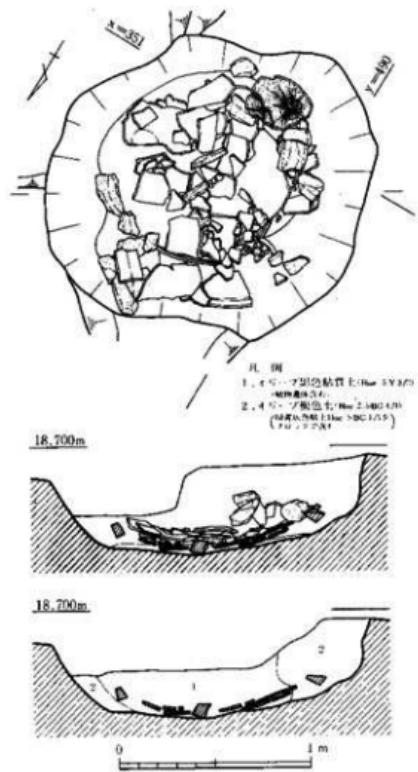


Fig. 35 第2号井戸実測図

検出面の標高は約18.65m。

出土遺物には陶器鉢、塊のほか曲物底板、棒状木製品、箆状竹製品および植物遺体がある。17世紀代。

出土遺物 (Fig. 36-37, PL. 20-24)

土器 (Fig. 36-1・2)

1は口縁部外側が玉縁状に肥厚する鉢で、端部は口禿である。2は二段状の高台をもつ壺で、高台側面より上位に施釉する。内面見込みの一部に自然釉がかかる。高台側面には3個の円錐トチが付着する。

の標高は約18.70m。北隅を起点として、桁行長6.0m、梁行長4.2mの規模をもつ。棟方向は北西—南東で、N-36°-W。桁方向の柱間距離は平均約3.1mで、柱穴の上面径は20-30cm、深さは30-40cm。柱穴の埋土はオリーブ褐色粘質土 (Hue 2.5Y 4/4)。

出土遺物はないが、第1号井戸に近接して位置することから17世紀頃のものであろう。

井戸

第1号井戸 (Fig. 34, PL. 16(1))

調査区東半の中央部付近に位置し、谷状の落込みの埋土上面が検出面である。平面形態は円形に近い椭円形で、上面径2.5×2m、底面径2.2×1.5mの規模をもつ。壁面は底面から急傾斜に立ち上がる。底面は西から東に下降しており、東端部では底面から深さ約10cmの凹形状の落ち込みが認められる。検出面からの深さは最浅部で約35cm、最深部で約75cmである。底面には多数の自然石が散乱している。

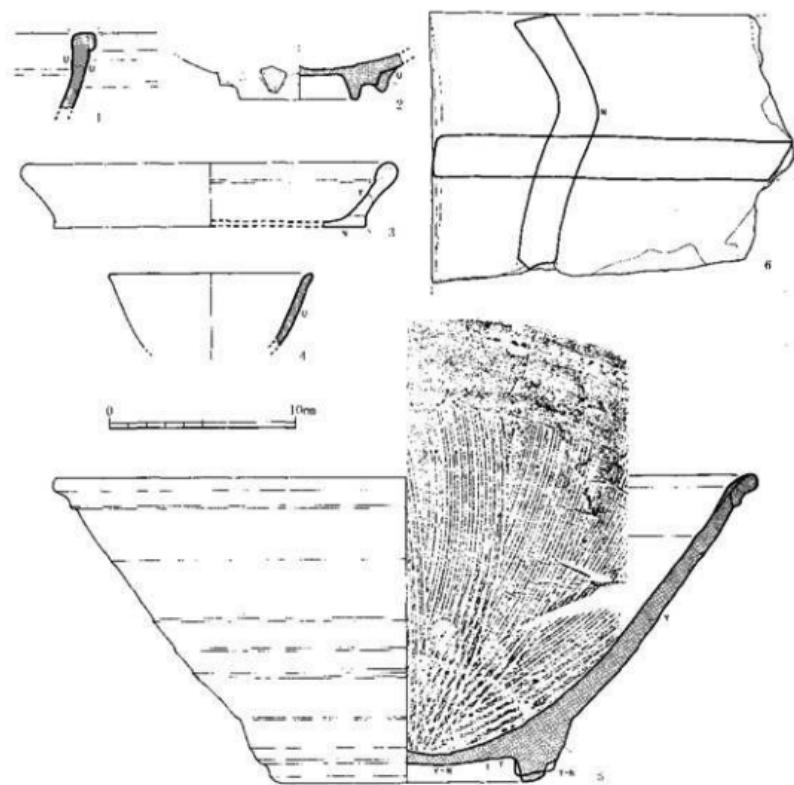


Fig. 36 井戸出土遺物実測図（1・2—第1号井戸 3～6—第2号井戸）

木・竹製品 (Fig. 37)

1は楕円形曲物の底板で、下半部を欠損する。横木どりで、側板をあてるために、周縁の内側を一段低くつくり出す。目釘穴は認められない。2は棒状木製品。農工具の柄の可能性があるが、下半部を欠損するため明かでない。両側縁は面取り状に加工し、断面形は頭部が扁平な楕円形、中位以下が楕円形を呈する。頭部への敲打痕はない。横木どり。3、4は竹製で同一品と考えられるが、接合しなかった。3は頭部に目釘穴をもち、上端に粗ざれと思われる横方向の擦過が残る。左側面は火熱を受け煤が付着する。4は上端部に

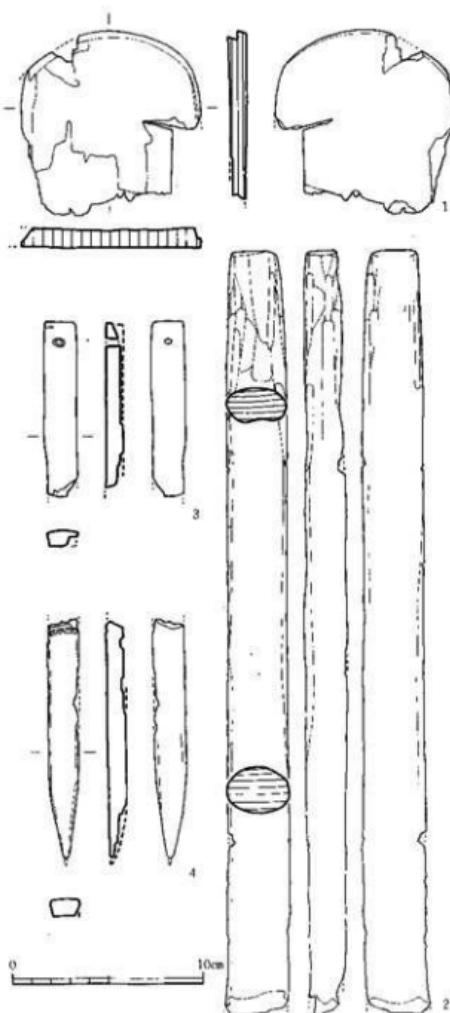


Fig. 37 第1号井戸出土遺物実測図

節をもち、下端部は左右両側面および裏面を加工し、尖らせる。二点とも左右両側面を面取りし、正面は素材面を残す。

第2号井戸

(Fig. 35, PL. 16(2))

調査区南端の中央部付近に位置し、第1号井戸同様、谷状の落ち込みの埋土上面が検出面である。本学統合移転前の水田に伴う暗渠によって東半部を若干削平されている。平面形態は円形に近く、上面径1.5~1.8m、底面径0.9~1.2mの規模をもつ。壁面は底面から緩やかに立ち上がり、断面形は擂鉢状を呈する。検出面からの深さは約50cmである。底面には自然石とともに土師質土器の壺一個体分が投げ込まれている。検出面の標高は約18.65m。出土遺物には土師質土器盤・壺、磁器塊、陶器擂鉢および植物遺体がある。17世紀前半。

出土遺物 (Fig. 36-3~6, Fig. 38, PL. 20·25)

3は土師質土器の盤で、口縁端部を内側に巻き込み肥厚させる。4は磁器塊で、口縁端部がわずかに外反する。5は陶器擂鉢。口縁部は短く外反し、内面には12本単



Fig. 38 第2号井戸出土遺物実測図

位の櫛歯描き上げを重ねながら左方向に施す。畀付は無施釉で、一箇所を指頭による指圧によって切り高台状に窪ませる。底部と体部の境付近の内面には重ね焼き時の放れ砂が付着する。6は棟瓦で葺足長は不明。四面は縱方向、凸面は横方向ナデ。前・側端部は縦に沿ってナデる。金雲母が多く含む。

Fig. 38は土師質土器の大甕。口縁部は肥厚し、直線的に内傾する。端部は平坦。頭部外面には二条の浅いヘラ描き沈線を施し、内面には段をもつ。幅約5~6cmの粘土帯を輪積み成形するが、法量にくらべて器壁が薄い。胴部から頭部はタタキによる調整で、内面上半部には同心円の当て具痕がそのまま残るが、下半部はそのち横、斜め刷毛を施す。外面は刷毛目ののちに荒いナデが行われており、タタキの種類は明かでない。他に寛永通宝1枚(Fig. 43-1)がある。

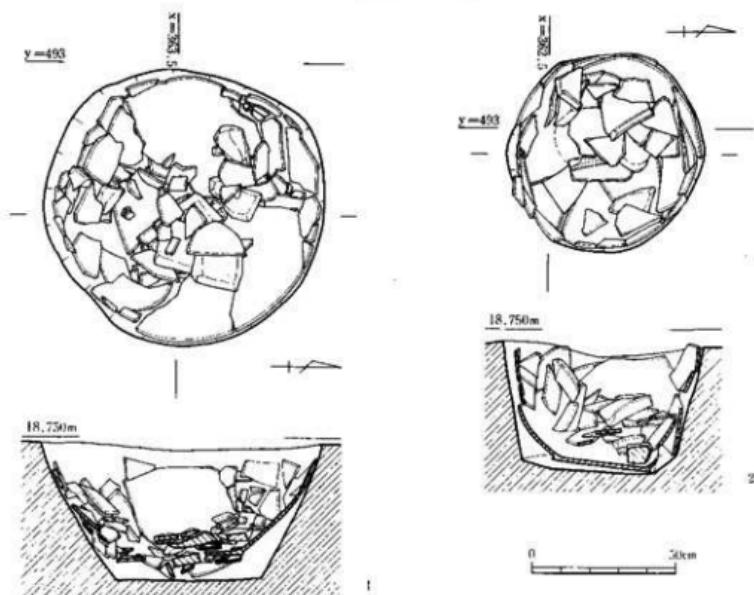


Fig. 39 第2・3号埋甕上壙実測図

埋甕上壙

試掘調査時とあわせて3基検出したが、後世の削平によって下半部しか残存しない。いずれも単独で存在し、上壙を共有することはない。

第1号埋甕 (Fig. 40-1・2, PL. 21)

試掘調査時に出土したもので、出土地点から第2・3号埋甕上壙の南に近接して存在したものと思われる。

1・2は土師質上器で、同一個体であろう。1は口縁部で外湾しながら内傾し、端部は肥厚する。頸部には一条の浅いヘラ描き沈線がめぐる。頸部以下はタタキによる調整で、内面は同心円の當て具痕がそのまま残るが、外面はそのち横方向のミガキを施す。2は底部で、内底面は周縁に沿って円形に刷毛目が施される。

第2号埋甕上壙 (Fig. 39-1・Fig. 40-3, PL. 17(1)・25)

調査区中央部よりやや東で検出した。平面形態は円形で、上面径約95cm、深さは検出面から48cmを残す。壙は底面から若干上位に据えられている。内部には自然石が落ち込んで

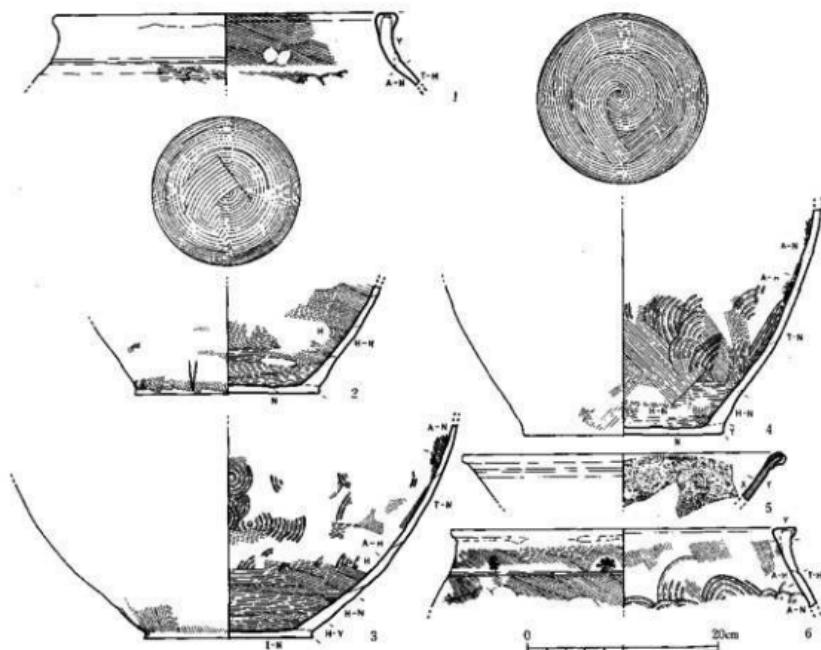


Fig. 40 第2・3号埋甕および出土遺物実測図

おり、口縁部は認められない。検出面の標高は約18.75m。埋土はオリーブ褐色粘質土(Hue 2.5Y 4/4)。甕は土師質で、胴部はタタキによる調整で、内面には同心円の当て具痕がそのまま残るが、底部付近はそのち横刷毛目を施す。外画は綫刷毛目のちさらに荒いナデが行われる。内底面の調整は第1号埋甕と同様で、外底面は板目压痕が残る。

第3号埋甕土壙 (Fig. 39-2・40-4～6, PL. 17(2)・21・25)

第2号埋甕土壙の約1m西で検出した。平面形態は円形で、上面径約70cm、深さは検出面から48cmを残す。甕はほほ底面に据えられており、内部には口縁部が落ち込んでいる。検出面の標高は約18.75m。埋土はオリーブ褐色粘質土(Hue 2.5Y 4/4)。4・6が埋甕で、土師質。4は胴部が底部から比較的急に立ち上がる。内外面の調整は第2号埋甕と同様であるが、外底面には板目压痕は認められない。6は第1号埋甕の口縁部と器形、調整ともほぼ同様であるが、口縁端部は面をもち、外面に菊花のスタンプ文を施文する。5は内部

から出土した陶器擂鉢。口縁部は短く緩やかに外反し、指押えによって注口部を作り出す。

溝

2条検出した。後世の削平が著しく、部分的にしか検出できなかった。出土遺物もなく時期は明らかでない。

第1号溝 (Fig. 29)

調査区北端部をほぼ南北に走り、第4号堅穴住居跡を切っている。検出した長さは約7mである。幅約10~15cm、検出面からの深さ約4cmを残す。検出面の標高は約18.60m。出土遺物はない。

第3号溝 (Fig. 29)

調査区中央部を北西→南東に走る。検出した長さは約3mで、幅約15~20cm、検出面からの深さ約2~4cm。検出面の標高は約18.65m。出土遺物には石器がある (Fig. 41~12)。

暗渠 (Fig. 29)

8条を検出した。本学統合移転前に開かれていた水田に伴うもので、内部から古墳時代から江戸時代の遺物が出土した。

暗渠出土遺物 (Fig. 41-1~11・13・14, PL. 21・22・25)

1は土師器壺。頭部内面に稜をもたず、口縁部は外湾しながら短く緩やかに外反する。2は須恵器の高杯。杯部は浅く、内湾しながら開き、上半部でやや急に立ち上がる。内面には重ね焼きの痕跡がみられる。短脚の据部は断面鳥嘴状となる。3~6・14は土師質土器。3・4は火舎。3は口縁部が短く内傾し、内面には沈線状の段をもつ。外面には菊花のスタンプ文を施す。4は獸足の支足をもつ底部で、足数は破片のため不明。外底面には板目圧痕が認められる。いずれも内外面には煤が付着する。5・6は盤。5は直線的に開く体部を底部側面に貼付する。口縁端部は内巻き気味に直立し、やや肥厚する。14は壺。口縁部は肥厚して直立し、端部は面取り状に平坦。頸部外面にはヘラ描きの浅い二条の沈線が巡る。内外面の調整は第2号井戸出土のものと同様である。7~10は陶器。7は鉢で、口縁部は玉縁状に肥厚し、端部は口禿となる。8は備前系の擂鉢。内面には14本を単位とする横筋描き上げを重ねながら右方向に施す。低い削り出し高台で、豊付は狭い。体部上半、外底面および豊付には煤が付着し、火災による投棄を思わせる。9~11は染付壺。口縁部に二条、体部下半に一条の網線が巡り、その間に粗雑な唐草文を絵付している。ほぼ全面に貫入がみられ、狭い豊付は無施釉。10は高台外面部にも一条の網線が巡る。11



Fig. 41 溝・暗渠出土遺物実測図

吉田構内教養部複合棟新宮に伴う発掘調査

Tab. 3 土壌一覧表

土壌番号	規 模(cm)			半面形態	埋 土 色 調	備 考
	長軸	短軸	深さ			
SK 1	152	62	2	梢円形	褐色粘質土 (7.5YR 4/6)	
SK 2	70	48	3	不整梢円形	*	SD 1 を切る
SK 3	70	46	8	梢円形	黒褐色粘質土 (2.5Y 3/2)	
SK 4	94	38	3	*	オリーブ褐色粘質土 (2.5Y 4/4)	
SK 5	114	70	4	不整梢円形	*	NR 1 を切る
SK 6	198	68	5	不整形	*	
SK 7	100	74	2	*	黒褐色粘質土 (2.5Y 3/2)	
SK 8	76	46	3	*	*	
SK 9	84	76	3	梢円形	褐色粘質土 (7.5YR 4/6)	土師器
SK10	166	108	4	不整形	オリーブ褐色粘質土 (2.5Y 4/4)	
SK11	222	84	2	不整梢円形	黒褐色粘質土 (2.5Y 3/2)	
SK12	92	44	9	梢円形	オリーブ褐色粘質土 (2.5Y 4/4)	
SK13	168	166	3	方形or長方形	*	

は口縁部外面に圓線状の絵付を施す。呉須は9が暗オリーブ灰色 (Hue 5 GY 4/1)、10が暗青灰色 (Hue 5 PB 4/1)、11がオリーブ灰色 (Hue 10Y 4/2) である。13は煙管の吸口。一枚の板を折り曲げ、肩をもたない。真鍮製。Fig.43-2は寛永通宝。第5号暗渠出土。1・13は第2号暗渠、3・5・9は第3号暗渠、4は第4号暗渠でその他は第8号暗渠出土。

土壌 (Fig. 29)

13基検出した。埋土はオリーブ褐色粘質土 (Hue 2.5Y 4/4) のもの (第4・6・10・12・13号土壌)、黒褐色粘質土 (Hue 2.5Y 3/2) のもの (第3・7・8・11号土壌)、褐色粘質土 (Hue 7.5YR 4/6) のもの (第1・2・9号土壌) の三種がみられる。平面形態は梢円形に近いもの (第1・3・4・12号土壌)、方形のもの (第9・13号土壌)、不整形のもの (第2・5・8・10・11号土壌) がある。オリーブ褐色粘質土の埋土をもつものは調査区北半部に集中する。規模は最大の第13号土壌で長軸両辺とも、170cm以上、最小の第8号土壌で長軸約76cm、短軸約46cmである。検出面からの深さは2~5cmのものが多く、残りの最も良い第12号土壌でも9cmを残すに過ぎない。

出土遺物はほとんどなく、わずかに第13号土壌から古墳時代の土師器が出上した。埋土の色調からすべて古墳時代以降のものであろう。

第4・5層出土遺物 (Fig. 42-1~9・11・12, PL. 22・24)

弥生時代以降の遺構・遺物

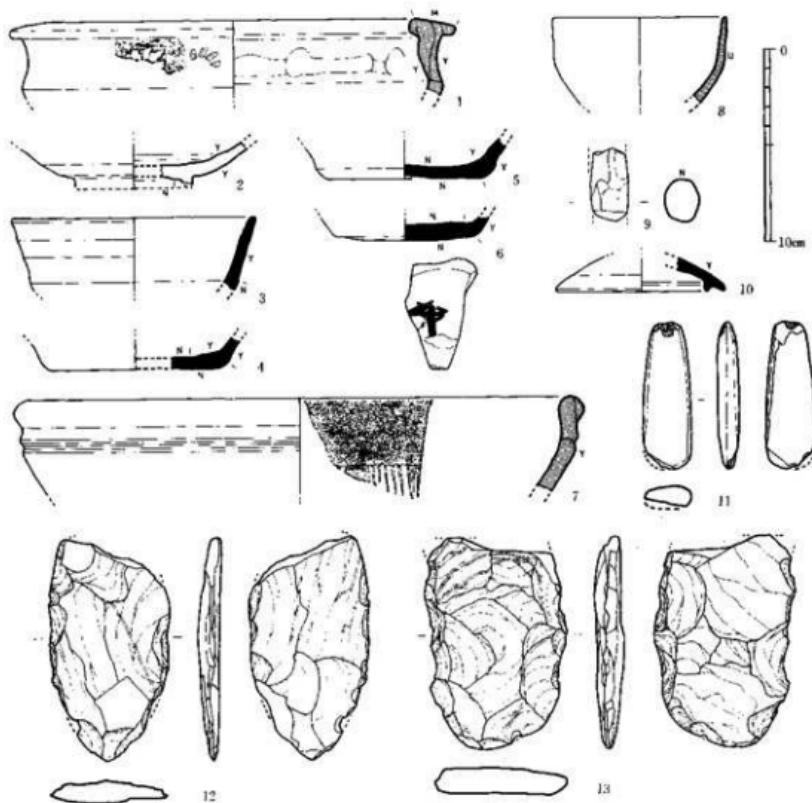


Fig. 42 第4・5層およびその他の出土遺物実測図

各層から土師器、須恵器、土師質土器、瓦質土器、陶器、磁器が出土した。古墳時代から江戸時代にかけての各時代のものが混在する。1は陶器の壺。口縁部は外溝しながら直立し、端部を斜上下の両方に拡張させる。端部は平坦で、ヘラミガキを行う。口縁部外面には菊花のスタンプ文を施文する。4層出土。



Fig. 43 出土鏡貨拓影 (1—第2号井戸
2—第5号暗渠 3—第5層)

吉田構内教養部複合棟新營に伴う発掘調査

Tab. 4 出土遺物観察表

法量()は復原値

No	器種	法量(cm) (①口径②底径③高さ)	色調 (①外表面②内面)	胎土	焼成	備考
落し穴 (Fig. 22)						
1	縄文上器		①にぶい黄褐色 (10YR5/3) ②深褐色 (5YR3/1)	良	良好	
河川跡 (Fig. 23)						
1	縄文土器 漆跡or浅跡		赤褐色 (5YR4/8)	良	良好	
2	縄文上器 漆跡or浅跡		灰褐色 (5YR5/2)	不良	稍良	
3	縄文土器 漆跡or浅跡		①褐色 (5YR6/8) ②にぶい黄褐色 (10YR7/3)	良	良	胎土に結晶片岩を多く含む
4	縄文土器 漆跡or浅跡		黄褐色 (2.5Y5/1)	不良	良好	
5	縄文土器 漆跡or浅跡		①灰色 (5Y4/1) ②褐色 (5YR6/8)	不良	稍良	
6	縄文土器 漆跡or浅跡		黒褐色 (7.5YR3/1)	不良	良	
7	縄文土器 漆跡or浅跡		橙色 (5YR6/8)	良	良好	
8	縄文土器 浅跡		①褐色 (7.5YR6/8) ②淡黄色 (2.5Y7/3)	不良	良好	波状口縁
9	縄文土器 (2) (3.0)		①淡黄色 (5YR3/1) ②灰白色 (2.5Y8/2)	不良	良	
10	縄文土器 (2) (6.4)		灰白色 (2.5Y8/2)	良	良好	
谷状造構 (Fig. 25)						
1	縄文土器裏		淡黄色 (2.5Y8/3)	やや不良	やや不良	外側に煤付着
2	縄文土器裏		①灰白色 (2.5Y8/1) ②深褐色 (10YR3/1)	不良	良	突帯の下位に卓孔
3	縄文土器裏		③にぶい褐色 (7.5YR5/4) ④淡黄色 (2.5Y7/3)	不良	不良	
4	縄文土器裏		⑤淡黄色 (2.5Y8/3) ⑥褐色 (7.5YR5/1)	不良	良好	
5	縄文土器裏		灰白色 (2.5Y8/2)	やや不良	良	
6	縄文土器 漆跡 (2) 3.4		淡黄色 (2.5Y8/4)	不良	良好	
7	縄文土器裏 漆跡 (2) (7.5)		⑦褐色 (2.5YR6/8) ⑧にぶい深褐色 (10YR2/2)	不良	良好	
8	縄文土器裏 漆跡 (2) (7.8)		⑨淡黄色 (2.5Y8/3) ⑩深褐色 (5YR5/2)	不良	良	
9	縄文土器裏 漆跡 (2) (8.6)		淡黄色 (2.5Y8/3)	不良	良	
10	土師器裏		褐色 (7.5YR4/3)	やや不良	良	
11	土師器高环		青色 (2.5Y8/6)	良好	やや不良	
12	埴輪器裏		⑪青灰色 (10YR6/1) ⑫灰白色 (N7/0)	やや不良	良好	
第6層 (Fig. 27)						
1	縄文土器 漆跡 (1) (43.4)		⑬褐色 (5YR4/3) ⑭褐色 (2.5YR4/3)	不良	不良	
2	縄文土器 漆跡		⑮褐色 (10YR2/1) ⑯褐色 (2.5YR4/2)	やや不良	良好	
3	縄文土器 漆跡		⑰褐色 (7.5YR5/1) ⑱褐色 (7.5Y7/1)	良好	稍良	外側に煤付着
4	縄文土器 漆跡		⑲にぶい褐色 (5YR4/3) ⑳褐色 (5YR5/1)	良好	良好	
5	縄文土器 漆跡		㉑淡黃褐色 (10YR6/3) ㉒にぶい褐色 (5YR4/4)	不良	良	
6	縄文土器 漆跡		㉓褐色 (10YR6/1) ㉔白色 (2.5Y8/2)	良好	良好	外側に煤付着
7	縄文土器 漆跡		㉕明赤褐色 (5YR5/6)	良好	良好	
8	縄文土器 漆跡		㉖明赤褐色 (5YR5/6)	良好	良好	
9	縄文土器 漆跡		㉗褐色 (10YR6/8) ㉘白色 (2.5Y8/1)	不良	小不良	

弥生時代以降の遺構・遺物

法()は複数個

No	器種	法() 〔1(1)付(2)付(3)等〕	色調 〔(2)外(3)内〕	胎土	焼成	備考
10	縄文土器浅鉢	②(1)付(2)付(3)等	灰褐色(2.5Y7/2)	不良	良好	
13	縄文土器	②(9.1)	①にぶい褐色(10YR5/3) ②淡黄色(2.5Y8/4)	良好	良好	
14	縄文土器	②7.2	①黑色(7.5YR5/1) ②褐色(5Y2/1)	不良	稍好	
15	縄文土器	②(10.1)	①褐色(7.5YR6/6) ②深褐色(2.5Y3/1)	不良	不良	胎土に粘土片岩を 多く含む

第7号(Fig. 27)

11	縄文土器	②7.0	赤褐色(2.5Y6/1)	良好	良好	
12	縄文土器	②7.4	浅黄色(2.5Y7/3)	良好	良好	胎土に粘土片岩を 多く含む

河川跡(Fig. 32)

1	土師器要	①(25.4)	①にぶい褐色(2.5YR6/4) ②にぶい褐色(2.5YR5/4)	良好	良好	
2	土師器要		①にぶい褐色(7.5YR7/3) ②にぶい褐色(10YR7/3)	不良	良好	
3	土師器高環		にぶい褐色(10YR7/3)	良好	良好	
4	土師器高環	②(11.4)	淡黄色(2.5Y8/3)	稍良	良好	
5	土師器支脚	②10.2	淡黄色(2.5Y8/3)	不良	良好	
6	土師器手盤上器	②10.6	にぶい褐色(10YR7/3)	やや不良	良好	
7	須恵器短須直蓋		①灰白色(N8/0) ②灰白色(N7/0)	稍良	良好	体部外面に重ね燒 きの痕跡
8	須恵器短須十脚器 环身	①12.3	①灰白色(10Y7/1) ②褐色(5B3/1)	稍良	良好	
10	縄文土器深鉢		①にぶい褐色(10YR6/3) ②褐色(10Y4/1)	良好	良好	
11	縄文土器深鉢		①にぶい褐色(7.5YR6/4) ②灰褐色(2.5Y3/2)	やや不良	良好	
12	縄文土器浅鉢		①灰白色(10YR7/1) ②褐色(7.5YR6/1)	良好	良好	
13	土師器要		①にぶい褐色(5YR6/4) ②深褐色(10YR8/4)	良好	やや良好	

第1号井口(Fig. 36)

1	施釉陶器鉢		素地一褐色(10YR6/1) 釉一黒褐色(7.5YR2/2)	良好	良好	口光
2	陶器底	②6.2	素地一にぶい褐色(10YR7/3) 釉一暗褐色(2.5Y3/4)	やや不良	良好	円錐トナ付着
3	土師質上器蓋	①19.4	にぶい褐色(7.5YK7/4)	良好	良好	
4	陶器底	①11.0	素地一褐色(5Y9/1) 釉一オレンジ色(5.5Y4/6)	良好	良好	
5	陶器底	①37.6	素地一本色(10R5/8) 釉一暗褐色(7.5Y3/2)	稍良	良好	底部内面に重ね燒 きの離れ付着

第2号井口(Fig. 38)

1	土師質上器蓋	①23.0	浅褐色(7.5YR8/4)	良好	良好	
---	--------	-------	---------------	----	----	--

埋甕土壙(Fig. 40)

1	土師質上器蓋	①35.6	にぶい褐色(7.5YK7/4)	稍良	良好	
2	土師質土器要	②19.6	①褐色(2.5Y2/6) ②深褐色(5YR8/4)	良好	良好	
3	土師質土器要	②17.8	にぶい褐色(5YR6/4)	良好	良好	
4	土師質土器要	②21.0	褐色(7.5YK7/6)	良好	良好	
5	陶器底	①33.4	素地一褐色(7.5Y4/6) 釉一褐色(10R2/1)	良好	良好	
6	土師質土器要	①39.4	灰白色(7.5YR8/2)	良好	良好	

殆保(Fig. 41)

1	土師質土器要		灰褐色(7.5YR5/2)	良好	良好	
---	--------	--	---------------	----	----	--

吉田構内教養部複合棟新宮に伴う発掘調査

法量()は復原値

No.	器種	法量(cm) (①口径②底径③高さ)	色調 (④外面⑤内部)	胎土	焼成	備考
2	須恵器 环 壺	① 13.0 ② 8.8 ③ 7.1	明青灰色 (10BY7/1) にぶい褐色 (7.5YR7/4)	良好	良好	
3	土師質土器 火舟		①淡褐色 (5YR8/4) ②にぶい褐色 (7.5YR6/4)	良好	良好	白釉無内外面に焼付素
4	土師質土器 火舟		①淡褐色 (5YR8/3) ②にぶい褐色 (7.5YR6/3) ③淡白色 (10YR8/2)	良好	良好	外底面に被目状痕
5	土師質土器 鍋	① 21.8 ② (17.2) ③ 3.1	①淡褐色 (5YR8/3) ②にぶい褐色 (5YR7/3)	良好	良好	
6	土師質土器 鍋	② (7.7)	にぶい褐色 (5YR7/3)	良好	良好	
7	施釉陶器 鍋	① 22.4	素地ににぶい褐色 (2.5YR6/4) 釉-明赤褐色 (5YR3/3)	やや不良	やや不良	口壳
8	陶器 描 花	② 11.4	赤色 (10R4/6)	良好	やや不良	
9	陶器 描 花	① 11.0 ② 4.8 ③ 6.3	素地-底白色 (N7/1) 釉-オーバーフラッシュ (2.5GY6/1)	良好	良好	
10	陶器 描 花	① (8.8) ② 3.6 ③ 6.3	素地-底白色 (7.5Y5/1) 釉-底白色 (6.6/1)	良好	良好	
11	褐 器	① (9.0)	素地-底白色 (10Y4/2) 釉-明褐色 (7.5GY8/1)	良好	良好	
14	土師質土器 壺	① (72.4)	①淡褐色 (7.5YR8/4) ②褐色 (7.5YR7/6)	良好	良好	

4層 (Fig. 42)

1	陶器 壺	① (19.0)	にぶい褐色 (5YR7/3)	良好	良好
---	------	----------	----------------	----	----

5層 (Fig. 42)

2	土師器 壺	② (6.0)	①淡黄色 (2.5Y8/3) ②淡褐色 (10YR8/3)	稍良	良好
3	須恵器 环身	① (12.6)	古灰色 (10BY6/1)	不良	良好
4	須恵器 环身	② (8.8)	青灰色 (10BY6/1)	やや不良	良好
5	須恵器 环身	② (8.0)	古灰色 (5B6/1)	良好	良好
6	須恵器 环身	② (4.4)	①淡黄色 (2.5Y8/1) ②淡褐色 (10YR8/1)	良好	良好
7	施釉陶器 鍋	① (28.4)	素地ににぶい褐色 (2.5YR6/4) 釉-明赤褐色 (5YR3/3)	良好	良好
8	陶器 壺	① (8.9)	素地-底黄色 (7.5Y6/1) 釉-底白色 (5GY8/1)	良好	良好
9	土師質土器 描 花		淡黄色 (5Y8/3)	良好	不良

表採 (Fig. 42)

10	須恵器 环身	① (8.8)	①暗青灰色 (10BG7/1) ②暗青灰色 (5PB6/1)	良好	良好
----	--------	---------	-----------------------------------	----	----

() は現存値

%	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重 量(g)	石 質	備 考
落し穴 (Fig. 22)							
2	剥片	② (2.9)	2.5	1.05	4.2	黒曜石	
谷状遺構 (Fig. 25)							
13	測量石 等	④ (4.5)	③ (3.95)	① (1.95)	44.0	泥岩ホルンフェルス	頭部
14	石	4.7	4.4	3.8	108.9	角閃石安山岩質 粘晶闊葉岩	
15	石	1.85	1.5	0.85	0.6	石英片岩	
16	石	1.65	1.5	0.55	0.8	黑曜石 (舞島産)	
17	石	1.1	1.9	0.4	0.4	黒曜石	
18	石	1.0	1.1	0.3	0.2	石英片岩	
19	加工板のある剥片	2.7	1.2	0.65	1.4	黒曜石	
20	加工板のある剥片	② (2.7)	1.3	0.6	2.3	舞島安山岩	

弥生時代以降の遺構・遺物

() は現存値

No.	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	備考
21	加工痕のある剥片	2.15	1.4	0.65	1.2	石英片岩	
22	加工痕のある剥片	(1.9)	(1.9)	(0.5)	1.9	石英片岩	
23	加工痕のある剥片	8.0	1.8	0.4	0.3	石英片岩	
24	加工痕のある剥片	(2.85)	2.2	0.65	2.7	黒曜石	
25	使用痕のある剥片	4.1	2.3	0.9	4.9	黒曜石	
26	石核	3.55	3.25	1.75	16.4	チャート?	

6期 (Fig. 28)

1	石 器				0.6	黒曜石 (鶴鳥産)	
2	石 器	(3.55)	(2.25)	0.75	4.1	黒曜石 (鶴鳥産)	横形
3	使用痕のある剥片	(3.75)	(2.65)	0.6	4.4	チャート	
4	磨製石斧	(20.5)	(7.0)	(3.95)	682.7	緑泥石片岩	複合資料
5	石 核	3.60	2.45	1.60	8.9	黒曜石	

河川跡 (Fig. 32)

9	打製石斧	23.4	5.4	1.9	272.1	緑泥石片岩	
14	石 器	2.1	1.65	0.55	1.2	石英片岩	
15	石 器	1.65	1.6	0.35	0.5	石英片岩	
16	石 器	(2.25)	(2.0)	(0.45)	1.7	無斑晶安山岩	
17	加工痕のある剥片	(4.0)	2.35	0.7	5.5	黒曜石	
18	加工痕のある剥片	(2.65)	1.6	0.6	1.8	黒曜石 (鶴鳥産)	

第3号溝 (Fig. 41)

12	石 器	(1.25)	(1.55)	(0.4)	0.4	黒曜石	
5期 (Fig. 42)							
11	磨製石斧	(7.6)	2.5	1.1	30.3	角閃石片岩	
12	打製石斧	(11.5)	(6.3)	(1.2)	94.2	緑泥石片岩	
耕作土 (Fig. 42)							
13	打製石斧	(10.95)	7.4	1.4	148.9	緑泥石片岩	

() は現存値

No.	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	材質	質	備考
第1号井口 (Fig. 37)							
1	柱円形曲物	(9.5)	(9.4)	1.0			底板
2	棒状木製品	39.9	3.2	1.9			
3	籠状木製品	(9.2)	(1.8)	1.0			口封穴
4	籠状木製品	(12.4)	(1.8)	1.0			

() は現存値

No.	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最小厚(cm)	備考
昭和 (Fig. 41)					
13	鍵 斧	5.2	0.9	0.25	吸口

2～9・11・12は5層出土。2は土師器塊。糸切り底で内面ヘラミガキ。3～5は須恵器の坏身。3は直線的に開く口縁部をもち、端部は丸い。4・5は高台をもたない底部。6は須恵質土器の坏身底部。外面には墨書きがみられるが、判読できない。7・8は陶器。7は備前系の擂鉢。わずかに内傾する口縁部をもち、端部外面には断面三角形の突帯を貼付し、肥厚させる。8は肥前系の塊で、口縁部は直線的に立ち上がる。絵付はみられない。9は土師質土器の肧脚部。11は小形の磨製石斧で、刃部幅が頭部幅よりやや広い。頭部に截打痕が認められる。断面形は楕円形。12は打製石斧。正裏両面に成形時の荒い剥離痕が残るが、正面の左右両側縁の二次加工は比較的丁寧である。刃部は尖る。他に5層からは寛永通宝1枚(Fig. 43-3)がある。

その他の遺物 (Fig. 42-10・13, PL. 22・24)

10は須恵器の坏蓋で、出土状況不明。体部から口縁部には直線的に移行する。かえりは短く、口縁部以下にわずかに突出する。13は第2層(耕作土)から出土した打製石斧。扁平な板石を素材とし、正裏両面中央部の素材面と自然面との区別は困難である。正裏両面の左側縁、下縁の二次加工は比較的丁寧である。刃部はあまり尖らず、やや面をもつ。各剥離面には階段状の剥離痕がめだつ。

4 小 結

(1) 遺構と遺物について

1) 繩文時代

繩文時代の遺構には河川跡、落し穴、溝がある。県内では繩文時代の遺跡の調査そのものの調査例が少なく、しかも沿岸部に集中しており、その実態は必ずしも明らかではない。⁶⁾
また、遺構は早期に遡る可能性のある堅穴住居状の遺構のほか土壤、河川跡、ドングリ等⁷⁾
のアケ抜き用の貯蔵穴などが検出されているにすぎず、貴重な検出例となった。⁸⁾

河川跡は幅約29m以上の規模をもち、蛇行しながら北東から南西に走行する。遺構の性格からやや時期幅をもつ遺物が含まれていることも考えられるが、河川跡の上位に堆積する第6層から口縁部下および胴部の屈曲部に突帯状の肥厚帯をもち、口縁部から頭部の内外面にやや規則的な横条痕を施す大形の粗製深鉢が出土している。岩田Ⅳ類・月崎上層Ⅲ式に相当し、⁹⁾晚期中頃に位置づけられるが、肥厚帯には刻み目をもたず、突帯文出現の前段階のものと考えられ、晚期中頃でも新しい要素をもつものである。河川跡の遺物には口縁部内面に段をもつものや、口縁端部が丸く、内面を横ナデによってにぶく段状に作り出す波状口縁の粗製浅鉢が含まれており、岩田Ⅳ類・月崎上層Ⅲ式に相当するものであろう。

小 結

層序的にも 6 層の土器より遡るものであるが、器形、調整のわかる資料がきわめて少なく、県内の編年が充分に行われていない現状では大きく晩期中頃の時期を与えておきたい。

吉田構内では縄文時代の遺構は二箇所で検出されている。いずれも晩期のものである。遺跡保存地区の西方では、今回検出した河川跡と直交する幅約60mの河川跡 1 条が確認されているが、距離的にやや離れており、相関関係は明かでない。また、養護学校敷地では晩期中頃の土壙 1 基が確認されている。⁽¹²⁾

山口盆地では本学の南西約 1~1.5km に所在する西遺跡で堆積、河川跡、小路遺跡で土壙、溝状遺構、また、横野川右岸では木崎遺跡で土壙の報告例がある。時期的には晩期中頃（岩田Ⅳ類・月崎上層Ⅲ式）から終末（岩田Ⅴ類・月崎上層Ⅳ式）のもので、それ以前の遺構は検出されていない。⁽¹³⁾ 松尾征二氏は小路遺跡周辺の段丘および段丘堆積物の分析から、小路層下部と命名したこれらの遺構を掘り込む層にアカホヤ火山灰由来する、淡褐色を呈するバブル型の平板状や XY 状の火山ガラスがかなり含まれていることを明らかにした。⁽¹⁴⁾ 同層は本学構内では晩期中頃でも新しい要素をもつ遺物を包含することから、小路層下部は二次堆積物で、その堆積時期は縄文時代前期から晩期中頃にあたる。したがって、盆地内では、従来、弥生時代以降の検出面とされていた同層から検出される縄文時代の遺構は、上記の遺跡にみられるように、遡っても晩期中頃までであろう。なお、河川跡は同層の堆積過程で、一時期地表面であった段階に機能していたもの理解できる。

次に、調査区のほぼ中央部で検出面された小土壙について述べておきたい。土壙は晩期中頃の河川跡の右岸に位置し、土壙端と川岸の距離は約70cm ときわめて近接して掘り込まれている。平面形態は隅丸長方形で、長軸105cm、短軸78cm、深さ25cmの規模をもち、長軸は河川跡と直交している。底面には深さ58cmの凹形のピットがあり、板石状の自然石が縦位に詰められている。

吉田構内では他に、今回の検出地点の北東約270mに位置する大学会館敷地で、ほぼ同じ平面形態、規模、構造をもつ土壙の検出例（SK 2・3）がある。SK 2 は長軸114cm、短軸70cm、深さ38cmの規模をもち、SK 3 は暗渠に切られているため平面の規模は明かでないが、深さは34cmである。2基の土壙は長軸方向を同じくし、約5m間隔で並列しており、いずれもピット内への詰め石はない。幅約16m以上の谷の谷頭付近に立地し、報告の段階では谷の緩斜面から出土した遺物から、埋没の時期を少なくとも古墳時代前期としたが、その下位にはまだ厚さ約80cmの堆積層が存在すること、谷の埋積土内から縄文早期のものと思われる石器が出土していることから、谷の開いていた時期は縄文時代に遡る可

能性がある。先に記した小路遺跡でも類例が認められる。第71号土壌がそれで、長軸119cm、短軸62cm、深さ10cmの規模をもち、縄文時代晩期のものと考えられている。

以上のように、縄文時代に属すると考えられる底面にピットをもつ小土壌は県内で4例ある。²¹⁾同じ構造をもつ土壌の検出例は東日本で多く、近隣では鳥取県青木遺跡、岡山県谷尻遺跡、²²⁾福岡県下原遺跡、門田遺跡、佐賀県六本木黒木遺跡などで報告例があり、落し穴と²³⁾²⁴⁾²⁵⁾考えられている。県内の4例もこれに当たると思われるが、解消すべき問題点がある。

まず、第一に深さがあまりないこと、すなわち構造上の問題点である。SK 2・3および第71号土壌が、後世の削平によって上面を大きく削られていること、教養部の例が小路層下部の堆積過程で浸食、人為的な地表の改変を受けたことが考えられることから、4基の土壌の深さは掘削の時点での深さを示すものではない。むしろ平面の形態・規模・構造の顯著な類似性、つまり構造上の規格性が強調されるべきであろう。

第二に落し穴として機能する環境にあったかどうか、すなわち立地上の問題点である。教養部の例が河川跡、SK 2・3が谷のすぐそばに存在することは、必ずしも偶然の所産とは考えられず、水呑場あるいはヌタ場を求めて集まる小動物捕獲のために、意識的に選択された場所であったものと思われる。また、県内の4例は落し穴の周辺を広範囲に調査したものではなく、1基のみの検出例が単独では存在しない落し穴の否定材料とはならない。その意味からも、SK 2・3の並列状況はまさに落し穴としての機能をもつものであろう。

なお、遺構ではないが、調査区中央部では「U」字形に、南西および南東に開く浅い谷状の落ち込みを検出した。出土遺物は須恵器、土師器を若干含むが、大半が岩田V類・月崎上層IV式に対比される突唇文土器を中心とする晩期終末のものである。縄文時代晩期終末の一時期に谷状の落ち込みが埋積し、埋まりきらなかった隙間に古墳時代の遺物が混入したものと考えられる。

また、今回の調査の成果として特筆すべきは晩期の遺物包含層を確認したことであろう。本学構内にとどまらず、県内でのこの時期の遺物は、遺構に伴うものを含めても多くはなく、編年上の課題となっているとともに縄文社会の復元に大きな障害となっている。これを機に、今後、沖積低地での晩期さらにはそれを通る遺物包含層、遺構の検出例が増加するものと思われる。

2) 弥生時代から江戸時代

弥生時代中期から古墳時代の堅穴住居跡4基、古墳時代の河川跡、江戸時代の井戸2基、

小 結

埋甕土壙3基、掘立柱建物跡2棟のほか、土壙13基、溝2条、柱穴多数がある。

竪穴住居跡は4基検出した。後世の削平によって壁面は最も残りのよい第3号竪穴住居跡でも5cmを残すに過ぎない。第4号竪穴住居跡は二重に巡る壁溝をもち、建て替えが想定される。規模はいずれも小さく、主柱配置は明かでない。出土遺物はないが、埋土の色調、棋野川流域における竪穴住居跡の平面形態、規模の変遷および切り合い関係から、第2号竪穴住居跡が弥生時代中期から後期、第3・4号竪穴住居跡が弥生時代後期から古墳時代、第1号竪穴住居跡が古墳時代のものと考えられる。4基とも遺跡保存地区の竪穴住居跡と同時期で、弥生時代中期から古墳時代にかけて、吉田構内南西部から中央部付近に大規模な集落が存在していたことを窺わせる。近年、遺跡保存地区における集落の内容が次第に明かになっており、吉田構内での集落の時期的な立地、展開過程を解明する貴重な資料となった。

河川跡は古墳時代のものを2条検出した。このうち第1号河川跡は、幅約2mの規模をもち、北東—南西に走行する。第2号河川跡と同一のものかもしれないが、調査区外にあるため確認していない。出土遺物、埋積土の状況から、5~6世紀代の少なくとも2時期の流路が存在する。この時期の河川跡は今回の調査地域の南約130mに位置する教育学部実験実習棟敷地²⁶⁾、北東約150mに位置する図書館増築地²⁷⁾でそれぞれ1条が検出されているが、これらとは流路方向が異なり、集落立地、規模を考えるうえで注目されよう。

近世の集落関連遺構には掘立柱建物跡、井戸、埋甕土壙がある。

掘立柱建物跡は身舎1間×3間（第1号掘立柱建物跡）、1間×2間（第2号掘立柱建物跡）のものの2棟がある。いずれも規模は小さい。他にも同時期のものと思われる柱穴が調査区内ほぼ全面に存在するが、復原できなかった。出土遺物はなく、時期比定は困難であるが、検出面の上位に堆積する5層から17世紀代の遺物が出土していること、両建物のそれぞれに近接して、この時期の井戸が存在することから17世紀前半のものと考えられる。2基の井戸はいずれも素掘りと思われるが、第1号井戸の底面には自然石が散乱しており、廃絶時に石組みが抜かれた可能性がある。埋甕土壙は少なくとも2基並列しており、土壙は共有しない。両建物は棟方向がほぼ直交し、井戸、埋甕土壙を付設する屋敷内の一連の建物として集落を構成していたものと考えられる。吉田構内では、中世以降の集落は環濠内に井戸²⁸⁾をもつ室町時代の建物跡が知られているが、近世の建物跡の検出例は少なく、中世から近世にかけての屋敷構造、集落および構成員の性格を知る上で興味深い。

遺物として着目しておきたいものに、まず、第1号河川跡から出土した須恵器模倣土師器がある。吉田構内では、図書館増築地で出土した7世紀初頭の壺蓋について2例目であり、製作工人集団の性格、動態を知るうえでの基礎的な資料である。また、墨書きのある須恵質土器は小破片のため明確な時期、墨書きの判読はできないが、筆跡、字形から遡っても鎌倉時代以降のものであるという。²⁹⁾ この時期、吉田構内周辺地域は「恒富保」の一部に編入されており、鎌倉幕府から地頭職として任官した父平子重經から「恒富保」を分割相続した四男重継は恒富氏と称している。³⁰⁾ 13世紀には恒富氏は本家の恒富氏と分家の吉田氏の両家に分かれ、地頭領主として成長したが、両家の居館跡は現在のところ明かでなく、物的資料も乏しい。しかし、本構内では今回の調査地点の北東約270mに位置する大学会館敷地で、12~13世紀の畿内系瓦器に加え、在地の一般集落を卓越する量の輸入陶磁器が出土しており、今回の文字資料とあわせて居館関連施設の存在を傍証するものとして注目される。また、第1~3号埋甕土壙の土師質土器の甕は、口縁部の形状から時期的にやや古い要素をもつが、第2号井戸出土のもの、大学会館前庭部敷地のDトレンチ4・5号土壙出土品に類似が認められる。³¹⁾ 口縁部の形状、胴部から頭部にかけての内外面のタタキによる調整など強い規格性をもち、山口県防府市に所在する佐野焼の系統と考えられる。

(2) 埋蔵文化財の遺存状況と今後の方針

埋蔵文化財資料館運営委員会は調査終了後、埋蔵文化財資料館から調査結果の報告を受け、現地の視察を行うと共に、その後の取り扱いについて協議した。

同委員会は竪穴住居跡をはじめとして、新宮予定地内における弥生時代以降の遺構が、後世の削平によって遺存度がよくないこと、遺構の分布密度も遺跡保存地区などとくらべて希薄であること、また、計画建物の候補地を他に求めることが困難であることなどから、調査結果を記録保存することで合意した。

しかし、縄文時代の遺物包含層が弥生時代以降の遺構の検出面であることが確認され、同じ色調、組成をもつ堆積層が吉田構内ではかなり広範囲に検出されること、また、吉田構内ではこれまでほとんど検出されていない縄文時代の遺構が存在し、しかも、弥生時代以降の遺構の検出面より下位の堆積層に掘り込まれている点を重視し、今後、縄文時代の集落関連遺構の精査が必要であると結論づけた。

〔注〕

- 1) a 河村吉行「山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和57年度）」（『山口大学構内遺跡調査研究年報』V、山口大学埋蔵文化財資料資料館、1986年）。
- b 河村吉行「山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和59年度）」（『山口大学構内遺跡調査研究年報』VI、山口大学埋蔵文化財資料資料館、1987年）。
- 2) 山口大学埋蔵文化財資料資料館「中央団体船増基予定地M-16区の発掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報』VI、1985年）。
- 3) 渡見透「山口県岩田遺跡出土縄文時代遺物の研究」（『広島大学文学部紀要』第18号、広島大学文学部、1960年）。
- 4) 渡見透「月崎遺跡」（『宇部の遺跡』、宇部市教育委員会、1968年）。
- 5) a 前掲注 1) a に同じ。
- b 河村吉行「古墳時代における堅穴住居の各属性について」（『山口大学構内遺跡調査研究年報』VII、山口大学埋蔵文化財資料資料館、1987年）。以下、堅穴住居の平面形態、規模による時期決定は上記の文献による。
- 6) 1988年に山口県旧石器文化研究会の調査によって、宇部市長井遺跡第二地点で検出されている。
- 7) a 建設者山口工事事務所、山口県教育委員会「木崎遺跡」（『朝田堀東群、木崎遺跡』、山口県埋蔵文化財調査報告第32集、1976年）。
- b 山口県教育委員会・山陽工業株式会社「奥正椎寺遺跡」（『奥正椎寺遺跡』、山口県埋蔵文化財調査報告第77集、1984年）など。
- 8) a 山口市教育委員会「小路遺跡」（山口市埋蔵文化財調査報告第27集、1988年）。
- b 山口大学吉田遺跡調査団「山口大学構内吉田遺跡発掘調査概報」（山口大学、1976年）など。
- 9) 半生町教育委員会「岩田遺跡」（1974年）。
- 10) 前掲注 3) に同じ。
- 11) 前掲注 4) に同じ。
- 12) 前掲注 8) b に同じ。
- 13) 山口市教育委員会「西遺跡」（山口市埋蔵文化財調査報告第21集、1986年）。
- 14) 前掲注 8) a に同じ。
- 15) 前掲注 7) a に同じ。
- 16) 前掲注 3) に同じ。
- 17) 前掲注 4) に同じ。
- 18) 松尾征二「小路遺跡周辺の第四系」（『小路遺跡』、山口市埋蔵文化財調査報告第27集、山口市教育委員会、1988年）。
- 19) 今回の調査ではB-C壁およびC-D壁の一部を深掘りし、土壤サンプルを採取している。現在、火山灰の同定作業を進めており、分析終了後に報告する予定である。
- 20) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内大字会館新宮に伴う発掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報』III、1985年）。
- 21) a 青木遺跡発掘調査団「青木遺跡発掘調査報告書 1」（1976年）。
- b 青木遺跡発掘調査団「青木遺跡発掘調査報告書 2」（1977年）。
- c 青木遺跡発掘調査団「青木遺跡発掘調査報告書 3」（1978年）。
- 22) 国山町文化財保護協会「中国縱貫自動車道建設に伴う発掘調査 6」（1976年）。
- 23) 福岡県教育委員会「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告第7集」（1978年）。
- 24) 福岡県教育委員会「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書 2」（1983年）。
- 25) 西田和己・岩長政博「六本木黒木遺跡」（『大門内遺跡』、佐賀県文化財調査報告書第51集、1980年）。
- 26) 山口大学埋蔵文化財資料資料館「教育学部構内 - 19・20区の発掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報』I、1982年）。
- 27) 前掲注 2) に同じ。
- 28) 山口大学埋蔵文化財資料資料館「昭和54・55年度調査の概要」（『山口大学構内遺跡調査研究年報』I、1982年）。

吉田構内教養部複合棟新宮に伴う発掘調査

- 29) 教養部教授木村忠夫先生に御教示を得た。
- 30) 内田伴・石川卓美「山口市」(『山口県の地名』、日本歴史地名体系、1980年)。平清水八幡宮の應治3年(1308年)の神主職譲状、庵寺高藏寺の応永21年(1414年)の雜路から吉田の地が恒富保の一部であったことが推定されている。
- 31) 『三浦家文書』に建久8年(1197年)、平子重經が恒富保の地頭職に任せられた記載がある。
- 32) 前掲注(20)と同じ。
- 33) 前掲注(1)▲と同じ。
- 34) 山口県教育委員会『生産遺跡分布調査報告書－窯業－』(山口県埋蔵文化財調査報告書第74集、1983年)。

第4章 小串構内医学部附属病院病棟新営に伴う試掘調査

1 調査区周辺の地形

小串構内（医学部キャンパス）は山口県南西部、宇部市大字小串1144番地に在り、^{小串川}霜降岳東麓に源を発し宇部港に注ぐ真緑川の中流域右岸に位置する。流域に遺跡は少なく、周辺の低位丘陵上・段丘上に弥生時代の北迫遺跡、南側遺跡等を若干見るだけである。宇部市域の地理的環境ならびに歴史的環境については、当調査研究年報のⅢ・Ⅳで詳細に述べてあるのでここでは割愛したい。

2 調査に至る経緯と調査方法

(1) 調査に至る経緯と調査目的

調査対象地区は、医学部附属病院の病棟新営予定地、約2200m²である。小串構内では昭和58年以降の調査によって、現在まで部分的にではあるが、近・現代所産と考えられる遺構、また旧石器時代・中世・近世などの遺物が発見されている。埋蔵文化財資料館では、昭和62年度の医学部事業計画案のなかに病棟新営が盛り込まれた時点で、新営工事に際しては何らかの調査が必要であろうとの判断をしていた。

昭和62年12月17日、医学部より病棟新営の工事計画を受けた資料館は、既往調査の結果を参考に遺構・遺物の遺存状況把握のための試掘調査を行うこととした。ところが、既設埋設物が多くあり、土層堆積状況も全く不明であったため、トレチ設定に困難を極めた。この試掘調査は今後の取り扱い上、非常に重要な位置を占めること、また、より効率的な試掘調査の実施から、まず、昭和63年1月19日に病棟新営予定地

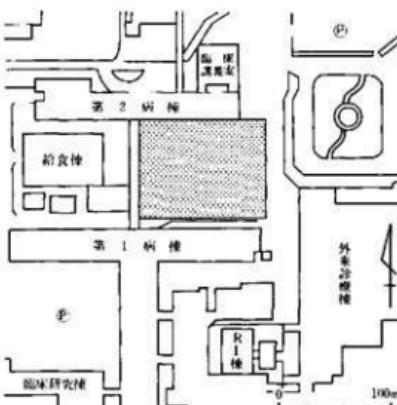


Fig. 44 病棟新営地位置図

の北西部と南東部の二箇所を試し掘りした (Fig. 45)。

その結果、遺構・遺物の発見はできなかつたが、旧石器時代から近・現代の遺物を含む灰オリーブ色粘土層の堆積を確認し、丘陵を形成すると思われる山土を初めて検出した。併せて埋設物の残存状況、埋め土の厚さの確認をおこなつた。灰オリーブ色粘土の堆積は新営予定地全域で予想されたが、遺物の出土量は必ずしも多くなく、遺構存在の可能性も低いと思われ、予定地全域の調査は不必要であろうとの予測ができた。しかし、試し掘りの面積が少ないとあり、試掘調査の結果を持ち、最終の判断を下すこととした。

試掘調査は、遺構・遺物の有無、先に検出した旧丘陵の連なりの把握を目的とし、昭和63年2月15日から3月4日にかけて実施した。

この結果、資料館では今後の工事に際して、一部の地域については綿密な立会調査が必要であること、他の地域については調査の必要はないとの結論を出し、埋蔵文化財資料館運営委員会において了承された。綿密な立会調査が必要とされた約300m²部分については、昭和63年6月に約2週間の日程で調査を実施しており、年報冊にて報告する予定である。

(2) 調査方法

旧丘陵の把握に主眼を置き、東西方向3本のトレントを設定した (Fig. 45) が、うち一つは地表下35cmで非常に硬いアスファルトに当たり、掘削を断念している。よって、A・B二箇所のトレント調査となつた。表土より下位は手掘りによる分層発掘をおこなつた。Aトレントでは遺構・遺物こそ希薄であったが、初めて黄橙色粘質土の遺物包含層を確認し、Bトレントでも、初めて確認した砂層の遺物包含層から多くの石器類が出土した。

第2病棟

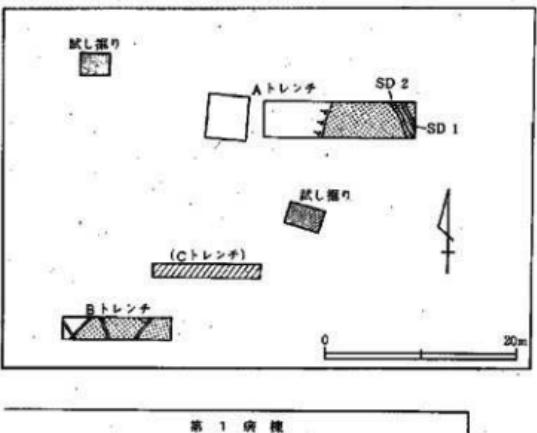


Fig. 45 トレントの位置と遺構分布図

3 層 位

(1) A トレンチの土層

A トレンチは、病棟新営予定地の北東部に長さ19m×幅4mで設定した。既設配管のため、A西とA東の2区に分かれた。A西・A東の西側半分は、現地表面下1.9m以上の擾乱を受けており、実際の調査はA東の東部のみとなった。

調査前の地表面はほぼ水平で、海拔標高2.6~2.7mを計る。地表面から1.2~1.7mまでの深さに近・現代の埋め土がある。1.5m程で近・現代の旧耕作土が見られ、床上をはさんで1.4~1.9mの間に灰色土を見る。ここでは若干の土器片が見られ、遺物包含層であることを確認した。またこの層を掘り込んだ2条の溝を検出した。その直下1.3~2.1mのあいだに、既往調査で旧石器時代~近・現代までの遺物を含むことが確認されている灰オリーブ色土が堆積している。以下、二枚の砂利層をはさみ、1.6~2.2mの深さで丘陵を形成すると思われる山土を検出した。Aトレンチ内を見る限り東へ下降することが分かった。

土層の堆積は以下の通りである。(Fig. 46参照)。

第1層 埋め土

第2層 黒褐色土 よくしまり、粘性をもつ。0.1cm以下の石英を若干含む。旧耕作土。

第3層 暗灰黄色土 よくしまる。粘性はない。0.2cm以下の石英を含む。床土。

第4層 灰色土 かたくしまり、若干粘性をもつ。0.3cm以下の石英を含む。包含層。

第5層 暗オリーブ灰色土 かたくしまり、粘性をもつ。0.2cm程度の石英を若干含む。包含層。

第6層 暗緑灰色土 砂利層である。0.1cm~0.3cm程度の石英を多く含む。

第7層 灰オリーブ色土 磨屑である。2.0~0.3cmの凹凸チャートを含む。

第8層 黄褐色土 よくしまり、若干の粘性をもつ。不純物は含まない。山土。

(2) B トレンチの土層

B トレンチは、病棟新営予定地の南西部に、長さ11m×幅2.5mで設定した。ところが既設の配管・基礎などのため、未完掘の部分が出た(Fig. 45参照)。土層の堆積は、調査前の地表面がアスファルトで、その海拔標高は2.4mである。まず、1.0~1.1mの深さまでが、近・現代の埋め土である。以下、約20cmの間に近・現代のものと考えられる旧耕作土を二枚、それと床土を確認した。そして1.3~1.5mの間に、灰オリーブ色土・オリーブ

灰色土、黄褐色土、暗オリーブ色土、灰オリーブ色土という二枚の層が堆積している。このうち、上部二層はAトレンチ内でも見られるが、第7層目に当たる暗オリーブ色土・灰オリーブ色土の堆積は、Bトレンチにおいてのみ確認したものである。なお、これらは全て遺物を含む層である。そして、1.4~1.8mの深さで灰色を呈する砂層の堆積を見た。これには、多くの石器類が包含されており、その直下、1.8~1.9m以上の深さでも、緑灰色を呈する砂層が堆積し、自然木等の出土を見ている(Fig. 46参照)。土層の堆積は、

第1層 埋め土

第2層 オリーブ黒色土 きめ細かで粘性を持つ。0.1cm以下の石英を若干含む。旧耕作土(上層)。

第3層 オリーブ黒色土 上層との違いはこちらがしまりが強いことである。旧耕作土(下層)。

第4層 オリーブ黒色土・オリーブ色土 若干粘性あるが全体にバサバサ。0.1cm~0.2cm程度の石英、0.1cm程度の黒ウンモを含む。床土。

第5層 オリーブ色土・オリーブ灰色土 若干粘性あるが全体にバサバサ。0.1cm程度の石英・黒ウンモを含む。包含層。

第6層 黄褐色土 若干粘性あるが全体にバサバサ。0.1cm程度の石英を多量に含む。包含層。

第7層 灰オリーブ色土 若干粘性あるが全体にバサバサ。0.1cm~0.2cm程度の石英を多量に含む。また、粘性をもち、0.1cm~0.3cm程度の石英、特に0.3cm程度の石英を多量に含む部分がある。包含層。

第8層 灰色土 砂層であるが、部分的に粘性をもつ。0.1cm~0.3cm程度の石英を多量に含む。包含層。

第9層 緑灰色土 砂層である。0.1cm~0.3cm程度の石英を多量に含む。包含層。

であり、両トレンチの土層は以下のように対比される。

Aトレンチ	Bトレンチ	Aトレンチ	Bトレンチ
1 ←→ 1		5 ←→ 6	
2 ←→ 2		7 ←→ ×	
→ 3		8 ←→ ×	
3 ←→ 4		× ←→ 7	
4 ←→ 5		× ←→ 8	
		× ←→ 9	A, Bトレンチの土層対比

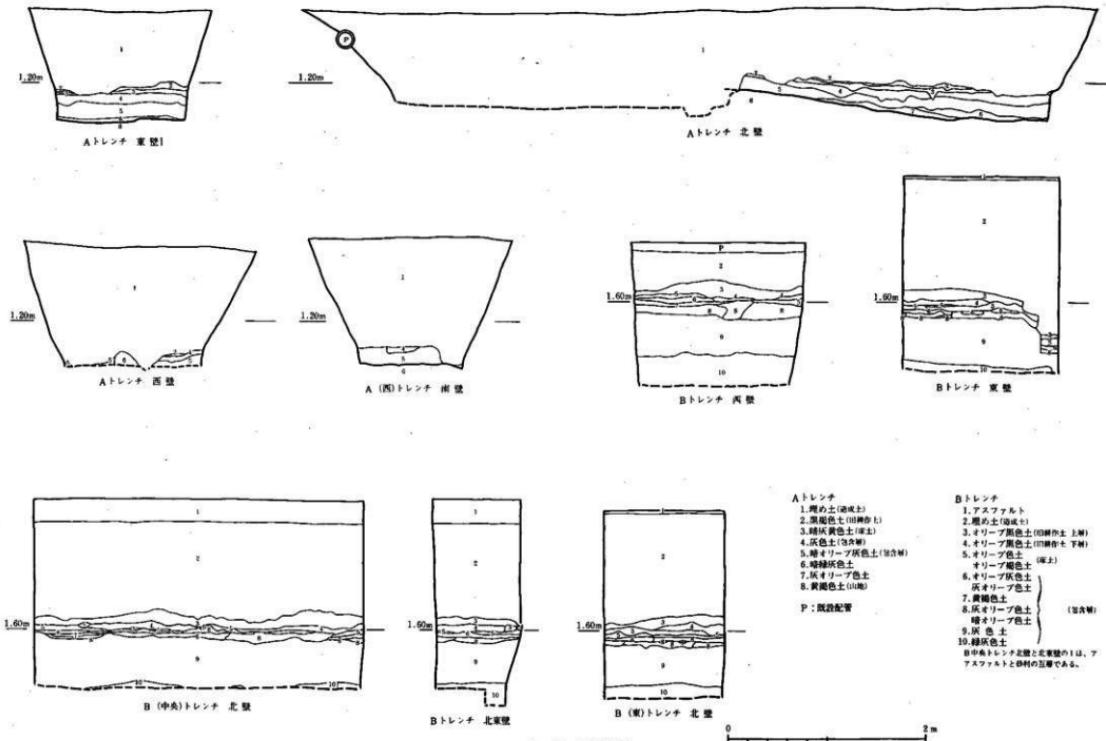


Fig. 46 土層斷面圖

4 遺構・遺物

(1) Aトレンチの遺構・遺物

これまで小串構内では、近・現代よりも古い遺構の発見はなく、検出された2条の溝も埋土の状況から、近・現代の所産と考えられる。両者は15~40cmの間隔ではば並列しており、北西→南東方向に流路をもつ。SD1は幅15~35cmで、長さ2.2m以上。検出面からの深さは、2.7cm~4cmを計る。溝底は平で、埋土から石英製の縦長剥片が1点出土した。SD2は幅20~45cm、長さ2.8m以上。検出面からの深さは、約4cmである。溝底は平で、出土遺物はない。両者とも上部の削平が大きいと考えられる。出土遺物にはこの剥片のほかに削器・二次加工剥片、擂鉢と考えられる土師質土器・須恵質土器の二細片がある。

(Tab. 5 参照)。なお、削器については、小結(2)考察の項も参照されたい。

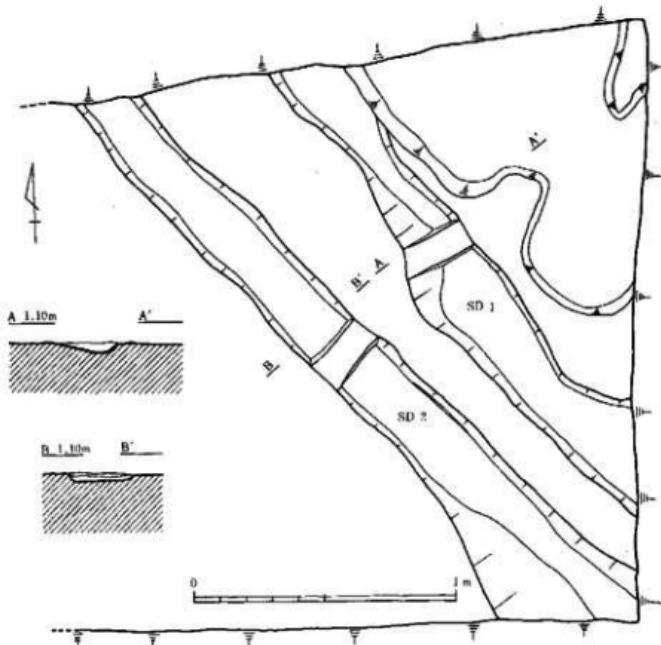


Fig. 47 Aトレンチ 第1・2号溝実測図

(2) B トレンチの遺構・遺物

遺構の発見はない。出土遺物は、旧耕作土（上・下層）・床上から、土師器・土師質土器・須恵器・須恵質土器・陶器・磁器・瓦の各破片、石器では細石刃核等、また灰オリーブ色土から、土師器・土師質土器・須恵質土器・陶器・磁器の各破片、そして石器類の包含層である灰色の砂層から、木片・ナイフ形石器・削器・加工痕のある剝片・剝片・礫等が出土した。各遺物の属性については Tab. 5 を参照して頂きたい。

5 小 結

(1) 埋蔵文化財の遺存状況と今後の方針

調査面積は病棟新営予定地、2200m²の内の約100m²で、その1/20である。遺構は2条のみで上部は削平を受けていた。人為的痕跡は擾乱による消失が高いと思われた。遺物もこの擾乱によって同一層に数時期のものが混在している状況であった。調査地点による上層の相違が大きく、今回初めて確認した土層がある。しかし、調査面積の少なさもあってこれらの堆積面の把握、またその成因・時期等の詳細は今後に待つところとなった。ただ、旧地形は病棟新営予定地内、大きく北東から南西への下降が確認され、南西側には石器類を含む灰色粘質土が堆積していると思われる。すなわち、給食棟、第一病棟方向周辺の掘削時には、事前に十分な調査が必要とされる。また、他の地域の遺構の有無は当調査結果からは言及できず、遺物を含め良好に保存されていることも考えられる。土層堆積範囲・その状況も未だ不明瞭であり、面的に網羅する上でも、まず、データーの収集が望まれる。

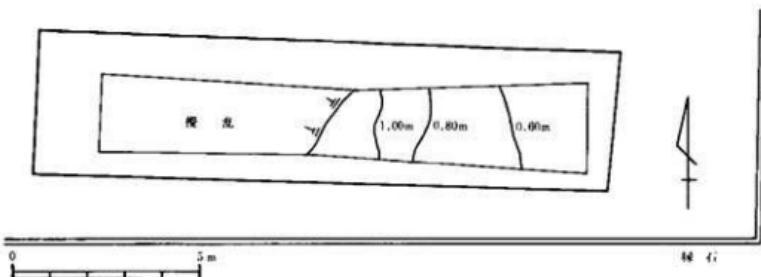


Fig. 48 A トレンチ 旧丘陵の地形

(2) 考察

ここで、Bトレンチ第9層灰色砂層出土の遺物について見ておきたい。

20点近くの石器類・それに若干の自然木等が見つかった。所属時期については本層が二次堆積と考えられる為、層位からの時期決定はできない。しかし、時期を代表できる石器として、ナイフ形石器以外見られること、土器類がないこと、また、石器類の石材・形態などから、大部分を旧石器時代の所産と考えておきたい。以下、遺物説明を行う。

42はナイフ形石器である。縦長剝片の一側縁～基部にかけてプランティングを施す。これは全て腹面側からで、素材の打面部は切られているものの、形状はあまり変更させない。プランティングの細かさ、小形の素材、使用石材という点において、県内でも異質なものといえよう。

9はスクレイパー（削器）である。素材の形状は不明である。図中、一側辺に大きめの剥離を施す。対辺には、使用によるものかと思われる微細な剥落痕が整然と認められる。素材面と考えられる剥離面からは、規則的な打撃方向を決定し得ない。なお、先端部については積極的に意識した加工は受けられない。

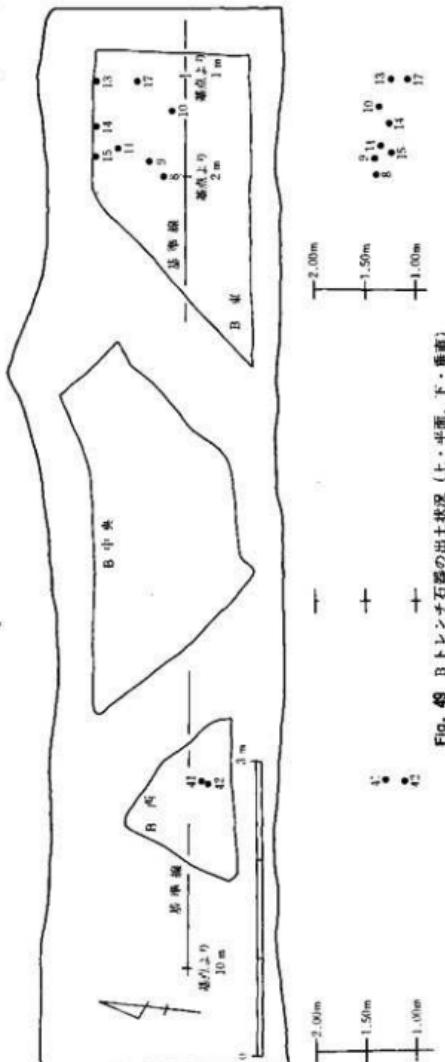


Fig. 48 Bトレンチ石器の出土状況(上・平面、下・垂直)

4は二次加工のある剥片である。打面部はない。リタッчиによって切られているものと思われる。素材形状はおそらく縦長であろう。厚手のもので原縫面を大きく残す。背面相面は多方向の剥離面で構成される。

22はナイフ形石器である。縦長剥片素材で、その一側邊と基部に整然と綿密なプランティングが腹面側から施される。打面・バルブは取り除かれている。しかし、素材の形状はあまり変更させない。背面には対向した剥離が存在し、両設打面石核の存在が考え得る。刃部には刃こぼれ状の微細な剥落痕が若干見られる。最先端部欠損。

15は削器である。素材は角柱状を呈するもので、その一側邊にリタッчиを整然と施す。原縫面も残している。なお、素材の打面部もよく分からず、剥離の方向など実測図にはあって記したところが多い。

10は使用痕のある剥片である。縦長剥片の一側邊に使用時によるものか、微細な剥落痕が連続的ではないが観察できる。原縫面が残存し、打面部も原縫面である。

18は複剥離打面をもつ縦長の剥片である。打点を残す。片側邊には、原縫面を残す。17は平坦打面をもつ不定形の剥片で片側邊を欠損する。

26は礫である。表面は黒色・橙色を呈し、表面には凸凹を見る。焼け礫か？

以下、第9層以外出土の遺物・Aトレンチ内の遺物について述べたい。

1はSD1出土の小形の剥片である。打面・打点は残らない。片側邊は欠損であるが、下端に原縫面を残す。時期帰属は不明である。

19は両面磨きが入るものと考えられ、側面は磨滅している。帰属時期・器種不明。

8は原形の2倍程度と思われる。残存部は原縫面で覆われる。表面は多少のローリングを受けているが、当時のものは判断しかねる。敲石片か？

4は細石刃核である。正面形は円錐形。4枚の細石刃剥離痕を見る。ただし、左側2枚についてはあまり明確でない。打面は調整打面で、一枚の大剥離面を打面としている。石核の調整は入念であるが、原縫面をも残す。剥離角は直角に近い。野岳・休場型。

7は欠損が多く、詳細不明。若干磨いているようでもあるが、単なるローリングか？

30は削器である。縦長剥片の一側邊に粗い加工を施す。対邊には原縫面を残す。打面も原縫面からなる。腹面側邊の剥離は、リタッчиの際か、あるいは使用による痕であろう。

以上、使用石材には、チャート・メノウがその半数を占めるものの、外に多くの石材がある。このことは、宇都台地遺跡群の在り方と類似するかのようであり、²¹⁾遺跡での主要

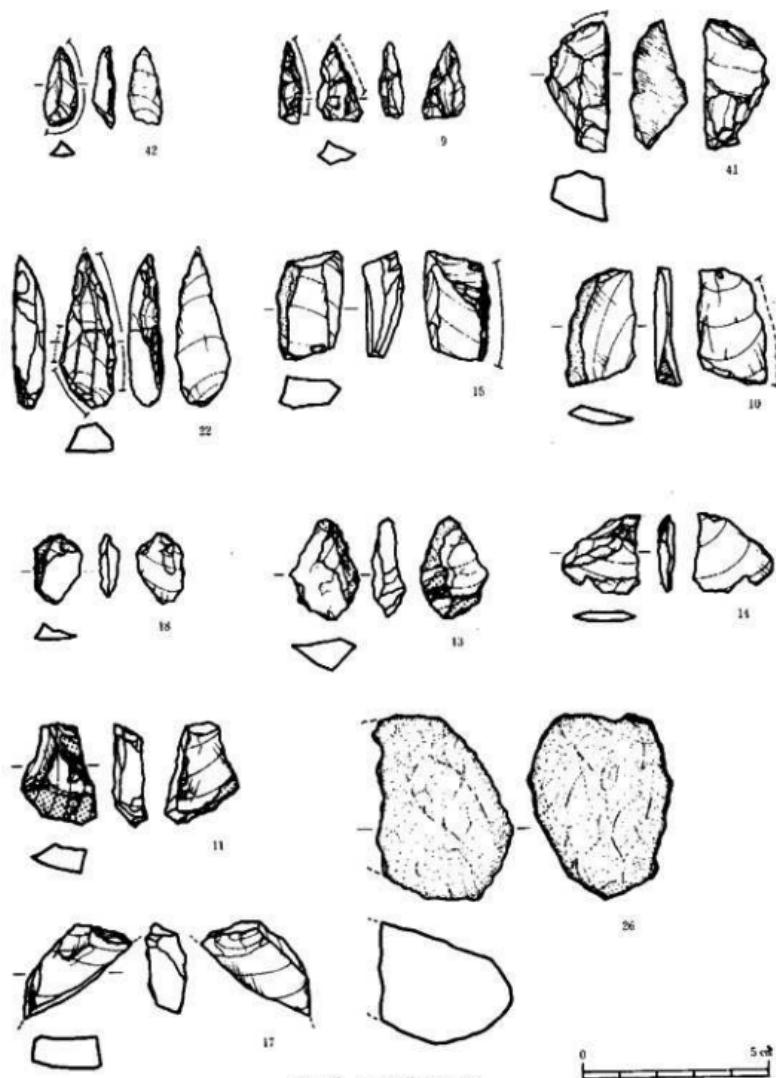


Fig. 50 出土遺物実測図(1)

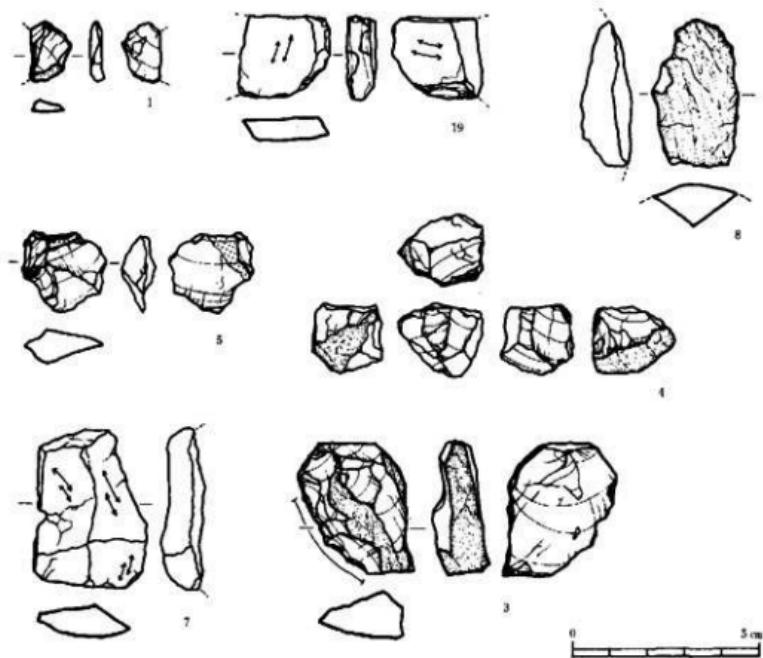


Fig. 51 出土遺物実測図 (2)

石材という点では、チャート・メノウ類が今回それに相当しよう。

宇部台地の遺跡群では、ナイフ形石器文化期と細石器文化期とを石材の面から概観すると、細石器文化期の、黒曜石の多さは目につくところである。これは一概に、黒曜石以外の石材の減少とは結びつかないが、今回出土した特に灰色砂屑の石器群は、石材の面から³⁾は宇部台地におけるナイフ形石器文化期の一般的な様相を示しているかのようにもとれる。

剥片剥離・調整法については、まず2点のナイフ形石器は縦長剥片素材である。両者とも二側縫加工で、素材の変更度は小さい。使用石材を除くと大きさで異なるものの、素材・調整法は類似する。大形の方は強いてあげるならば、南方遺跡に類似品を見るが、宇部台地の遺跡群にあっても数は少ないものである。また、剥片類の背面剥離面からは、主要剥離面の打撃方向に対し、ほぼ同じ面と、約90°ずれる面とを持つものが多く、4~5枚で構成される。ナイフ形石器については対向する剥離面を含んでおり、両刃打面石核の存

在が推測できる。ここでは器種による剥離法の違いが指摘できるが、当石器群の詳細な剥片剥離法を追及するには資料が少なすぎよう。

打面については調整打面は少ない。原縫面打面が多い。打面調整の有無イコール定形的な剥片剥離技術の有無という一元的な考え方には成立しないが、打面の作出、調整の過程が単純であることは、より発達した形での剥片剥離法の存在を考えにくくしている。ただ、打面調整については、打面調整を含む調整技術を持ち合わせていない場合、また石材においても左右される場合もある。宇部台地の遺跡群で少なくとも打面調整の技術は見られるので、今回の資料は石材に影響されたものと考えておきたい。

チャート・メノウ製の石器類を見てみると、縦長剥片素材の削器一点を除き、外はやや横長の不定形剥片である。原縫面を側面に残すものが多く、全体的に小振りであり、挙大円錐状の原石が利用されたとの推測が可能である。当調査区を含め、宇部台地の遺跡群で案外普遍的な玻璃質安山岩は大分県姫島で産出する。一般に知られる黒曜石とは生成時に異なるものか、概略ながらその在り方が対照的で黒曜石は露頭として、⁶⁾ 玻璃質安山岩は挙大の円錐として場所を逸れて存在している。この玻璃質安山岩の在り方は、チャート・メノウ類の多用性を考えるに示唆するところがなかろうか。旧石器時代、宇部台地遺跡群のほか、姫島周辺地域での姫島産黒曜石の利用度が少ないことは原石の在り方が選択行為に十分影響していたと考えたい。すなわち、当遺跡を含む宇部台地遺跡群におけるチャート・メノウ類の多用性は、それが地元で豊富に採れることに加えて、石器原材の形・大きさに選択行為が働いているものとして捉えておきたい。

(注)

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「山口大学構内遺跡調査研究年報IV-V」(1985-1987年)所収。
- 2) 山口県立石器文化研究会「宇部台地における旧石器時代遺跡(1)-(9)」(『古代文化』第35巻-41巻、1983-1989年)。
- 3) 富隈孝志「雨乞台遺跡の使用石材について」(『山口県雨乞台遺跡の発掘調査』、山口大学人文学部考古学研究報告 第5集、1988年)。外に2)の文献。
- 4) 2)、3)の文献、実見による。
- 5) 山口県立石器文化研究会「宇部台地における旧石器時代遺跡(5)-南方遺跡 その(1)-」(『古代文化』第38巻-9号、1986年)。
- 6) 清水宗昭「姫島産の黒曜石とガラス質安山岩の分布について」(『賀川光夫先生還暦記念論集』1982年)。実見による。

Tab. 5 (b).1. 道物觀察表

No.	岩種	石質	出土位置 (Grid)	出土深度 (cm)	Jc ²⁰ (%)	測定高 (cm)	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	重(g)	寸法の形状	原標面 の有無	標示面 の有無	備考	
22	ナイト形石器	灰黑色安山岩	B中央	8			4.1	1.5	0.7	4.0				
23	片	蛇紋岩?	B中央	8	N66.0	410.0	1,060	1.9	1.3	0.4	1.6			
24	片	蛇紋岩?	B中央	8	N74.0	544.0	1,121	3.2	2.6	0.7	1.6			
25	片	蛇紋岩?	B中央	8	S26.0	383.5	1,125	2.1	0.8	0.4	0.7			
26	片	安山岩	B中央	8			4.9	3.7	3.2	72.0	○			
27	片	チサツ	-	1	B中央	8		1.9	1.6	0.7	2.2			
28	片	蛇紋岩?	B中央	8			2.5	1.2	0.4	1.7				
29	片	蛇紋岩?	B中央	8			2.1	0.8	0.4	0.7				
30	片	蛇紋岩?	B中央	8			1.1	1.1	0.5	0.4	原刻線	原刻線		
31	片	蛇紋岩?	B中央	8			1.1	1.8	0.6	1.1				
32	片	蛇紋岩?	B中央	8			1.2	1.3	0.4	0.9	複刻線	13.5cm		
33	片	蛇紋岩?	B中央	8			1.5	1.0	0.4	0.6				
34	片	蛇紋岩?	B中央	8			1.4	0.6	0.2	0.2				
35	片	蛇紋岩?	B中央	8			1.0	1.0	0.7	0.6				
36	片	蛇紋岩?	B西	8	S44.0	900.0	1,480	2.0	1.0	0.7	1.5			
37	片	蛇紋岩?	B西	8	S77.0	896.0	1,480	2.3	1.5	0.9	3.0	原刻線	本下	
38	片	蛇紋岩?	B西	8	S13.0	893.0	1,508	2.9	1.1	0.6	2.1	○		
39	片	蛇紋岩?	B西	8	S 3.0	896.0	1,514	1.7	2.2	0.9	4.3	複刻線		
40	片	チサツ	-	1	B西	8	S 4.0	793.0	1,431	1.9	2.3	0.4	1.9	○
41	片	水晶	-	1	B西	8	N 7.0	810.0	1,303	3.4	1.7	1.6	7.6	
42	+ナイト形石器	蛇紋岩?	B西	8	S 16.0	811.0	1,109	3.1	0.9	0.5	0.8			

小中横内医学部附属病院病棟新宮に伴う試掘調査

No.	器種	石質	出土位置 (Grid)	高さ(層位) (cm)	左→右 (cm)	前→後 (cm)	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	厚さ (cm)	柱面の形状	複合断面	備考
43	火薬の丸い形	蛇紋岩	B西	8	523.0	782.0	1.08	1.5	1.1	0.7	1.0	
44	片状	蛇紋岩	B西	8			1.3	2.2	1.1	3.0	堅接觸	水平
45	火薬の丸い形	蛇紋岩	B西				2.6	2.8	0.9	8.6		○
46	火薬の形	石質	B西	8			2.0	1.9	0.4			

No.	器種	出土位置	石質	高さ(層位) (cm)	左→右 (cm)	前→後 (cm)	色	既存柱穴	既存柱穴	既存柱穴	既存柱穴	既存柱穴
1	上端乳突器	A東	4 a-d	6 高 細 小	6 高 粗 大	6 高 粗 大	褐色 褐色 褐色	褐色 褐色 褐色	褐色 褐色 褐色	褐色 褐色 褐色	褐色 褐色 褐色	褐色 褐色 褐色
2	乳突器	A東	4 a-c	6 高 細 小	6 高 粗 大	6 高 粗 大	褐色 褐色 褐色	褐色 褐色 褐色	褐色 褐色 褐色	褐色 褐色 褐色	褐色 褐色 褐色	褐色 褐色 褐色
3	上端	B中央	2 a-b	6 高 細 小	6 高 粗 大	6 高 粗 大	褐色 褐色 褐色	褐色 褐色 褐色	褐色 褐色 褐色	褐色 褐色 褐色	褐色 褐色 褐色	褐色 褐色 褐色
4	柄	B中央	2	6 高 細 小	6 高 粗 大	6 高 粗 大	褐色 褐色 褐色	褐色 褐色 褐色	褐色 褐色 褐色	褐色 褐色 褐色	褐色 褐色 褐色	褐色 褐色 褐色
5	丸	B中央	2	6 高 細 小	6 高 粗 大	6 高 粗 大	褐色 褐色 褐色	褐色 褐色 褐色	褐色 褐色 褐色	褐色 褐色 褐色	褐色 褐色 褐色	褐色 褐色 褐色
6	丸	B中央	2	6 高 細 小	6 高 粗 大	6 高 粗 大	褐色 褐色 褐色	褐色 褐色 褐色	褐色 褐色 褐色	褐色 褐色 褐色	褐色 褐色 褐色	褐色 褐色 褐色
7	球	B中央	2	6 高 細 小	6 高 粗 大	6 高 粗 大	褐色 褐色 褐色	褐色 褐色 褐色	褐色 褐色 褐色	褐色 褐色 褐色	褐色 褐色 褐色	褐色 褐色 褐色
8	球	B中央	2	6 高 細 小	6 高 粗 大	6 高 粗 大	褐色 褐色 褐色	褐色 褐色 褐色	褐色 褐色 褐色	褐色 褐色 褐色	褐色 褐色 褐色	褐色 褐色 褐色
9	球	B中央	2	6 高 細 小	6 高 粗 大	6 高 粗 大	褐色 褐色 褐色	褐色 褐色 褐色	褐色 褐色 褐色	褐色 褐色 褐色	褐色 褐色 褐色	褐色 褐色 褐色
10	球	B西	2	6 高 細 小	6 高 粗 大	6 高 粗 大	褐色 褐色 褐色	褐色 褐色 褐色	褐色 褐色 褐色	褐色 褐色 褐色	褐色 褐色 褐色	褐色 褐色 褐色
11	板	B西	2	6 高 細 小	6 高 粗 大	6 高 粗 大	褐色 褐色 褐色	褐色 褐色 褐色	褐色 褐色 褐色	褐色 褐色 褐色	褐色 褐色 褐色	褐色 褐色 褐色
12	板	B西	2	6 高 細 小	6 高 粗 大	6 高 粗 大	褐色 褐色 褐色	褐色 褐色 褐色	褐色 褐色 褐色	褐色 褐色 褐色	褐色 褐色 褐色	褐色 褐色 褐色
13	板	B西	2	6 高 細 小	6 高 粗 大	6 高 粗 大	褐色 褐色 褐色	褐色 褐色 褐色	褐色 褐色 褐色	褐色 褐色 褐色	褐色 褐色 褐色	褐色 褐色 褐色

No.	名	種	出上所	出上所役	石	要	長	石	外観石	石	形	色	外觀(原色)	色	内面(原色)	色	内面(原色)	色	内面(原色)	色	内面(原色)	色
14	名也質	形	B東	3										不 利		7.5Y 6/1	褐 色	不 利				
15	—	—	B東	3										褐 色	7.5 Y 6/0	褐 色	4/0	褐 色	不 利			
16	H.	H.	B東	3										褐 色	7.5 Y 6/0	褐 色	4/0	褐 色	不 利			
17	H.	H.	B東	3										褐 色	7.5 Y 6/0	褐 色	4/0	褐 色	不 利			
18	66	器	B東	3										褐白(7.5 Y 7/1)	白(7.5 Y 6/0)	白(7.5 Y 6/0)	白(7.5 Y 6/0)	白(7.5 Y 6/0)	不 利			
19	66	器	B東	3										(7.5 Y 6/1)	(7.5 Y 6/1)	(7.5 Y 6/1)	(7.5 Y 6/1)	(7.5 Y 6/1)	不 利			
20	1. 動	器	DP尖	—										(7.5 Y 6/1)	(7.5 Y 6/1)	(7.5 Y 6/1)	(7.5 Y 6/1)	(7.5 Y 6/1)	不 利			
21	H.	H.	B東	3										7.5 Y 7/4	7.5 Y 7/4	7.5 Y 7/4	7.5 Y 7/4	7.5 Y 7/4	不 利			
22	66	器	1.6中	3										7.5 Y 7/4	7.5 Y 7/4	7.5 Y 7/4	7.5 Y 7/4	7.5 Y 7/4	不 利			
23	1. 66	22	B東	3										7.5 Y 7/4	7.5 Y 7/4	7.5 Y 7/4	7.5 Y 7/4	7.5 Y 7/4	不 利			
24	1. 66	22	B東	3										7.5 Y 7/4	7.5 Y 7/4	7.5 Y 7/4	7.5 Y 7/4	7.5 Y 7/4	不 利			
25	66	22	H.内	3										7.5 Y 7/4	7.5 Y 7/4	7.5 Y 7/4	7.5 Y 7/4	7.5 Y 7/4	不 利			
26	66	器	B東	3										7.5 Y 6/4	7.5 Y 6/4	7.5 Y 6/4	7.5 Y 6/4	7.5 Y 6/4	不 利			
27	H.	H.	H.内	3										7.5 Y 6/1	7.5 Y 6/1	7.5 Y 6/1	7.5 Y 6/1	7.5 Y 6/1	不 利			
28	H.	H.	B東	3										7.5 Y 5/1	7.5 Y 5/1	7.5 Y 5/1	7.5 Y 5/1	7.5 Y 5/1	不 利			
29	1.66質	器	B東	4										7.5 Y 5/1	7.5 Y 5/1	7.5 Y 5/1	7.5 Y 5/1	7.5 Y 5/1	不 利			
30	H.質	1.66	B東	4										7.5 Y 5/1	7.5 Y 5/1	7.5 Y 5/1	7.5 Y 5/1	7.5 Y 5/1	不 利			
31	66	器	B東	5										7.5 Y 5/1	7.5 Y 5/1	7.5 Y 5/1	7.5 Y 5/1	7.5 Y 5/1	不 利			
32	66	器	B東	5										7.5 Y 6/2	7.5 Y 6/2	7.5 Y 6/2	7.5 Y 6/2	7.5 Y 6/2	不 利			
33	66	器	B東	5										7.5 Y 5/1	7.5 Y 5/1	7.5 Y 5/1	7.5 Y 5/1	7.5 Y 5/1	不 利			
34	66	22	B東	5										7.5 Y 5/1	7.5 Y 5/1	7.5 Y 5/1	7.5 Y 5/1	7.5 Y 5/1	不 利			

空の欄は該当事項のないもの。但し、法律については、右器類では計測不可能なもの意味

石器類について、その石材が軟質か？あるいは、現時点、その石材から石器として認定し難いものも見られる。上器の胎土については、合まれる粒の人さきを、県林省農林水産技術公職事務局監修「新版野草土色帖」(1976)に従って、便宜的に分類した。

極小一徑 1 mm 以下

小一坪 \sim 2坪で、各々4段階、細かい分類には、ひとつした。

第5章 昭和62年度山口大学構内の立会調査

第1節 吉田構内の立会調査

1 教養部複合棟新営に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 I・J-16

調査期間 昭和62年9月8日（A地点）、昭和63年2月24日（B地点）、3月12・17日（C地点）

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約30m²

調査結果 A地点は樹木移植に伴うもので、工事基底面の現地表下約30cmまで構内造成に伴う埋め土が堆積し、顯著な遺構・遺物は認められなかった。B地点は給水管埋設に伴うもので、工事基底面の現地表下約80cmまで構内造成に伴う埋め土が堆積していた。工事に支障のない範囲内で部分的に深掘りを行った結果、埋め土はさらに14cmほどの厚さをもち、その直下に緑灰色膠泥じり粘質土の地山が検出されたが、顯著な遺構・遺物は認められなかった。C地点は排水樹および側溝の新営に伴うもので、前者は現地表下約1.1mまで掘削した。現地表から厚さ約45cmの埋め土を除去した段階で、幅約30cm、深さ約9cmの溝状遺構を検出した。周辺は大きく搅乱を受けており、一部分しか残存していない。埋土は上層に分層され、上層は黒褐色粘質土（Hue 5 YR 2/1）、下層は黒褐色砂（Hue 2.5Y 5/3）である。出土遺物はなく時期は明かでない。後者は排水樹新営地点のすぐ南に位置するが、埋め土はわずか約14cmの厚さで、その直下が青灰色粘土の地山である。顯著な遺構・遺物は認められなかった。いずれも埋め土中に赤黒色粘質土（Hue 2.5YR 2/1）の遺物包含層がブロックで混入しており、土師器が出上した。耕作土が残存していないこと、遺構の遺存状況が極めて悪いことなどから、当該地域周辺での削平が比較的大規模に行われたことを窺わせる。



Fig. 52 調査区位置図

2 國際交流会館新營に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 M-23, N-22・23
 調査期間 昭和62年11月9～11日（A地点）、昭和63年3月28日（B地点）
 調査方法 工事施工時における立会調査
 調査面積 A地点-150m² B地点-約45m²
 調査結果 A地点は國際交流会館の基礎工事に伴い、基礎部分を除いた地盤が現地表下約1.2mまで掘削された。同建物敷地では昭和61年度に試掘調査を実施しており、南半部で東から西へ走行する弥生時代から古墳時代の河川跡が検出されている。¹⁾幅約19m以上の規模をもつが、左岸付近は未検出であったため立会調査を行った。現地表下約40～80cmの構内造成に伴う埋め土の下は、厚さ20～50cmの第2層：暗オリーブ色ないしは黄灰褐色土が堆積しており、東に向かうに連れて層厚を増す。北東部では認められない。その下が河川跡の堆積土で、第3層：青灰色および緑灰色の砂礫が厚さ40～50cmにわたって堆積している。調査区内では左岸からの落ち込みは検出されなかったが、B地点の調査結果から幅30m以上の規模をもち、学外に広がるものと推測される。前回の調査では弥生土器、須恵器が出土しているが、今回は出土遺物はない。

B地点はA地点の南東約10mに位置し、浄化槽の新設に伴い調査した。堆積層順、層厚

はA地点とほぼ同様であるが、第2層は認められない。河川跡は全面で検出されたが、層厚は20～40cmと薄い。なお、河川跡の埋積土の下位には、層厚約60cmの無遺物層をはさんで、上位から青灰色、黄褐色の砂礫がそれぞれ約60～70cm、30～40cmの厚さで堆積している。青灰色砂礫で湧水する。出土遺物はないが、弥生時代以前の河川跡の可能性がある。

[注]

1) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内國際交流会館新營に伴う試掘調査」（山口大学構内遺跡調査研究年報第1号、1987年）。



Fig. 53 調査区位図

3 教育学部附属養護学校自転車置場移設に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 B-21

調査期間 昭和62年11月20日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約 1 m²

調査結果 養護学校の敷地は施設整備の前段階で、昭和54年度に山口県および山口市教育委員会によって試掘調査が実施されている。体育館以北の約2300m²の範囲には、平安時代から室町時代の掘立柱建物跡（棟数不明）のほか柱穴多数が検出されている。また、体育館のすぐ北側では、東西に走行する弥生時代から古墳時代の溝2条が検出されており、そのうちの1条は幅約4mの大規模なもので、約50mの流路長が確認されている。さらに、敷地の北端部での側溝工事に伴う調査では、弥生時代前期から古墳時代前期にかけての多数の溝が検出されており、東・西両端部付近でも弥生時代から平安時代の遺物包含層の存在が報告されていることから、養護学校の敷地は遺構・遺物の遺存状態が比較的に良好な地域とされている。

今回の調査地点は、遺構が密に分布する体育館のすぐ北側に位置する。過去の調査では、施設整備前の水田耕作上面から20~30cm下位で遺構面が検出されている。自転車置場の基礎は現地表面から40cmの掘削を必要とするものであり、工事による遺構への影響が危ぶまれたため立会調査を行った。しかし、基礎に並行して既設の排水管が埋設されており、調査範囲内は埋設管の工事によってすでに搅乱を受けていた。なお、埋め土には黒褐色粘質土がブロック状に混入しており、周辺での遺構ないしは遺物包含層の削平が行われていることを示唆する。

養護学校敷地内の調査は、これまでほとんどなされていないのが現状で、今後の調査によって集落構造、展開過程を明らかにする必要がある。



Fig. 54 調査区位図

4 農学部附属農場 E 7 園場排水管埋設およびE 6 園場進入路拡幅に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 L・N-12

調査期間 昭和62年12月14日、昭和63年3月7～9日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 A 地点-約21m² B 地点-約34m²

調査結果 排水管の埋設工事は幅70cm、長さ約30mの規模で、現地表面から約60cm掘削するものである（A 地点）。厚さ約20～30cmの耕作土の下には、上位から層厚約10～20cm の第2層：暗褐色粘質土（Hue 10YR 3/3）、約10～30cmの第3層：黒褐色粘質土（Hue 7.5YR 3/2）、約10cmの第4層：黒褐色粘土（Hue 10 YR 2/2）、約10cmの第5層：褐色粘質土（Hue 7.5YR 4/6）が堆積する（Fig. 56, PL. 32(1)）。遺物は第2層から弥生土器、歴史時代の土師器、第5層から弥生土器、須恵器、歴史時代の土師器、輪入陶磁器などが出土したが、いずれも小片で、大学会館敷地を検出した包含層と同一のものである。なお、中央部付近では地山が認められ、柱穴を検出した。¹⁾

B 地点は農作業用機械の搬出入道路を確保するため、循環道路より一段高い斜面を幅約2m、長さ約17mにわたって現地表面から約1.5m掘削するもので、調査地点の東に存



Fig. 55 調査区位置図

在する丘陵の裾部に位置する。堆積層順は厚さ約5cmの腐植土の下位に、周辺の丘陵を削平した客土が厚さ約10cm堆積する。その下には、層厚約10cmの褐色土（Hue 10YR 4/4）が堆積しているが、遺物は包含していない。地山はその下位に堆積する丘陵の基盤である明黄褐色（Hue 10 YR 6/8）の山土で、土壙1基が検出された。

土壙（Fig. 57, PL. 32(2)）

後世の削平によって東端部しか残存していない。平面形態は円形もしくは梢円形と思われ、現存最大長は東西42cm、南北66cm

吉田構内の立会溝査

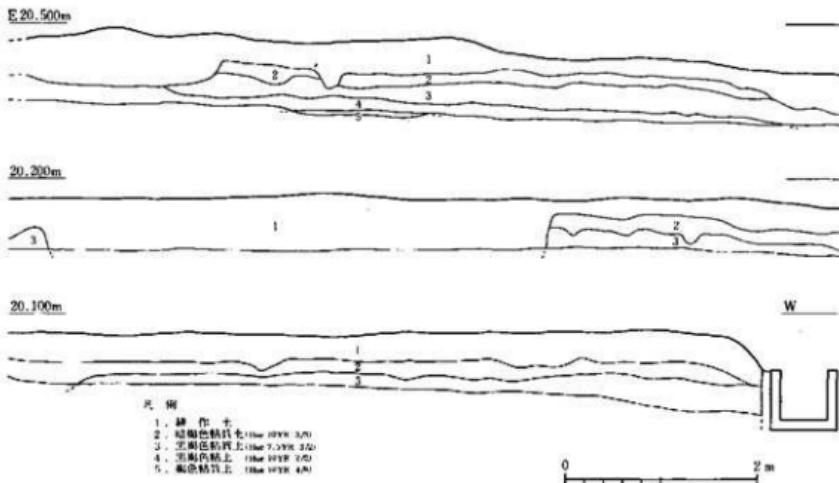


Fig. 56 A地点土層断面図

の規模をもち、深さは検出面から36cmである。検出面の標高は約22.0m。壁面は平坦な壌底から比較的緩やかに立ち上がる。埋積土は木炭を含む褐色土 (Ilue 10 YR 4/6) で、地山の土が所々に混在する。埋積土の最上層には扁平な板石が一枚が認められる。

出土遺物はないが、埋積土の色調から古代から中世のものと考えられる。遺存状態が極めて悪く、土壤の性格を知る手がかりは少ないと、平面形態、規模、立地から土壤もしくは火葬墓の可能性が考えられたため、土壤を各一試料採取し、全リン酸 (P_2O_5)、全カルシウム (CaO) 量の分析を山口県農業試験場に依頼した。1mmのふるいを通して、全リン酸はバ

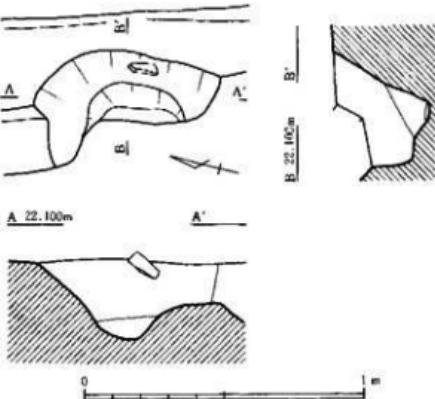


Fig. 57 B地点土壤実測図

昭和62年度山口大学構内の立会調査

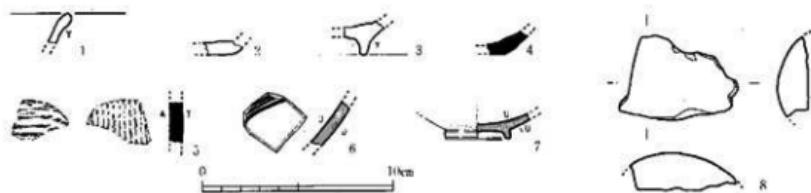


Fig. 58 A地点出土遺物実測図

Tab. 5 A地点出土遺物観察表

No	器種	(①)口径 (cm) (②)高さ (cm) (③)底径 (cm)	色 (①)外面 (②)内面	胎土	焼成	備考
1	土師器 壺	—	灰白色 (2.5Y 8/2)	良好	良好	—
2	土師器 壺	—	①灰白色 (2.5Y 8/2) ②灰褐色 (7.5Y 7/3)	やや不良	良好	—
3	土師器 壺	—	①灰白色 (2.5Y 8/2) ②褐色 (10YR 6/1)	良好	良好	—
4	須恵器 壺	—	灰白色 (10Y 8/1)	不良	やや不良	—
5	須恵器	—	青灰色 (10BG 5/1)	稍良	良好	—
6	青磁 壺	—	未焼 灰白色 (7.5Y 8/1) 釉面 やや薄った透明	不良	良好	内外面に貫入あり
7	磁器 壺	(③) 3.4	素地一淡黄褐色 (10YR 8/3) 釉面一灰白色 (5Y 7/1) で溝有	—	—	—

ナドモリブデン酸比色法、全カルシウムは原子吸光光度法により定量した。

その結果、全リン酸は上壙内0.77mg/g、土壤外0.37mg/g、全カルシウムは上壙内1.16mg/g、土壤外0.90mg/gの分析値が得られた。試料数は少ないが、試料採取地の土壤は肥料による汚染がほとんどなく、土壤内外における両成分の分析値の開きは定量的に意味をもつものであり、土壤もしくは火葬墓の可能性を否定するものではないであろう。

出土遺物 (Fig. 58, PL.32(3))

1～3は土師器。1・2は壺。1は口縁端部がやや肥厚し外反する。2は底部で、外底面の凸凹からへラ切りであろう。3は壺で断面長台形の高めの高台を貼付する。4・5は須恵器。4は壺で、底部と体部の境が不明瞭である。5は外面に平行タタキを施す中・大型品であろうが、器種は不明。6は青磁で、内面に片彫り文様を有する。内外に貫入がみられる。7は敲石もしくは磨石と思われるが、欠損が著しく詳細は不明。

[注]

- 1) 山口大学埋文化財資料館「吉田構内大学会館新館に伴う発掘調査」(山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ、1985年)。

5 農学部植栽に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 N-17

調査期間 昭和63年3月17日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約3m²

調査結果 工事は農学部の西側の庭園に樹木を移・植樹するものである。木数は4本で、径2mの範囲について、現地表面から80cmの掘削を必要とした。このうちの3本は、昭和47年に新設された同学部本館の建築工事や既設の汚・雨水管埋設工事の際、すでに掘削され、擾乱を受けている部分に植栽されるため、調査の対象から除外した。調査の結果、現地表面から70cmまでマサ土が厚く出土されており、その下位には構内造成に伴う埋め土が堆積している。顯著な遺構、遺物包含層は認められなかったが、埋め土内には遺物包含層と思われる、木炭を含む黒褐色粘質土がブロック状に混在している。出土遺物はない。

同学部本館周辺では、中央図書館増築、中央ボイラー棟車止設置に伴う調査などが散発的に行われているにすぎず、遺構、遺物包含層の埋存状況はほとんどわかっていない。前者では、三層に分層される層厚約95cmの遺物包含層が検出されており、弥生時代前期から鎌倉時代の遺物が出土している。中央図書館付近は地山が北から南に下降しており、同学部本館の西端部付近から中央広場にかけての地域にも、遺物包含層が広がっている可能性があり、今後の調査が期待される。

[注]

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「中央図書館増築予定地M-161cの発掘調査」(「山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅱ」、1985年)。
- 2) 山口大学埋蔵文化財資料館「中央ボイラー棟車止設置に伴う立会調査」(「山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ」、1986年)。



Fig. 59 調査区位置図

6 経済学部集水樹取設に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 K-20

調査期間 昭和63年3月20日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約0.5m²

調査結果 集水樹の取設は、第二講義室棟周辺の舗装、U字溝・排水管取設工事および樹木の植栽等を行う環境整備の一環として計画された。なお、集水樹を除く各工事は、掘削規模が現地表面から10~25cmと浅く、過去の調査結果から、埋蔵文化財に影響を及ぼす恐れがないことから、調査対象から除外した。取設地点は、昭和61年度に実施した同学部身体障害者用スロープ取設に伴う立会調査D地点の南約30mに位置し、掘削規模は現地表面から50cmである。現地表面はD地点より約40~50cm高いが、D地点では40cm下位で、黒褐色粘質土の埋土をもつ柱穴が検出されており、本工事によって遺構が検出される可能性が十分考えられた。

層順は、現地表面から35cm下位まではマサ土で、その下には構内造成に伴う埋め土が客土されている。地山は検出されなかったが、両地点の現地表面の比高差から、遺構面はさらにその下位に存在するものと推察される。なお、埋め土中には、旧耕作土、遺物包含層



Fig. 60 調査区位置図

と思われる木炭を含む茶褐色粘質土、および地山を形成する黄褐色粘質土がブロック状に混在しており、周辺で地山に達する削平が行われたことを窺わせる。遺物は出土していない。

[注]

1) 山口大学埋蔵文化財資料館「経済学部身体障害者用スロープ取設に伴う立会調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報第1号』、1987年)。

7 九田川改修に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 B・C-17

調査期間 昭和62年10月20日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約20m²

調査結果 九田川は吉田構内の北側を東から西に走り、横野川に合流する総延長距離約5.8kmの二級河川である。現在の河川は平均川幅7.1~4.9m、平均深さ1.4m、流水能力10.0m/sで、30年確率の洪水流量19.6m/sにくらべてはるかに河積が小さく、改修が必要とされていた。改修はテニスコート西側端から下流約4.2kmはすでに完了しており、引き続き、吉田構内に沿う流路長750mの範囲について昭和62年度から5ヶ月計画で実施するものである。昭和62年度は、テニスコート西側端から上流約20mについて、吉田構内側の左岸は幅約1m、現地表面から約5mの掘削を必要とした。テニスコートの存在する地域では、過去に二回の調査を行っている。¹⁾その結果、現地表面から約1~1.4m下位で、弥生時代から古墳時代にかけてのものと思われる遺物包含層が検出されており、今回の改修工事によって遺物包含層が掘削される恐れが十分に考えられた。

調査は山口県埋蔵文化財センターが主体となり、埋蔵文化財資料館は吉田構内の遺跡との比較・検討資料蓄積のため、調査補助として参加した。その結果、工事範囲内は護岸用の石垣の裏込めで顯著な遺構、遺物包含層は検出されなかった。しかし、63年度以降はさらに吉田構内側への掘削幅が広がる計画であり、工事に伴う埋蔵文化財への慎重な対応が必要であろう。

〔注〕

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「学生部テニスコートフェンス改修に伴う立会・試掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』Ⅲ・IV、1985)。

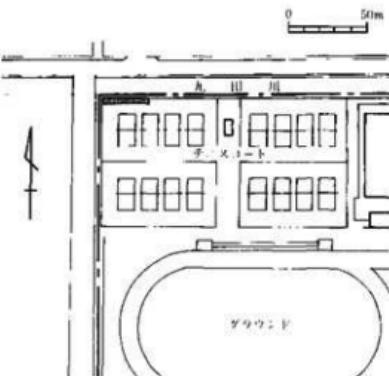


Fig. 61 調査区位置図

第2節 小串構内の立会調査

医学部附属病院東駐車場改修に伴う立会調査

調査地区 小串構内

調査期間 昭和62年9月7日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約6m²

調査結果 本構内での駐車場の確保のため、アスファルト舗装、雨水管・集水樹の埋設、縁石の設置等の整備が計画された。整備地域は小串構内の北東部に位置し、昭和58年度に旧石器時代および室町時代の遺物が出土した、体育館敷地部分の西に隣接している。遺物は耕作土、床上およびその下位の青黄灰色ないし青灰色粘土から出土したが、出土状況から、両層は二次堆積層であると考えられた。青黄灰色粘土は現地表面から約100~120cm下位に堆積している。

調査は掘削深度の最も深い集水樹について、20ヶ所の設置地域のうち6ヶ所を選定して、土層の堆積状況、遺物の有無を確かめた。掘削は現地表面から80~100cmである。第4地点を除いてすべて、構内造成に伴う埋め土で、工事基底面には耕作土が認められた。第4地点は集水樹と一緒に水銀灯の設置も計画され、現地表面から140cm掘削した。



Fig. 62 調査区位置図

第3節 亀山構内の立会調査

教育学部附属幼稚園遊戯室拡張に伴う立会調査

調査地区 亀山構内

調査期間 昭和62年11月26日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約40m²

調査結果 亀山構内では過去に3件の調査を実施しているが、今回の調査地点は、昭和61年度に行った污水排水管布設に伴う試掘調査で設定した、幼稚園部分の第1、3トレンチの中間にあたる。第1トレンチでは、層厚約80cmの構内造成時の埋め土の下位に、弥生土器を含む遺物包含層が検出されている。層厚は40cm以上で、少なくとも三層に分層され、最下層は堆積状態、土壤の性質から遺構の埋土の可能性が指摘された。また、第3トレンチでは、現地表面約70cm下位で遺構と思われる二時期の掘り込みを検出した。切り合い間隔にあり、新しいほうからは室町時代の土師器が出土した。しかし、調査面積が狭く、また、出土遺物も少ないため、明確な規模、時期等は明かにしえなかつた。

工事は東端部に存在する既設のプールを撤去後、現地表面から約60cm掘削するもので遺物包含層あるいは遺構に達する可能性があったため立会調査を行った。しかし、工事基底面まで造成時の埋め土で、顕著な遺構、遺物包含層は検出されなかった。亀山構内では、これまでトレンチによる調査が行われているにすぎず、埋蔵文化財の調査はその緒についたばかりである。今後の調査によって遺構の分布状況、遺跡の性格・時期・展開過程、周辺遺跡との関連を明らかにする必要があろう。

[注]

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「亀山構内教育学部附属幼稚園遊戯室拡張に伴う試掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』、1987年)。

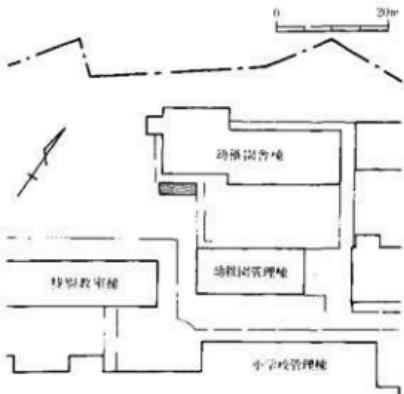


Fig. 63 調査区位置図

第4節 光構内の立会調査

教育学部附属光中学校グラウンド防球ネット設置に伴う立会調査

調査地区 光構内

調査期間 昭和63年3月28日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約2m²

調査結果 工事地域は光構内の東端部、御手洗湾に接する附属中学校グラウンドの北縁部付近にある。調査の対象は総延長距離約120mの防球ネット設置に伴い、約10m間隔で埋設される15本の支柱部分で、掘削の規模は現地表から約3mである。工事は機械を使用して掘削し、土層の堆積状態を観察することが不可能であったため、館員による現地での立会調査に加えて、光附属学校係の長谷知之氏に掘削状況の写真撮影、出土遺物採取を依頼した。その結果、出土地点は明かでないが、黄褐色ないし黒褐色の砂層から上師器、歴史時代の土師器壺、陶器甕、瓦質土器鉢、瓦数点が出土した。

出土遺物 (Fig. 65, PL. 32(3))

1は上師器の壺。系切り底で、内面の調整は粗雑。2は陶器の甕。口縁部は内側に強く屈曲し、外面には浅いヘラ引きの1条の沈線が巡る。瓦は丸瓦で凸面格子タタキののちナ

デ、凹面には布目痕が残る。1・2とも胎土、焼成良好。1は外面黒褐色 (Hue 10YR 3/2)、内面にぶい褐色 (Hue 7.5YR 6/3)。2は内外面橙色 (Hue 5 YR 7/6)。瓦は内外面暗灰色 (HueN 3/0)。



Fig. 64 調査区位図

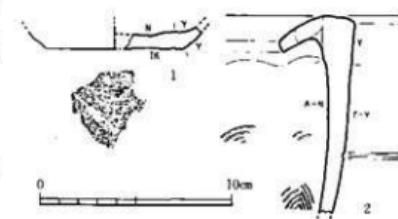


Fig. 65 出土遺物実測図

吉田遺跡の花粉分析

野井英明*

はじめに

吉田遺跡は、山口大学吉田キャンパス内に埋存する旧石器時代から江戸時代にかけての遺跡である。今回、山口大学埋蔵文化財資料館によって、教養部複合棟敷地の発掘調査が行なわれ、それに伴って得られた土層試料の花粉分析を行なった。本論では、花粉分析の方法と意義について簡単な解説を行なったあと、本遺跡の花粉分析の結果について述べる。

花粉分析について

花粉分析は、堆積物中に含まれる花粉を抽出し、その組成などを調べる手段である。その対象は花粉のみにとどまらず、胞子や他の植物性微化石も含めることが多い。花粉は、母植物の属あるいは科のレベルにおいて特異的な形態を持ち、母植物の同定ができる。そのため花粉組成を明らかにすることによって、堆積物の堆積当時の植生を推定することが可能である。この点において、花粉分析は考古学研究の上でも重要な役割を果している。それらのうち、最も重要なものは農耕に関するものであろう。中村・畠中（1976）は、福岡市板付遺跡において¹⁴C年代値が3,400年以上の地層から連続してイネの花粉を検出し、その当時から稲作が行なわれていたと推定した。また、中村（1981）は、日本各地の遺跡から採取した堆積物の花粉分析結果に基づいて、イネの花粉が連続して出現し始める時期を稲作の開始時期と考え、稲作の伝播にまで言及している。また、植生は、人為的、局地的なものを除けば、大きくは気候的環境によって決定されるものであるので、植生から気候を推定することができる。このように、花粉分析は、古環境、特に植生、気候の変遷史を解明する上において重要な手段の一つである。

考古学に関連の深い時代である日本の晩氷期以降の時代は、日本各地で多くの花粉分析結果が公表されており、花粉群変化が最も明らかにされている時代である。それに伴って、花粉群変化を区分する花粉帯の設定が多くの研究者によって試みられ、いくつかの区分が提出されている。それらのうち、現在最も一般的に使用されているのは、Tsukada（1963）による分帯である。それによると、晩氷期をI带とし、後氷期以降の花粉群を4帶に区分し、下位から、R I, R II, R IIIa, R IIIb带としている。ここでは、それらの細かな説明は

*九州大学 理学部 地質学教室

行なわないが、三好（1983）による中国地方におえる各花粉帯の特徴的な花粉分類群の変遷（植生変遷）をTab. 7に示す。

花粉の大きさは、大部分が10~100 μm である。この大きさは、砂屑物の粒径区分のシルトから細粒砂の区分に含まれるため、花粉は砂屑物とともに運搬され堆積する際には、シルトや細粒砂とほぼ同様な挙動を示す。したがって、花粉化石は大部分の堆積物（岩）に含まれるもの、シルトないし細粒砂（岩）に多く含まれる。また、花粉は還元状態の泥炭やシルト層中では保存されやすく、逆に空気にさらされやすい土壤などでは、酸化作用のために保存されにくい。これらのことから、試料としては、泥炭あるいは水中の還元的環境で堆積したシルトサイズ以下の堆積物であることが望ましい。

試料の採取は、壁面あるいは試錐試料から行なう。花粉組成変化を詳細に明らかにするためには、試料をできるだけ密な間隔で採取する必要がある。しかしながら、堆積物はふつう堆積当初の水流などによって堆積面が擾乱され、上下の堆積物がある程度混合していることが多い。したがって、堆積物の堆積環境を考慮して採取間隔を決定する心要があり、極端に密に採取しても無意味である。一般に、完新世の堆積物の場合には、10cm間隔で採取することが多い。また、花粉を含む堆積物はごくわずかの試料でも極めて多くの花粉を含むがあるので、採取にあたっては、採取に用いる移植ゴテなどは1試料を採取する毎に水洗するなど、試料の汚染を防ぐ注意も必要である。

遺跡の試料を含む第四紀の試料から花粉を抽出するには、KOH（水酸化カリウム）、HF（フッ化水素酸）によるアルカリ、酸処理に重液分離とアセトリシス処理を加えた以下の方法が一般に用いられている。

①KOH処理 1~2cmの試料を50mlポリエチレン製遠沈管に入れ、10%KOHを加えて沸騰している湯煎器中で攪拌しつつ10分間程度加熱する。その後、遠心分離器を用いて水洗を数回行なう。

②HF処理 ①の処理が終わった試料に48%HFを加えて攪拌し、室温で無機物が溶解するまで放置する。遠心分離を行なってHFを捨て、温10%HCLによる洗浄後、水洗を数回行なう。

③重液分離 ②の残渣を10mlガラス製遠沈管に移しかえて、比重が1.8程度に調整したZnCl₂水溶液を加え十分に攪拌し混和させる。2000rpm程度の遠心分離を10分間行ない沈殿物と浮遊物を十分に分離させ、浮遊物をスポイドで10mlガラス製遠沈管にとる。浮遊物をとった遠沈管に水を加えて重液の比重を下げて遠心分離を行ない、花粉を含んだ有機物を

Tab. 7 中国地方の晩水期以降の植生変遷(三好、1983を一部改変)

現在の植生帯		暖温帯下部		暖温帯上部～冷温帯下部	
時代区分	年代(千年)	花粉帶	低地	山地	
完新水世	後水世	R IIIb	Pinus	Pinus	Lepidobalanus
			Lepidobalanus	Cryptomeria	
	4.0	R IIIa	Cyclobalanopsis	Castanopsis	Cryptomeria
			Lepidobalanus	Carpinus	Lepidobalanus
	8.5	R II	Cyclobalanopsis	Castanopsis	Cyclobalanopsis
			Lepidobalanus	Podocarpus	Lepidobalanus
			Tsuga	Abies	Cryptomeria
更新世	10.0	R I	Fagus	Pinus	Fagus
			Lepidobalanus	Celtis	Lepidobalanus
	16.0	L	Carpinus	Betula	Fagus
			Lepidobalanus	Ailanthus	Betula
			Fagus		Picea
			Pinus		Lepidobalanus

沈殿させる。その後、水洗を数回行なう。

④アセトトリシス処理 ③の処理が終わった試料に CH_3COOH を加え脱水する。残渣に $(\text{CH}_3\text{CO})_2\text{O} : \text{H}_2\text{SO}_4 = 9 : 1$ の混酸を加え、湯煎器中で約5分間加熱する。遠心分離によって混酸を捨て、残渣を CH_3COOH で洗浄した後水洗を数回行なう。

⑤封入 ④までの処理のあとの残渣をグリセリンゼリーで封入しプレパラートを作る。

観察・計数は、ふつう400倍の光学顕微鏡下で行なうが、必要に応じて1000倍を用いる。封入の際に花粉・胞子が不均一に分布していることがあるので、検鏡にあたっては必ずプレパラートの全面を観察し、封入された試料のすべてを同定しなければならない。同定は花粉・胞子の総数が500個以上になるように行なう。分析結果は、試料の単位体積あたりに含まれる各花粉・胞子の絶対量で表わすこともあるが、多くは、木本類あるいは木本類+草本類を基数とする各花粉・胞子の出現頻度によって表わす。それらの値は、各分類群の構成比変化を理解しやすくするため、花粉ダイアグラムとよばれる図で表現することが多い。

分析結果と考察

今回花粉分析を行なったのは、教養部複合棟敷地のB棟とC棟から採取した36点の試料である(Fig. 66・67)。これらのうち、C棟から採取した試料は、すべて花粉・胞子とも

にまったく検出されないか、または極めて少ない。B壁から採取した試料も、1試料から抽出される花粉が数10個程度と少いものがほとんどであるが、花粉が少ないものでも胞子を多く含むことが多い。今回は、花粉・胞子合わせて500個以上計数が可能であったものについて、花粉・胞子の合計を基数とする百分率でその結果を示した (Fig. 68・69)。(C壁の試料は、検出された花粉・胞子が極めて少ないので、ダイアグラムは作成しなかった。)

先に述べたように、今回分析を行なった試料からは、KYFB-2, 19の2試料を除いて統計処理に十分な数の花粉は検出されず、また、多様性も低い。そのため、各花粉分類群

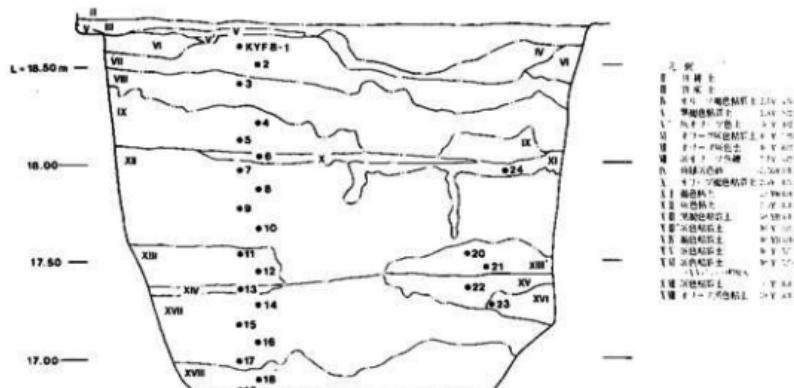


Fig. 66 B壁セクションおよび試料採取場所

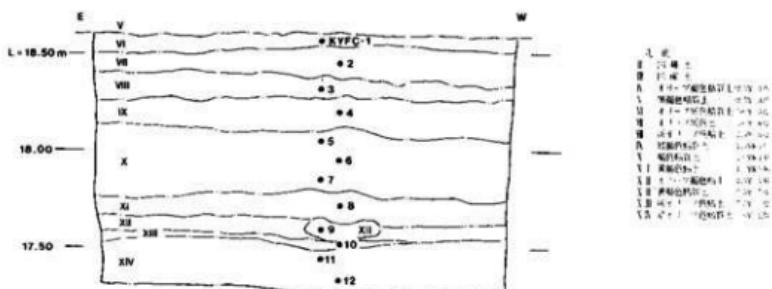


Fig. 67 C壁セクションおよび試料採取場所

分析結果と考察

のスペクトラの変化はなめらかではなく、植生変化を完全に反映しているとは考えにくい。しかしながら、植生変化の概略を把握するには十分であろう。

今回の花粉分析で検出された花粉分類群は以下のとおりである。*Pinus* (マツ属), *Abies* (モミ属), *Cyclobalanopsis* (アカガシ-ヤマモモ属), *Castanopsis* (シイ属), *Myrica* (ヤマモモ属), *Lepidobananus* (コナラ属), *Ulmus-Zelkova* (ニレ-ケヤキ属), *Aibus* (ハンノキ属), *Castanea* (クリ属), *Acer* (カエデ属), *Salix* (ヤナギ属), *Symplocos* (ハイノキ属),

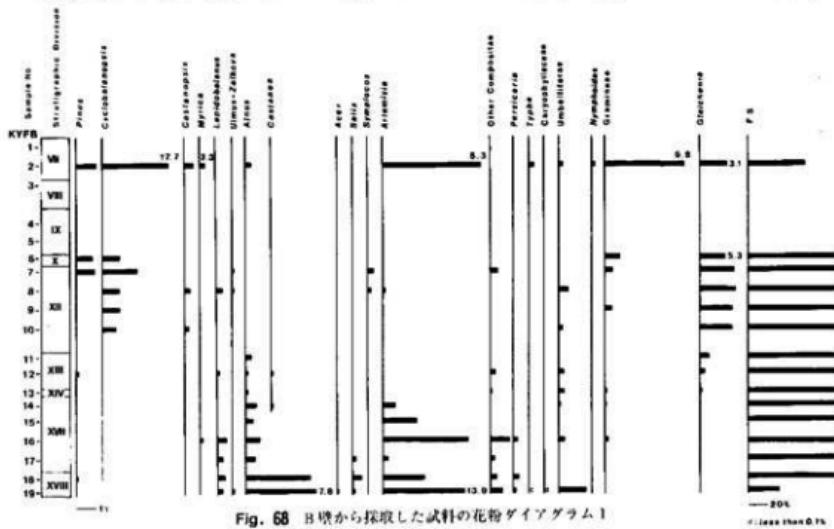


Fig. 68 日機から採取した試料の花粉ダイアグラム

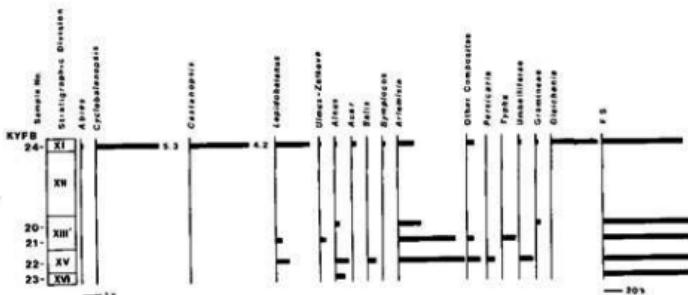


Fig. 69 本歌から採取した試料の花粉ダイアグラム 2

Artemisia (ヨモギ属), Other Compositae (ヨモギ属以外のキク科), *Persicaria* (タデ属), *Typha* (ガマ属), Caryophyllaceae (ナデシコ科), Umbelliferae (セリ科), *Nymphoides* (アサザ属), Gramineae (イネ科), *Gleichenia* (ヒカゲノカズラ属), FS (シダ類胞子)。

花粉ダイアグラムから読み取れる本遺跡周辺の植生変化は、大きく2つの時期に区分される。それらは、XIII層からXVII層（試料番号 KYFB-11-19, 20-23）にかけての落葉広葉樹を主とする時期と、Ⅳ層からXII層（試料番号 KYFB-1-10, 24）にかけての常緑広葉樹を主とする時期である（土層区分はB層の区分による）。下部の落葉広葉樹を主とする時期は、木本花粉では *Lepidobalanus*, *Alnus* を主としており、当時の森林はこれらの樹種を中心として構成されていたと考えられる。*Artemisia*, Other Compositae, *Persicaria*などの草本類花粉も多く検出されることから、遺跡の周辺ではなんらかの形で森林が破壊されて荒地が形成されていたであろう。常緑広葉樹がほとんどみられないところから、この時期の気候は現在よりもやや冷涼であったと推定される。この時期の花粉群は、日本の後水期以降の花粉帯であるRⅠまたはRⅡ帶の下部に対比されるであろう。上部の常緑広葉樹を主とする時期の植生は、*Cyclobalanopsis*を中心として *Castanopsis* を交えるいわゆる照葉樹林を主としていたと考えられる。Ⅳ層では、*Artemisia*, Other Compositae の草本花粉を多く含むことから、遺跡周辺は比較的乾燥した土地であったであろう。しかし、一方で *Typha*, *Nymphoides*などの水辺・水中植物の花粉がわずかつつではあるが検出される点を考慮すると、部分的には湿地あるいは池が存在していたと考えられる。XII層になって *Gleichenia*が急増し、*Cyclobalanopsis* が高率になるところから、XIII層からXII層にかけての時期に気候の温暖化が推定され、この時期の気候は現在とはほぼ同じかやや暖かかったであろう。この時期の花粉群は、日本の後水期以降の花粉帯であるRⅡ帶の上部に対比される。

引用文献

- 三好 敦大, 1983: 花粉分析学的研究よりみた中国東方の洪積世後期以降の植生変遷. 日本国史学, 中国, 82-89. 玉文堂, 東京.
- 中村 錠, 1981: 花粉から分る稲作の苦難. 科学朝日, 41, 44-47.
- 中村 錠・畠中 健一, 1976: 板付遺跡の花粉分析学的研究. 福岡市埋蔵文化財調査報告書, 35, 29-46.
- Tsukada, M., 1983: Umbrella pine, *Sciadopitys verticillata*: Past and Present distribution in Japan. Science, 142, 1680-1681.

山口大学構内出土の植物遺体

山口大学農学部 宇都宮 宏

教育学部附属教育実践研究指導センター、教養部複合棟及び医学部附属病院病棟の各新營予定地出土の植物遺体を観察・調査して、その植物名（数、状態）を明らかにし、その環境を考察した。

方 法

山口大学構内の教育学部附属教育実践研究指導センター、教養部複合棟、医学部附属病院病棟建設予定地の調査区域から取り上げた埋土は、まず水洗によって、土と植物遺体を丁寧に分離した。但し、植物遺体に付着して取れない微粒の土は、ブラシを使って除去した。水洗した植物遺体は、種子（堅果）、木片、樹皮及び葉身に分けた後に、肉眼あるいは解剖顕微鏡を使って観察（10~20倍）を行ったが、特に、木片については、木口、柾目、板目の切片を作成して、生物顕微鏡で鏡検（50~200倍）し、同定した。

観察結果

上記の山口大学構内の各建設予定地から出土した植物遺体は、種子（堅果）、木片、樹皮及び葉身片が出土したが、その植物の種類と出土数は以下の通りであった。

教育学部附属教育実践研究指導センター新營予定地からの植物遺体の観察・調査からは種子（堅果）から21種類、果皮からは1種類、樹皮から1種類、木片からは8種類の植物が認められた。種子（堅果）の中では、ハゼが最も多く、次いでヌルデ、スタジイの順であった。樹皮はミズナラに限られていたが、木片はアラカシが最も多く、次いでブナ、イヌブナ、コナラの順であった。

次に教養部複合棟新營予定地からの植物遺体からは、種子（堅果）から6種類、果皮・樹皮・葉身・葉鞘からは5種類の植物が出土した。種子の出土数はわずかであったが、アカマツの樹皮やトチノキの樹皮が比較的多く出土していた。

医学部附属病院病棟建設予定地からは、樹皮としてアラカシが出土した。

これらの出土した植物遺体の種子（堅果）、木片、樹皮及び葉片は還元状態や炭化状態での出土がごく少なく、比較的酸素の供給が可能な酸化状態下にあったように考えられる。

山口大学構内出土の植物遺体

Tab. 8 山口大学構内出土の植物遺体

1. 教育学部附属教育実践研究指導センター新館予定地
(1グリッド 河川跡 13層~27層)

出 土 植 物 名		数
(1) 種子(堅果)		
スダジイ	(<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky.)	307
クヌギ	(<i>Quercus acutissima</i> Carr.)	31
ヤブツバキ	(<i>Camellia japonica</i> L.)	3
ハシバミ	(<i>Corylus heterophylla</i> Fisch.)	22
コブシ	(<i>Magnolia kobus</i> DC.)	12
ヤマハゼ	(<i>Rhus silvestris</i> sieb. et Zucc.)	32
イヌガヤ	(<i>Cephalotaxus harringtonia</i> K.Koch.)	11
ナンキンハゼ	(<i>Sapium sebiferum</i> Roxb.)	16
スルデ	(<i>Rhus chinensis</i> Mill.)	447
ハゼ	(<i>Rhus succedanea</i> L.)	621
マテバシイ	(<i>Pasania edulis</i> Makino.)	1
ノブドウ	(<i>Ampelopsis brevipedunculata</i> Trautv. var. <i>heterophylla</i> Thunb.)	34
イヌブナ	(<i>Fagus japonica</i> Maxim.)	24
ハンノキ	(<i>Alnus japonica</i> Steud.)	14
ホソバイヌタデ	(<i>Polygonatum trigynanthrum</i> Makino.)	9
ノグサ	(<i>Schoenus apogon</i> Roem. et Schult.)	16
コウモリカズラ	(<i>Menispermum dauricum</i> DC.)	14
アラカシ	(<i>Quercus glauca</i> Thunb.)	71
ツブライ	(<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky.)	95
タブノキ	(<i>Machilus thunbergii</i> Sied. et. Zucc.)	18
バイカモ	(<i>Batrachium niponicum</i> Kitamura var. <i>majorkitam.</i>)	4
(2) 果皮		
クヌギ	(<i>Quercus acutissima</i> Carr.)	2
(3) 樹皮		
ミズナラ	(<i>Quercus mongolica</i> Fisch var. <i>gross serrata</i> Rehd. et Wils.)	198
(4) 木片		
アラカシ	(<i>Quercus glauca</i> Thunb.)	1164
イヌブナ	(<i>Fagus japonica</i> Maxim.)	755
サンゴジヌ	(<i>Viburnum awabuki</i> K.Koch.)	1
ミズナラ	(<i>Quercus mongolica</i> Fisch var. <i>gross serrata</i> Rehd. et Wils.)	373
ハウチワカエデ	(<i>Acer japonicum</i> Thunb.)	1
コナラ	(<i>Quercus serrata</i> Thunb.)	510
ハンノキ	(<i>Alnus japonica</i> Steud.)	298
ブナ	(<i>Fagus crenata</i> Blume.)	850

観察結果

2. 教養部複合棟新営予定地
(第1号井戸)

出土植物名		数
(1) 種子(堅果)		
クヌギ	(<i>Quercus acutissima</i> Carr.)	1
アベマキ	(<i>Quercus variabilis</i> Blume.)	3
ヤマハンノキ	(<i>Alnus hirsuta</i> Blume.)	1
サンショウウ	(<i>Zanthoxylum piperitum</i> DC.)	3
ノグサ	(<i>Schoerera apogon</i> Roem. et Schult.)	2
オオトボシガラ	(<i>Festuca subulata</i> Bong. var <i>japonica</i> Hack.)	1
(2) 果皮・樹皮・葉身・葉蛸		
アベマキ	(<i>Quercus variabilis</i> Blume.)	4
アカマツ	(<i>Pinus densiflora</i> Sieb. et Zucc.)	55
トチノキ	(<i>Aesculus turbinata</i> Blume.)	24
モウソウチク	(<i>Bambusa edulis</i> Carr.)	3
コナラ(葉身)	(<i>Quercus serrata</i> Thunb.)	2

3. 医学部附属病院病棟建設予定地
(B トレンチ 第9層 緑灰色土中)

出土植物名		数
アラカシ(樹皮)	(<i>Quercus glauca</i> Thunb.)	2

考 察

1. 教育学部附属教育実践研究指導センター新営予定地

ぶな科植物は8種が認められる。落葉種は、クヌギ、イスブナ、ミズナラ、コナラの4種類、常緑種は、スダジイ、アラカシ、マテバシイ、ツブライが出土しており、暖地性のぶな科植物が認められる。このほかには落葉樹のナンキンハゼ、ヌルデ、ハゼ、コウモリカズラ、そして落葉混生(日陰)に適するハウチワカエデやハンノキもみられる。常緑樹としては、ヤブツバキ、イスガヤもあり、照葉樹林樹が認められる。また河畔に自生するホソバイヌタデ、水中に自生するかやつりぐさ科のノグサもみられるところより、照

山口大学構内出土の植物遺体

葉樹林と落葉樹林を混成した山林雑木林を構成しながら、付近は多湿の湿地状態である環境であったと推察される。

2. 教養部複合棟新嘗予定地

第1号井戸からの植物遺体は、種子（堅果）、果皮、樹皮、葉身（不完全）の状態で出土しているが、炭化している植物遺体は非常に少ない。中でもアカマツの樹皮片が多く、次いでトチノキの樹皮である。ぶな科植物はクヌギ、アベマキ、コナラの落葉樹に限られている。また山林中に自生するサンショウ、林内の多湿環境に自生するイネ科のオオトボシガラ、湿原野に自生がみられるノグサも出土しているところより、山林野の状態にありながら、多湿の土壤状態であり、水流の動きもある環境であったことが推察される。

参考文献

- (1) 貴島恒夫・岡元省吾・林 昭三 1986. 原色木材大図鑑. 1-176. 保育社. 東京.
- (2) 北村四郎・村田 源・小山義夫 1968. 原色日本植物図鑑(下). 69-421. 保育社. 東京.
- (3) 北村四郎・村田 源 1969. 原色日本植物図鑑(中). 1-348. 保育社. 東京.
- (4) 北村四郎・岡元省吾 1970. 原色日本植物図鑑. 1-250. 保育社. 東京.
- (5) 北村四郎・村田 源・堀 稔 1970. 原色日本植物図鑑. 2-264. 保育社. 東京.
- (6) 牧野富太郎 1955. 牧野日本植物図鑑. 654-661, 896-911. 北隆館. 東京.
- (7) 鳥地 謙・伊東産男 1986. 図説木材組織. 1-163. 地球社. 東京.

墨で文字を書きこんだうつわ 一既刊の報告 補訂一

杉 原 和 恵

1はじめに

最初におことわりしておく。本稿は、当館がすでに刊行した報告書の記載を補足訂正する目的であり、おもに、年報Ⅴで報告した「富(富)」の墨書のある須恵器の塊を、ここであらためて紹介するものである。(→実測図 Fig. 72、写真 PL. 33-(1))

というのは、その報告の段階では、この塊は底の付近だけしかなく、その底も口が欠けており、当然ながら、底にある墨書の文字も、右下が一部欠けてしまっていた。口がないので、全体の形もわからなかった。ところがその後、欠けていた底の、まさにその残り口が、収蔵庫の整理中に、ひょっこり見つかったのである。しかも、発見地として、前述報告の調査地とは約100mも離れた別の場所の名が記されており、その調査は年報Ⅲですでに報告を完了していた。報告するべきを漏らしてしまっていたわけである。さらに、年報Ⅴで報告した口の部分の破片が、新たに見つかった底の破片にびたりとくっついたため、結局、この須恵器の底から口までのほぼ完全な形を知ることもできるようになった。

この塊が、文字を書きこんだ希少なものであることにくわえて、ひとつの塊の破片が、約100mも離れたところに分かれて埋まっていたという事実にも注目しなければならない。発見地周辺がその当時はどういう地形だったのか、遺物包含層がどのように堆積したのか、などを考える手がかりである。今後の調査にも大いに役立つと思われる所以、あわせて報告したい。

また、付属的に、墨で文字を書いた土器を研究するに際し、注意すべき点について、少々の私見を述べさせてもらった。

*須恵器…朝鮮伝来の灰褐色の硬い燒きもので、5世紀～10世紀に開拓されていた。それまで日本になかった新しい技術（ロクロで作り、墨で焼く）を使ったので、元々作られていた素焼きの土器（→109ページ補注）より格段に丈夫で精巧なものだった。

*遺物包含層…遺物（土器や石器など）を含んでいる地層。

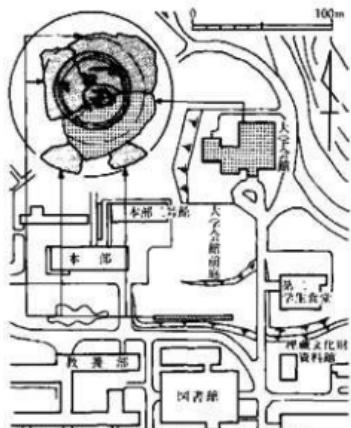


Fig. 70 「富」の須恵器 発見場所

2 墨書き土器とは

墨で文字を書きこんだ土器（墨書き土器）について、まずあらかじめ説明しておこう。ただしここでは、律令時代と呼ばれる7～10世紀のものを中心に取り扱う。墨書き土器の移り変わりは、律令による国家の民衆支配と決して無関係ではなかったと考えられている。⁵⁾

文字（漢字）が日本人に使われたのは、今のところ5世紀の例を最古とする。6世紀には仏教が伝わり漢字の必要性を高めたり、⁶⁾7世紀初めの推古18年（610年）には、墨と紙の製法も伝えられ、文字が普及する条件は整ってきていた。事実、その翌推古19年からは、⁷⁾かの聖德太子が、三経義疏、国史の編纂など、精力的な文筆活動を始めている。

とはいって、当時、紙は貴重品。普段は「木簡」と呼ばれる木の板が、もっぱら紙のかわりに使われていた。しかし、これら昔の書物や木簡が、今に伝えられている例は少ない。文字を書きこんだ土器はそれを補うものとして、第三の書簡と言えるかもしれない。¹⁰⁾

いつ頃のもの？ 最古の例は今のところ、日本が唐の律令を探り入れた7世紀で、量のピークは8～9世紀頃にあり、10世紀以降には減ってゆくようである。これはおそらく、須恵器が椎葉をかけた陶器にかかり、漆器や中国産の磁器などが使われて、墨書きできる材質のうつわが減ったこともあろうが、律令制の崩壊が大きく影響したものと思われる。ただし、土師器や、陶磁器の釉薬のかからないところを選んで書く例は、もちろんずっと後まで残り、むしろ山陽道ぞいでは、11世紀以降にそれらの墨書き土器が増大する傾向にある。

どこで使われたの？ 墨書き土器が発見される遺跡は、古代の役所や宮殿、寺など、やはり文字を知る人がたくさんいたと思われる特殊な遺跡が多い。しかし、関東・中部・東海など、当時「東国」と呼ばれていた地方では、9世紀以降の一般的な集落遺跡から、墨書き土器が多量に発見される例が最近ふえてきており、一概にそうとは言えなくなっている。

どんな文字が書いてあるの？ 人名・地名やそれを省略したものの、神仏やまじないに関する文字、などが各遺跡に共通するおもなものである。ただ、文字はひとつの土器に1字、多くて2字が普通なので、意味の理解に苦しむことが多いのが欠点。役所跡や宮殿跡などでは、これらの文字のほかに、その土器の名前や中に入れる食物の名前、建物やそこに勤務する役職の名前、そして落書きや手書きなどが加わってバラエティーに富み（→次ページ写真）、さらに、ひとつの土器に記す文字数が多くなる傾向にある。

何がわかるの？ 本当にその当時の人が書いた、生のままの文字や文章を知ることができるので、それだけなら別に土器に書いたものでなくてもかまわないが、紙・木・布などが、長く埋まっているうちに土にかえり、たいていは今に姿を残さないことを考えれば、土器は

墨書き土器とは

かなりの悪条件でも残るため、紙や木・布などより有利と言える。

また、土器は日常生活に欠かせぬ食器であり、書物や木簡などと違ってそう広範囲に持ち運ばれはしないので、発見された土器の性格や使用法が、即その遺跡の性格に結びつくことが多い。たとえば、掘り出された土器に書いてあった「志太厨」「志太少領」などの文字から、その場所が千年の昔、¹³⁾ 薩河国志太郡の役所であったとわかった（静岡県御子ヶ谷遺跡）というような例は、決して珍しくないのである。

なぜ土器に文字を書いたの？何のメリットがあるの？ 確実にわかっているのは、「炊女取不得」（あなたがた、取ってはいけませんよ!!）などたいへん素直に書いたものである（奈良県平城宮跡）。¹⁴⁾ 他に、小範囲の墨書き土器を取り上げて、まじないに使ったとか、単に土器の整理のために書かれたとか、来客の接待や宴会に使われたらしい、などとされているが、全体の見通しにつながるものではない。第4章で、私の考えを述べてみたい。

*律令…「律」が刑法（してはいけないこと）、「令」がそれ以外の法（するべきこと）。均の制度にならった。701年、大宝律令の制定によって完成。律令が國の基本法であった時代（大化の改新～平安時代、7世紀なかば～12世紀）を律令時代と呼ぶ。ただし本稿は、律令がすでに有名無実であった平安時代後半は含めない。

*土器器…陶文土器～赤生土器～土加器と旧來の伝統を守ってきた素焼きの上器も、須恵器の出現によって技術の改良を余儀なくされ、8世紀には土器器もロクロと窯を使って作るようになった。須恵器は、より保水性の高い陶器が出現したため平安時代で姿を消すが、土器器は改良を重ね、用途を変えながら、系譜を現在に伝える。

*厨…厨房のこと。商場や調理具の収納施設をさし、役人の食事や公的な宴会の準備などを行われた。

*少領…郡のトップクラス（郡司）の官職名で、大領・少領・主政・主執（四等官）のうちの第二の地位。

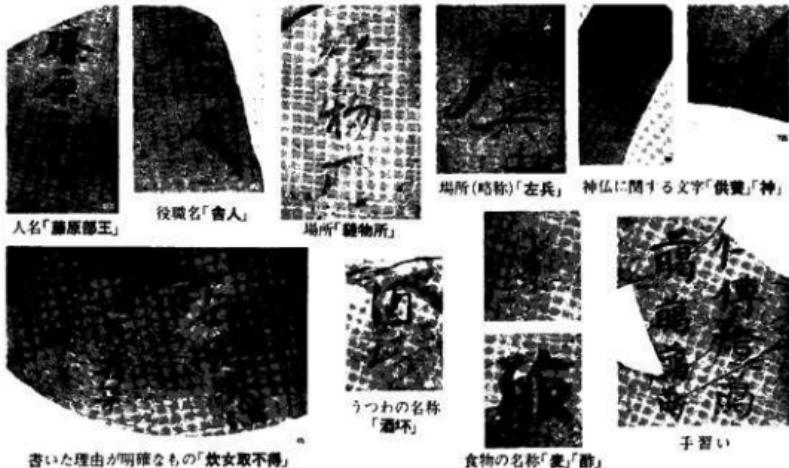


Fig. 71 さまざまな墨書き文字（平城京）

注21)文献より転載、奈良国立文化財研究所許可済

3 「富」の墨書き須恵器 再報告

① 須恵器について

前置きが長くなってしまったが、最大の目的、吉田遺跡の「富」の須恵器について、III報告の訂正をかねて、あらためて紹介しよう。

当資料は高台のついた壺で、復原口径13.9cm（やや歪んでいるため、正確な数値とは言えない）、高台径は小さく6.6cm、器高は4.9cmである。外面の底部と体部の境を強い回転押圧によって明確に凹ませ、体部はわりあい素直に外広がりに伸び、口縁の端を外側に曲げ、丸くおさめたものである。底は回転ヘラ切りのち未調整。高台は小さめで、断面は先細りするがほぼ四角形となり、底部の端に貼り付ける。が、貼り付け方は乱雑で、高台の歪みや傷なども一切調整せず、少々いびつな形になっている。

胎土（使われている粘土の質）は粗く、径3mm以下の砂粒をかなり含んで砂っぽいが、焼成（焼きぐあい）は良好。内・外底面部分の色調（青灰色：Hue 5B6/1）が、ちょうど円形に、他の部分（灰色：Hue 7.5Y6/1）よりも暗くなっている。

高台径が小さいこと、高台の作りが雑なこと、また体部が上に伸びずにかなり斜めに傾

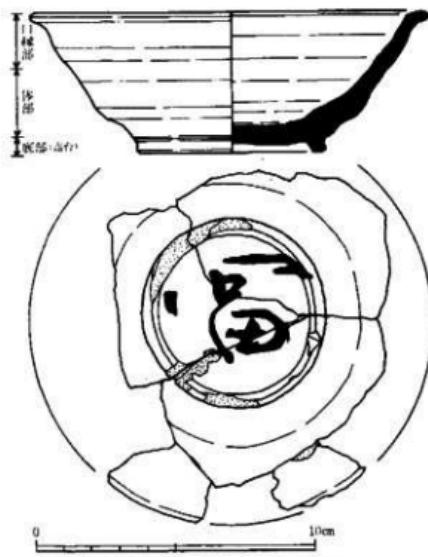


Fig. 72 「富」の須恵器実測図

いて伸びていることなどは、中村浩氏の大坂府和泉陶邑窯の須恵器編年によれば、IV型式4段階（770～780年前後頃）にあたる特徴であるが、陶邑編年も律令時代になると、山口県の須恵器には当てはまらないのが実情である。

陶邑窯の操業期（5～8世紀）のうちでも前半期は、陶邑産の須恵器はほとんど専売特許のような形で広く流通し、その形が画一的であることにより、全国共通の基準とされている。山口県と例外ではない。ただ、どこの地方でも、地元で須恵器が生産できるようになる6世紀以降については、地元産のものに特徴的な形とか、陶邑産と地元産との流通の違いなどがあるので、

その地方独自の基準を作り出さねばならない。その基準が、山口県ではまだ完全に定まつてはおらず、よって特に律令時代の須恵器は、詳しい時期の推定ができるないという現状なのである。事実、当吉田遺跡周辺にも、須恵器の窯が各世紀を通じてあり、地元産と陶邑産の須恵器が共存する時期があったことは、確かである（→下図）。特に、8・9世紀の陶窯、百谷窯は、吉田遺跡に近く、規模も大きい。

当地方の須恵器全体に共通する基準を、私が今見つけ出せば問題はないのだが、残念ながらそれだけの器量も度胸もないでの、この「富」の須恵器のみに限って、いつの時期のものかを考えてみよう。

近年、奈良教育大学の三辻利一教授が、螢光X線による土器の胎土分析を精力的に行ない、その一環として当吉田遺跡に近い2遺跡（西遺跡と小路遺跡。→下図）で見つかった須恵器について、興味深い事実を明らかにした。それによると、5・6世紀、そして7世紀のある時期までの須恵器に使われている粘土は、すべて大阪の陶邑窯のものと一致するが、7世紀には地元山口の粘土を使った須恵器があらわれ、8・9世紀には逆に陶邑窯の粘土を使った須恵器が見あたらない、というのである。小路遺跡では8世紀後半の須恵器に墨書きがあるのが確認されている（→115ページ表）が、この須恵器に使われた粘土も、地元のものという分析

結果だった。つまり、8・9世紀、吉田遺跡周辺では、須恵器は地元産のもののみを使っていた可能性が高いと判断されたのである。

ということは、当然ながら、この「富」の須恵器もおそらく地元産のものであり、大阪の陶邑の須恵器に照らしあわせて年代を断定することは、適当ではないということになる。

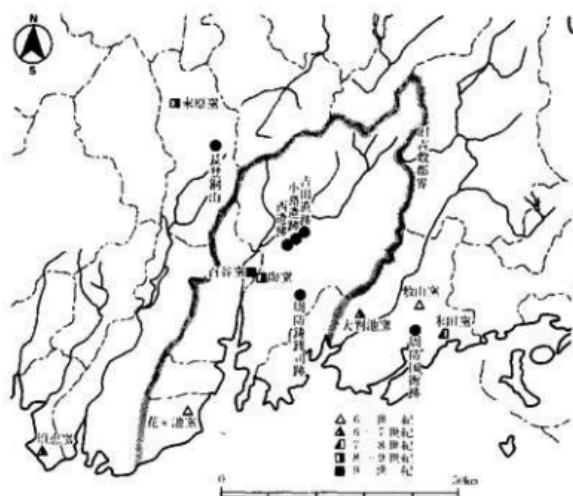


Fig. 73 吉田遺跡周辺の須恵器窯跡

「富」の須恵器そのものの胎土分析を、機会を見てぜひお願ひしてみたい。

地元のものとして考えると、口縁の端を外側に曲げるという特徴は、前述の百谷窯で焼かれた須恵器のなかによく見られることに気づく。百谷窯Ⅱ類Aという分類で、9世紀前半～中頃のものとされている。だから即ちこの窯の製品だと言えるわけではないが、うつわの特徴を語る時、IIの部分が占めるウエイトは高く、あまり軽視することはできない。

ただ、文献（注16）に載る百谷窯のⅡ類Aの塊は体部に丸みがあり、「富」の塊とはかなり形が違うので、当初はこの分類の中に含めるのはどうかと思っていたが、実際に百谷窯の須恵器を見せていただいたところ「富」の塊に実にそっくりな形・胎土（焼き終わらずに生焼けの状態で廃棄されたものなので、焼成・色調は比較できないが、高台の雑な貼り付け方までそっくりだった）のものがあり、百谷窯の製品ではないかとの確信を深めた。

またもうひとつ、Ⅱ類Aの塊とするには体部があまりにも大きく斜めに傾きすぎているという疑問があるが、この塊の形は、高台さえ取り除いてしまえば、そのままのⅢ類Bの段階の塊とたいへんよく似た形となる。このことから、「富」の塊は、Ⅱ類AからⅢ類Bへの過渡期の段階か、むしろⅢ類Bの時期に入ってから作られたものと考えたい。

はなはだ貧弱な理由ではあるが、これらのことから、「富」の塊は、9世紀の中頃～後半くらいの時期に、百谷窯またはそれと系列を同じくする窯で作られ、この吉田の地で文字を書きこみ使用されたものと思われる。

*11件、成澤「高台付」。器高…壺土器は、専門の職人が大量生産するので、ある時期にひとつの窯で焼かれたものは、ほとんど規格が統一されている。そのため、これらの寸法は大きな手がかりになる。

*回転ヘラ切り…ロクロの上で土器の形を作ったあとは、そのロクロから土器を切り離すことが必要になる。その切り離し方のひとつで、土器の底になるところにへら状の道具をさしこみ、ロクロを回転させてぐるりと切り離す方法のことをいう。

*編年…考古学で、割り出されたものがいつの時代のものかを決めるための手段。

同じ時代とわかっている名のどうしや、明らかに時代の違う名のどうしを観察してゆくと、同種類のものでも時代によって模様や形・作り方に特徴があり、それが少しずつ移り変わってゆくことがわかる。この移り変わりを順序立てて整理することが「編年」である。これは、あくまでも「AよりBが古く、BよりもさらにCが古い」というような順序（絶対年代）を決めることがある。土器は変化が表れやすいので特に有効であるが、たとえ信頼性の高い陶器の編年といえども、それだけでは実際の器の上での年代（絶対年代）は決められない。

文献で存続期間がわかっている遺跡とか、いわば死んだかが確定した人の墓の中などから、たとえばBの土器が発見されると、そこで初めてBの絶対年代がわかる。変化の順序（編年）がA→B→Cならば、このBを基準にしてAやCの絶対年代も推定できる、という手順になる。（→例えは注19の周防御鏡司の例のように）

*宝光X線による土器の胎土分析…土器の中では須恵器についての研究が最も進んでいる。さまざまな成分どうしの組合的な対比によって、胎土に地域性のあることが確かめられている。山田點斑の土器に使われている胎土は、特にK（カリウム）量が多い。

* 壱…ここでは、今で言う「お椀」のうち、高台があるものを壠、ないものを壺と呼ぶ。

(2) 墨書き「富」について

底の外面の高台内部をいっぱいに使い、一部高台にもはみ出して書かれている。文字は「富」と読める(→PL. 34-(1)に実物大の写真)。

「富」は「富」の異体字で、画数を省略したものである。千葉県八千代市北海道遺跡²⁰⁾、奈良県奈良市平城宮跡²¹⁾、大阪府高槻市郡家今城遺跡²²⁾、京都府大宮町谷内遺跡²³⁾、富山県小杉町黒河尻²⁴⁾自遺跡などでも、同じ異体字を墨書きした土器が見つかっており、本字の「富」よりもむしろこの異体字の方が一般的に使われていたと思われる(→写真 PL. 34)。

また書体等について人文学部の八木充教授に見ていただいたところ、書き慣れた筆跡でかなりの達筆であり、書風に地方性を感じられない(つまり田舎くさくない)、都風の文字だということであった。つけくわえるならば、9世紀の段階でそのような文字を書ける人物は、中央の役人や貴族にはば限られるとのことである。

なお付記しておくと、吉田遺跡では、墨書きのある律令時代の土器は他にも1点見つかっている。須恵器の蓋であるが、破片で、もともとの形を推定できず、また文字も上半分が欠けていて読めないので、「富」の塊にくらべれば、引き出せる情報量は少なかった。

この「富」の文字が何を表すのかをつきとめるために、まず、律令時代の当吉田遺跡はどのようにであったのか、についてふれておこう。第2章で述べたように、遺跡の性格によって、墨書きの内容が違っているからである。

この吉田の地には、中央の律令政権に關係する、何らかの施設が存在したと考えられている。その理由は、荷札²⁵⁾(中央へ送る貢納品につける木簡。荷札の役目をする)、銘²⁶⁾(官位を示すためのベルトの飾り)、硯²⁷⁾(それも須恵器のうつわを利用した仮の硯ではなく専用に作られた硯)など、一般の集落では當時使わなかったもの、また役人・貴族だけが持つことのできたものが、この吉田遺跡からは見つかっているからである。ただ、この時期の遺構が見つかっていないので、これだけではまだ「○○という施設があった」という断定はできない。しかし施設の性格はわからなくても、役人または貴族・僧侶など、流麗な文字を書く相応の人物がこの吉田の地にいたことは、ます間違いないの事実であろう。

墨書き土器は、第2章で、東国(東国)の集落遺跡から大量に見つかると書いたが、近畿以西のいわゆる「西国」では、役所跡や寺跡などの、中央との関連の深い遺跡のほかでは、今のところほとんど見つかっていない。山口県内(周防國・長門國)に限れば、律令時代の最重要道路で最も交通が頻繁だったはずの山陽道ぞいの要地にあるのに、なぜかこの時代の墨書き土器の発見例が極端に少なく、当道路の2点のほかには防府市の周防國衙跡で6点、由



Fig. 74 律令時代の墨書き土器が見つかった遺跡(山口県内)

口市小路遺跡、²⁹⁾山口市周防鉄銭司³⁰⁾跡、³¹⁾美東町長登銅山跡、³²⁾下関市长門国分寺跡で各1点、発見されているのみである(→左図、次ページ。写真PL. 34)。うち、小路遺跡を除いたすべての遺跡については、律令国家の出先機関があったことはほぼ疑いない。西国では、墨書き土器も、中央との直接的な関係を示すものと考えてよさそうである。

また、墨書き土器の量が少ない上にひとつの上器に書く文字の数も少ないとから、山陽道ぞいでは、その交通量のわりには文字の普及が意外に遅く、また土器に文字を書くという風習を、この地の人々が積極的には受け入れなかつたものと考えられる。いかに國の出先機関の遺跡から発見されたとしても、当方の土器に書かれた文字は、地名か人名の省略形、またはお守りやまじない的な性格をもつ可能性が高いと考えるべきであろう。

さて、「富」の文字の示す意味であるが、一字のみを流麗な筆はこびで、しかも最も文字の保存に適した高台の内側に、大きく書くということからも、やはりその文字のとおり、「富」という願いをうつわに込めたものと考えるのが妥当だと思う。

ただ、注意しておかなければならないのが、中世この吉田の地に存在した「恒富保」である。「保」は、平安時代以降国術領において、「庄」とは別に、農民が自力で開拓した土地に与えられた名称である。「恒富保」の名が文献に登場するのは鎌倉幕府が開かれた直後の建久8年(1197年)が初めてで、それ以前のこととは明らかでない。「ツネトミ保」または「ツネトミ」という地名が、須恵器の年代に見合う平安時代初めごろにはすでに存在し、かつ「恒富」の漢字が当てられていたとすれば、「富」は「恒富」の省略である可能性も出てくる。

*異体字…漢字で、同じ字ではあるが、標準と考えられている字とは違う形態のもの。

*鏡…墨書き土器が見つかる東国の集落遺跡では、使われた鏡はほとんどが私用鏡(須恵器のうつわを鏡として利用したもの)である。役所や寺では、私用鏡にくわえて、専用に作られた鏡(円面鏡、風字鏡、宝珠鏡など)が使われている。吉田道路で見つかったのは、円面鏡の鏡片。

*遺物…埋蔵文化財(土に埋まっている文化財)のうち、穴や建物のあとなど、その場を動かせないものをいう。土器や石器など、その場を動かせるものは「遺物」という。それらが埋まっている場所が、「遺跡」である。

「冠」の墨書き更器 再報告

Tab. 9 律令時代の墨書き更器一覧(山口県内)

遺跡名	所在地	出土地點・遺構など	墨書きの器種と部位	墨書き内容	時期	文献
防府国御跡	防府市国西町新町	昭和53年度在用ID 地点	墨書き壺、底部外面(高台中)	「可」	8世紀後半	注28a
	防府市国西町新町	昭和53年度在用ID 地点	墨書き壺、底部外面(高台中)	欠損不明	不詳	注28b
周防國御跡	鳥取市因幡五丁目25-3番地	昭和56年度	墨書き壺、天井部内面	「集」	8世紀前半	
		第28次調査(GF 地区)	墨書き壺、底部外側	「山か」	8世紀後半	注28b
周防國御跡	山口市国西五丁目786番地	昭和57年度第15次調査(昭和57年4月)	墨書き壺、底部外面(高台中)	「國制」	8世紀後半	未報告
	山口市防武町字四止大高	昭和58年度第16次調査(昭和58年4月)	墨書き壺、底部外面(高台中)	「欠損」	8世紀後半	注30
小路遺跡	山口市大字里川小路	人面ヒドレンチ	墨書き壺、体部外側	欠損不明	8世紀後半	注29
吉田遺跡	山口市大字吉田	M-N-15区とL-M-15区の縦合部 T-211(河川跡)	墨書き壺、天井部外面	「吉田宮」	8世紀後半	本著
長谷銅山跡	小豆郡下關町大字長谷字大原	大切地(既下塗の土の運搬中より)	墨書き壺、天井部外側	「大家」	8世紀後半	注25
長門国分寺跡	下関市長門宮の内町	西殿推定地LX 120A	墨書き壺、体部外側	「美(美)」	8世紀後半	注26

※高台のあるものを壺、ないものを壺とする。

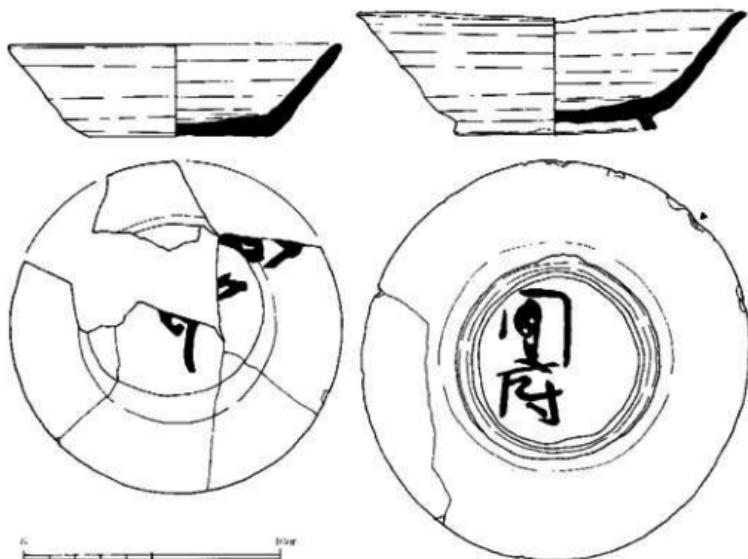


Fig. 75 律令時代の墨書き更器 実測図 (左: 周防御跡、右: 周防國御跡)

(3) 地下の状況について

当資料館が、これまで大学会館周辺において行なった調査（→次ページ）はかなりの件数になる。また資料的に不明確ではあるが、資料館設置以前にも、この地域は吉田遺跡^{吉田}調査団によって第Ⅰ地区と称され、大学統合移転に際して多くの調査が行なわれている。これらの調査の結果からして、大学会館周辺は、学内でも遺跡保存地区周辺に次いで遺構密度の高い地域として注意されるようになった。

今回紹介した墨書土器は、大学会館敷地部分では黒色粘土層より、前庭部分では黒色・黒褐色系の粘質土層より見つかっている。直線距離にして100mも離れた場所にあった破片どうしがあまり磨滅もせずに発見され、ひとつに接合したという事実から、若干の色調、土質の違いはある、大学会館敷地のみならず、周辺を覆うこれらの遺物包含層全体が、同一成因によるものである可能性はすこぶる高いと思われる。事実、大学会館敷地部分では、この黒色粘土層は調査区の中の最も広い範囲を覆っていたことがわかっている。この膨大な量の遺物包含層はある場所から、いちどきに流れ込んできたということである。

ある場所——もともとこれらの遺物を使い、捨てた場所、または当時の遺構のあった所とは、どこだったのか。これまで積み重ねられた調査の成果をもとに、地形の旧状を復原してみた（→次ページ）。

既調査で判明している地盤のありかたから判断すると、現在農学部の花木園となっている丘陵は、もともとは大学会館部分を避けるように、第2学生食堂→大学会館前庭→本部管理棟の方向に掘野をのばしていたと考えられる。この掘野部分は台地状で、生活の場としては好適地。事実、これまでの調査で多くの遺構が発見されている。ただ、律令時代のものと断定できる遺構は少ないので、積極的な証拠にはならない。

しかし、土砂（遺物包含層）がいちどきに流されていく過程で、その中に含まれていた「信」の須恵器が、大学会館敷地と前庭下段都南端との別方向に分かれてしまったという事実を重く見たい。この状況が可能になるのは、これらの遺物包含層の起源が、第2学生食堂敷地から前庭上段の東半部あたりにあった、と考えるのが、地形と土層の堆積状況からみて、最も自然であると思う。

学生食堂付近の台地は、平地を作るためすでにすっかり削られており、今後調査をしたところで、遺構の発見はあまり期待できないだろう。律令時代の吉田遺跡に、どのような施設があったのかは、おそらく今後も、遺構ではなく遺物から判断してゆくしかなさそうである。残念といわざるをえない。

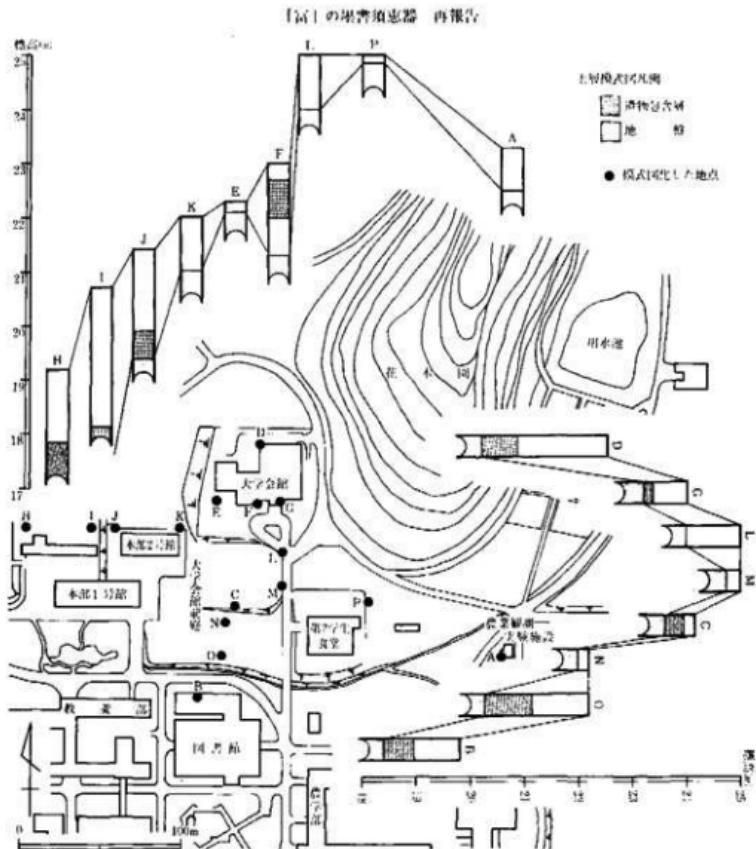


Fig. 76 大会館周辺の地下の状況

各地点の土壁模式図は、下記の調査によるもの。

- A 山口大学理農文化財資料館「昭和54・55年度調査の概要」(山口大学構内道路調査研究年報Ⅰ、1982年)。
- B 同上「中央図書館増築予定地M～16区の発掘調査」(山口大学構内道路調査研究年報Ⅱ、1985年)。
- C 同上「大学会館新設予定地M～14・15区の試掘調査」(山口大学構内道路調査研究年報Ⅲ、1985年)。
- D～G →注1) a報告。
- H～K 同上「吉田構内大学会館排水管布設に伴う発掘調査」(山口大学構内道路調査研究年報Ⅳ、1985年)。
- L～M 同上「吉田構内大学会館ケーブル布設に伴う発掘調査」(山口大学構内道路調査研究年報Ⅴ、1985年)。
- N～O →注1) b報告。
- P 同上「污水排水管等整修改修に伴う発掘調査」(山口大学構内道路調査研究年報Ⅵ、1987年)。

4 土器に文字を書いたわけ

土器に書いてある文字がいかに大きな情報源となるかについては、第2章で述べたところである。そのため最近、文字を集成・分類した論者がふえているのは喜ぶべきことだが、墨書き土器の発見例がふえるに従い、その分類はどんどん煩雑になるばかりで、基本的な原理や基準を見出すのは至難の業である。一方で、土器に文字を書くという行動自体を、当時の人がどのような意識で何のために行ったのか、ということをかえりみる人は少ない。精神分野の解明は考古学的にはむずかしい、と言ってしまえばそれまでだが、木簡や古文書などと同じく、文字を読解し、それを集成・分類するにとどめたままでよいだろうか。

土器にはあくまで「うつわ」という本職がある。文字を書くために最初からそれ専用に作られる、書物や木簡とは違う。つまり、土器は元来文字を書くためのものではないのだから、文字をわざわざ土器に書くからには、「この土器にこの文字を」という意志や必然性があると考えなければならない。文字を読解することにくわえて、文字とうつわとの関係を見ることが大切なのだ。墨書き土器が遺跡の性格を表わす（→第2章）というのも、尤を止せば、土器は日常食器であるからあまり移動しない、ということが前提なのだから。

文字を、わざわざ紙でない物体に書き込む場合、文字とその物体とは、何か特別な要因で結びついていると考えるべきである。一つの実例をあげてみよう。

私の友人のK姫は、プロ野球読売巨人軍の中畠清選手の大ファンであるが、かつ彼女自身も並の男以上のソフトボール連球投手である。中畠氏のサイン会が近所で行なわれた時のこと、彼女は、ぜひ自分のグローブにサインを、と勇んで会場に出かけた（数日前から、彼女はかなりの興奮状態であった）。ところが営利主義のその会場の持ち主は、サイン用の色紙を売ろうと待ちかまえ、その色紙でないとサインはできないと言う。彼女はひるまず、強引にその場を突っ切り、めでたくグローブにサインしてもらっただけでなく、人に親しく話しかけられ、握手までしてもらって、ほとんど放心状態とも言えるほどの有頂天であった。そのグローブを、彼女が以前にもまして愛用しているのは言うまでもない。

彼女にとって、《野村克也のサイン》ではなく《中畠清のサイン》だからこそ、意味があった（ちなみに私は野村氏のほうがいい）。またそれを、《色紙》ではなく《自分のグローブ》に書いてもらったからこそ、彼女の喜びは大きかった。つまりは、《中畠清のサイン》が《自分のグローブ》に書かれたからこそ、彼女にとってサインの価値もグローブの価値もお互いに倍増したわけである。

これは、文字とうつわとの関係にもそのまま当てはまるだろう。文字を、紙や木簡では

なくわざわざうつわに書くからは、相応の理由があったはず。それを明らかにすれば、土器や文字にまつわるその時代の風俗や考え方も、より深く具体的になるに違いない。³⁸⁾

「酒杯」と書いた8世紀の土師器(→109ページ写真下段中央)が発見された。おそらく「酒杯」という呼び名の、酒を飲むためのうつわだろう。でもわざわざ土器にそう書いた理由は?よく似た形のうつわがほかにもあるから区別するためだろうか、それとも他の土器で酒を飲んじゃいけなかっただろうか、それとも……という具合に、深く、具体的に。

ただ、このように個々の墨書き土器について具体的な理由を考えても、立証はむずかしいし、ましてや墨書き土器全体の見通しにはつながりにくいだろう。それを差し引いても、文字をわざわざ土器に書いた理由を考えることによって、文字を読解するのと同じくらい多くの情報が私たちにもたらされるという希望は、捨てがたいものである。

土器に文字を書いた理由となる、当時の思想をつかみたいと思っていたが、どうやら私の手に余る大仕事のようなので、せめてその指標となるよう、私なりに土器と文字との関係を整理したものを述べて、結びとしたい。結局は、次の三つのタイプに集約できる。

- ① 土器中心型: 土器をまちがいなく使うために文字を利用したもの。特に文字でなくとも、記号やしるしで用は足りる。上述の「酒杯」のような例。しかし、整理や区別のための、純粋に便宜的なものは少数で、②の効果を兼ねるもののが多かったのではないか。
- ② 土器と文字との相乗効果型: 文字を書きこむことによって、その土器に別の意味を持たせたり、価値を高めたりするものや、土器と文字とが合わさって、はじめてなんらかの意味をもつものなど。先述の《サイン入りグローブ》に代表されるような例。
- ③ 文字中心型: 文字を書くために単に土器を紙がわりに利用したもの。土器と文字の間に、さしたる関係がない。手習いや落書きの類。

おそらく、墨書き土器のほとんどは、②に属するはずである。文字がまだ意志伝達の道具には至らず、何か意味のある記号やデザインにしかすぎないような場所では、この例が主体とならざるをえず、多分にまじない的な意味をもつたのではなかろうか。多くの人が文字を扱いこなす場所では、当然一般集落とは文字に対する考え方方が違うであろうが、「文字を上器に書き込むことによって、土器と文字とがお互いに付加価値をもつ、または用途が規制される」という図式は、不変のものと思う。

①③の例は、文字が普及している場所・文字を解する人がほとんどである場所でのみ、存在可能である。逆に、そのような人々がいる場所では土器の種類と量が豊富であったから、①③の例が生まれた、とも言えよう。

5 おわりに

「福」の墨書き須恵器を再報告し、ついでに、といつてはなんだが、墨書き土器研究の方向性について、なぜわざわざ上器に文字を書いたかという重要な疑問を解決するためには、文字の読解のみにとどまらず、文字と土器との相間に目を向けるべきだ、ということを述べたつもりである。K嬢のグローブに書かれた文字を見つけて、それを「中烟清」と解説し、「中烟清」がプロ野球選手であることをつきとめただけでは足りない。わざわざグローブに書いてある意味を考えてこそ、野球（ソフトボール）を愛し、かつ中烟選手を敬愛するK嬢の気持ちと努力が、報われようというものだ。

なお本稿の文章表現は、考古学の「専門用語」や「自明の理」に頼らずに、どこまで書けるか試みたものである。先学諸賢にはまどろっこしい表現が、多々あるものと承知しているが、その分、古代史になじみの薄い人には抵抗感の少ない文章になったと自負している。とはいっても、考古学用語なしで遺物や地層の堆積状況などを説明するというのは青息吐息のむずかしさで、専門語のぬるま湯にひたったまま、本質となるものの説明を巧みに避け不勉強をごまかしてきた自分を、いまさらながら反省する破目におちいった。

学术用語を使わぬことに関しては、反対意見があつて当然と思う。しかし、内容はさておいて、この文章を誰もが途中でくじけずに最後まで読み、理解してくれたら、それを考古学にとってマイナスであると主張する人は、おそらく少ないのである。

写真の転載にあたっては、奈良国立文化財研究所、京都府埋蔵文化財調査研究センターにお願いし、ご了解を得た。富山県埋蔵文化財センター、高麗山教育委員会からは、了解の上にさらに真のご提供をいただいた。

県内の墨書き土器は、防府市教育委員会の吉瀬勝康氏、山口市教育委員会の吉古信幸氏、美東町教育委員会の若木朝夫氏のお骨折りによって、直接見せていただくことができた。うち周防国御跡の一部と長亞御山跡の資料はまだ正式に報告されていないが、特に便宜をはかっていた。百谷園跡の須恵器も、小郡町公民館で見ることができた。周防御跡山跡の墨書き土器の写真撮影は、小田村宏・吉古信幸両氏に全面的に助力いただいた。

文章表現については、同僚の木村元治氏に助言をいただいたが、また、次の文献にたいへん勇気づけられた。やさしい文章を志す方は、ぜひ一読をお勧めする。

佐原鶴「考古学をやさしくしよう」（『京都府埋蔵文化財論集』第1集—創立五周年記念誌ー、和京都府埋蔵文化財調査研究センター、1987年）。

ご厚情をお寄せいただいた上記の機関・諸氏に、深くお礼申し上げます。

[注]

- 1) a 山口大学埋蔵文化財資料館『吉田構内大学会館新館に伴う発掘調査』『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』、1985年)。
- b 山口大学埋蔵文化財資料館『大学会館環境整備に伴う立会調査』(山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅵ、1986年)。なおこの調査は、「吉田構内大学会館環境整備に伴う試掘調査」(同書所収)に付随するものである。この試掘調査の報告と合わせて参照いただきたい。
- 2) 前掲注1) b 報告に記載のFig. 40-16 (66ページ) が当資料の墨書きされた底部である。

- 3) →前掲注1) a 報告。
- 4) 前掲注1) b 報告に記載の Fig. 40-14 (66ページ) が当資料の図録の一部であったことが判明した。
- 5) 番善土器研究の概要がコンパクトに取まつていて、入手がたやすいものとして、次の書籍が便利。
- 雄山閣出版株式会社「季刊考古学」第18号―特集・考古学と出土文字―(1987年)。下記のような論考を所収。
- 斎藤忠「考古学資料と文字―墨書き土器研究の意義―」、玉口時雄「文字資料研究の現状・墨書き土器―」。
- 6) 東河・北條の築造跡での墨書き土器の移り変わりは、律令体制の成立→改廐→崩壊という流れの中で、漢字の意義や、材という組織自体のありかたが変わっていくことに關係するとされる。
- a 長谷川厚「古代における文字資料研究の一試論―特に墨書き土器を中心として―」(『史報』第104冊、早稲田大学史学会、1981年)。
- b 吉岡康親「墨書き土器」(『東大寺新横江道跡』、松江市教育委員会・石川考古学研究会、1983年)。
- 7) 和歌山県橋本市鶴田八幡宮蔵の「癸未年」(443年、一説に503年)の人物画像鏡に、「立業存冥宮」という字がある。これが日本語を漢字で表わした義典の例とされる。漢字自体はずっと以前から日本に流入しているが(『漢委奴國王』の金印や『最初四年』銘の三角絆神獸鏡など)、日本語を書き表わしたものではなかった。
- 8) 仏教信仰は文化國家の證であり、仏教を理解するには經典を読むことが必要だった。
- 百済の聖明が仏教と經典を献じたこと(『元興寺縁起』)と『上宮聖德法帝垂誕』では538年、『日本書紀』では552年)をもって、仏教の正式な伝来とするが、其公式には以前より伝わっていた。
- 9) 高句麗の體善瓶が、嵇具耳環(體善用の石臼)の製法とともに伝えたという(『日本書紀』)。
- 其の歴史については、次の文献が簡便。
- 水野和雄「戰国時代の生活と經濟―文房具―」(『季刊考古学』第26号、特集・戰国考古学のイメージ、1989年)。
- 10) 611年に傳・藤原經義造、613年に藤原經義造、615年に法平軒義造を著した(上宮聖德太子伝福岡記)、620年には「天皇記及び同記、岸辺作造因造有八十部並びに公民等の本記」を錄したとある(日本書紀)。
- 11) 奈良堅藤原京跡。伝承爲板塗宮跡からの出土物が、今のところ最高のものである。
- 12) 山口縣では陶磁器の底に青く例が多い。土師器の底(内外)に書いた例は、かなり特殊を使われ方をしたものばかりで、たとえば防府市の中石出遺跡では、空町時代の建物の種持柱の穴に梵字を書き込んだ坏が9枚残っていたし、下関市の長門国分寺跡では、江戸時代の墓に、155後もの人名(光明皇后)「行基」「義隆」「大内義隆」「洞春様(毛利元就)」などを書いた坏が捨てられていた。儀式やまじない用と推定できる。
- a 山口市教育委員会・日本道路公社・建設省山口工事事務所「山陽自動車道・防府バイパス 下右田道路 第3次調査概報」(山口縣文化財調査報告第46集、1979年)。
- b 下関市教育委員会「長門岡田跡」(長門岡田周辺道路発掘調査報告書、1980年)。
- 13) 藤枝市都留美公社・藤枝市教育委員会「志太郡面跡(御子ヶ谷道路・秋谷道路)」(日本住宅公团藤枝地区埋蔵文化財調査報告書第2号、奈良・平安時代編一)、(1981年)。
- 14) 奈良國立文化財研究所「所長官跡発掘調査報告書」(奈良國立文化財研究所学報第十六集、1976年)。
- 15) 中村浩「和泉陶器窯跡の研究」(柏古房、1985年)。
- 16) 梅原邦彦・波田哲文「防長地城の須恵器窯跡と編年研究」(山口県の土師器・須恵器・集成と編年一)、周陽考古学研究会報3、(1981年)。
- 17) →前掲注16) 文獻。
- 18) a 三辻利一「西瀬跡出土土器の炭素X線分析」(『西瀬跡』、山口市埋蔵文化財調査報告第21集、山口市教育委員会、1986年)。
- b 三辻利一「小路遺跡出土須恵器の炭素X線分析」(『小路遺跡』、山口市埋蔵文化財調査報告第27集、山口市教育委員会、1988年)。
- 尚道路とも山口大学敷地と同様、萬葉川の左岸にあり、山口大学から直線距離にして西遺跡約2km、小路遺跡約1km。
- 19) a 前掲注16) 文獻。
- b 山口市教育委員会「周防鷹司跡」(1978年)。
- 根拠は、周防鷹司跡(→注30)の第1次調査(昭和40年度)で、百谷窯Ⅱ類Aのすぐあとに作られたⅢ類Bの須恵器が、「宗門私印」の押捺ある粘土板と一緒に見つかっていること、「宗門」が、周防守と

鉄鏡司長官を兼任していた安倍宗行をさすと考えられるので、その任期内の白銀7年～10年（865～868）が、粘土板と百谷窯Ⅱ類Bの須恵器の年代の目安とされる。これから、百谷窯Ⅱ類Aがその直前、9世紀半～中頃という推算ができる。

周防鉄鏡司跡は、百谷窯からの距離も4km足らずと近く、おそらく百谷窯の須恵器の大供給先であつたろう。

- 20) 住宅・都市整備公団首都圏都市開発本部、御千葉県文化財センター『八千代市北海道遺跡』（八千代地区埋蔵文化財調査報告書目、1985年）。
- 奈良・平安時代の住居全114軒のうち、48軒で墨書き土器が発見され、うち18軒に「富」の文字が見られた。
- 21) 奈良国立文化財研究所『平城宮出土墨書き土器集成』（奈良国立文化財研究所30周年記念史料（史料第25冊）、1983年）。第32次調査で見つかったもの。
- 22) 高槻市教育委員会「都家今城遺跡」（『鳴上郡衛他関連遺跡発掘調査概要・12』、高槻市文化財調査概要Ⅲ、1988年）。
- 23) 御京都府埋蔵文化財調査研究センター「谷内遺跡」（『考古学』、第7回小さな展示会一昭和62年度発掘調査の成果から一、1988年）。
- 24) 宮山県教育委員会「黒河尾日遺跡」（『都市計画街路』七美・大周山・高岡線内道路群発掘調査概要(5)、1987年）。
- 25) 山口大学理藏文化財資料館『市崎神崎1号線および間田神崎線の送水管理設に伴う立会調査』（『山口大学構内道路調査研究年報Ⅰ』、1987年）。遺物は山口市教育委員会に保管されている。
- 26) 当吉田遺跡の古代・中世については、次の文献をぜひお読みいただきたい。
森田孝一「周防国吉田における古代・中世の様相 吉田遺跡をめぐる諸問題」（『山口大学構内道路調査研究年報Ⅱ』、山口大学理藏文化財資料館、1985年）。
- 27) →前掲注1) の調査で発見。
- 28) 周防国の古代の役所跡。今の銀行。墨書き土器が載るのは次の報告。調査は継続中で、未報告のものもある。
a) 防府市教育委員会「周防国守跡昭和53年度発掘調査概要」（『防府市文化財調査年報Ⅱ』、1979年）。
- b) 防府市教育委員会「第28次調査（G-F地区）」（『防府市文化財調査年報Ⅲ』、1984年）。
- 29) 明確な律令時代の遺構は、墨書き土器を含んでいた人蔵だけである。→前掲注18) の文献の本論。
- 30) 平安時代の吉田の骨壺製造所。鉄鏡司は、天長2年（825年）に長門國から周防國に移された。11世紀頃には実際の機能はなくなったとされている。→前掲注19) 6文献。
- ただし墨書き土器は、上部器と報告されていたが、山口市文化財センターで見せていただいたところ、底盤の不十分なあっぽい須恵器であり、文字は底面だけではなく体部にも書かれていた。同様な色の須恵器が多く、第1次調査で上部器と報告されているものの中にはかなりの割合で須恵器が混じっていると思われる。
- 31) 奈良時代・東大寺の大仏を作るための銅は、この鋼山から採掘したものであり、「長登」の地名は、銅を輸上したうどびとして朝廷から賜った「金良登」の名に由来すると伝えられる（文献2）。
- 1988年に至り、東大寺境内の調査で人の骨遺跡が発見され、その銅のカスの成分にはヒ素が多く、長登鋼山産の銅に酷似するという分析結果が発表された（文献6）。さらに同年、長登鋼山跡の試掘調査が行われ、銅のカスの堆積に混じって多量の奈良時代の土器が発見され、そのなかに「人冢」の墨書き須恵器があつたわけである。吉東町大寺司が管轄するような施設があったと考えても決しておかしくない。
- a) 池田哲文「天長2年登見の須恵器について」（『塔ノ坂発掘調査報告書』、吉東町文化財調査報告第1集、吉東町教育委員会、1975年）。
- b) 池田哲文「奈良の大仏と長登鋼山」（『山口県地方史研究』第59号、山口県地方史学会、1988年）。
- 32) 天平13年（741年）の聖武天皇の発願により、建廟に造営された宮寺のひとつ。墨書き土器を含んでいた性格不明の溝状構造は、この開創以前のものとされる。
- 神鋼興産株式会社・下関市教育委員会「長門国分寺」（長門国分寺周辺遺跡発掘調査報告書目、1988年）。
- 33) →前掲注26) の論文。
- 34) 佐々木経が、古都郡の「保佐」と加富保の「保佐」を幕府から任命されたという記事（三浦文書）が最初である。
- 35) 特に、第2学生食堂建設時には、古墳時代を中心とする多数の遺構・遺物が発見され、律令時代の大溝もある。
- 36) おもなものは、前掲注5) 文献の中で取り上げてあるので、そちらをご覧下さい。

注

- 37) →前掲注6) 参考など。
- 38) 木簡も、紙がかなり普及した鎌倉・室町時代には、紙の代用品としての意識が薄れて、紙とは明確に使い分けられるようになっていたらしい。材質としての木の技術が、木簡の記載内容や用途に影響したという。
水野真「木に墨書きすること—中世木簡の用例ー」(『史学雑誌』第93巻第11号、史学会、1984年)。
- 木のメリットは、持ち運びに便利なこと、耐久性があること、風雨にさらされても文字が消えないことなどで、そのため特に荷札や墨札、立て札など、要するに不特定多数の人間に伝達したい時に使うことが多かったといふ。
- 『なぜ紙ではなく木に文字を書いたのか』という疑問の答えとして納得のいくものであるし、それを根拠にして、文書として現存している法令などが、どの地域・どの階層の人々にまで実際に伝達されたのか。という社会的な問題が、実は木の札(木簡)の発掘という考古学的手法を用いて立証できる、という考えにまで至っている。文字と木簡を見る視点として、墨書き器にそのまま当てはめることはできないが、たいへん興味深い。
- 39) むしろ、たわむれに文字を書き込むことは、うつわに死を与えることになり、書かれた時点でそのうつわはうつわとしての機能を失う。とする考え方もある。エッセイ的小文のため論証には乏しいが、示唆に富む。
水野正好「文字と器と—その文脈の世界」(『前略』8号、奈良大学考古学研究会、1982年)。

山口大学構内遺跡調査要項

山口大学埋蔵文化財資料館規則

(設置)

第1条 山口大学に山口大学埋蔵文化財資料館（以下「資料館」という。）を置く。

(資料館の業務)

第2条 資料館は、学内の共同利用施設として、次の各号に掲げる業務を行なう。

- 一 山口大学構内等から出土した埋蔵文化財の収蔵・展示および調査研究
- 二 山口大学構内等における埋蔵文化財の発掘調査並びに報告書の刊行
- 三 その他埋蔵文化財に関する必要な業務

(運営委員会)

第3条 資料館に関する事項を審議するため、山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会（以下「委員会」という。）を置く。

2 委員会に関する規則は、別に定める。

(館長)

第4条 資料館に館長を置く。館長は委員会の議を経て学長が委嘱する。

2 館長の任期は2年とし、再任を妨げない。

3 館長は、資料館の業務を掌理する。

(調査員)

第5条 資料館には調査員若干名を置く。

2 調査員は、委員会の議を経て館長が委嘱する。

3 調査員は、資料館の業務を処理する。

(特別調査員)

第6条 埋蔵文化財に関する特別な分野の調査研究を行なうため、資料館に特別調査員若干名を置くことができる。

2 特別調査員は、委員会の議を経て館長が委嘱する。

(雑則)

第7条 この規則に定めるもののはか、資料館に必要な事項は別に定める。

山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会規則

(趣旨)

第1条 この規則は、山口大学埋蔵文化財資料館規則（以下「資料館規則」という。）第3条第2項の規定に基づき、山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会（以下「委員会」という。）に關し、必要な事項を定めるものとする。

(審議事項)

第2条 委員会は次の事項を審議する。

- 一 山口大学埋蔵文化財資料館（以下「資料館」という。）に関する基本的なこと。
- 二 資料館の管理運営に關すること。
- 三 資料館の整備充実に關すること。
- 四 資料館の運営に要する経費に關すること。
- 五 その他必要な事項

(組織)

第3条 委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- 一 資料館規則第4条第1項の館長
- 二 各学部および教養部の教官各1名
- 三 事務局長

2 前項第2号の委員は、それぞれの部局の推薦に基づいて学長が委嘱する。

(任期)

第4条 前条第1項第2号の委員の任期は2年とし、再任を妨げない。

(委員長)

第5条 委員会に委員長を置き、委員の互選とする。

2 委員長は委員会を招集し、その議長となる。

(幹事)

第6条 委員会に幹事を置き、庶務部長、経理部長及び施設部長をもって充てる。

(委員以外の出席)

第7条 委員会が必要と認めるときは、委員以外の者を委員会に出席させることができる。

(事務)

第8条 委員会の事務は、庶務部庶務課において処理する。

(雑則)

第9条 この規則に定めるものほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員会が定める。

Tab. 10 山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会委員

(昭和62・63年度)

部局名	氏名	官職	任期	備考
医学部	黄基雄	教授	62.4.1~平元.3.31	委員長・館長
人文学部	中村友博	助教授	62.5.29~平元.5.28	
教育学部	三浦肇	教授	62.4.1~平元.3.31	
経済学部	及川順	教授	62.4.1~平元.3.31	
理学部	村上清文	助手	62.4.1~平元.3.31	
工学部	島 故史	教授	62.4.1~平元.3.31	
農学部	藤田則之	教授	62.4.1~平元.3.31	
教養部	木村忠夫	教授	62.4.1~平元.3.31	
事務局	大谷巖 有地成光	事務局長 事務局長	60.12.1~ 63.3.30 63.4.1~	

Tab. 11 山口大学埋蔵文化財資料館特別調査員

学部等	氏名	官職	専攻科目等	備考
人文学部	中村友博	助教授	日本考古学	昭和62・63年度
教育学部	三浦肇	教授	地理学	昭和62・63年度
理学部	松本徳夫	教授	岩石学	昭和62・63年度
農学部	勝本謙	助教授	植物分類学	昭和62・63年度
工業短期大学部	池谷元伺	教授	年代測定	~昭和62年5月20日

山口大学構内の主な調査

Tab. 12 山口大学構内の主な調査一覧表

吉田構内

調査年次	調査実施地区名	構内地図番	地點	面積 (a)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和41年	第一地区 A・B 区	L・M・N-15	1	30?	柱生型火葬床・柱穴	灰生土器、土器器、瓦	事前	調査担当 小野忠熙	①
	第二地区家畜廐新宮	S・T-19 R・S-20	2	2.000	溝、柱穴	灰生土器、土器器、瓦質土器、瓦質土器	*	*	
	第三地区	P・Q-19-20	3			灰生土器、土器器	試掘	*	
	第五地区木々ヶ谷	S-10	4	300	柱生床・上塙、古墳型火葬床、中核住居跡・溝	灰生土器、土器器、瓦質土器、陶器	事前	*	
	第六地区	S-T-9-13	5				試掘	*	
昭和42年	第二地区 稲刈区	R-20	6	1,100	稲刈	灰生土器、土器器、瓦質土器、瓦質土器、瓦質土器	事前	*	
	第四地区南区	G-H-22-23	7		河川跡、柱穴	磚文土器、灰生土器、木器、石器	*	*	
	第四地区北区	I-J-20-21	8	1,400	壁穴住居、溝、上塙、柱穴		*	*	
	第五地区東南区	H-23 I-J-K-24	9		柱生型火葬床	灰生土器	*	*	
	第五地区野球場	J-22-23 K-22-23	10		中核柱穴	瓦質土器	試掘	*	
	第五地区学生食堂	I-J-19-20	11			灰生土器、古墳型火葬床	事前	*	
	第五地区	H-I-J-K- L-M-N- 18-20	12		河川跡、柱穴、土壇	灰生土器、土器器	試掘	調査担当 山口大学吉田遺跡調査会	
	第六地区C区 大学本部新宮	K-L-14	13	600	壁穴住居、溝、上塙	土器器、瓦器、瓦質土器	事前	*	
昭和44年	第五地区教育学部				河川跡	灰生土器、土器器、瓦	試掘	*	
昭和45年	第一地区D区第1地点	K-13	14		溝	灰生土器、木底屑	*	*	
	第一地区D区第2地点	L-13	15			灰生土器、土器器、瓦質土器	*	*	
	第一地区D区第3地点	L-M-13	16		壁穴住居、土壇、柱穴	土器器	*	*	
	第一地区D区第4地点	M-N-13	17		柱生型火葬床、溝、上塙	灰生土器、土器器、瓦質土器、石器	*	*	
	第一地区D区第5地点	L-13	18		溝	灰生土器	*	*	
	第一地区D区第6地点	M-13	19		古墳型火葬床、灰生	灰生土器、土器器、石器	*	*	
	第一地区D区第7地点	M-13	20		溝	灰生土器	*	*	
昭和50年	第六地区E区 第2学生食堂新宮	N-O-15	21	900	柱生・古墳型火葬床住居、上壇、溝、柱穴	灰生土器、土器器、瓦質土器、瓦質土器、石器、瓦製品	事前	*	
昭和51年	第六地区F区					灰生土器	試掘	*	
	第六地区G区				溝・柱穴	灰生土器、土器器、瓦	*		

文献① 山口大学吉田遺跡調査会「吉田遺跡発掘調査報告」1976年

調査年次	調査名	構内施設類	地 点 (m)	地 質	遺 物	調 査 区分	備 考	文 獻
昭和53年	人文学部校舎新宮	M・N-21	22	180		試掘	調査担当 改築委員会	未刊
	教育学部附属施設	A・B・C・D・E 20-24	23	400	清、土壤 縄文土器 弥生土器	*	山口大学附属文化財資料室・山口市教育委員会	
昭和54年	理学部校舎新宮	O-18・19	24	250		*		
	農学部動物生物学	P-18・19	25	380		*		
昭和55年	本部管理棟新宮	L-14	26	740	清、土壤、柱穴、小 豆井戸、土器窓、住 居跡	事務		
	経済学部校舎新宮	K・L-21	27	70		*		
昭和56年	農学部農業機械測定施設新宮	Q-15	28	50	清、土壤	*		
	本部	E・F-15・16 F-20・21 G・H-12・19	29			立会		
昭和57年	農学部	L・M-12・13 N・O・P-10-12 P・Q-17・18	30			*		
	教育学部校舎新宮	H-19	31	400	弥生堅穴住居、土壤、 清、柱穴	事務		年報1
昭和58年	教育学部新宮	H-16	32	100	清	*		
	教育学部新宮	J-19・20	33	130	旧河川、清、柱穴	縄文土器、弥生土器、 須恵器、土器窓	*	
昭和59年	正門 搬運新宮	H-11	34			立会		
	時計場所改修	I-14	35			*		
昭和60年	本部構内施設	K-14	36			*		
	農学部構内施設	I-16・17	37			*	工法等変更	
昭和61年	構内構造道路舗装	J・K・L・ M-15 M・N-16	38			*		
	農学部中央整備	O-17	39			*		
昭和62年	理房施設改修	D-16	40			*	工法等変更	
	学生部文化会館新宮	L-8	41			*	工法等変更	
昭和63年	学生部馬場整備	M・N-8・9	42			*		
	図書館書庫増設	M-16	43	600	弥生-古墳清、土壤、 柱穴、柱列	弥生土器、土器窓、須 恵器、石器	事務	年報2
昭和64年	大学会館新宮	M-14・15	44	130	弥生堅穴住居、清	弥生土器	試掘	
	教育学部附属施設	B-22	45	800			立会	
昭和65年	教育学部附属施設 天候室等本館新宮	O-18	46	2			*	
	農業部貯販室新宮	K・L-17	47	100			*	
昭和66年	農業部中央整備	J・K-16	48			*		
	大学会館新宮	M・N-13	49	2,000	古墳時代、土壤、柱 穴、中灰層(?)、断 面建物	弥生土器、土器窓、須 恵器、輪動施設、圓 筒形器、瓦質土器、九 字形、綠釉陶器、木簡、 竹筒	事務	年報3
昭和67年	学生部馬場新宮	G・H-19	50	120	弥生溝、弥生-古墳 堅穴住居、土壤	弥生土器、土器窓、石 器	*	暫定区域は工法変更による現地保存

調査年度 昭和 年	調査名	調査地区(部)	高 度 (m)	地 質	遺 物	調 査 区分	備 考	文 獻
	理学部大学院社会考古 学門・専門・臨時直場 および正門花壇調査	M・S-20 O-19・20	51	410		文化		年報 目
	学生部アーチチャーリー 場の台、電柱設置	H-1-23 I-12・13 J-13	52	180		*		
	学生部各委員会	M-8	53	30		*		
	学生部野球場 敷水栓取戻	L-7	54	2		*		
	学生部野球場整備	J-21 K-22	55			*		
	教養部環境整備	I-16・17 J・K-17・18	56	80		*		
	学生部テニスコート改 修	C-18 D-17 E-16	57	12		*		
昭和 59年	人文学部ケーブル布設	N-12・14	58	160	弥生土器、柱穴	弥生土器	季節	
	大学会館排水管布設	K・L-13	59	180	弥生～中世遺物、瓦 含層、古墳土壙、古代 ～中世土壙、柱穴	弥生土器、古墳、瓦 土器	*	
	学生部テニスコートフ ェンス改修	B-17・18 C-16・19 D-15・17 E-15・16	60	25	古墳以降の遺物包含 層	上部器	試掘	年報 N
	経済学部新木移築	K-19・21	61	8			*	
昭和 60年	大学会館環境整備	L-14 L・M・N-15	62	592	弥生～中世遺物包含 層、弥生型穴住居、 石蔵穴、土壙、古代 ～近世土壙、溝、柱 穴	弥生土器、古墳、瓦 土器、輪入器、國家 陶磁器、土瓶器、石器、 原石、瓦器、甕等	試掘	年報 V
	経済学部環境整備 (樹木移植)	K-22 L-20	63	5			文化	
	農芸学部農場整備 (樹木移植)	R-16・19	64	30	古代末～中世河川跡	漆器、上部器、輸入 陶磁器、輪口、石器、 瓦等	*	
	農芸学部農場農場整 理	V-15・16	65	325			*	
	教育学部附属環境整備 (樹木移植)	I-3-19・20	66	430			*	
	中央ボイラー換算止 歛	O-P-16	67	2.5	埴輪器		*	
	大学会館環境整備 (樹木移植)	L-M-15	68	9	弥生土器、土瓶器、圓 窓器、石器、瓦石、鐵 器		*	
	文油燃成設置	J-20・N-14 O-18	69	3			*	
	数学部解説文書整理整備 (樹木移植)	P-Q-17・18	70	16			*	
	理学部環境整備 (樹木移植)	N-20・21	71	4			*	
	農芸学部附属農場整備 装置	S-T-19	72	270			*	
昭和 61年	国際交流会館西宮	N-22・23	73	70	弥生～古墳河川跡 中世～近世溝	弥生土器、上部器、漆 器、瓦片、甕、輪入器、 陶磁器、鐵器、上部器 のある割引	試掘	年報 目
	山口銀行現金自動支 払機設置	I-3-19・20 (車路埋設)	74	11	包含層(河川跡か)	弥生土器	文化	

調査年	調査名	構内地図	地點	面積 (ha)	遺 墓	遺 物	調査区分	備 考	文獻
昭和 61年	農学部附属農場遺跡 調査	S-20 U-19	75	165	中井溝、柱穴	土器、瓦質土器	立会	工事等変更	年報 11
	農学部附属農場遺跡 調査 (施設ボーリング)	L-10 Q-15・16	76	2				*	
	正門横(校内)城多 軒 取	I-10	77	0.25	包含層か			*	
	経済学部附属農場 (木移築・記念碑付)	M-20	78	3				*	
	吉田 樹 内 交 運 機 池 取	H-22, J-9, P-22, M-20, W-16	79	3		埴輪器	*		
	市道神崎上弓削おお び間田寺母娘の込水 埋蔵		80	2,100	古墳・古代溝、古代 河川跡、坑、生牛骨 含留	朱牛土器、土器器、埴 輪器(器内のあるもの 含む) 丸瓦土器、瓶底 土器、石斧、板石		山口市教育委員会・山口 大学埋蔵文化財資料館	
	教育学部附属農場付 近地盤改良および 排水等 計画	K・L-18	81	3.5				*	
	教育学部身体障害者用 スロープ取設	L-15・16	82	3				*	
	経済学部敷水施設設	L・M-20	83	4				*	
	吉田構内泳泳プール 改 修 等	P・F-16 H-15	84	26.5	包含層			*	
	農学部附属農場 水 池 計 画	S-12	85	3				*	
	吉田構内汚水排水管 整 修 改 修	M-18 O-15・16	86	15.5		土器質土器		*	
	本部身体障害者用ス ロープ取設	L-14	87	12				*	
	経済学部身体障害者 用スロープ取設	K-20 L-18-20	88	88	溝生・古墳柱穴			工事等変更	
	研究会用施設物置換 用スロープ取設	L-16	89	8		朱牛土器		*	
	教養部37番教室改修	K-16	90	1				*	
昭和 62年	教育学部附属農場教育実践 研究指導センター新設	K-18	91	240	上塙、往穴、溝	プランク、削器、植物 遺体	事前		年報 12
	教育学部複合棟 延長	J・K-17・18	92	35	埋糞土堆、溝、柱穴	土器器、埴輪器、土器 質土器、石斧	試掘		
	教養部宿場整備	I・J-16	93	30	溝状遺構	朱生土器	立会		
	教育学部複合棟新設	J・K-17・18	94	900	鳥之穴、河川跡、第 六代住居、土堆、溝、柱 穴、埋糞土堆、柱 立柱遺物跡、谷状遺 構、柱穴	縄文土器、土器器、第 六代住居、土堆第十一基、 柱穴、埋糞土堆、柱 立柱遺物跡、谷状遺 構、石斧、木製品	事前		
	九田川河川改修	B・C-17	95	20			立会	教養・山人博文	
	国西交差点整備	M-23 N-22-23	96	195				*	
	教育学部附属藍海学校 白松半葉移設	L・N-12	97	45				*	
	農学部附属農場付近地 盤改良および排水施設 整備	L・K-12	98	45	中井土壤層か	朱牛土器、土器器、活 土器、輸入白磁、困難 器器、板石		*	
	農学部植栽	N-17	99	3				*	
	経済学部敷水施設取	K-20	100	0.5				*	

小串構内

調査年度	調査名	構内地図番	地點	面積 (m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和58年	医学部体育館新設	1	260			土師器、瓦質土器、石器	試掘		年報Ⅲ
	医学部図書館新築	2					立会		
	医学部体育館新設	3	1				*		
昭和59年	医学部浴場改修新設	4	44	近世溝		土師器、瓦質土器、磁器	事前		年報Ⅳ
	医学部体育館新設	5	65			土師器、瓦質土器、磁器	*		
	医学部施設整備 (特高受電変電設備)	6	28			動物遺体(其の2)	試掘		
昭和60年	医学部臨床講義棟・ 講義用別室新設	7	38				*		年報Ⅴ
	医学部外来診療接客室	8	409			土師質土器、瓦質土器、 陶磁器	*		
	医学部基礎研究検所新設	9	11			近世陶器	*		
昭和61年	医学部看護部宿舎改修	10	25			近世陶磁器	立会		年報Ⅵ
	医学部看護部宿舎改修	11	26				*		
	医学部施設整備 (木工室)	12	40				*		
昭和62年	医学部附属病院外來 診療接客室新設	13	5				*		年報Ⅶ
	医学部附属病院外來 診療接客室新設 (衛生管理課)	14	18				*		
	医学部附属病院新設	15	6				*		
昭和63年	医学部附属病院新設	16	104			陶器、ナイフ形石器、 礫石刀核	試掘		年報Ⅷ

常盤構内

調査年度	調査名	構内地図番	地點	面積 (m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和58年	工学部校舎新設	1	70			須恵器	試掘		年報Ⅸ
	工学部圖書館増築	2	70				*		
昭和59年	工学部尾山宿舎 木工室新設			29			立会		年報Ⅹ
	工学部尾山宿舎舞弊 取締			65			*		
昭和60年	工学部受水槽施設改修	3	1.5				*		年報Ⅺ
	工学部尾山宿舎排水 改修			6			*		
昭和61年	工学部体育練習場用 スローライブ取締	4	29				*		年報Ⅻ
	精算処理センター (運営セシヨン) 空調設備取締	5	30				*		

龜山構内

調査年	調査名	構内地区割	地点	面積 (m ²)	遺 墓	遺 物	調査区分	備 考	文献
昭和58年	教育学部附属山口小・幼稚園運動場整備	1	60	古墳時代灰陶、清状遺物	土器、酒器、丸瓦、石製品、木製品	試掘			年報Ⅳ
昭和60年	教育学部附属山口小学校改修水栓改修	2	1				立会		年報Ⅴ
	教育学部附属山口中学校改修ワード整備	3	2				*		
	教育学部附属幼稚園運動場整備(樹木移植)	4	1				*		
昭和61年	教育学部附属山口附属学校内水道水管改修	5	57 中世土器 河川跡 柱列	37 20	绳文土器、弥生土器、上階器、他器、瓦質土器、瓦器、上砂質土器、陶器、不明焼製品、竹器、剣竹、植物遺体		*		年報Ⅵ
	教育学部附属山口小学校電柱改修	6	0.5				*		
昭和62年	教育学部附属幼稚園運動場草刈整備	7	40				*		年報Ⅶ

光構内

調査年	調査名	構内地区割	地點	面積 (m ²)	遺 墓	遺 物	調査区分	備 考	文献
昭和58年	教育学部附属光小学校白石車両場新設	1	五代～近代石器		陶器、瓦質土器、瓦		試掘		年報Ⅳ
昭和59年	教育学部附属光小・中学校建物新設	2					立会		年報Ⅴ
昭和60年	教育学部附属光小学校待合改修	3	1		土器		*		年報Ⅵ
昭和61年	教育学部附属光小学校記念堂改修(アーチス後建)	4	2.5		土器、須恵器		*		年報Ⅶ
昭和62年	教育学部附属光中学校ラジウム浴場改修	5	2		弥生土器、上階器、瓦質土器、上砂質土器、五		*		年報Ⅷ

その他の構内

調査年	調査名	所 在 地	单 点	面積 (m ²)	遺 墓	遺 物	調査区分	備 考	文献
昭和59年	学生宿舎・ト朝華合宿修業所整備	宇都宮市小野澤		0.5			立会		年報Ⅸ
	学生宿舎コート整備	古河郡秋田町					*		
昭和60年	熊野丘陵湯器取扱	山口市熊野町	1	7			*		年報Ⅹ
昭和61年	海田宿改修水管改修	山口市海田温泉	35	板			*		年報Ⅺ
	延泊学部宿舎下水管改修	山口市延泊通り	1	7	土器質土器	瓦	6号宿舎 2号宿舎		年報Ⅻ

* 昭和41年以降、吉田構内においては主事に際し、隨時継続的に調査を実施しているが、昭和52年以前の吉田道路調査用の調査分については調査名をすべて把握しているわけではなく、注意されたい。

Summary

This report accounts the results of archaeological researches in fourteen in excavated areas located on campus in 1987.

As Appendix, it carries four papers, Radiocarbon Dating, Plant seed and Pollen analysis of the soil in Yosida campus, and "remains writing in ink".

Yamaguchi University Archaeological Museum was established as part of the crossfaculties public facilities of the University in 1978. We refer to a plan from the conference of the Management Committee first and gain appooval. We then carried out the reseach in relation to the construction work on campus. That's why our reserches are helpful to reconstruct the past society, environment and so on.

The current year we carried out researches as follow :

1. Researches on the Yoshida campus

(1) Excavation in relation to the Practical Education Center at the Faculty of Education

We found a pit, some post holes dating from the Yayoi to the Kofun period and two pits in the Edo period, and so on. In addition to these remains, We have been able to discover some stone implement made of obsidian from Hime island, Oita Prefecture. We have obtained a new evidence which was buried some layers containing artifact in the late Jomon period on the Yamaguchi basin. In the soil under this layering there were buried many remains of plants and seeds. It seemed that the river flowed in the eastern part. By plant seed analysis and pollen analysis of the soil, it is presumed to have been wet fields round here in those days.

(2) Excavation in relation to the construction of the new Lecture building at the Faculty of Liberal Arts

We uncovered a river, pitfall some ditches in the late Jomon period and four dwelling pits, two rivers daiting from the Yayoi to the Kofun period, and also four constructions, two wells, three pits contained jar and so on. In this Prefecture, There is a precious case of excavation about the ruins in the Jomon period. Particularly a pitfall which exists along the river more than 29 meters in breadth, is valuable features to make clear environments and hunting pattern. In addition to these features we found artifacts in the late Jomon period, it will be possible to discover features and layers contained ones by results of volcanic ashes analysis.

Some constructions with wells and pits contained jar in the Edo period, is a good features to clarify to clarify the arrangment of the structure, the kind of village and organized ones. Furthermore it is worthy of notice to have discovered Haji ware imitated from Sue ware and ones with writing in ink.

(3) Examinations under construction

We found a ditch unknown to time as for examination under construction in relation to the laying drain pipes under ground on the Lecture buildings at the Faculty of Liberal Arts, two rivers from the Yayoi to the Kofun and before then in regard to the construction and laying the purifier on the International Hall. Especially we uncovered a pit regarded as a grave by quantitative analysis of Phosphoric Acid and Calcium under repair on the University Farm.

2 . Researches on the Kogushi campus

(1) Soundings in relation to the construction of the new ward at the University Hospital.

We found many stone implements such as knife tools, scrapers, flakes made of Obsidian, Chert, Tuff and so like in the Paleolithic, but could not find any pottery. These remains contained in the same soil tells us for the technique of production for stone implements in those days. Some layers contained such artifacts were distributed in south part, it was confirmed that these layers accumulated in the direction of southern area still more.

(2) Examinations under construction

We carried out the examination under construction in relation to the repair of the parking under University Hospital, we could not find any artifact.

3 . Researches on the Kameyama campus

As for an extension of the play room in the Kindergarten, we could not find any artifact.

4 . Researches on the Hikari campus

As for a extension under construction in relation to the repair of the net around the ground, we could not find any artifact in the part. But, on the beach of Mitarai Bay in front of this campus we picked up many Haji wares, ceramic roof tiles and so on from the Kamakura to the Edo period.



Fig. 77 山口大学吉田構内地図および調査区位置図

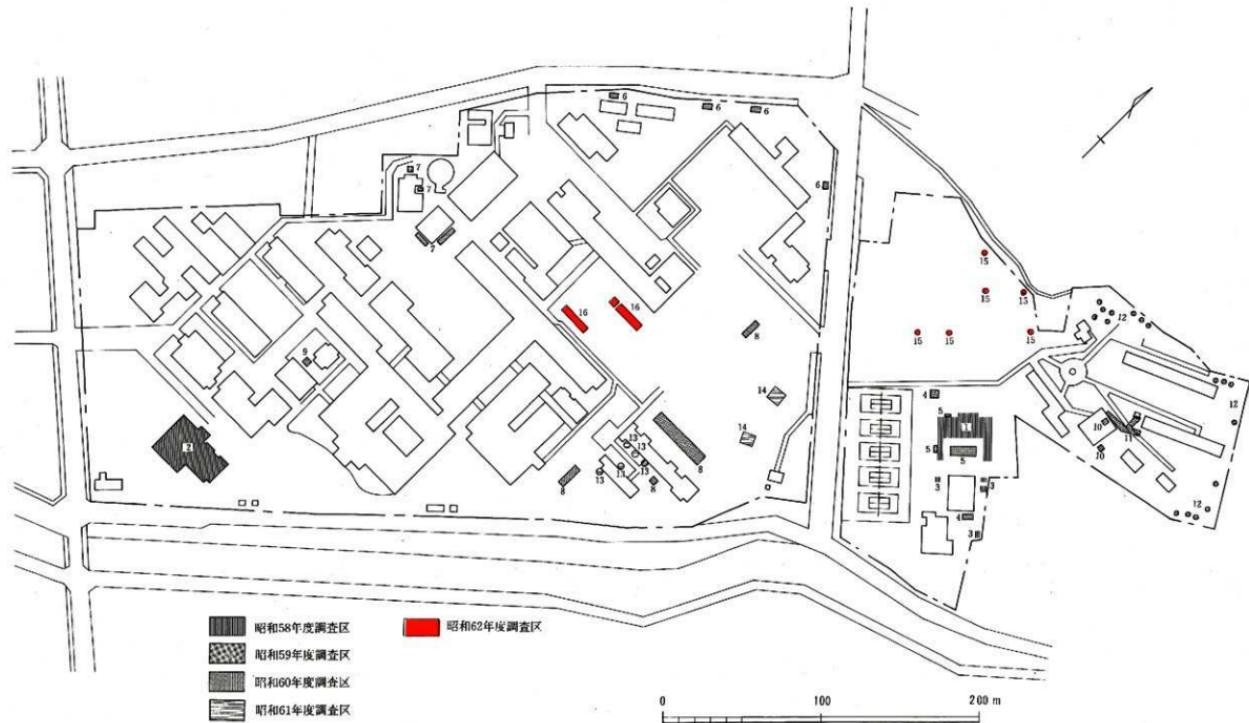


Fig. 78 山口大学小串構内調査区位置図

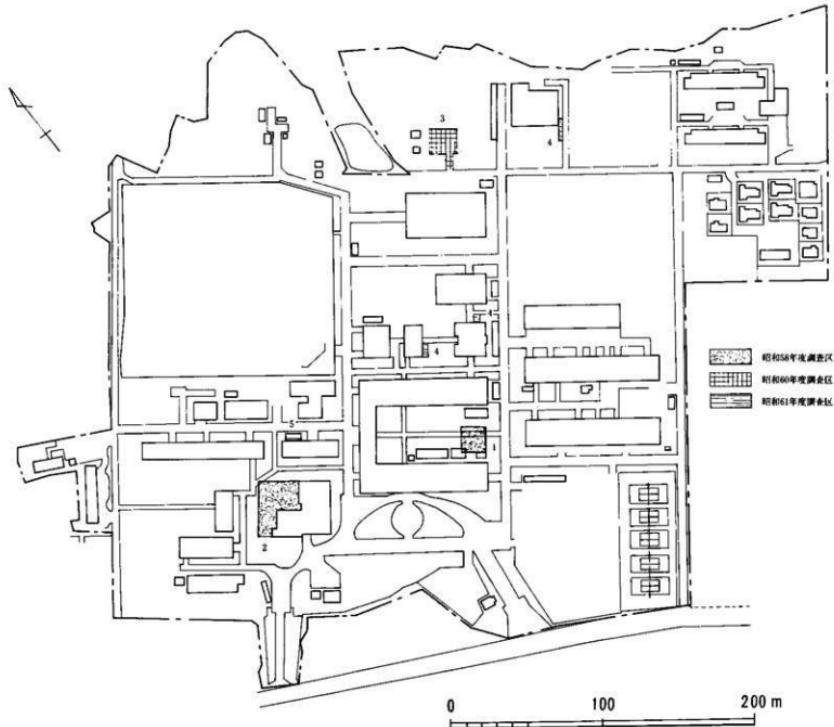


Fig. 79 山口大学本館構内調査区位置図

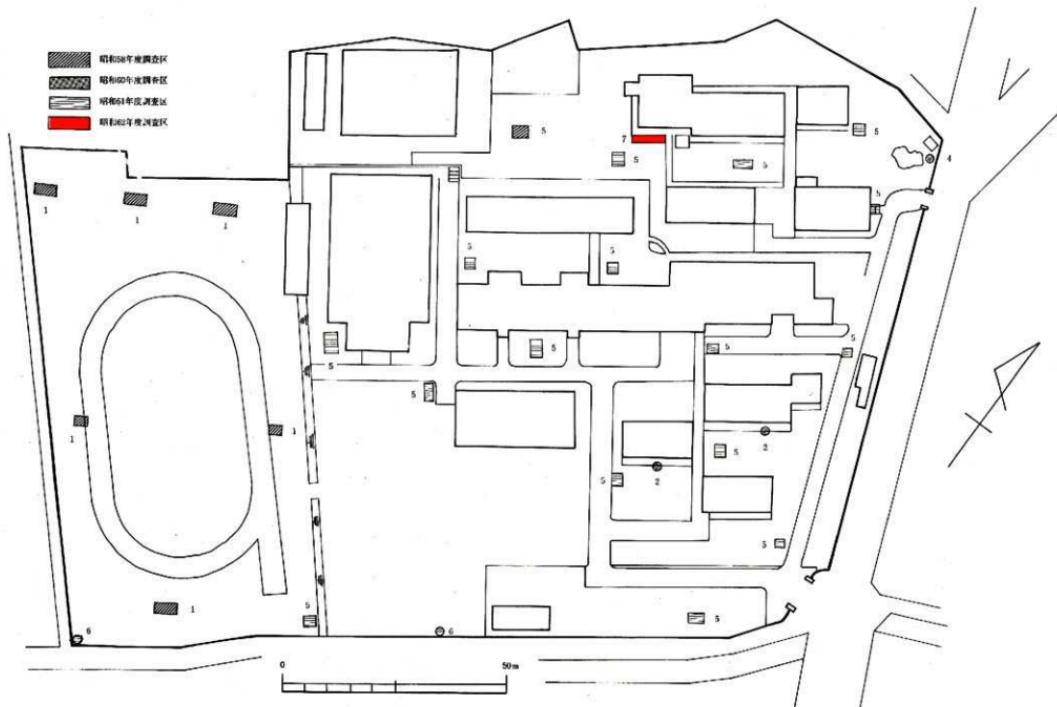


Fig. 80 山口大学龜山構内（幼稚園・小学校部分）調査区分図

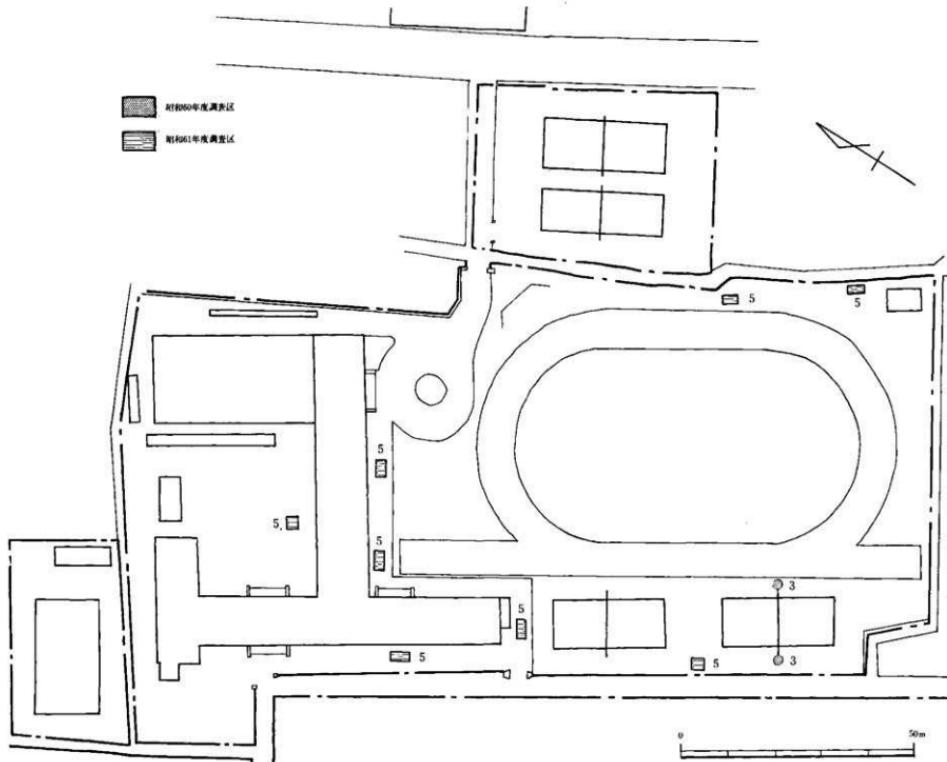


Fig. 81 山口大学龜山構内（中学校部分）測量区位置図

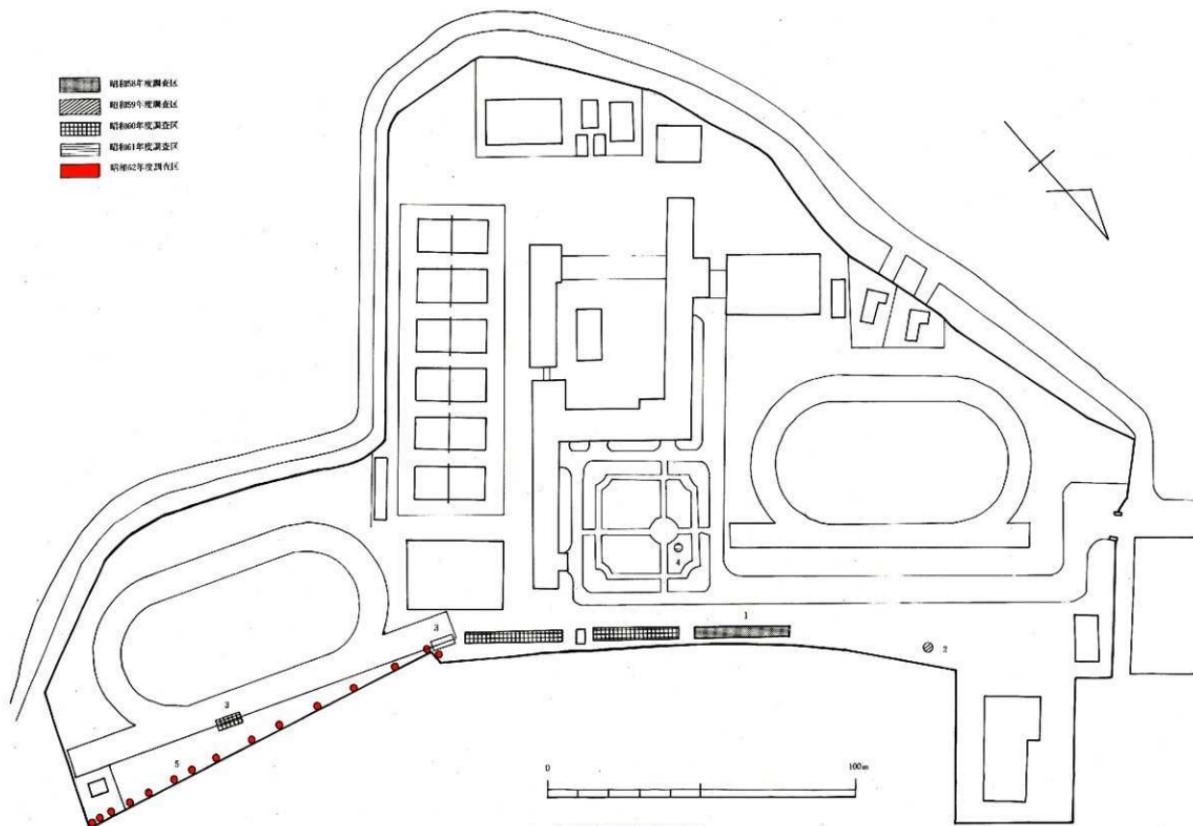


Fig. 82. 由口大学光塔内调查区位置图



Fig. 77 山口大学吉田構内地図および調査区位置図

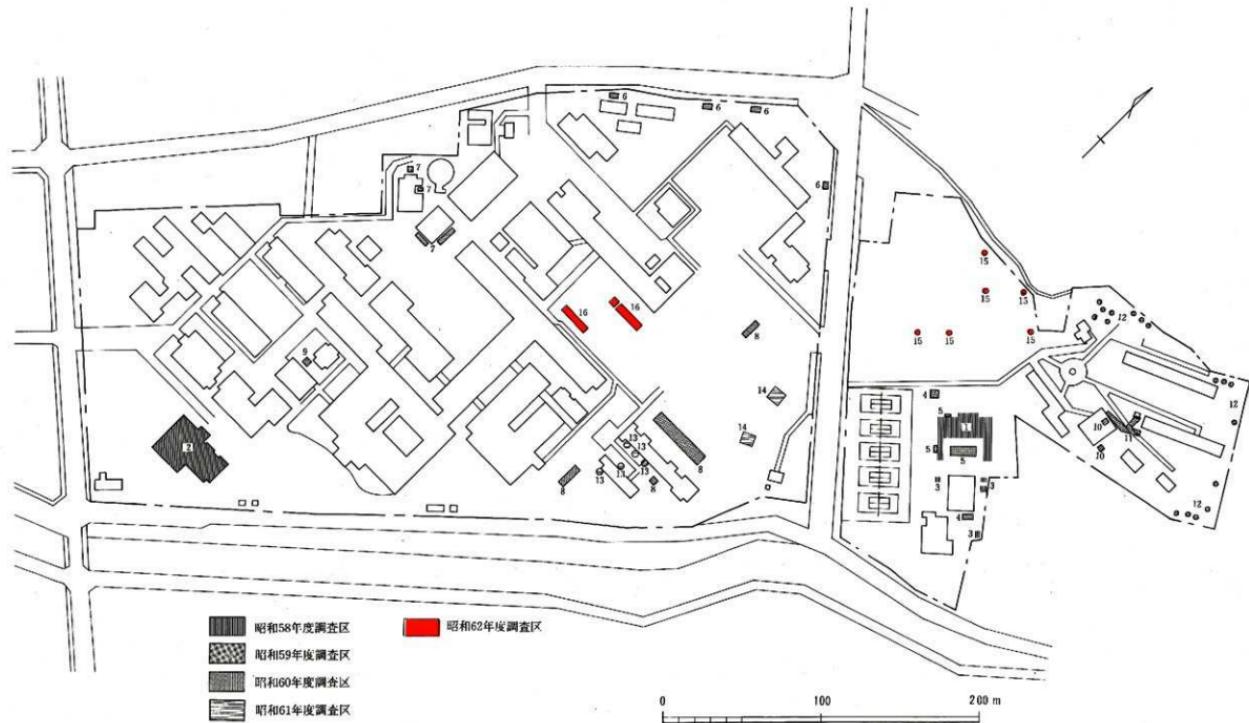


Fig. 78 山口大学小串構内調査区位置図

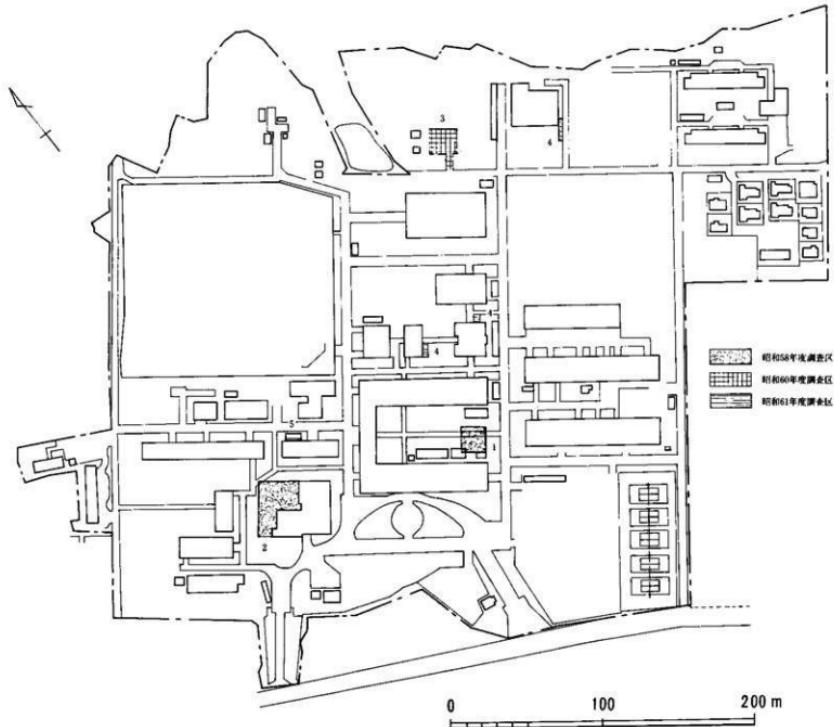


Fig. 79 山口大学本館構内調査区位置図

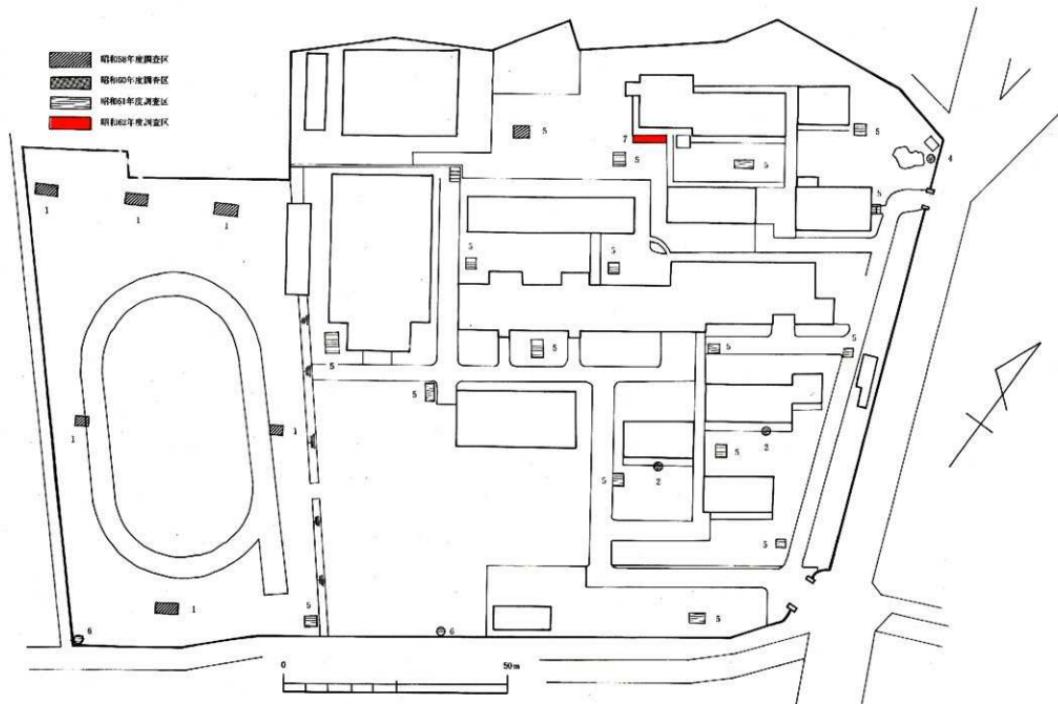


Fig. 80 山口大学龜山構内（幼稚園・小学校部分）調査区分図

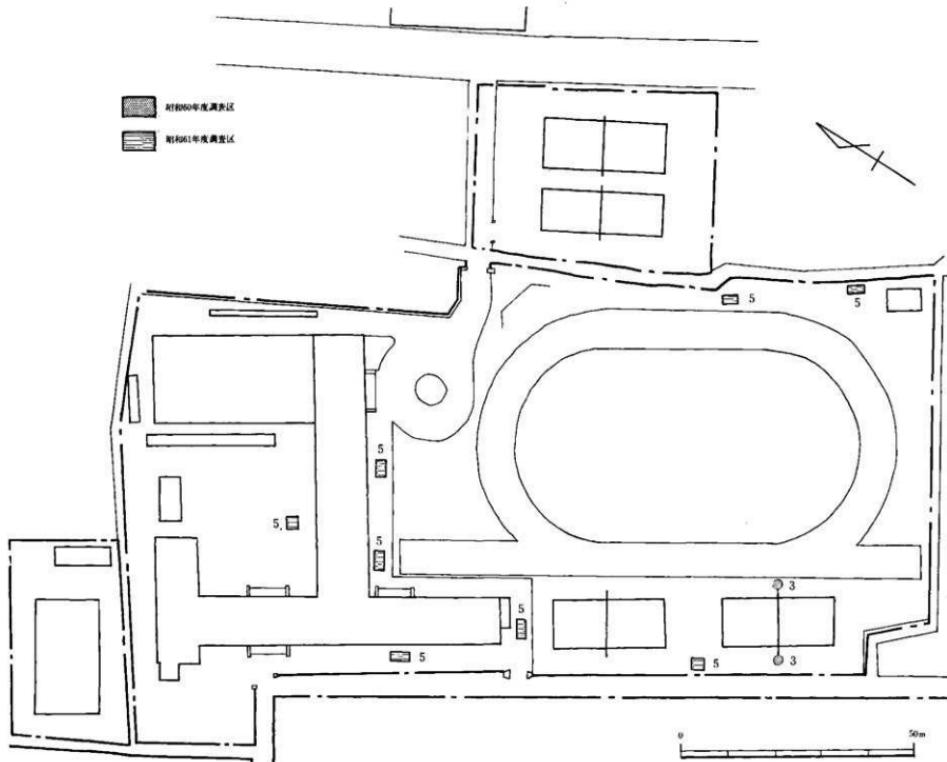


Fig. 81 山口大学龜山構内（中学校部分）測量区位置図

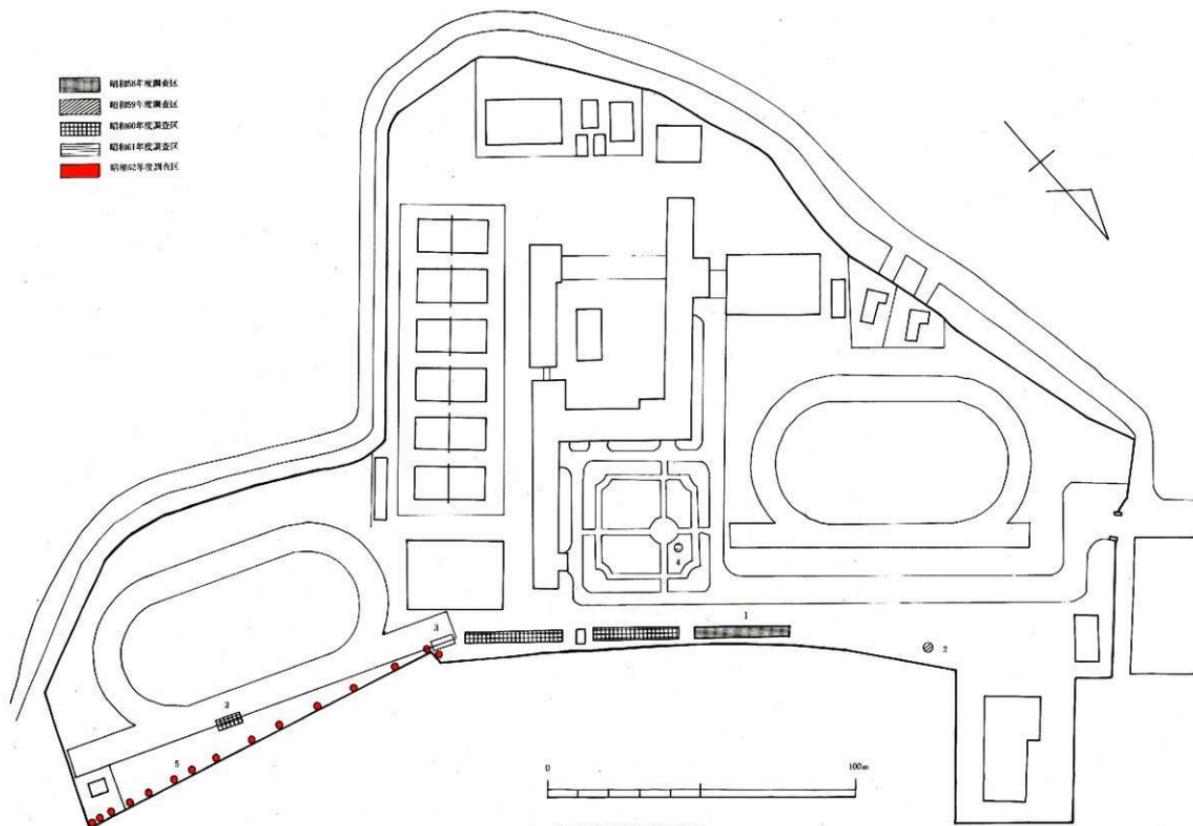
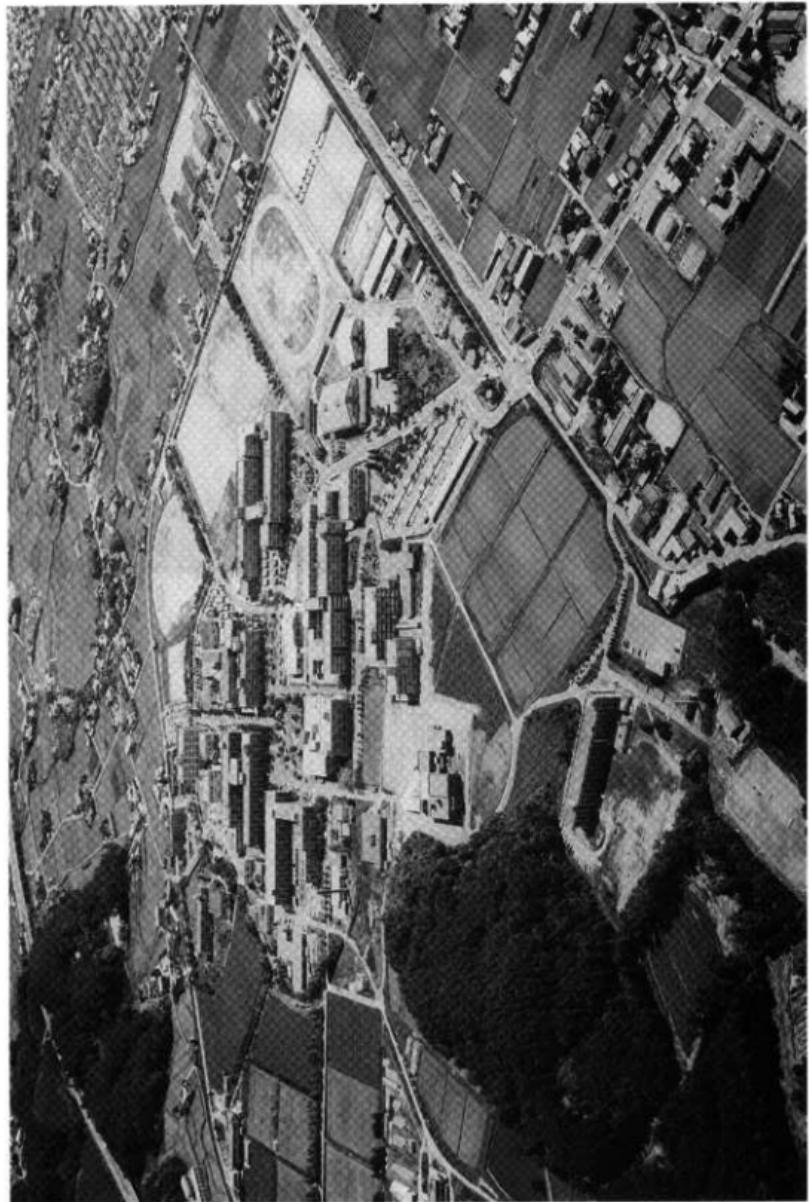


Fig. 82. 由口大学光塔内调查区位置图

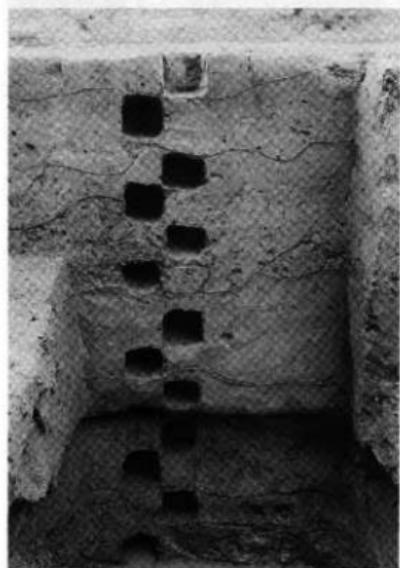
PLATES

吉田構内全景（北西から）





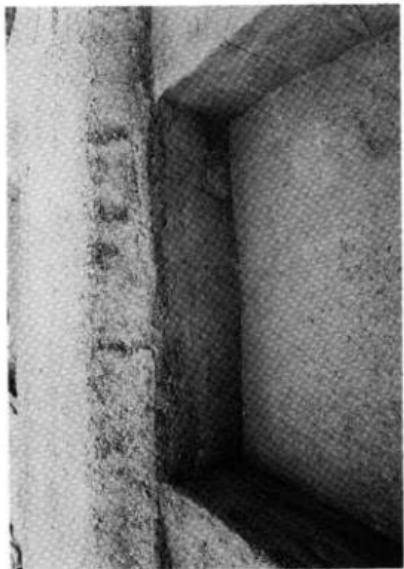
(1) 調査区全景(東から)



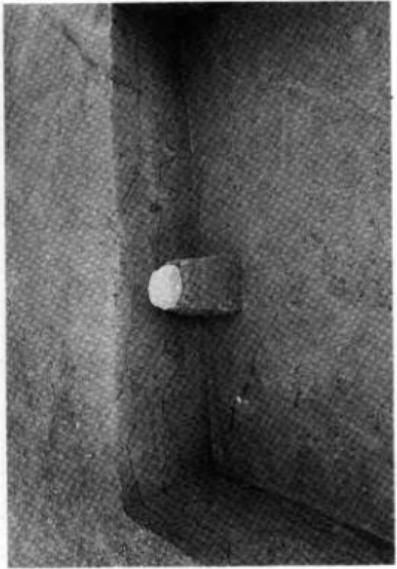
(2) 1 グリッド北壁土層断面(南から)



(3) 4 グリッド西壁土層断面(東から)



(1) 2グリッド南壁土層断面(北から)



(2) 3グリッド南壁土層断面(北から)



(3) 1グリッド遺物出土状況全景(東から)



(4) 1グリッド遺物出土状況(南から)



(1) グリフド植物遺体出土状況(西から)



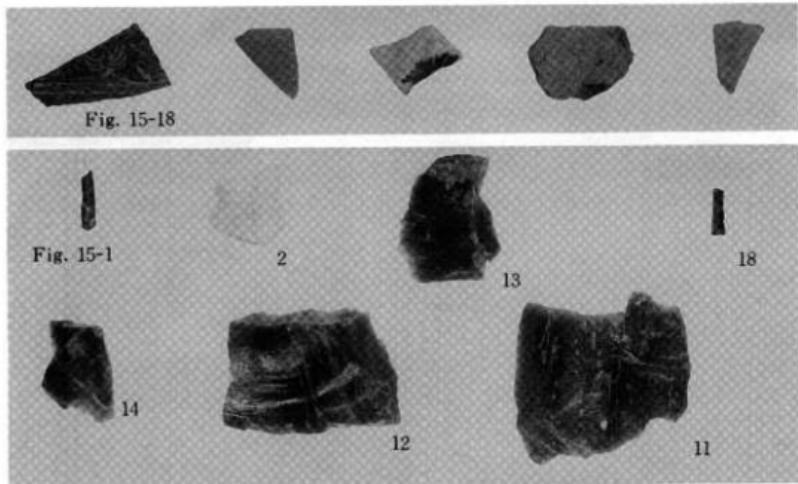
(2) グリフド植物遺体出土状況(西から)



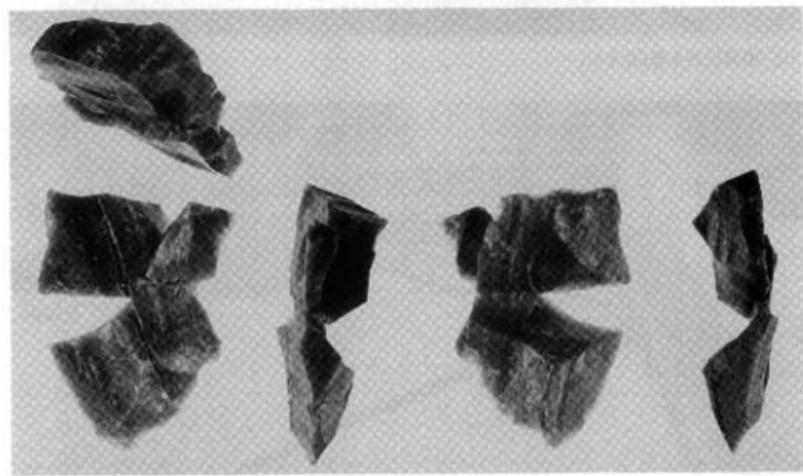
(3) グリフド植物遺体出土状況(西から)



(4) 調査風景



(1) 出土遺物



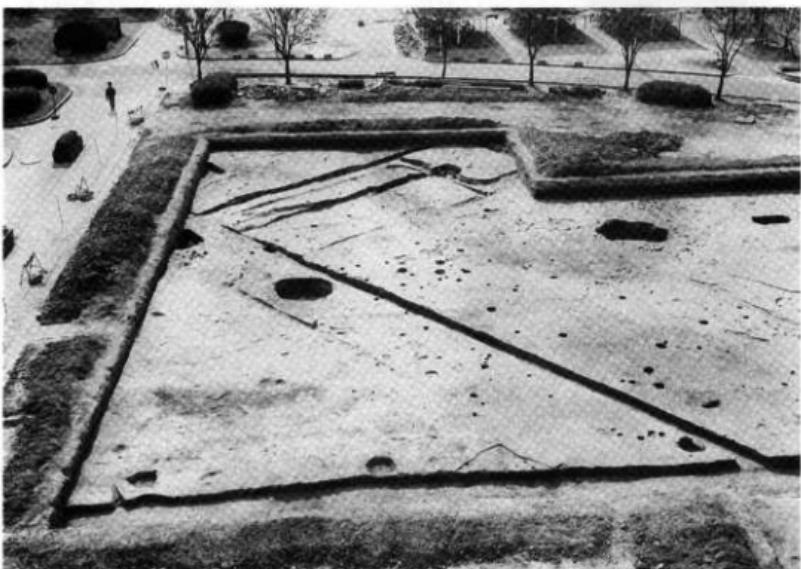
(2) 接合資料(11+12+14)

PL. 6

吉田構内教養部複合棟新設に伴う発掘調査(1)



(1) 調査区西半部(北から)



(2) 調査区東半部(北から)



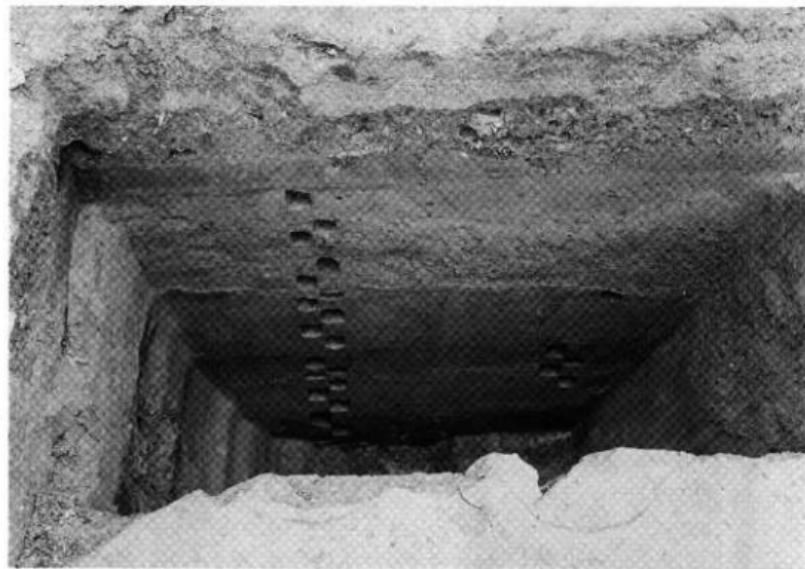
(1) 調査区北端部(北から)



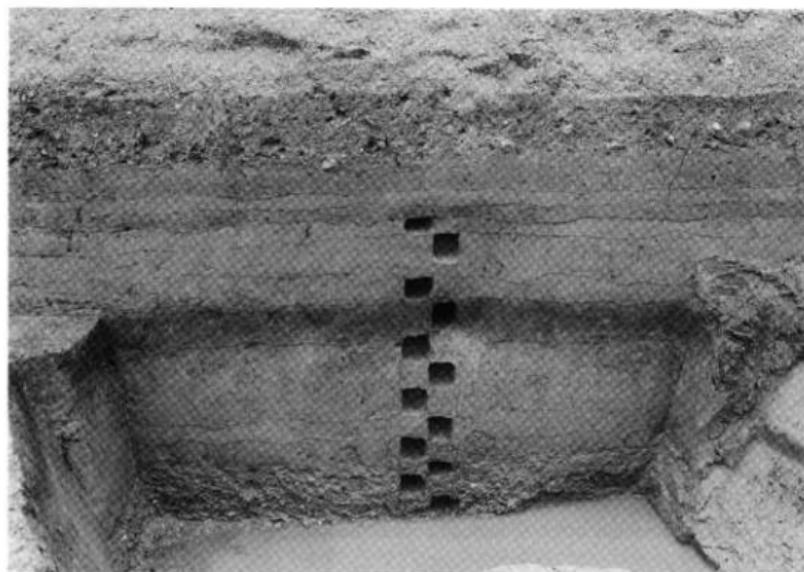
(2) ベントレハナ河三路(西から)

PL. 8

吉田構内教養部複合棟新設に伴う発掘調査
(3)



(1) A - B 壁土層断面(東から)



(2) C - D 壁土層断面(北から)



(1) 落し穴検出状況(西から)



(2) 落し穴全景(西から)



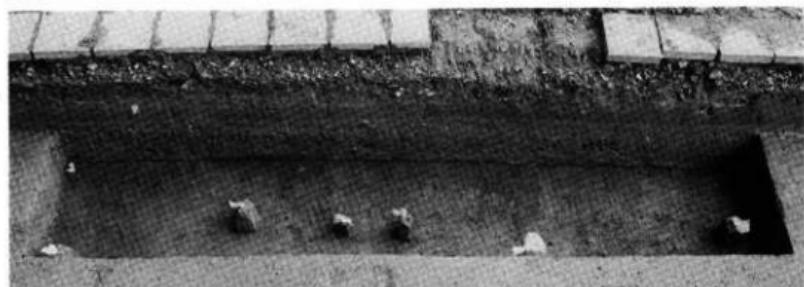
(1) A トレンチ遺物出土状況(東から)



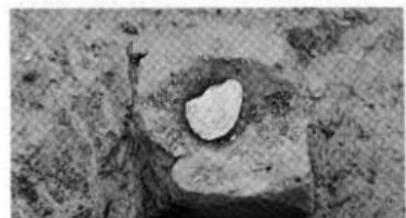
(2) A トレンチ遺物出土状況(東から)



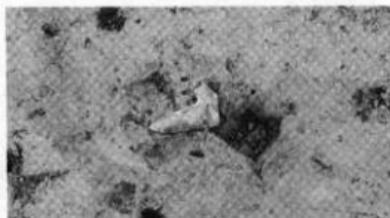
(1) B トレンチ全景(北から)



(2) C トレンチ全景(西から)



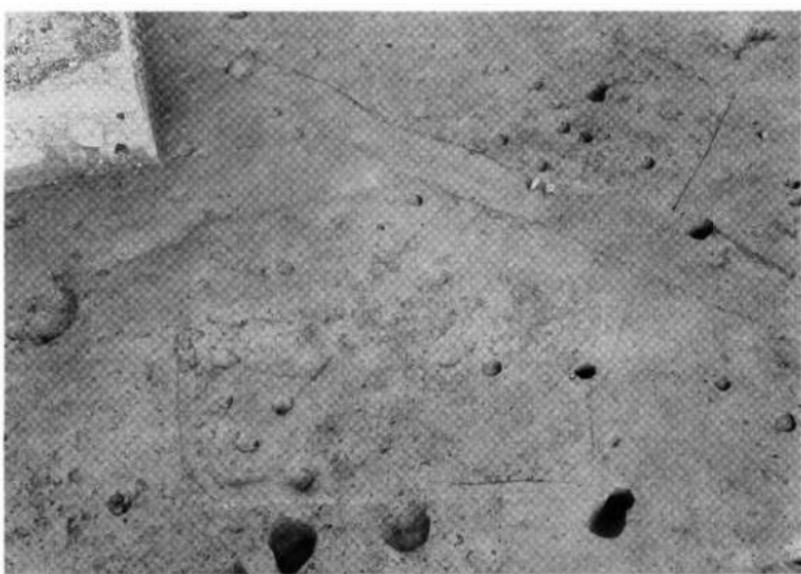
(3) A トレンチ石斧出土状況(北から)



(4) 包含層石器出土状況



(1) 第1～3号竪穴住居跡検出状況(北西から)



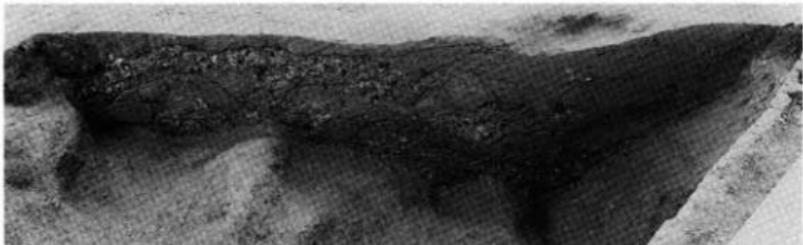
(2) 第1・3号竪穴住居跡(西から)



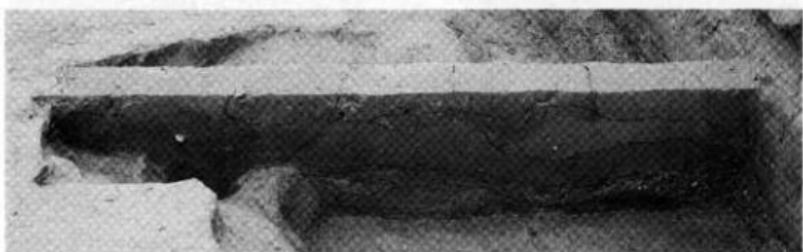
(1) 第4号竪穴住居跡検出状況(北から)



(2) 第4号竪穴住居跡(西から)



(1) 第1号河川跡土層断面(東から)



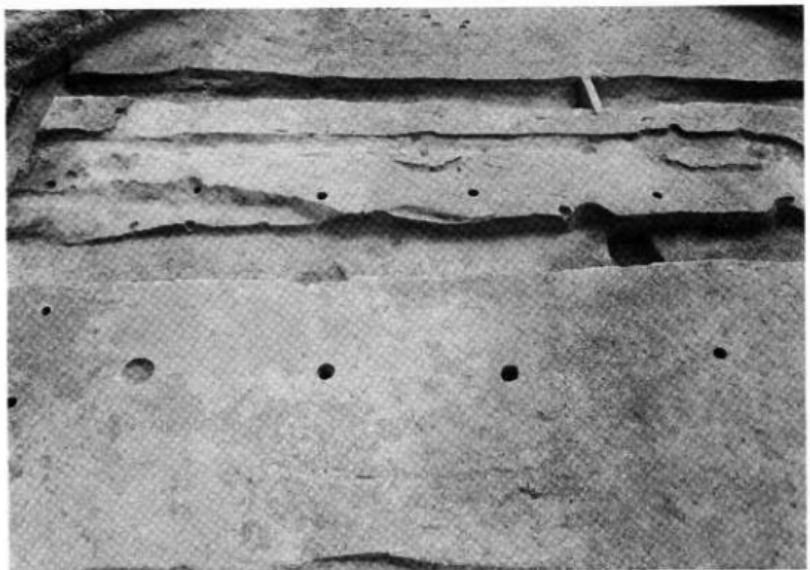
(2) 第2号河川跡土層断面(北から)



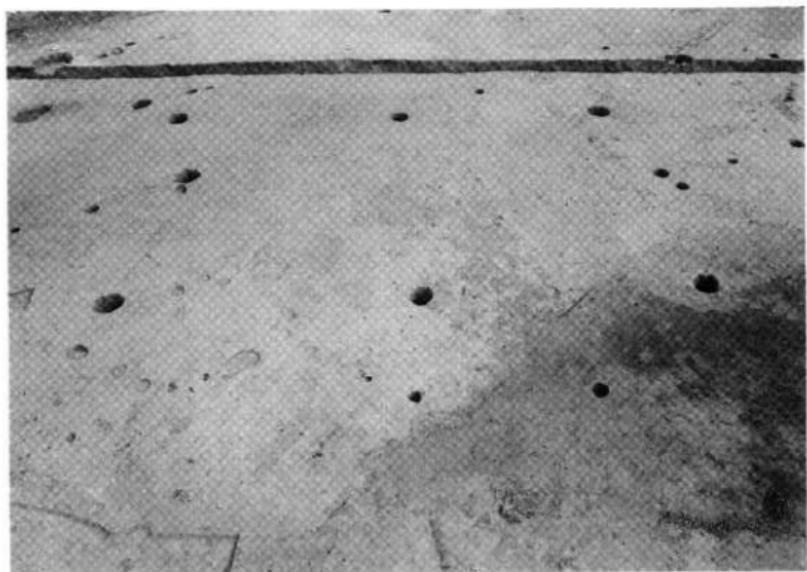
(3) 第1号河川跡石斧出土状況(南西から)



(4) 第2号河川跡石鎌出土状況(南から)



(1) 第1号掘立柱建物跡(北から)



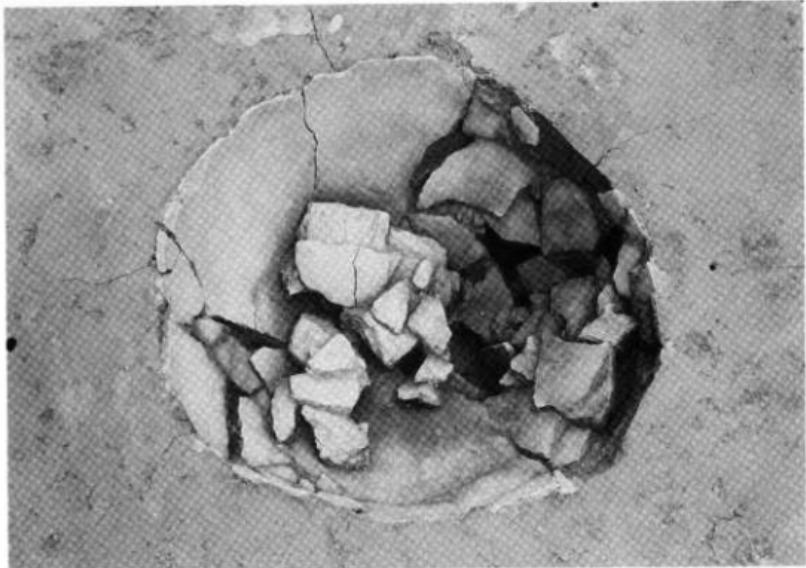
(2) 第2号掘立柱建物跡(西から)



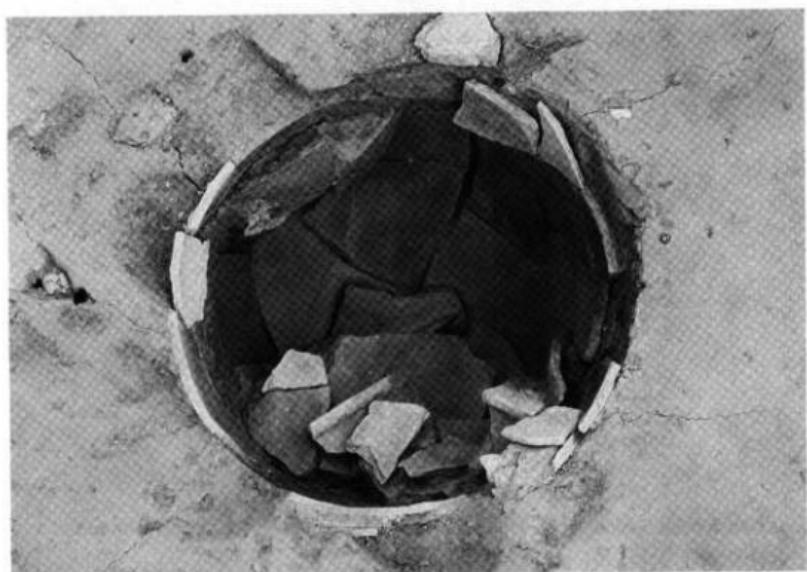
(1) 第1号井戸(東から)



(2) 第2号井戸(東から)



(1) 第2号埋甕土壤(西から)



(2) 第3号埋甕土壤(西から)

PL. 18

吉田構内教養部複合棟新宮に伴う発掘調査
(13)



Fig. 22-1



Fig. 23-1



2



3



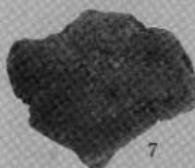
4



5



6



7



8



9



10



Fig. 25-1



2



3



4



5



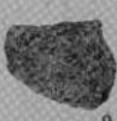
6



7



8



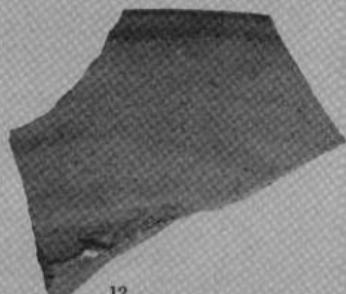
9



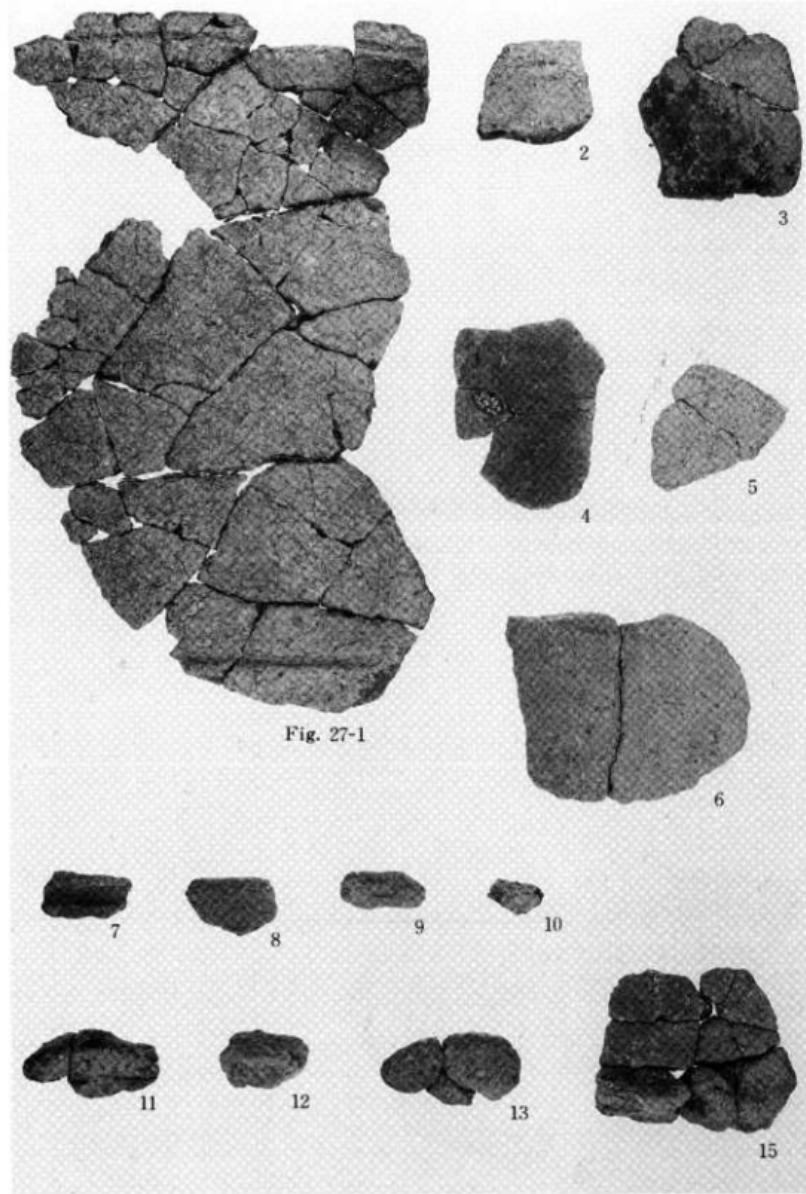
10



11

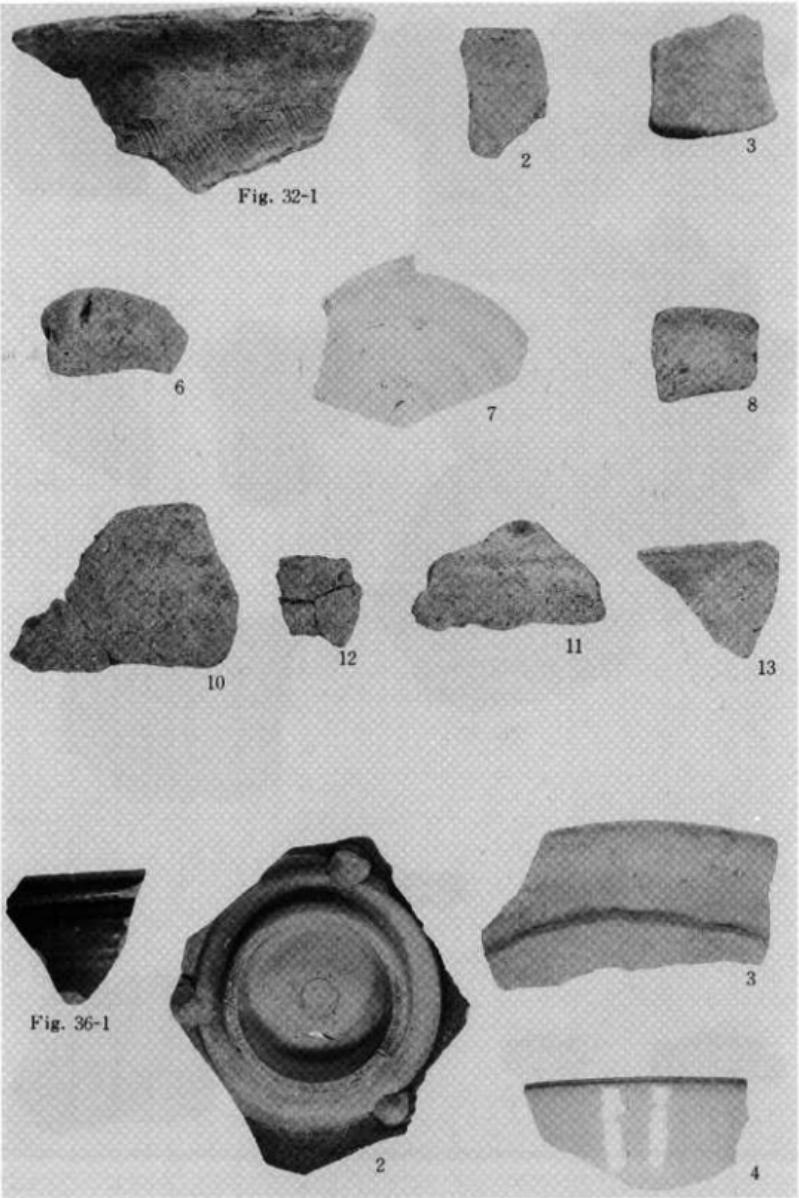


12



PL. 20

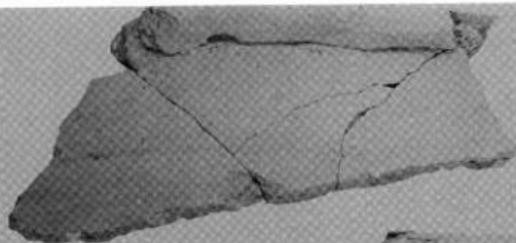
吉田構内教養部複合棟新宮に伴う発掘調査
(15)



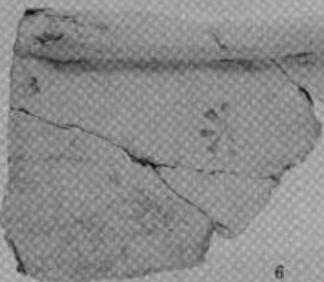
出土遺物 (3)

吉田構内教養部複合棟新嘗に伴う発掘調査(16)

Fig. 40-1



5



6



Fig. 41-1



3



4



5



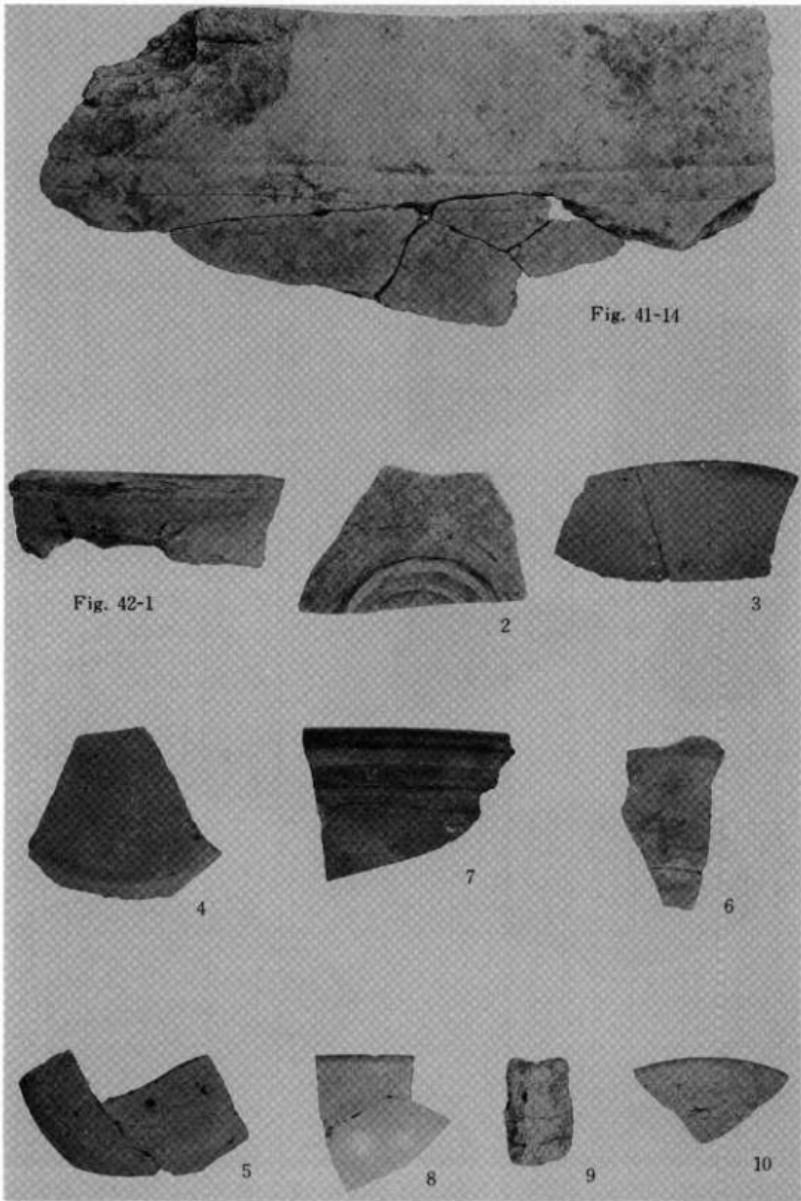
6



7



10



出土遺物 (5)

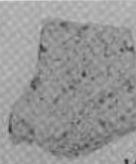
吉田構内教養部複合棟新營に伴う発掘調査(18)



Fig. 22-2



Fig. 25-13



14



15

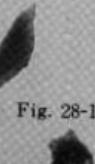


Fig. 28-1



17



19



20



24



25



16



2



21



22



Fig. 32-9



Fig. 32-14



16



17



15



18



Fig. 25-26



Fig. 28-5

PL. 24

吉田構内教養部複合棟新嘗に伴う発掘調査
(19)

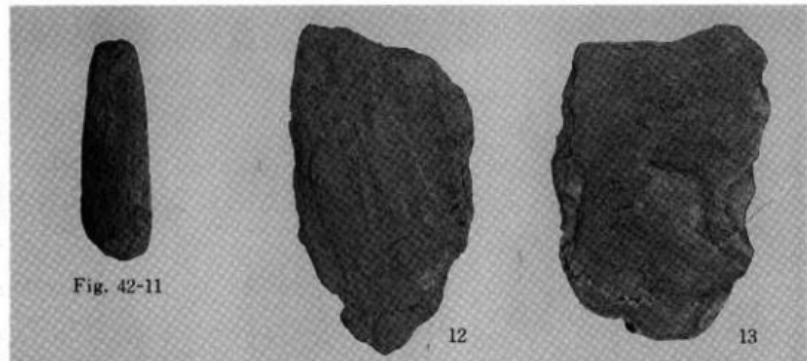


Fig. 42-11

12

13

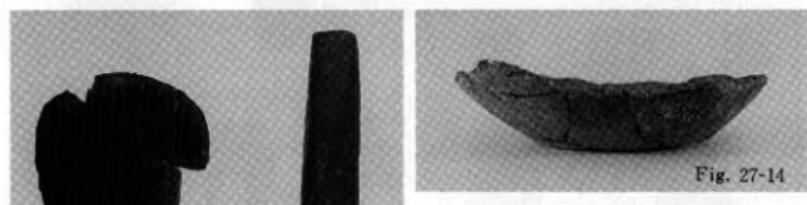
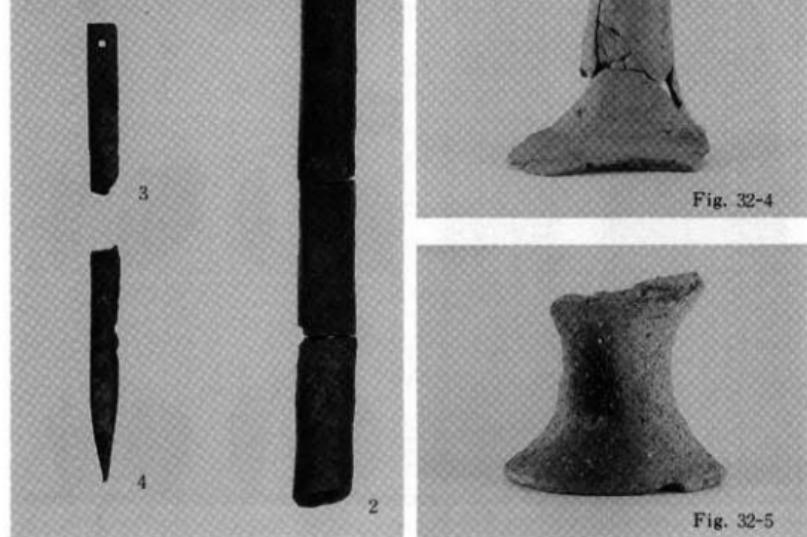


Fig. 37-1

Fig. 27-14



3

4

2

Fig. 32-4

Fig. 32-5



Fig. 36-5

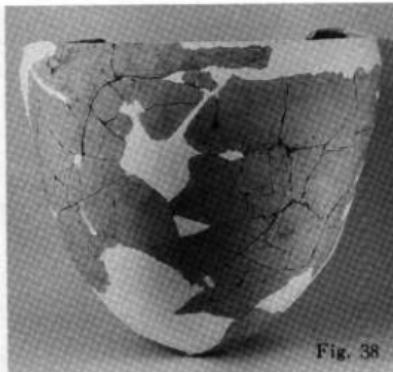


Fig. 38



Fig. 40-3

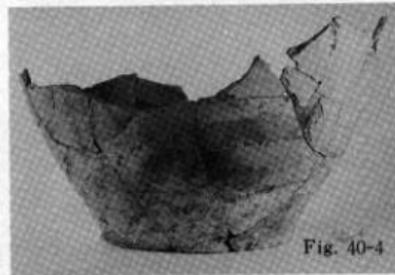


Fig. 40-4



Fig. 41-9



Fig. 41-11

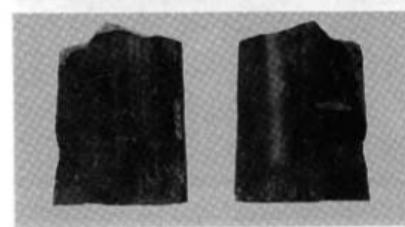


Fig. 41-2

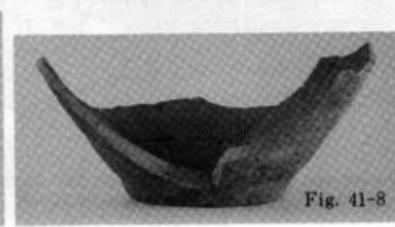


Fig. 41-8



小串構内(医学部・医療技術短期大学部キャンパス)全景(南西から)

小串構内医学部附属病院病棟新嘗に伴う試掘調査(1)



(1) Aムムハナ全露(西から)



(2) Bトレンチ全露(東から)



(1) Aトレンチ西壁全貌(西から)



(2) Aトレンチ東壁(東から)



(3) Aトレンチ北壁土層断面(南から)



(4) Bトレンチ東壁土層断面(西から)



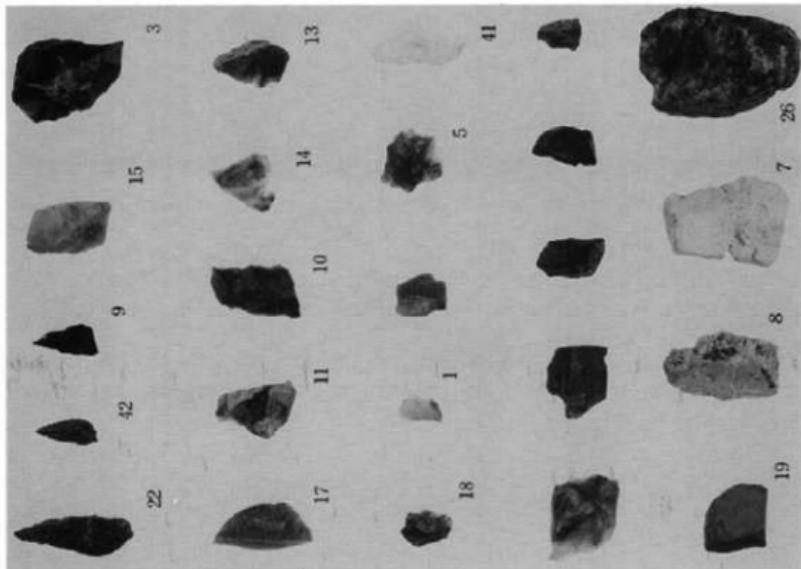
(1) Bトレンチ遺物出土状況全景(南から)



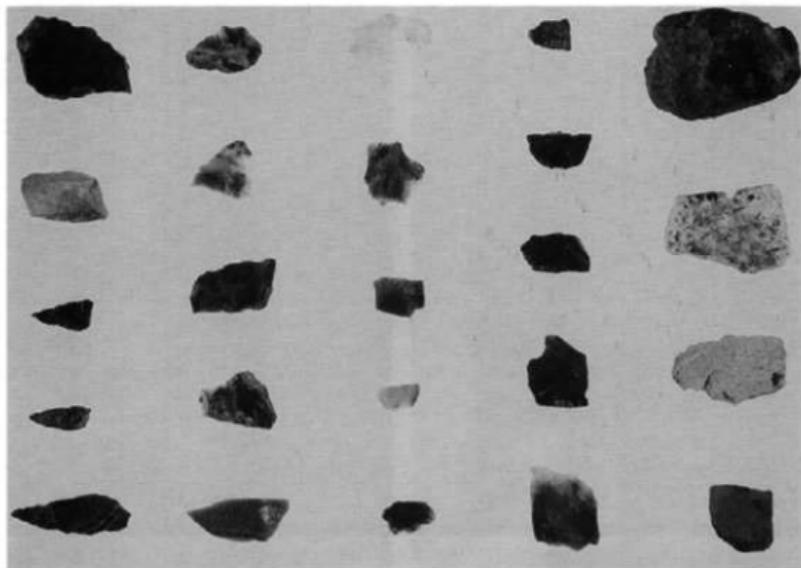
(2) Bトレンチ遺物出土状況(南から)



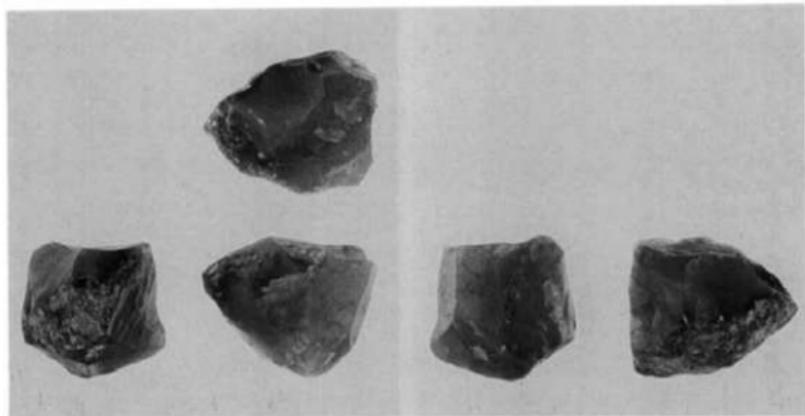
(3) Bトレンチ遺物出土状況(東から)



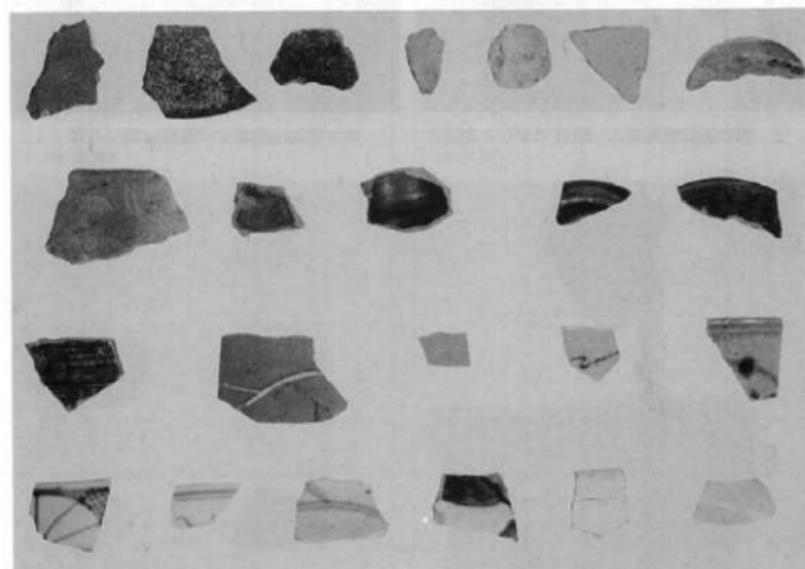
(1) 出土遺物(石器・表) Fig. 30 - 50



(2) 出土遺物(石器・裏)



(1) 出土遺物(石器)



(2) 出土遺物(土器)



(3) 出土遺物(サメの歯)



(1) 教学部附属農場E7圃場A地点土壌断面
(東から)



(2) 教学部附属農場E6圃場B地点土壌
(西から)

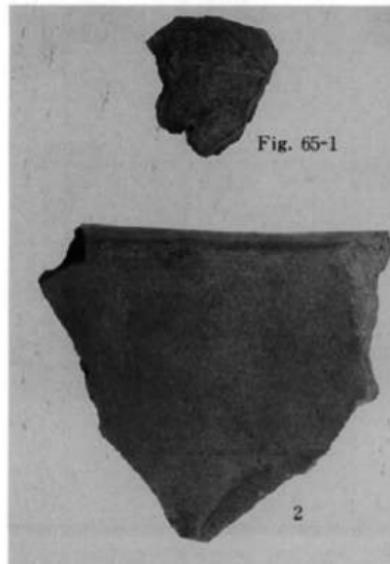


Fig. 65-1

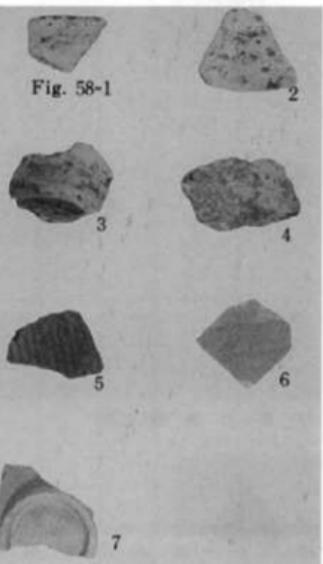


Fig. 58-1

(3) 出土遺物



(1) 教学部附属農場E7圃場A地点土壌断面
(東から)



(2) 教学部附属農場E6圃場B地点土壌
(西から)

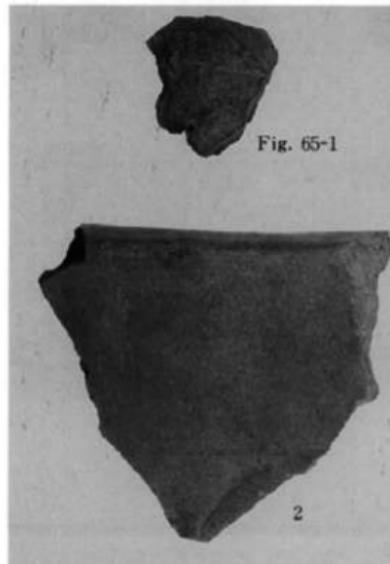


Fig. 65-1

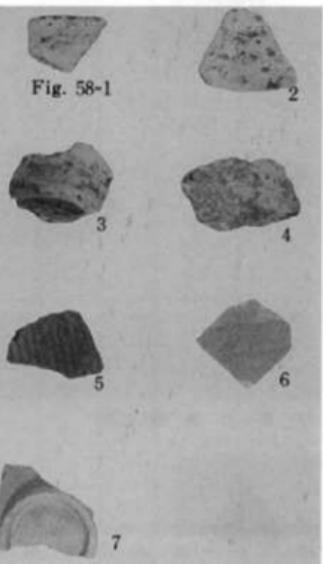
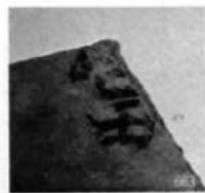


Fig. 58-1

(3) 出土遺物

墨で文字を書きこんだうつわ(1)



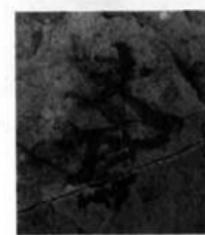
(2) 平城京跡「富」
(奈良国立文化財研究所
保管 掲載許可済)



(3) 郡家今城遺跡「富」
(高槻市立埋蔵文化財調査
センター保管)



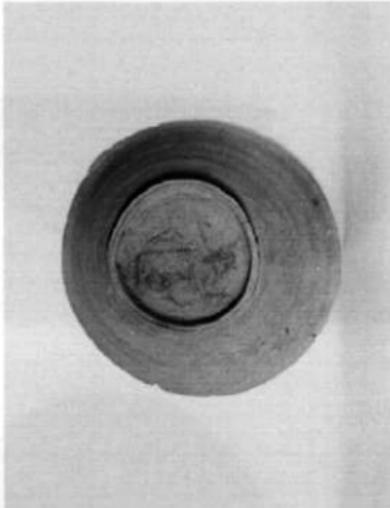
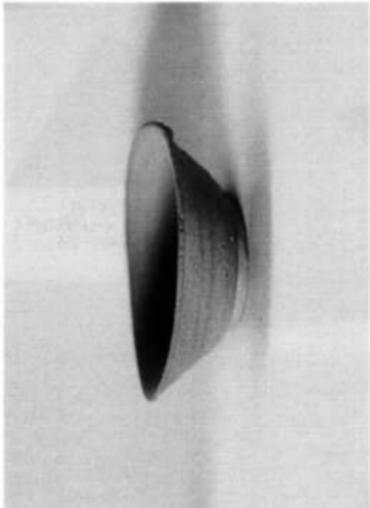
(4) 谷内遺跡「富」
(財團法人京都府埋蔵文化
財調査研究センター保管)



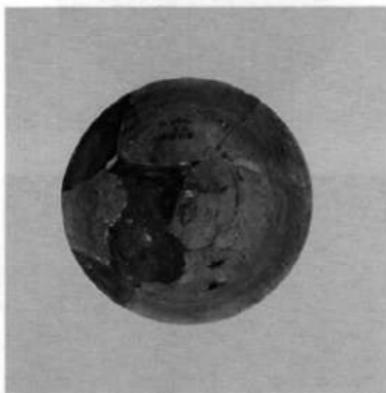
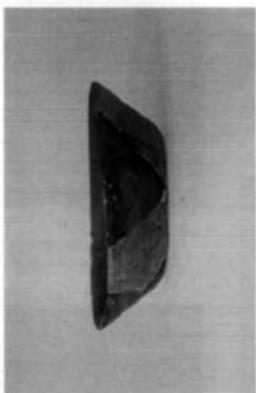
(5) 黒河尺目遺跡「大富」
(高山県埋蔵文化財センター
保管)

(1) 吉田遺跡の墨書き土器「富」

器で、文字を書きこいんだうつわ
(2)



(1) 周防国歴史発見の埴輪土器「国房」(防府市教育委員会保管・未報告資料)



(2) 周防鉢司跡発見の埴輪土器(山口市教育委員会保管)

山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅶ

平成元年3月

編集 山口大学埋蔵文化財資料館

発行 山口大学

〒753山口市大字吉田1677-1

印刷 桜プリント(企)

〒753山口市旭通り1-1-6

ARCHAEOLOGICAL RESEARCHES AND STUDIES
AT YAMAGUCHI UNIVERSITY Vol. VII

CONTENTS

Chapter

I	General outline of the project on Yamaguchi University campus in 1987	1
II	Excavation in relation to the construction of the Practical Education Center at the Faculty of Education on the Yoshida campus	5
III	Excavation in relation to the construction of the Lecture building at the Faculty of Liberal Arts on the Yoshida campus	23
IV	Soudings in relation to the construction of the new ward at the University Hospital on the Kogushi campus	67
V	Examination under construction performed on the Yamaguchi University campus	85

Appendix I

(1)	Pollen analysis of the soil at the Yoshida site	97
(2)	Plant seed analysis of the soil on the Yamaguchi University campus	103

Appendix II

Remains writing in ink	107
------------------------	-----

The gist of researches and studies at Yamaguchi University

Regulations of Yamaguchi University Archaeological Museum	124
Regulations of Yamaguchi University Archaeological Museum Management Committee	125
Lists of Researches in Yamaguchi University	127
Summary	133

Published by

Yamaguchi University Archaeological Museum

Yamaguchi, 1988